

赤坂遺跡Ⅱ

－ 県道酸ヶ湯黒石線地方特定道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

2013年3月

青森県教育委員会



赤坂遺跡 航空写真（北西から）



赤坂遺跡 検出遺構

(本報告は、調査区ほぼ中央のグリッドライン116より西側を対象。グリッドライン116より東側は第487集『赤坂遺跡』で報告済。)

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成20年度より県道酸ヶ湯黒石線地方特定道路建設整備事業予定地内に所在する赤坂遺跡の発掘調査を実施しております。

調査の結果、縄文時代、平安時代、近世以降の各時代にわたる複合遺跡であることがわかりました。特に平安時代においては、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑などの遺構が重複して多数発見され、当地域における平安時代の生活を知る上で貴重な遺跡と考えられます。

赤坂遺跡は、津軽平野の南東部に位置する黒石市に所在します。黒石市には数多くの埋蔵文化財包蔵地が残されていますが、中には平安時代の甲里見(2)遺跡や高館(1)遺跡など重要な集落遺跡が含まれています。

本報告書は、平成20～21年度赤坂遺跡発掘調査事業の調査結果のうち、西側区域についてまとめたものです。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成25年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 柿崎 隆司

例 言

1 本書は、青森県県土整備部道路課による県道酸ヶ湯黒石線地方特定道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成20～21年度に発掘調査を実施した黒石市赤坂遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査対象面積は3,115㎡、発掘調査面積は1,872㎡である。

2 赤坂遺跡の所在地は、黒石市大字上十川字長谷澤一番団32-1外、青森県遺跡番号は204008である。

3 本書は、第487集『赤坂遺跡』の続刊である。本書の報告内容は、平成21年度調査区(第2次調査・グリッドライン116以西)に検出された遺構及び遺構内出土遺物及び平成20～21年度調査区(第1次～第2次調査区全域)に検出された柱穴・小穴から抽出した掘立柱建物跡、遺構外出土遺物、各種自然科学的分析に関するものである。

※ 本遺跡の発掘調査は、平成23年度以降も実施され、3冊目以降の報告書刊行が予定されている。

4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成21年8月27日～平成21年10月28日

整理・報告書作成期間 平成22年4月1日～平成23年3月29日

平成24年4月1日～平成25年3月29日

6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆・編集は、青森県埋蔵文化財調査センター木村高文化財保護主幹が担当し、依頼原稿の執筆者名については、文頭に記した。既刊の第487集『赤坂遺跡』と本書の内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。

7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

グリッド杭設置及び水準測量	株式会社 コンテック東日本
航空写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
遺物の写真撮影	シルバーフォト(土器・その他)・フォトショップいなみ(石器)
土器胎土の分析	大阪大谷大学文学部 三 辻 利 一
火山灰の分析	弘前大学理工学部 柴 正 敏
炭化植物種子の分析	札幌国際大学博物館 椿 坂 恭 代
石器の石質鑑定	青森県立郷土館主任学芸主査 島 口 天
炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
樹種の同定	株式会社 バレオ・ラボ ・ 古代の森研究会
プラント・オパール分析	株式会社 バレオ・ラボ
珪藻化石の分析	株式会社 バレオ・ラボ
花粉の分析	株式会社 バレオ・ラボ

目 次

第1章	調査の概要	
第1節	調査に至る経緯	2
第2節	調査の経過	2
第2章	調査および報告の方法	
第1節	発掘作業の方法	5
第2節	整理・報告書作成作業の方法	9
第3節	報告の方法	10
第3章	遺跡の環境	
第1節	遺跡周辺の地形及び地質	(山口義伸) 13
第2節	遺跡の位置と周辺の遺跡	17
第4章	遺跡の概要	
第1節	遺跡の概要	20
第2節	遺構の概要	20
第3節	遺物の概要	22
第5章	検出遺構と出土遺物	
第1節	検出遺構	25
1	竪穴建物跡(S1)	26
2	土坑(SK)	42
3	溝跡(SD)	45
4	並列溝状遺構(SD)	46
5	焼土遺構(SF)	46
6	柱穴・小穴(Pit)	47
7	掘立柱建物跡・塀(柵)跡(SB)	48
8	土壌硬化範囲(SX)	49
9	用途不明遺構(SX)	51
第2節	出土遺物	53
1	縄文時代の遺物	53
2	弥生時代の遺物	56
3	平安時代の遺物	56
4	近世以降の遺物	61
5	時期不明の遺物	62

第6章 自然科学的分析

第1節	赤坂遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	(獨加速器分析研究所)	63
第2節	赤坂遺跡出土の火山灰について	(柴正敏)	78
第3節	赤坂遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	(三辻利一)	81
第4節	赤坂遺跡出土の炭化植物種子	(椿坂恭代)	85
第5節	赤坂遺跡より出土した炭化材	(古代の森研究舎)	93
第6節	赤坂遺跡出土炭化材の樹種同定	(獨パレオ・ラボ)	95
第7節	赤坂遺跡のプラント・オパール	(獨パレオ・ラボ)	102
第8節	赤坂遺跡谷部堆積物の珪藻化石群集	(獨パレオ・ラボ)	107
第9節	赤坂遺跡の花粉化石	(獨パレオ・ラボ)	113

第7章 調査の成果と課題

第1節	遺 構	119
第2節	遺 物	125

第8章 調査のまとめ 129 |

引用参考文献	130
--------------	-----

遺 構 実 測 図	131
-----------------	-----

遺 物 実 測 図	171
-----------------	-----

遺 構 一 覧 表	197
-----------------	-----

遺 物 観 察 表	201
-----------------	-----

遺 跡 ・ 遺 構 写 真	写真1-32
---------------------	--------

遺 物 写 真	写真33-54
---------------	---------

報 告 書 抄 録	巻末
-----------------	----

- 8 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の25,000分の1地図画像「浪岡」・「王余魚沢」・「黒石」・「温湯」を拡大・縮小・合成して使用した。
- 9 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系により、挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 10 遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組合せた略号を付した。基本的な略号は、以下のとおりである。これら以外の特殊な略号については、第2章 第1節「発掘作業の方法」を参照されたい。
- SI-竪穴建物跡 SK-土坑 SD-溝跡 Pit-柱穴・小穴 SX-用途不明遺構
- 11 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。
- P-土器 S-石器 C-炭化材
- 12 土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 13 遺構実測図に使用した網掛けの説明は、各図中に記し、遺物実測図に使用した網掛けの説明は、観察表中に記した。
- 14 遺物実測図の基本的な縮尺は、概ね以下のとおりである。各国版にはスケールを付している。
- 土器類・礫石器等-1/3 剥片石器-1/2
- 15 遺構一覧表及び遺物観察表における()内計測値は残存値を示す。
- 16 遺物写真には、実測図の図番号を付し、写真のみの報告遺物には、丸付き番号を付した。縮尺は、概ね以下のとおりである。
- 大型の礫石器-1/4 大型の土器類・礫石器等-1/3 土器破片・剥片石器・鉄製品等-1/2
- 17 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 18 発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の方々と機関からご協力・ご指導いただいた(敬称略、順不同)。
- 黒石市教育委員会 穴澤義功 鈴木 徹 中村隼人 半沢 紀

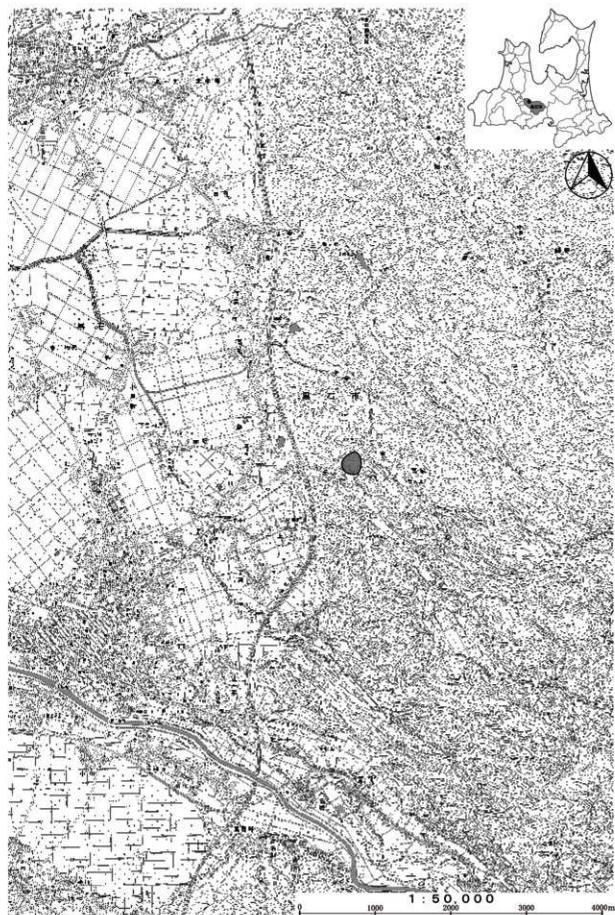
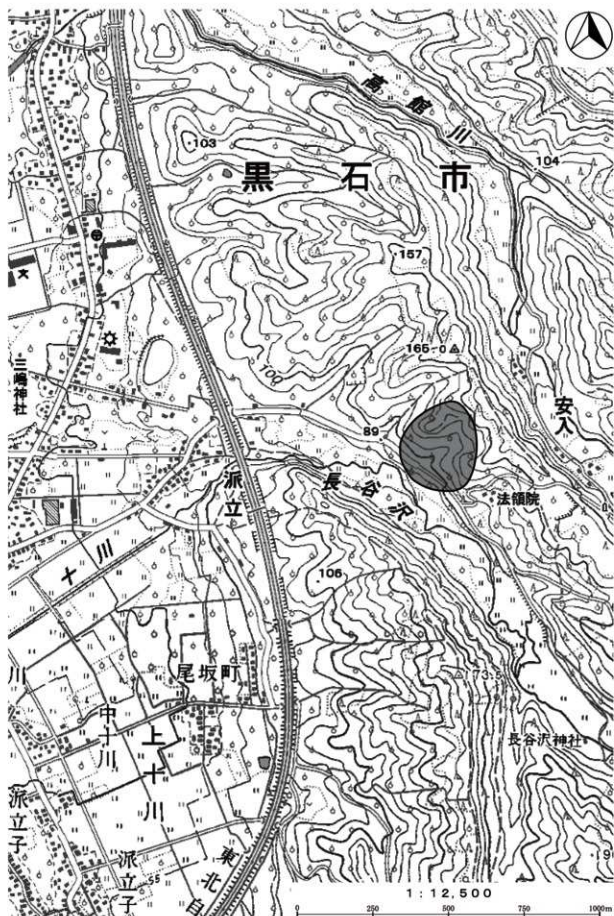


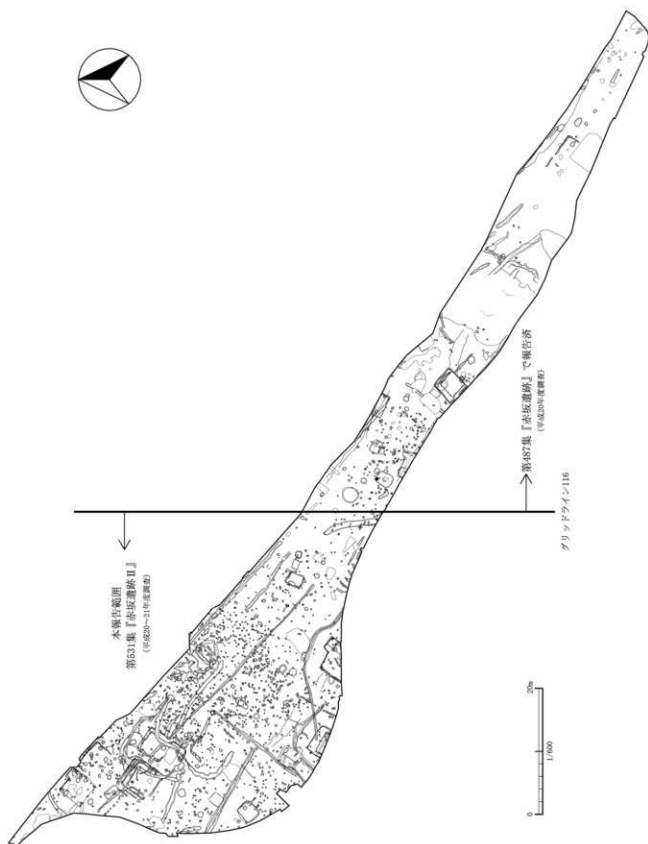
図1 遺跡の位置(●部分)(本誌は、国土地理院発行の25,000分の1地形図像「秋田」・「王金魚沢」・「黒石」・「黒川」を50%縮小・合成したものである。)



図Ⅱ 遺跡の位置(●部分)(本図は、国土地理院発行の25,000分の1地図画像「王命魚沢」・「黒石」・「黒川」を200%拡大・合成したものである。)



図Ⅲ 調査区の位置 (網掛け部分)



図Ⅳ 赤坂遺跡遺構配置図(本報告以外の範囲を含む)

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成19年7月に青森県中南部地域県民局地域整備部道路施設課(以下、「道路施設課」)から、事業予定地内に所在する赤坂遺跡及びその隣接地の取り扱いについて青森県教育庁文化財保護課(以下、「文化財保護課」)へ照会があり、8月に文化財保護課と道路施設課は現地踏査及び協議を行った。文化財保護課は、9月に既存県道の南側区域の範囲確認調査を実施し、この結果に基づき、道路施設課、文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターの三者は10月に現地協議を実施、平成20年度に既存県道南側区域と遺跡東端部切土予定区域の発掘調査、さらに同年度の早期に県道北側区域の範囲確認調査を行う計画を立てた。

土木工事等のための発掘に関する通知書は、中南部地域県民局長から平成20年3月に提出され、これを受け県教育委員会教育長から同月に発掘調査の実施が指示された。

平成20年4月、道路施設課、文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターの三者による本調査に関する現地協議を行い、同年6月17日より発掘調査を開始した。

第2節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

前年度の平成19年9月4日～5日にかけて文化財保護課が行った範囲確認調査(既存県道の南側区域:66㎡)では、全8ヶ所のトレンチのうち半数から遺構・遺物が、6ヶ所のトレンチから遺物が確認された(青森県教育庁文化財保護課 2008)。この結果から、遺構数は相当数にのぼるものと予測されていた。

平成20年6月17日より開始した本調査(第1次調査)では、これらのトレンチを再掘削しつつ新たなトレンチを設け、土壌の堆積状況や最終精査面までの深度、遺物の包含状況、遺構の分布状況の把握に重点をおいた。結果、概ねグリッドライン116以西～グリッドラインI M以南では、縄文時代前期～後期の遺物包含層が分布していたが、この範囲以外では、リンゴ畑の造成等による削平が著しく、また、谷部は近年の盛土により厚く整地されていることが分かった。これらの状況をふまえ、重機の稼働範囲と排土搬出のルートを検討し、調査区全域を表土から順次掘り下げ、遺物包含層の調査、遺構調査の順に発掘作業を進めることにした。

遺構は調査区のほぼ全域に分布することが判明し、特にグリッドライン111以西には多数の柱穴・小穴とともに各種遺構が密集している状況が把握された。当初予想を超えた多数の遺構のため、年度内の調査終了は困難となったことから、道路施設課、文化財保護課、県埋蔵文化財調査センターの三者協議により調査期間の延長を決定、さらに平成20年度の調査完了範囲をグリッドライン116以东と定め、併せて計画路線内に残る未発掘区の確認調査を行うこととなった(グリッドライン116以东の調査結果は、第487集『赤坂遺跡』で報告済)。

平成21年度の調査(第2次調査)はグリッドライン116以西を対象に8月27日より開始し、10月28日に調査を終了した(本報告書は、グリッドライン116以西の調査結果)。

(2) 発掘調査体制

平成21年度(第2次調査 調査期間 平成21年8月27日～同年10月28日)

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター	
所長	新岡 嗣浩	(前 青森県総合社会教育センター所長)
次長	工藤 大	(平成22年3月退職)
調査第二GM	高山 昇	(平成23年3月退職・現 文化財保護主幹)
総務GM	木村 繁博	(平成24年3月退職)
文化財保護主幹	木村 高	(発掘調査担当者)
文化財保護主査	工藤 忍	(発掘調査担当者)
調査補助員	成田 徹人	(平成22年3月退職)
	最上 泰代	(平成24年3月退職)
	森山 智絵	(平成24年3月退職)

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人(考古学)
調査員	高島 成侑	前八戸工業大学教授・故人(建築学)
調査員	三浦 圭介	北里大学非常勤講師(考古学)
調査員	山口 義伸	前青森県立浪岡高等学校教諭(地質学)

(3) 発掘作業日誌

- 【7月】13日 黒石市産業会館で発掘作業員の雇用説明会を実施。
- 【8月】27日 発掘器材等を現地へ搬入、環境整備後、調査区内の危険物除去、草刈り等を行う。
- 【9月】1日～3日、土嚢・シート等の撤去作業。4日以降、遺構確認～精査。
18日、黒石市教育委員会視察。
- 【10月】7日 山口調査員による現地指導。
16日 遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影。
28日 発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤去。
- 【11月】所轄の警察署に教育庁文化財保護課から遺物発見届を提出。
中旬 既存県道南側の全区域を重機により埋め戻した。

(4) 整理・報告書作成作業の経過

平成22年度

平成21年度出土遺物の洗浄・注記作業を行った後、土器の接合・復元作業を行う。各種サンプル等を整理し、自然科学的分析を委託。

平成23年度

整理・報告書作成作業なし。

平成24年度

【4月】平成21年度調査の遺構図面・写真類の整理作業、遺物のナンバリング～リスト作成を実施。

【5月～8月】土器類の拓影図作成及び実測図作成を行う。

【9月】遺構実測図の確認作業を行う。

【10月】土器類の実測図作成及びトレースを行う。

【11月】確認の終了した遺構実測図と土器類の実測図トレース、礎石器の実測を行う。

【12月】各種遺物の写真撮影を委託により実施。各種図面の図版を作成。

【1月】報告書の割付・編集・原稿作成を行い、印刷業者を入札・選定して入稿。

【2月】本報告書の校正作業を行う。記録類・出土品の整理。

【3月】本報告書の校正作業を行う。記録類・出土品の収納。3月27日、報告書刊行。

(5) 整理・報告書作成体制

平成22年度

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	文化財保護主幹	木村 高	(報告書作成担当者)
	文化財保護主査	工藤 忍	(報告書作成担当者)
	調査補助員	最上泰代	森山智絵
	整理作業員	半田さくら	名古屋陽子

平成24年度

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	文化財保護主幹	木村 高	(報告書作成担当者)
	調査補助員	和嶋正典	對馬央子
	整理作業員	蝦名富子	杉田敦子

第2章 調査および報告の方法

第1節 発掘作業の方法

平成19年9月4日から5日にかけて文化財保護課が行った試掘調査(66㎡)では、全8ヶ所のトレンチのうち半数から「住居跡」1軒、土坑2基、溝跡2条が確認され、6ヶ所のトレンチから縄文土器、土師器、須恵器及び石器の出土がみられた(青森県教育庁文化財保護課 2008『青森県遺跡詳細分布調査報告書』20)ことから、遺構数は相当数にのぼることが予測されていた。

この結果を踏まえ、平成20～21年度の発掘調査では、縄文時代・平安時代の遺構調査に重点をおき、集落の時期や構造等を把握できる調査方法を探った。

【測量基準点・水準点の設置・グリッド設定】(図V)

調査対象区域内に、標準の座標と標高を備えた実測基準点を測量業者に委託して設置した。

基準点測量は、中南部地域県民局地域整備部所管の測量成果より、T8、T9、TA29、TA30を与点とし、結合路線方式により位置を決定、グリッド杭打設の与点とした。

水準(仮B.M.)測量は、上記測量成果のB.M.4、B.M.6の点検を行い、今回の新設基準点に直接水準測量により標高を決定し、それらを基にして、指示地点に標高10cm単位の仮B.M.を設けた。

グリッド杭設置測量は、今回の新設基準点とグリッド杭座標値を使用し、放射法により設置した。

杭名称	X	Y	H	備 考	
T 8	73864.957	-16333.943	—	既設基準点	
T 9	73907.153	-16405.037	140.256		
TA 2 9	73975.601	-16784.027	92.954		
TA 3 0	74018.674	-16836.405			
B.M. 4	—	—	89.820	既設仮B.M.	
B.M. 6	—	—	156.455		
IF-104	73980.000	-16804.000	—	グリッド杭(新設点)	本報告の範囲
IK-105	73960.000	-16800.000	—		
IN-112	73948.000	-16772.000	—		
仮B.M.	—	—	92.200	仮B.M.(新設点)	
IR-119	73932.000	-16744.000	—	グリッド杭(新設点)	第487集『赤坂遺跡』で報告した範囲
IF-131	73900.000	-16696.000	—		
IF-133	73900.000	-16688.000	—		
仮B.M.	—	—	92.700		

※ 座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系。

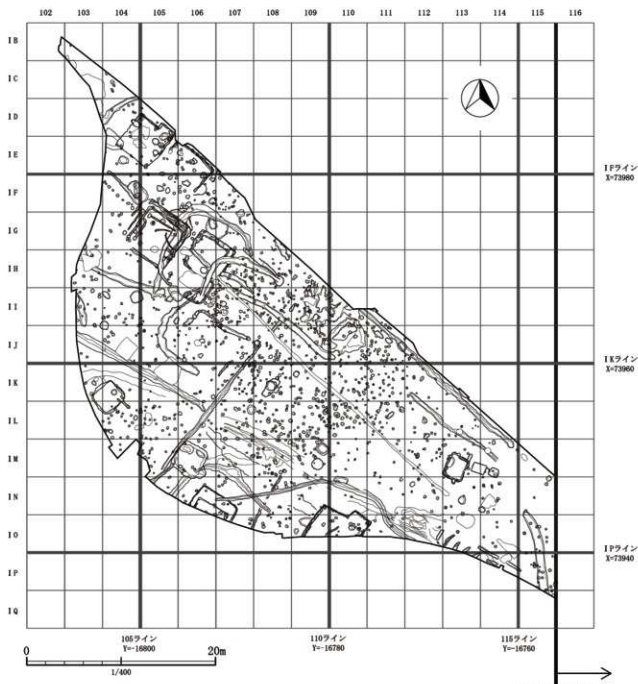
委託による杭の設置後、IF-104、IK-105、IN-112、IR-119、IF-131、IF-133のグリッド杭を基準として調査区の全域に4m×4mのグリッドメッシュを設定した。

座標X軸(南北ライン)にはローマ数字(I～)とアルファベット(A～T)を組み合わせた名称を付け、

Y軸(東西ライン)には算用数字を付けた。X軸は4m南進する毎に「IA」、「IB」…とアルファベットが進み、IT(IAから20m)に達すると、次はローマ数字が繰り上がり「IIA」となるようにした。Y軸は4m東進する毎に算用数字が1ずつ増えるようにした。

グリッド杭の名称は、X軸(ローマ数字+アルファベット)とY軸(算用数字)を組み合わせることで表し、各グリッドメッシュの名称は、北西隅のグリッド杭(ライン交点)を用いた(下図参照)。

レベル原点も、92.200mと92.700mの仮B.M.を与点として、必要に応じて敷点設置した。



図V グリッド配置図

グリッドライン116以西は
第487集『赤坂遺跡』で報告済

【基本土層】

遺跡の基本土層については、表土から下位にローマ数字を付けて呼称した。土層の色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を用いた。

【表土等の調査】

グリッドライン116以西～グリッドラインIM以南を除く範囲は、リンゴ畑の造成等による削平が著しいことから、重機を併用して掘削の省力化を図った。

【遺物包含層の調査】

基本的に、上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションにより、ドット図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、ドット図を作成せずに層位毎にグリッド単位で取り上げた。

【遺構の調査】

重複関係にある遺構に対しては、適宜サブトレンチを設定し、形状の正確な把握に努めた。また、遺構の見落としや新旧関係の誤認を防ぐため、遺構確認作業では、ジョレンをなるべく用いず、ほとんどを移植ベラで行った。特に、遺構覆土の内部に掘り込まれている柱穴・小穴などは、その遺構覆土の中位に検出されることもあるため、遺構覆土の掘り下げにあたっては、調査期間とのバランスを考慮しながら極力、移植ベラでスライスして検出に努めた。

土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、規模等に応じ、4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等に応じて加除した。遺構内の土層には算用数字を付け、ローマ数字を付けた基本土層とは区別した。土層の色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を用いた。土壌の中に火山灰を含む場合は、純度の高い部分を中心にサンプリングした。

平面図は、主に株式会社「遺構実測支援システム」を用い、トータルステーションによる測量で作成した。遺構内出土遺物については、遺構単位で層位毎あるいは堆積土一括で取り上げたが、床面（底面）やカマドの出土遺物については、必要に応じてドット図・微細平面図等を作成した。

遺構には、種別毎の略号と3桁数字の組合せによる略称を付けた。付番にあたっては、001～（柱穴・小穴は0001～）や101～（柱穴・小穴は1001～）のように、連番を意識しない3桁数字（柱穴・小穴は4桁数字）で番号の重複を避け、欠番発生をあえて容認する形式をとった。

また、精査過程で擾乱と判断されても番号の振替え等はあえて行わず、番号の重複を防いだ。なお、「竪穴建物跡」とした遺構は、一般的には「竪穴住居跡」等と呼称されているものであるが、住居として使用された確証は無いことから、本報告では「竪穴建物跡」とした。各遺構の種別毎の略号は次の通りである。

遺 構 種 別		略 号	備 考
堅 穴 建 物 跡	堅穴部及び堅穴部の内外に伴う付属遺構全てを含む状態	SI□	
	堅穴部内に伴う柱穴・小穴	SI□Pit□	
	堅穴部内に伴う土坑	SI□SK□	
	堅穴部内に伴う用途不明遺構	SI□SX□	本報告では該当なし（第487集『赤坂遺跡』に報告あり）
	堅穴部内に付属する溝跡	SI□SD□	堅穴部内から伸びる外延溝
	堅穴部外に付属する溝跡		堅穴部を囲む外周溝
	堅穴部外に付属する溝跡に付属する土坑	SI□SD□SK□	
	堅穴部外に付属する掘立柱建物跡	SI□SB□	
	堅穴部外に付属する掘立柱建物跡を構成する柱穴・小穴	SI□Pit□	
掘立柱建物跡・帯(槽)跡	SB□	グリッドライン116以東に検出された柱穴・小穴（第487集『赤坂遺跡』の報告範囲）から抽出した掘立柱建物跡も本報告に掲載。	
堅 穴 遺 構	SH□	本報告では該当なし（第487集『赤坂遺跡』に報告あり）	
土 坑	SK□		
溝 跡	SD□		
並 列 溝 状 遺 構	SD□	いわゆる畚跡(畚状遺構)・波板状遺構に類似する遺構	
焼 土 遺 構	SF□		
土 壌 硬 化 範 囲	SX□	道跡及び堅穴建物跡の出入口に関連する可能性のある遺構	
用 途 不 明 遺 構	SX□		
柱 穴 ・ 小 穴	P i t □		

【写真撮影】

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル各フィルム及びデジタルカメラ(キャノン製 EOS Kiss×2 4272×2848ピクセル 約1220万画素)の3種を用い、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況、精査状況、完掘後の全景等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影は業者に委託した。

第2節 整理・報告書作成作業の方法

発掘調査の結果、赤坂遺跡は平安時代の集落を主体とする遺跡であることが判明したが、削平された堅穴建物跡や、時期決定遺物を欠く多量の柱穴・小穴、縄文時代及び近世以降の遺物の存在より、各遺構の時期推定にあたっては、遺物が小片であっても軽視することはできない。整理・報告書作成の作業ではこのことを念頭に、遺構・遺物を入念に検討した。

【図面類の整理】

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成した。整理作業ではこのデジタルデータと手取りで図化したセクション図等との対比を行った。また、遺構台帳を見直し、発掘作業時の所見等を再整理した。

【写真類の整理】

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータファイルは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様にフォルダ格納し、各フォルダおよび各ファイルにはタイトルを付けた。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】

土器類の洗浄にあたっては、ブラシ痕がつかないように注意して行った。接合・復元作業は、遺構内出土遺物を優先し、出土地点・層位等を点検しながら行った。遺物の注記は、遺構内出土遺物には、調査年度/遺跡名/遺構名/グリッド名/層位/遺物No.の順に記し(例：09アカサカ SI101 IⅡ-106 フクド P-1)、遺構外出土遺物には、調査年度/遺跡名/グリッド名/層位/遺物No.の順に記した(例：09アカサカ IⅡ-109 II P-5)。剥片石器・金属器等の直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。

接合・復元にあたっては、出土地点・出土層等を点検しながら入念に行った。

【報告書掲載遺物の選別】

遺物全体の分類を行った後、遺構に伴う資料(遺構の構築～廃絶時期等を示す資料)、遺構の帰属時期を推定する上で有効な資料(遺構廃絶以降の埋没過程を暗示する資料を含む)、遺構外出土であっても本遺跡の性格およびその出土地区にある遺構群の性格・時期を推定する上で有効な資料等を主として選別した。

平安時代の土師器・須恵器に関しては、本遺跡の平安時代集落の存続期間等を推定する上で重要であることから、従来、掲載外として扱われてきた小破片も多数抽出し、可能な限り掲載した。

【遺物の観察・図化】

遺物の図化にあたっては、特徴が埋没しないよう過度な描画は避け、できる限り簡略化・模式化に努めた。また、一部の遺物については、写真のみで報告した。

【遺物の写真撮影】

一部の資料を除き、業者に委託して行った。実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等が伝わるよう留意した。

【自然科学的分析】

放射性炭素年代測定・火山灰分析・須恵器の蛍光X線分析・炭化植物種子の同定・炭化材の樹種同定・プラント・オパール分析・珪藻化石分析・花粉分析を外部に委託して行った。

※ これらの諸分析には、既報告(東側区域 グリッドライン116以南)の遺構・遺物に関する分析結果を含むことから、詳細については1冊目の報告書(第487集『赤坂遺跡』)も併読されたい。

【トレース・版下作成】

実測図及びその他挿図のトレースは、手作業と鞆CUBIC製「トレースくん」、アドビシステムズ製「Adobe Illustrator CS4」によるデジタルトレースを併用した。

実測図版・写真図版等の版下は「Adobe Illustrator CS4」で主に作成した。

【調査成果の検討】

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、柱穴・小穴のならびについても検討を加え、掘立柱建物跡の抽出作業を行った。これらの検討後、平安時代集落の時期・構造・変遷等について検討した。

第3節 報告の方法

本報告では、平成20～21年度の調査におけるグリッドライン116以西の遺構と遺物及び、グリッドライン116以东検出の柱穴・小穴群から抽出した掘立柱建物跡・堀(溝)跡、遺構外出土遺物、各種自然科学的分析に関する内容をまとめた。

【分割区の名称と報告対象範囲】

調査区は北西から南東に細長い平面形を呈す。報告にあたっては、便宜的に、ⅡA-124を中心に位置する「谷」を境に、北西側を「エリア1」、南東側を「エリア2」と呼称した。

本報告と前巻『赤坂遺跡』の各区名と報告範囲は下表のとおりである。

報告書名	エリア1	エリア2	報告対象範囲
第487集『赤坂遺跡』(前巻)	○	○	グリッドライン116以东
第531集『赤坂遺跡Ⅱ』(本報告)	○	—	グリッドライン116以西

【遺構の認定・分類】

遺構は、大きく9種に分類した。下表にこれら遺構の推定されるおおまかな所属時期とその分類基準・報告方法等を示す。

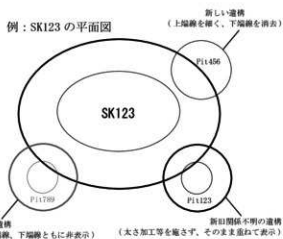
遺構種別	時期	内容
1 竪穴建物跡 SI	平安時代	一般的に「竪穴住居跡」と呼称されているものを「竪穴建物跡」とした。「竪穴住居跡」の名称を用いない理由は、①「竪穴住居跡」と一般的に呼称されている遺構が本当に住居として使用されたものかどうかについては不明、②同じ建築構造物である「掘立柱建物跡」に並列させる名称としては「竪穴建物跡」が最適、と考えたことによる。なお、竪穴部の検出がなくとも、外周溝と判断できるU字型の溝跡の検出をもって「竪穴建物跡」として認定したものもある。
2 土坑 SK	平安時代 近世以降	平安時代が主体と推定されるが、わずかに近世以降が混在している可能性がある。特記すべきものについてのみ所見を交え文章記載したが、大半は一覧表にまとめた。
3 溝跡 SD	平安時代 近世以降	平安時代が主体と推定されるが、わずかに近世以降が混在している可能性がある。特記すべきものについてのみ所見を交え文章記載したが、大半は一覧表にまとめた。
4 並列溝状遺構 SD	平安時代	平安時代と推定される。列をなす溝跡群であることから、遺構略号は「SD」とした。
5 焼土遺構 SF	平安時代以降	1基のみの検出である。
6 柱穴・小穴 Pit	縄文・平安時代 近世以降	平安時代が主体と推定される。平面図は付図に掲載し、計測値は深さのみとした。
7 掘立柱建物跡 塀(櫓)跡 SB	平安時代 近世以降	掘立柱建物跡は、間尺と深さに因襲せず、柱穴・小穴の並びがある程度直線的で、概ね矩形を呈し、構造的に成立し得るものを抽出したものである。よって、各プランの確度は高いものではなく、あくまでも案である。塀(櫓)跡には、季節性の一時的なものも多く含まれている可能性もある。
8 土壌硬化範囲 SX	平安時代 近世以降	「道路」と推定されるものと竪穴建物跡の「出入口」関連と推定されるものと2種を含む。これらは厳密には「用途不明遺構」の範疇にあるため、略号は「SX」とした。
9 用途不明遺構 SX	平安時代以降	土坑や溝跡等も本来的には「用途不明遺構」であるが、ここでは形状が土坑や溝跡に含めがたい、特異な状況を持つものを「用途不明遺構」とした。

【遺構平面図の表現方法】

個々の遺構平面図では、その遺構を切る(新しい)別遺構や掘乱坑等については、上端線を細くし、下端線を消去の状態を表示し、その遺構に切られる(古い)別遺構については、上端線、下端線ともに非表示としている。

新旧関係の不明な別遺構については、上端線・下端線とも太さ加工等を施さず、そのまま重ねて表示している。

一方、遺構配置図は新旧関係を考慮せず、遺構形状の全てを同一面に重ねている。



【遺構名の変更】

発掘調査段階の遺構略称は、本報告書の作成過程で一部変更となった(下表)。発掘調査図面・写真等には調査時の遺構名が記されている。

調査時の遺構名	本報告の遺構名	備 考	調査時の遺構名	本報告の遺構名	備 考
SI104P1t1	SI104SK01	惣穴建物跡惣穴部内土坑	SD107	SI207SD01	惣穴建物跡外周溝
SI201SK01	SK227	土坑	SD109	SI102SD01	惣穴建物跡外周溝
SI201SK05	SI201P1t01	惣穴建物跡惣穴部内柱穴	SD110	SI103SD01	惣穴建物跡外周溝
SI202SF01	SI202(古段階)	カマド火床面	SD111	SK202	土壌酸化範囲目
SI206	SI102(古段階)	惣穴建物跡(古段階)	SD113	SI205SD01	惣穴建物跡外周溝
SI206SD01	SD212	溝跡	SD114	SI207SD01	惣穴建物跡外周溝
SK110	復乱	復乱	SD115	SI205SD01	惣穴建物跡外周溝
SK111	復乱	復乱	SD116	SI205SD01	惣穴建物跡外周溝
SK116	SD121	溝跡	SD202	SI205SD02	惣穴建物跡外延溝
SK201	SI204SK03	惣穴建物跡惣穴部内土坑	SD203	SI202(新段階)	惣穴建物跡惣穴部壁溝
SK202	SI204P1t01	惣穴建物跡惣穴部内柱穴	SD204	SI208	惣穴建物跡惣穴部壁溝
SK207	SI207SD01SK01	惣穴建物跡外周溝付属土坑	SD209	SI208	惣穴建物跡惣穴部壁溝
SK211	SI204SK01	惣穴建物跡惣穴部内土坑	SD210	SI201SD01	惣穴建物跡外周溝
SD102	復乱	塩び管理設溝	SK101	復乱	復乱
SD105	SI207SD01	惣穴建物跡外周溝	SK105	SK119	土坑
SD106	SI208SD01	惣穴建物跡外周溝	SK201	SK226	土坑

【遺物の分類と掲載方法】

遺構内出土遺物は遺構毎に掲載し、遺構外出土遺物のうち、器類については時代毎に、それ以外については時代毎・種別毎に掲載した。文章記述は特徴的なものに限定し、主に表にまとめた。

遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品、弥生時代の土器、古墳時代かと推定される古式土師器、平安時代の土師器・須恵器・石器・土製品・焼成粘土塊・羽口・石製品・礫・鉄製品・鉄滓、近世以降の陶磁器・土製品・銭貨・鉄製品・銅製品・石製品等に大きく分類し、個々の遺物の細かな形態分類は行わなかった。各遺物のおおまかな帰属時期と掲載基準は下表のとおりである。

帰属時期	種別	掲載基準
縄文時代	土器	希少なものを、図化に適すものを掲載。
	石器	剥片石器：いわゆる定形石器は全て掲載。 礫石器：任意掲載。
	土製品	全て掲載。
弥生時代	土器	図化に適さない細片以外全て掲載。
古墳時代か	古式土師器か	全て掲載。
平安時代	土師器	遺構内を中心に掲載。図化に適かつ遺構内遺物に類のある遺構外遺物は掲載なし。
	須恵器	微細な破片20点を除き、全て掲載。
	石器	遺構内・遺構外任意抽出。
	土製品	全て掲載。
	焼成粘土塊	掲載なし。
	羽口	図化に適さない細片以外全て掲載。
	石製品	全て掲載。
	礫	遺構内・遺構外任意掲載。
	鉄製品	遺構内出土を全て掲載。遺構外は掲載なし。
鉄滓	遺構内・遺構外任意抽出。	
近世以降	陶磁器	掲載なし。
	土器	全て掲載。
	土製品	全て掲載。
	銭貨	掲載なし。
	鉄製品	掲載なし。
	銅製品	全て掲載。
石製品	全て掲載。	

第3章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質 (青埋報 第487集『赤坂遺跡』の再録)

前青森県立浪岡高等学校教諭 山口 義 伸

赤坂遺跡は黒石市上十川字長谷沢に位置し、黒石市街地から約4km北方の、丘陵を流れる十川流域に立地している。調査区域は十川に迫る丘陵末端部において、急勾配の斜面から緩斜面へ転換した部分(標高90~95m)に位置し、南端は15mもある急崖をもって谷底平野に臨んでいる。また、調査区域東側のエリア2は小さな谷状地形であって、谷状凹地が北側の丘陵に馬蹄状に分布している。調査区域は、後述するが、県道酸ヶ湯黒石線の道路拡幅に伴う削平工事に伴って山側が大きく削平され、谷状凹地は盛り土により整地されている。したがって、遺構密集地での基本層序の欠如と谷状地形内の土層との相違、縄文時代以降の土流堆積物の存在により基本層序の確立が難しかった。

第1図には本遺跡周辺の地形分類を示した。黒石市街地は浅瀬石川流域沿いにおいて、平野部への出口付近に展開する扇状地上に立地している。浅瀬石川南方でも同扇状地が舌状に張り出しており、面上には平川市平賀及び尾上が立地している。この開析扇状地は標高30~100mであって、黒石市牡丹平付近を扇頂部とする半径約6kmの扇形の地形であるが、上述のように浅瀬石川によって大きく開析されている。この扇状地は浅瀬石川沿いと丘陵縁辺部では急勾配の黒石Ⅰ面として分布し、この面の低地部分を被覆する形で下位の黒石Ⅱ面が分布している。面上には黒石市や平川市の市街地が立地するほかに、りんご園としても土地利用されている。なお、黒石市街地西方の扇状地前縁部には平坦な扇状地性低地が展開しており、水田として主に利用されている。

開析扇状地の背後には大釈迦丘陵に連続する黒石-平賀丘陵が展開しており、等高線の配置から扇状地とは明瞭に識別できる。標高は概ね100~300mであって、開析谷による浸食作用で起伏に富んだ地形となっているが、頂部が平坦で平野側に緩やかに傾斜している。そして丘陵東方には、起伏の激しい山地が南北に分布し、黒森山や高清水山などの安山岩の貫入岩体も存在している。

ところで、浅瀬石川以北における開析扇状地を刻む河川としては十川がある。支流の長坂川、高館川、本郷川などを含め、これらの河川はいずれも黒森山-法峠付近の分水嶺に発源し、扇状地内で十川に合流している。

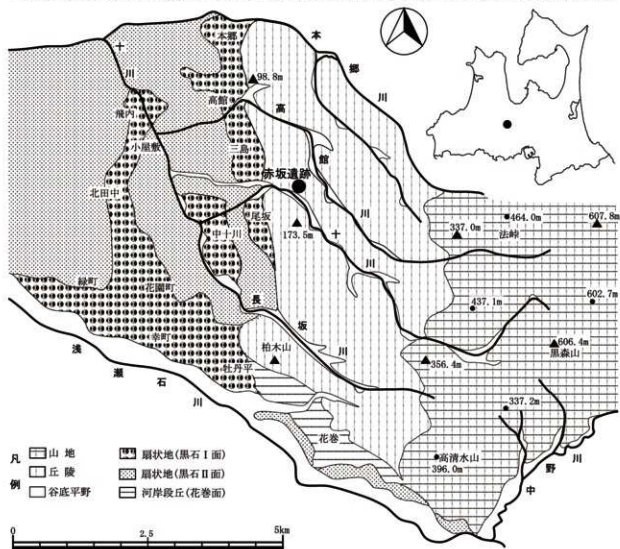
ここで、本地域内の地質概要について述べることにする。

本遺跡調査区域近くの露頭では、下部には塊状の軽石質凝灰岩(10m以上)が堆積し、上部には下位から酸化した軽石質中粒砂(厚さ約5m)、砂礫層(3m以上)、軽石質砂と軽石質シルトとの互層(6m以上)が堆積している。これらの堆積物はいずれも更新世後期の堆積物であって、下部が八甲田第2期火砕流堆積物であり、上部が黒石扇状地堆積物に相当し、平野側に30°以上と大きく傾斜している(村岡・長谷,1990)。

また、本遺跡東方の山地を構成する地層として、新第三紀中新世の温湯層(礫岩やシルト岩・頁岩)、

第三紀鮮新世の尾闈山凝灰岩層(流紋岩質凝灰岩を主とする火砕岩)と貫入岩体としての三ツ森安山岩、砂岩主体の大釈迦層(砂岩や礫岩、シルト岩)などが認められる。三ツ森安山岩を除く基盤岩は法峠背斜と並行する法峠向斜に沿って南北に帯状に分布しており、村岡・長谷(1990)によると、この褶曲運動は第四紀更新世後期まで継続していたと指摘している。南北に分布する山地の東翼には田代平カルデラに起因する、八甲田第1期火砕流堆積物(約65万年前の流下)と第2期火砕流堆積物(約40万年前の流下)が広く分布している。これは北方に展開する大釈迦丘陵の構成層と同様であって、基盤の大釈迦層を不整合に覆っている。ちなみに、大釈迦丘陵は河川の浸食作用により等高線の配置がきわめて入り組んでいるが、火砕流堆積物の流下により頂部には平坦面が残っている。一方、山地西翼には褶曲運動に伴う傾動により八甲田第2期火砕流堆積物の上位に扇状地性の堆積物(黒石扇状地堆積物)が分布している。したがって、黒石一平賀丘陵は平野側に大きく傾斜しているが、平頂であり、主にりんご園として利用されている。

浅瀬石川流域の開析扇状地である黒石面は後背地から供給された砂礫のほかに、十和田火山起源の火砕流堆積物で構成されている。すなわち、約3.2万年前に流下した大不動浮石流凝灰岩によって浅瀬石川流域には黒石Ⅰ面が形成される。その後の浸食作用によって谷状凹地が発生し、これを被覆する形で大不動浮石流凝灰岩が再堆積した結果、下位の黒石Ⅱ面が形成されたと考えられる。なお、黒石面の前縁部に分布する扇状地性低地には約1.3万年前に流下した八戸浮石流凝灰岩も確認されてい



第1図 遺跡周辺の地形分類

る。なお、浅瀬石川の北側に分布する扇状地は河床から約20mの比高のある段丘面として分布している(山口, 2001)。

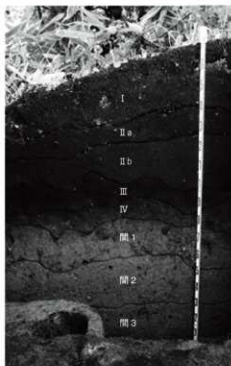
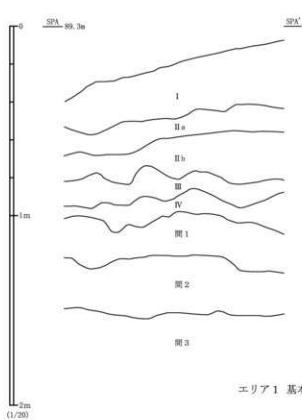
次に、本遺跡調査区内の基本層序について述べることにする。

本遺跡は上述のように、十川に臨む丘陵上に立地しており、基盤岩として火砕流起源の堆積物および再堆積物が認められる。また、県道酸ヶ湯黒石線の道路拡幅に伴う削平工により調査区域内の基本層序は大きく欠如していること、縄文時代以降に発生したと考えられる土石流堆積物も認められ、基本層序の確立が困難であった。そこで、基本層序の層相については十川に突き出た舌状台地にあたるエリア1のIM-104グリッドでの各層の特徴をもとに作成し、丘陵を刻む谷状凹地のエリア2のII C-130グリッドでの特徴も追記することとした(第2図)。

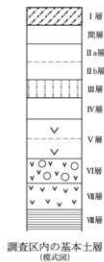
- 第I層** 黒褐色土(10YR2/3) 耕作土。固さはあるが、締まりに欠け脆い。耕作により粘土や砂などのブロックが多量に混入しており、道路拡幅工事に伴い下位層の擾乱が目立っている。特に凹地状のエリア2では、本層下位に盛り土(間層)が認められた。下部の盛り土2層(淡黄褐色土、10YR8/4)は、調査区域内の基盤(基本層序VII層以下)である軽石質砂質粘土が層状に盛り込まれており、上部には整地用に固く締まった盛り土1層(黒褐色土、10YR3/2)としてIII層とIV層のブロックを混入した砂質粘土が盛り込まれている。
- 第II層** 黒褐色土(10YR2/2) 腐植質土であり、平安時代の遺物が包含されることから、生活面と判断される。層相から2層に細分される。上位のIIa層は粘性・湿性にやや欠け、全体的にソフトな感じがする。下位のIIb層(暗褐色土、10YR3/4)は多少湿性があり、炭化物、焼土粒、粘土粒、軽石粒が多少包含されている。また、下位には著しく酸化した褐色砂質粘土(間1層、10YR4/4)と褐色シルト(間2層、10YR4/6)が堆積している。径5cm~20cm大の安山岩や凝灰岩等の亜角礫~亜円礫を包含しており、おそらく十川で発生した土石流による堆積物と判断される。
- 第III層** 黒色腐植質土(10YR1, 7/1) 粘性・湿性があり、やや締まりもある。上位のII層は乾くと黒灰色に変色するが、本層は湿性が保たれている。軽石粒や粘土粒だけでなく焼土粒、炭化粒なども混入し、縄文時代前期~後期の遺物も包含されている。
- 第IV層** 黒褐色土(10YR3/2) 漸移層である。V層以下の各層をブロック状や粒子状に多量に含み、粘性・湿性がややある。エリア1では、本層下位に土石流堆積物と思われる土層(間1~4層)が認められる。上部の間1層(褐色土、10YR4/4)は軽石粒じりの粘質土、間2層(褐色土、10YR4/6)は粗粒砂混じりの粘質土であって、いずれも下位の間3~4層の再堆積相を示唆している。間3層(黄褐色土、10YR5/6)は酸化の著しい粗粒砂質の軽石質粘土、間4層(明灰褐色土)は酸化の著しい軽石質砂で、径10cm大以下の円礫~亜角礫を多量に包含している。間3~4層は陶土不良の層相や礫の混入等から判断して、十川流域における土石流の発生に起因した堆積物と考えられる。特に平安時代の遺物が密集するIライン以北では、道路拡幅工事による削平により基本土層が30cm以上も欠如しており、間3~4層が遺構確認面となっている。エリア2では、調査区北側では、基本層序I層下にVa層が堆積し、調査区南側ではI層下にVII層が堆積する。
- 第V層** 黄褐色ラピリ質軽石層 錠状円浮石(山口, 1993)に相当し、千曳浮石に対比される。緻密堅固である。上部のVa層は径10mm大以下の軽石粒の混入が目立ち、下部のVb層は赤色、紫色、灰色などカラフルな風化礫の混入が目立つ。
- 第VI層** 灰褐色軽石質砂層 淘汰不良な軽石質砂が主体で、径10cm大以下、最大20cm大の頁岩、凝灰岩、安山岩などの円礫~亜角礫がかなり混入している。十川での土石流堆積物、あるいは崖堆積物と考えられる。
- 第VII層** 灰色軽石質砂層 淘汰良好な軽石質砂が主体で、緻密堅固である。下位のVIII層と互層を成す堆積物であり、おそらく丘陵を構成する八甲田第2期火砕流堆積物の再堆積物と考えられる。
- 第VIII層** オリーブ灰色シルト層 細粒軽石質なシルトである。

引用文献

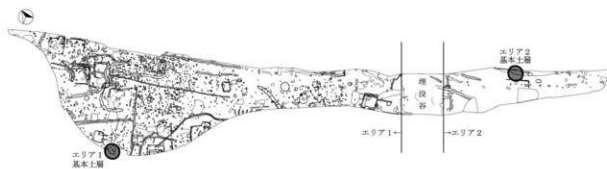
- 村岡洋文・長谷和(1990)「黒石地域の地質」『地域地質研究報告5万分の1地質図幅』地質調査所
 山口義伸(1993)「平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について」『年報史ひろさき』第2号 弘前市
 山口義伸(2001)「第1章 第3節 津軽平野南部の地形発達」『新編弘前市史 通史編1(自然・原始)』弘前市



エリア1 基本土層



エリア2 基本土層



第2図 基本層序

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

赤坂遺跡が所在する黒石市域は東部と西部とで地形環境が大きく異なる。東部は南八甲田山から続く山地～丘陵地、西部は津軽平野を形成する沖積台地となっている。図1・IIの遺跡位置図および巻頭写真1・写真1～3の航空写真で分かるとおり、遺跡は東部丘陵地の西端に位置し、微地形的にみれば、高館川と小河川(十川水系長谷沢)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面(長谷沢右岸)に立地している。

中心市街地から北東約4Kmに所在し、周囲には一面のリング畑が広がり、長谷沢の流れる谷底平野は水田として利用されている。

図IIIは、県教委 2009『青森県遺跡地図』より作成した、赤坂遺跡周辺の遺跡分布図である。地図の枠内には59の遺跡が収まっているが、沖積台地から丘陵地にかけて、広範囲かつ高密度に分布していることが分かる。表に基づきこれら各遺跡を時代別にみると、縄文時代が37遺跡、平安時代が32遺跡と、わずかに縄文時代遺跡が平安時代遺跡を上回るものの、縄文時代と平安時代の存続期間の差を考慮すれば、本遺跡を中心としたこの一帯は、平安時代に活発に利用されていたことが分かる。

図示範囲内にある発掘調査実施遺跡としては、2の高館(1)、15の長坂(1)、114の甲里見(2)、371の松元の4遺跡が挙げられる。これら4遺跡のうち、長坂(1)遺跡のみが縄文時代主体で、ほか3遺跡は平安時代を主体とする。

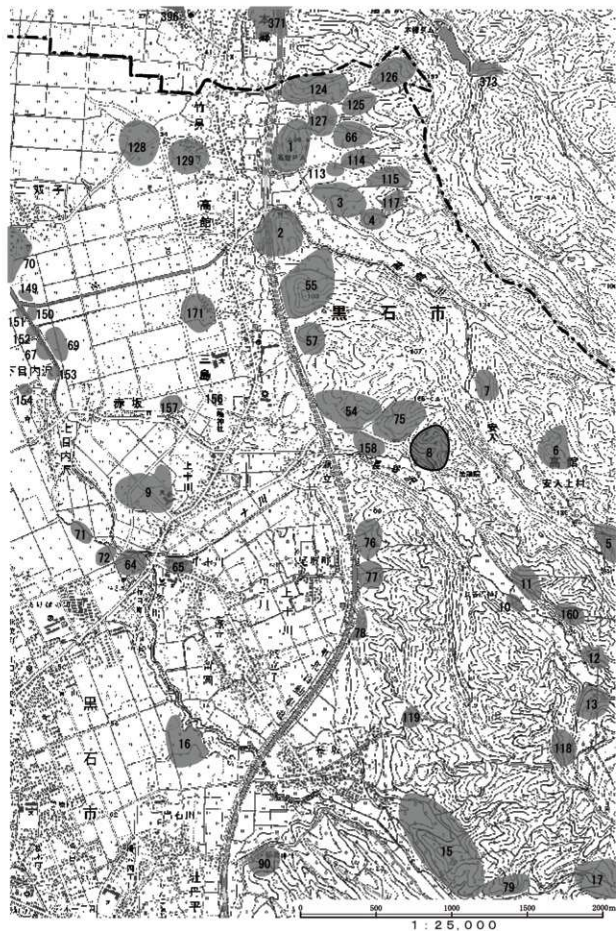
長坂(1)遺跡からは、「竪穴住居跡」、竪穴遺構、配石遺構、石囲炉、土坑、土器埋設遺構など多数の遺構が検出され、縄文時代前期から後期前半の集落跡であることが判明している。特に、縄文時代後期の蓋を伴う甕棺土器は注目される遺物である。

高館(1)遺跡は、独立丘陵を利用して造られた、空堀と土塁を伴う11～12世紀前半の集落跡であり、「竪穴住居跡」116棟、土坑約90基、円形周溝1基、溝跡約25条など多数の遺構が検出されている。出土遺物は土師器・須恵器・砥石等といった平安時代に一般的な遺物に加え、擦文土器、刀子・鈴・雁股鎌・鎌・鋤鉋先・二本箆・穂摘具様・紡錘車・手斧などの鉄製品や鉄滓、炭化したオニギリ状の飯や穀類・木器・蒸籠・櫛・糸に加え、宋代の白磁や銅製装飾品といった貴重な資料も出土しており、該期の集落構造と物質文化を考える上で重要な遺跡である。

甲里見(2)遺跡は、9世紀代と推定される集落跡であり、「竪穴住居跡」4棟や溝状遺構1条などが検出されている。焼失建物跡のカマド付近からは、土馬や勾玉、つまみ形の土製品や小型土器などがまとまって出土し、該期の祭祀儀礼を考える際の好例である。

松元遺跡は、縄文時代と平安時代の遺跡であるが、主体は9世紀末～10世紀代の集落跡であり、「竪穴住居跡」22棟、鉄生産関連遺構などが検出されている。「竪穴住居跡」のうち、外周溝を伴うものが12棟、掘立柱建物跡を伴うものが1棟みられ、遺物では土師器・須恵器・鉄製品・砥石等のほか、碗型鉄滓を含む鍛冶滓も出土している。土師器はクワロ環とクワロ長騎甕を主体とし、クワロ環には墨書されたものも含まれている。

これら遺跡の内容を概観すると、時期的、内容的に本遺跡との類似性が高い遺跡は松元遺跡であり、今後、遺跡間の関連性等について検討する必要がある。また、高館(1)、甲里見(2)にみられる諸事例も、赤坂遺跡の平安時代集落の存続期間を絞り込む上で参考にすべき内容を有している。



図VI 赤坂遺跡(●部分)および周辺の遺跡

(本図は、国土地理院発行の25,000分の1地図画像「黒岡」・「王金魚沢」・「黒石」・「黒湯」を合成したものである。)

表 赤坂遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代			種別	備考・文献
			縄文	奈良	平安		
1	竹鼻	黒石市 竹鼻字山平	●(後・晩)		●	散布地	
2	高館(1)	黒石市 高館字丁高原	●(後)		●	散布地	県教委 1978 第40集
3	高館(2)	黒石市 高館字甲里見	●(中・後)		●	散布地	
4	高館(3)	黒石市 高館字甲里見	●(後・晩)			散布地	
5	安人(1)	黒石市 高館字乙高原	●(後)			散布地	
6	安人(2)	黒石市 高館字乙高原	●(後)			散布地	
7	安人(3)	黒石市 高館字乙高原			●	散布地	
8	赤坂(本報告)	黒石市 上十川字長谷澤一番田	●(後)		● ●	集落跡	県教委 2010 第487集 県教委 2013 第531集
9	十川	黒石市 上十川字村元二番			●	散布地	
10	長谷沢(1)	黒石市 上十川字長谷澤一番田	●(後)			散布地	
11	長谷沢(2)	黒石市 上十川字長谷澤一番田	●(後)			散布地	
12	長谷沢(3)	黒石市 上十川字長谷澤二番田	●(後)			散布地	
13	長谷沢(4)	黒石市 上十川字長谷澤二番田	●(後)			散布地	
15	長坂(1)	黒石市 上十川字柳沢	●(前・後)			散布地	市教委 1985 第3集 市教委 1999 第15集
16	長坂(2)	黒石市 東野添字長坂道北	●(中・後・晩)			散布地	
17	野間頭	黒石市 上十川字長谷澤一番田	●(後)			散布地	
54	山派立	黒石市 上十川字長谷澤一番田			●	集落跡	
55	高館ハチマキ山	黒石市 高館字丁高原			●	集落跡	
57	北野崎	黒石市 赤坂字北野崎	●(後)			散布地	
64	あけぼの町	黒石市 あけぼの町	●(後)			散布地	
65	北原四番	黒石市 上十川字北原四番	●			集落跡	
66	山平(1)	黒石市 竹鼻字山平	●		●	散布地	
67	富田(1)	黒石市 富田			●	散布地	
69	西田(1)	黒石市 三島字西田			●	散布地	
70	二双字	黒石市 二双字字十川	●		●	散布地	
71	松原(1)	黒石市 松原	●(後)		●	散布地	
72	松原(2)	黒石市 松原	●			散布地	
75	長谷沢一番田(1)	黒石市 上十川字長谷澤一番田	●(後)		●	散布地	
76	山元(1)	黒石市 上十川字山元	●			散布地	
77	山元(2)	黒石市 上十川字山元	●			散布地	
78	山元(3)	黒石市 上十川字山元	●			散布地	
79	柳沢	黒石市 上十川字柳沢	●(中・後)			散布地	
90	柏木山(3)	黒石市 牡丹平字柏木山				散布地	
113	甲里見(1)	黒石市 高館字甲里見	●		● ●	散布地	
114	甲里見(2)	黒石市 高館字甲里見	●		● ●	散布地	市教委 1989 第8集
115	甲里見(3)	黒石市 高館字甲里見	●			散布地	
117	甲里見(5)	黒石市 高館字甲里見	●			散布地	
118	長谷沢二番田(1)	黒石市 上十川字長谷澤二番田	●			散布地	
119	山元(4)	黒石市 上十川字山元	●			散布地	
124	山平(2)	黒石市 竹鼻字山平			●	散布地	
125	山平(3)	黒石市 竹鼻字山平			●	散布地	
126	山平(4)	黒石市 竹鼻字山平			●	散布地	
127	山平(5)	黒石市 竹鼻字山平			●	散布地	
128	竹鼻宮元(1)	黒石市 竹鼻字宮元	●			散布地	
129	竹鼻宮元(2)	黒石市 竹鼻字宮元	●			散布地	
149	甲松坂	黒石市 高館字甲松坂			●	散布地	
150	東池田	黒石市 赤坂字東池田			●	散布地	
151	富田(3)	黒石市 富田			●	散布地	
152	富田(4)	黒石市 富田			●	散布地	
153	富田(5)	黒石市 富田			●	散布地	
154	富士見	黒石市 富士見			●	散布地	
156	三島宮元	黒石市 三島字宮元			●	散布地	
157	西田(2)	黒石市 赤坂字西田			●	散布地	
158	長谷沢一番田(2)	黒石市 上十川字長谷澤一番田			●	散布地	
160	長谷沢二番田(2)	黒石市 上十川字長谷澤二番田	●			散布地	
171	村里	黒石市 三島字村里			● ●	散布地	
371	松元	青森市 浪岡大字本郷字松元	●(中・後)		●	散布地、集落跡	県教委 1979 第96集
373	敦ノ沢	青森市 浪岡大字本郷字田ノ沢	●(早・中・晩)			散布地	
396	本郷館跡	青森市 浪岡大字本郷字柳田				城館跡	

第4章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

赤坂遺跡は、高館川と小河川(十川水系長谷沢)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面(奥谷沢右岸)に立地し、東西約280m、南北約300mの範囲として登録されている(図Ⅱ)。標高は約90～140mを測り、微地形でみると標高90m前後の緩斜面エリア(既存県道より南西)と標高約100～140mの急斜面エリア(既存県道より北東)とに分かれる。遺跡範囲外の南西側は急斜面となっており、谷底平野に形成された水田を見下ろすことができる。この水田面との比高差は約15mであり、ロープなしには下りられないほどの急崖となっている。遺跡およびその周囲にまとまった平坦地は無く、ほぼ全体が斜面地となっている。

赤坂遺跡は、昭和38年の工藤正による踏査で登録され、所在地は上十川字長谷澤一番圃であるが、遺跡名は当時の登録遺跡名が現在も用いられている。現状はリンゴ畑と道路(県道)である。

平成20～21年度の調査区は、標高90m前後の緩斜面エリアが対象で、長谷沢に面する崖線上部に相当する。調査の結果、縄文・平安・近世以降の各時代にわたる複合遺跡で、主体は竪穴建物跡と掘立柱建物跡(柱穴・小穴)・土坑・溝跡等で構成される平安時代の集落跡であることが判明した。

第2節 遺構の概要 (図Ⅶ 遺構配置図・付図参照)

平安時代の遺構は、調査区の全域に分布している。竪穴建物跡の敷棟には白頭山苦小牧火山灰(B-Tm・10世紀前葉～中葉降下)の堆積が認められ、各竪穴建物跡にみられる重複関係等より、本遺跡の平安時代集落は9世紀中葉～10世紀前半の期間内に収まるものと考えられる。なお、出土遺物及び遺構形態、堆積土の状況よりみて、今回の報告範囲に縄文時代と推定される遺構は検出されていない。

前巻『赤坂遺跡』の報告範囲における遺構密度はさほど高くはないが、今回報告の範囲では、多くの遺構が高密度で検出されている(図Ⅳ参照)。

【竪穴建物跡】

グリッドラインJ以南では、平安時代の生活面が良好に残存し、竪穴建物跡等の遺存状況も比較的良好であった。よって、竪穴建物跡竪穴部の深さやカマド排煙部の形状等を把握しやすく、さらに、竪穴建物跡がさほど重複せずに、一定間隔をおいて分布していることから、個々の平面規模の比較も容易で、建物構造を考える際の支障が少ない。

一方、グリッドラインJ以北では、リンゴ畑の造成等により、著しい削平を受けている。このため、遺物とはより、遺構形状等に関わる多くの情報が失われている。この範囲に検出された竪穴建物跡は、いずれも近接した配置を示し、竪穴部が同軸で並ぶ状況も認められることから、数世代が同一空間を継続利用した様相がうかがわれる。

竪穴部内に構築された付随遺構及び竪穴部外に付設された外部付属施設の有無により、各竪穴建物跡は多様性に富む。竪穴部内に構築された付随遺構には土坑及び外延溝があり、外部付属施設には外

周溝と掘立柱建物跡・塀(柵)跡がみられる。

堅穴部には、貼床が複数施された例や拡張されている例が認められ、改修を加えながら長期使用された様相がうかがわれ、他遺跡の事例よりも複雑な状況を呈している。また、今回報告の堅穴建物跡は、SI104の1棟を除き、全てが南東カマドとみられる。主軸も概ね一致し、集落構造を考える上で良好な状況と言える。なお、外周溝を伴う堅穴建物跡は、旧浪岡町域において多くの事例が蓄積されてきたが、黒石市域での検出は本遺跡が初例となる。

【土 坑】

調査区全域から検出されているものの、その分布状況は散発的であり、出土遺物の乏しさも加わって、堅穴建物跡との関連性を見出し難いものが多い。平面形や堆積土のあり方より、これらの中には、近世以降のものがわずかに混在している可能性がある。

土坑の中で注目したいものにSK208土坑がある。この土坑は、形状及び被熱痕跡や出土遺物の内容より、鉄関連遺構と判断され、鍛冶関係の施設(鍛冶炉(小煎治)か)と考えられる。土器の出土がみられないため、厳密には時期不明とせざるを得ないが、鉄滓の形状からは古代と推定され、数棟の堅穴建物跡の至近距離に構築されていること等から、本土坑はこれらの堅穴建物跡と併存していた可能性がうかがわれる。

【溝 跡】

溝跡は、調査区の全域に検出されている。等高線に対して平行気味に走るもの、直交気味に走るもの、堅穴建物跡外周溝の一部である可能性があるもの等、いくつかの種類がみられる。

等高線に対して平行気味に走るものは、地表面を流れる水を遮断するために構築されたものが多いと推察されるが、中には堅穴建物跡群との位置関係より、区画溝の可能性をもつものもある。

等高線に対して直交気味に走るものは、数棟の堅穴建物跡の軸線によく合致していることから、区画溝の可能性が高い。

【掘立柱建物跡・塀(柵)跡/柱穴・小穴】

柱穴・小穴は調査区の全域から検出され、全般に小規模のものが多い。膨大な検出数よりみて、掘立柱建物跡・塀(柵)跡が幾度にもわたって建て替えられていた状況を裏付けている。ただし、堆積土の状況を見ると、地山の土壤に類似した土質をもつものがみられる。これらは、縄文時代の柱穴・小穴、あるいは地山中の礫が外れた痕跡等である可能性もあるが、全体の数からみれば1割程度のものである。よって、柱穴・小穴群の時期は、あくまでも平安時代に主体があると考えられる。

これら柱穴・小穴群は、今回報告範囲の中央部に高密度で検出され、堅穴建物跡に取り囲まれるように分布している。

【並列溝状遺構】

並列溝状遺構として報告したものは、SD017・018・019・020・021の5条の短い溝跡が一単位をなすものであり、近年における諸事例に基づけば、畚跡である可能性が推定される。しかしながら、上述の道跡と推定される硬化範囲の軸線上に位置する点を考慮すれば、これをいわゆる「板状遺構」・「板状凹凸面」との関連で捉え直すことも不可能ではない。溝跡が並列する遺構についてはこれまで「畚状遺構」等の名称で報告されている例が多く、青森県内ではこの名称が一般化の傾向にあるが、この類の遺構については今後、道跡との関連で追究する姿勢が必要となろう。

【土壌硬化範囲】

土壌硬化範囲(SX202)は、「道跡」と推定されるものと堅穴建物跡の「出入口」と推定されるものとの2種の硬化範囲を併せて報告している。

道跡と推定される硬化範囲は、北西～南東の軸線で形成されており、その盛期は近世以降と推定されるが、堅穴建物跡の「出入口」と推定される硬化範囲は、この道跡と推定される硬化範囲に接続し、さらにこれら3棟の堅穴建物跡は、道跡と推定される硬化範囲の軸線に沿うように並んでいる。

これらのことから、道跡と推定される硬化範囲は、これら3棟の堅穴建物跡と関連しながら徐々に形成された可能性がうかがわれ、形成の初源は平安時代と推定される。

【用途不明遺構】

SX102は一般的に「土坑」と称される遺構に比べ、規模が大きく、形状も不整なものであり、湧水地点に近接していること等から、恐らくは貯水用の施設であったと推定され、井戸に代わる役割を担っていた可能性がある。

第3節 遺物の概要

出土した遺物は、段ボール箱で61箱である。量的に多いとは言えないが、その種類は豊富である。

※ 前巻『赤坂遺跡』における報告範囲(グリッドライン116以東)から出土した遺構外出土遺物も併せている。

遺物は、縄文時代の早期～晩期の土器・石器・土製品、弥生時代の土器、古墳時代か推定される古式土師器、平安時代の土師器・須恵器・石器・土製品・焼粘土塊・羽口・石製品・礫・鉄製品・鉄滓、近世以降の陶磁器・土製品・銭貨・鉄製品・銅製品・石製品等で構成される。

主体は土器であるが、大半は細片であり、復元率は極めて低い。縄文土器は平安時代の人々の営為により砕かれ、平安時代の土器は堅穴建物内に残されずに屋外廃棄され、リング畑の造成とともに細片化していった、という背景が推察される。

縄文土器は、早期～晩期まで各時期のものがみられる。量的に卓越する時期は縄文時代中期(円筒土層式)であるが、これは1個体から生ずる破片数が多いことから、時期的な主体を占めるとは限らない。

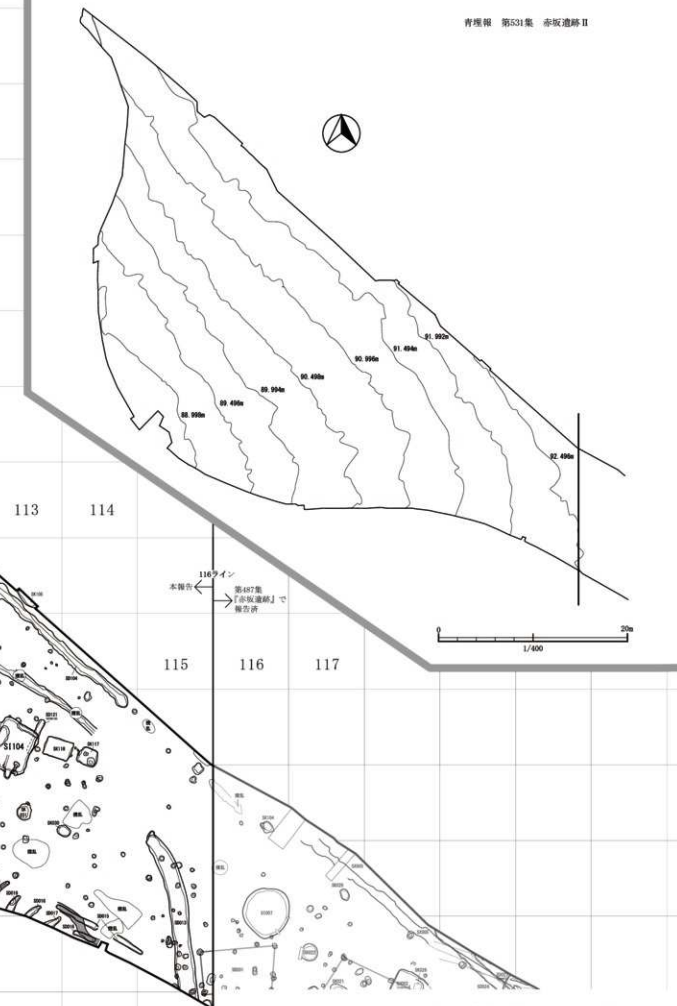
弥生土器には砂沢式土器と田舎館式の破片がみられる。また、古墳時代と推定される古式土師器らしき破片も出土している。

平安時代遺物の主体は土師器であり、これに須恵器がわずかに加わる。土師器は土器類全体の中でも主体を占め、縄文時代の遺物は平安時代遺物に比べれば格段に少ない。

土師器は、坏・皿・長胴甕・小型甕・埴・壺・羽釜・小型土器(いわゆるミニチュア系)、須恵器は坏・鉢・長頸壺・広口壺・甕で構成され、土製品には土鈴や鈴子等、鉄製品には鉄鐙(?)・刀子等がみられる。

今回の報告では、「平安時代の石器」として報告しているものがある。これは、いわゆる礫石器であり、堅穴建物跡における出土状態と縄文時代らしからぬ石材選択と使用痕跡より、平安時代の石器としてとらえたものである。

近世以降の遺物は、18世紀代の肥前から近代までの陶磁器、その他が出土している。



図Ⅶ 遺構配置図・コンターライン

第5章 検出遺構と出土遺物

検出遺構は、竪穴建物跡・土坑・溝跡・焼土遺構・掘立柱建物跡・掘立柱建物跡・塀(柵)跡・柱穴・小穴・土壌硬化範囲・並列溝状遺構・用途不明遺構である。

これら検出遺構のほとんどは平安時代のもので占められるが、時期決定遺物を伴わない遺構の中には、わずかに縄文時代及び近世以降のものが含まれている可能性がある。

出土遺物は、縄文・弥生・古墳(?)・平安・近世以降の5時期に大別される。量的に多いのは平安時代の遺物で、これに縄文時代、近世以降の遺物が続く。縄文時代と近世以降の遺物は、平安時代に比べ極めて少なく、弥生・古墳(?)の2時期の遺物は土器片数点である。

第1節 検出遺構

本遺跡の主体は竪穴建物跡と掘立柱建物跡(柱穴・小穴)・土坑・溝跡等で構成される平安時代の集落跡である。各遺構の記載にあたり、竪穴建物跡については平安時代集落を考える上で重要なものであることから、若干の所見を交えながら全棟について詳述し、その他の遺構については、平安時代に構築されたと考えられるものの中から重要度の高いものについてのみ記述し、他については「検出遺構一覧表」に一括した。

各遺構の検出位置や計測値・重複関係等の詳細については、「検出遺構一覧表」・「竪穴建物跡一覧表」・「掘立柱建物跡一覧表」・「柱穴・小穴一覧表(付図中)」を参照されたい。

なお、遺構配置図(図Ⅶ・付図)で分かるとおり、各遺構は重複関係をもつものが非常に多く、特に、柱穴・小穴との重複は相当数にのぼる。これら柱穴・小穴との重複関係に関して文中及び表中に記載するのは煩雑であるばかりか、誤植による混乱等を招きかねないことから、これについては個々の遺構平面図における表現^{*)}を参照されたい(第2章 第3節「遺構平面図の表現方法」参照)。

- ・その遺構を切る(新しい)別遺構や複乱坑等については、上端線を細くし、下端線を消去。
- ・その遺構に切られる(古い)別遺構については、上端線、下端線ともに非表示。
- ・新旧関係の不明な別遺構については、上端線・下端線とも太さ加工等を施さず、そのまま重ねて表示。
(遺構配置図(付図)では、遺構の新旧関係に関係なく、遺構形状の全てを同一面に重ねて表示。)

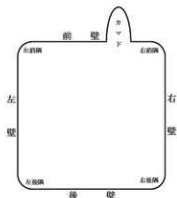
また、遺構図面の整理過程で、土層断面図に記した層番号を変更すべき状況がいくつか生じたが、報告書の刊行後における出土遺物の注記及び自然科学的分析試料との不一致が生ずるのを避ける意味で、あえて層番号の振り替えは行っていない。よって、土層断面図中の層番号には欠番が生じている箇所がいくつかある。

1 竪穴建物跡 (SI)

本遺跡で検出された竪穴建物跡には、竪穴部内に構築された付随遺構及び竪穴部外に付設された外部付属施設が多くみられ、一般的な竪穴建物跡に比べれば複雑な状況を呈している。特に、本遺跡の場合は1棟あたりの居住期間が長いことによるものか、他遺跡の事例よりも複雑度が高い。

このことから、これら竪穴建物跡に関する記述の明瞭化をはかるため、以下のような便宜的表現を用いた。

竪穴部の四壁の表現においては、東西南北の一般的な方位を用いず、前壁・後壁・左壁・右壁と呼称した。つまり、竪穴部の中心からカマドの作りつけられる壁を見た際、その壁が前壁、後ろにある壁が後壁、右にある壁が右壁、左にある壁が左壁である。また、竪穴部の四隅についても方位で呼称すると複雑になるため、これについても左前隅・右前隅・左後隅・右後隅と4つの名称を用いた。つまり、竪穴部の中心から前壁を見た際、左前方の隅を左前隅、右前方の隅を右前隅、左後方の隅を左後隅、右後方の隅を右後隅と表現した。



なお、竪穴建物跡の周辺(特に前壁側)から検出される柱穴・小穴の中には、付属掘立柱建物跡が含まれている可能性があるが、これまでの事例に基づけば、竪穴建物跡に付属する掘立柱建物跡は、単独の掘立柱建物跡に比べて平面形の歪みが著しいなど、独特な平面形を呈すものも少なくない。このことから、高い確度での抽出は不可能であるものの、付属掘立柱建物跡については、竪穴部に平行もしくは垂直に並ぶ柱穴・小穴を、可能性の範囲内で積極的に抽出している。

また、竪穴部の床面とカマドからの出土遺物の位置はドットで示している。各遺物の記号は、土器=●、石器・礫=□、焼成粘土塊=■、鉄製品/鉄関連遺物=▲、年代測定サンプル=★である。

SI101竪穴建物跡 (遺構図1~3, 写真6~7)

【概要】 本竪穴建物跡はグリッドIM-106を中心に位置する。竪穴部には外延溝が付随し、2面の床の存在により、新古の2段階が認められる。古段階には外延溝(SI101SD01)と2基の土坑(SI101SK01・SI101SK02)が付随している。

【重複】 SI102竪穴建物跡外周溝(SI102SD01)より新しく、SD103溝跡より古い。

【構造】 本遺跡の竪穴建物跡の中では小型の部類に属す。平面形はほぼ正方形を呈し、四壁はいずれも斜めに立ち上がる。

壁溝は、土層断面図(A-A')の両端及び、掘方の平面形よりみて、古段階では存在していた可能性があるが、新段階では埋め戻されている。つまり、壁溝有り(古段階)→壁溝無し(新段階)という変遷がうかがわれる。壁溝は新段階の構築時(壁板の取り外し時)に壊され、原形をとどめていない。

床面は新古の2面が認められる。新段階、古段階ともにほぼ平坦に仕上げられている。古段階にお

ける床構築土は、黒褐色土にロームブロックを多量に混和させたものであり、新段階の床構築土は、黒褐色土を主体としている(写真6-4)。古段階床面の左壁寄りには、後述するSI101SK02土坑があるが、この土坑の影響のためか、新段階床面の左壁側はやや沈降している。これは新段階の床構築土が、意図的な混和土を含まない黒褐色土を主体としていることも要因の一つと考えられる。

ピットは6個検出された。このうち、1236、3563・3582は垂直に穿たれていることから柱穴、3443・3559は斜めに穿たれていることから斜材設置の小穴と推定される。

※ 土層断面図(A-A')の左端にみられる⑬層とした部分も柱穴もしくは斜材設置の小穴であった可能性があるが、これは土層断面調査時のトレンチにより形状を失い、平面把握ができなかった。

各ピットの構築位置は、3559は後壁面中央、3582は右壁面中央、3443・3563の2個は左後隅壁面、1236は右後隅壁面というように、いずれも壁面に構築されている。斜材設置の小穴と推定される3443と3559の2個の底面は窄まっていることから、先端の尖る材が刺さっていたものと考えられる。

これら5個のピットが、新段階・古段階のどちらに伴うものかについては、①：1236は、古段階に構築した外延溝が埋められた後に掘り込まれている ②：全てが壁面に穿たれている ③：古段階において壁板が取り外されている可能性がある ④：ピットが全周しない という4点より、新段階に伴う(追加材の痕跡である)可能性がある。

カマド火床面手前のPit 1は古段階に伴うもので、新段階の時点では床下にあったものである(A-A')。検出位置よりみて建物構造とは関係しない(柱穴ではない)ものとみられることから、カマド祭祀等に関わったものかと推定される。

【カマド】 カマドは、燃焼部から排煙部まで良好に検出された(天井部は崩落)。前壁の右側寄りに構築されている。煙道部は、①：半楕円形に凹ませ、②：砂質粘土を内側に盛り、③：裏込土を充填、という手順で造られている(C-C')。排煙部底面は若干くぼみ、煙道部底面には、SI102SD01の覆土が露出している。燃焼部側壁(ソデ)も煙道部と同じ砂質粘土で造られ、左ソデには芯材として用いられた可能性のある礫が1点含まれている。構築面は古段階の床構築土上であり、火床面は古段階の床がそのまま利用され、よく焼けている。燃焼部内壁及び煙道部天井内面もよく焼けている。

【付随遺構】 SI101SD01外延溝及びSI101SK01土坑・SI101SK02土坑が付随する。これらは全て古段階の床面に検出されたものであり、新段階の時点では床下にあったものである。

SI101SK01とSI101SK02の2基の土坑は、左壁の直下に縦列するかたちで構築されている。SI101SK01の壁は建物の左壁～左上隅壁面に沿い、SI101SK02の壁は、建物の左壁～左後隅～後壁に沿っている。両者とも不整楕円形を呈し、断面形は鍋底状を呈す。

SI101SD01外延溝は、後壁直下の右寄り部分から始まり、右後隅壁面を破って堅穴部外に延びる。末端部は調査区域外にあるため全体形状は不明であるが、始発部分よりも調査区際のほうが底面レベルが約30cmほど低い点と、想定される末端部は長谷沢側にあることから、排水溝の跡と推定される。

【堆積土・床構築土】 堆積土は黒褐色土を主体とし、1～2層にはφ2～10mm程度の白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)が含まれている。新段階の床構築土は、中央部では薄層(7～9層)が4枚も重なり、右壁側には一括性の高い厚層(6層)がみられる。中央部薄層の最下にあたる9層は、古段階床面を直に覆う厚さ5mmほどの炭化物層(写真6-5)を含むものであるが、この上に3枚重なる中央部薄層は、あたかもこの炭化物層を覆うかのように貼られている。古段階の床構築土は、表土～地山までを掘り込

んだ際に生じたと思われる黒褐色土とロームブロックを混和させたもので占められ、あまり分層されない単純な層である。

【遺物の出土状態等】覆土上半の1～2層からは多くの土器片に混じって礫や礫片が出土した。わずかに鉄製品、土製品、剥片などもみられる。3層以下の出土遺物は極端に少ない。

新段階床面からはごくわずかの土器と礫が出土したのみである。新段階床面出土の遺物は、遺物図1-1, 6の土師器である。1-6は、床面+覆土上半+覆土下半+床構築土中+SI101SK01覆土+SI101SK02覆土+遺構外Ⅱ層と、各位置の破片が接合したものである。

カマドのソデ中には、小さな礫が芯材として用いられており、被熱による風化が認められる。古段階床面から遺物は出土しなかった。

古段階床面中央には、炭化物の集積範囲があり、その上面には焼土・灰もみられた。炭化物に材の形状は認められないことから、建物の焼失等に伴う可能性は考え難い。外延溝の存在より、一時的に屋内が浸水した経緯があるとすれば、この炭化物・焼土・灰は堅穴部内での焚火的な行為に伴う可能性もある。

【備考】写真48-①の礫は、本堅穴建物跡の覆土上半から出土した2点の礫片とSI202堅穴建物跡新段階床面から出土した1点の礫片が接合したものである。また、遺物図15-1の土師器塼は、本堅穴建物跡の覆土上半(1M-106)、SI202堅穴建物跡覆土(1G-105)、遺構外Ⅰ層(1M-106)、遺構外Ⅱ層(1M-107)の4片が接合した塼の体部破片である。SI202堅穴建物跡との接合関係が2例あることは重視される。

本堅穴建物跡の左壁外方には、道跡と推定されるSX202(B)土壌硬化範囲があり、前壁左寄りの外部には、本堅穴建物跡の出入口との運動により形成されたと推定されるSX202(b2)土壌硬化範囲がある。これらは互いの位置関係より関連性が高いと推定される。

SI102堅穴建物跡(遺構図4～6, 写真8～9)

【概要】本堅穴建物跡はグリッドIN-106～107を中心に位置する。約半分が調査区域外にあるため、全体形状は不明である。古段階と新段階の2つのプランがあり、新段階(SI102)は古段階(旧SI206)の壁を拡張しているものである。新段階の堅穴部(SI102)には外周溝(SI102SD01)が伴う。

本堅穴建物跡堅穴部にカマドは検出されていないが、南東壁付近の床面からカマドのソデ材起源の砂質粘土塊が出土していること、付属する外周溝の開口方向より、カマドの構築位置は南東壁側である可能性が高いことから、以下では前壁・後壁・左壁・右壁の表現を用いる。

【重複】SI101堅穴建物跡及びFSI103堅穴建物跡外周溝(SI103SD01(旧SD110))、SD212溝跡(旧SI206SD01)より古い。SD118溝跡との新旧関係は不明である。

堅穴部

【構造】新段階、古段階ともに平面形はほぼ正方形を呈するものと推定される。新段階プランの遺存状態は良好であるものの、調査区壁の土層断面に壁の立ち上がりはほとんど認められない。このことから、本来的に掘り込みの浅い堅穴であった可能性がある。

古段階から新段階への拡張は、前後壁側の拡張幅は狭く、左壁側の拡張幅は広がっている。

壁溝は、新段階では全周している。古段階の壁溝は、新段階構築時における壁材の取り外しによっ

てかなり壊されており、前壁及び後壁、左壁の一部に残存しているが、掘方の形状を見れば全周していたようである。なお、古段階左壁の壁溝は、新段階の構築時に床面レベルまでしっかり埋め戻されており、古段階床面の調査時には全く見いだせなかった。

床面は新段階、古段階ともにほぼ平坦に仕上げられている。

ピットは新段階、古段階ともに検出され、新段階のPit 1・2・3・5は柱穴と考えられ、古段階左壁中央及び左前隅と左後隅のPit 7・8・9はかなり小型ではあるが柱穴と考えられる。

【カマド】 堅穴部の約半分が調査区域外にあるため、新段階、古段階ともにカマドは検出されなかった。新段階の左前隅付近の床面からは、カマドのソデ材起源の砂質粘土塊が出土している。これは一部が強く被熱し、赤化していることからカマド構築材であったことは確実である。このカマド構築材の付近にカマド本体が構築されていたとすれば、構築位置は、前壁の左寄りとなる。

【付随遺構】 新段階、古段階ともになし。

【堆積土・床構築土】 新段階の堆積土は黒色土を主体とし、1c層には白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)が微量に含まれている。古段階の堆積土は存在しない。新段階の床構築土は、黒色土にロームブロックを混和させた、あまり分層されない単純層で、古段階の床面上に盛土して構築されている。古段階における床構築土は、暗褐色～黒褐色土等にロームブロックを多量に混和させたもので、最上層には仕上げ若しくは追加と思われる薄層が貼り付けられている。

【出土遺物】 新段階の覆土及び床面、床面付近からは土器と礫が、古段階床面からも土器、礫が出土しているが、新段階・古段階ともに遺物は少ない。

【備考】 本堅穴建物跡の約半分は調査区域外にあり、調査区域ラインの約1mほど奥は長谷沢に面する急崖となっている。このことから、本堅穴建物跡の約2分の1弱は、平安時代以降の崖崩れにより失われたとみられ、かつて本堅穴建物跡の周辺には、もっと広い土地が存在していたものと推測される。

外周溝(SI102SD01(旧SD109))

新段階に伴うと考えられるもので、堅穴部後壁及び左壁に平行して構築されている。堅穴部と外周溝上端間の距離は、後壁-外周溝間の距離よりも左壁-外周溝間のほうが若干長い。

断面形は全般にV字形を呈し、先端部の底面は緩やかに立ち上がる。堅穴部左壁中央に対峙する位置には断面が逆台形状を呈す、不整楕円形土坑(SI102SD01SK01)が付随している。I N-107グリッド部分における覆土上半からは、多くの土器片等が出土している(写真9-2)が、特にこの土坑部分には土器・礫等が集中し(写真9-1)、カマド起源と推定される被熱砂質粘土や焼成粘土塊も含まれている(写真9-3, 4)。また、この下層には、焼土層(5a層)と炭化物層(5b層)が水平に堆積しており、これら焼土と炭化物は、この場所における燃焼行為によるものである。

このことから、この土坑は不要品の廃棄ないし魔棄儀礼の場所であると考えられる。ただし、カマド起源と思われる被熱砂質粘土は、堅穴部からみて外周溝の外側から廃棄されている。このことから、これらの遺物及び被熱砂質粘土等は、本堅穴建物から生じた物だけでなく、他の堅穴建物跡に関わる遺物も含むものと推定される。なお、I N-107グリッド部分及び土坑部分も、底面からの遺物は一切無く、全て覆土の中位以上からの出土である。よって、これらの遺物は、本堅穴建物跡の機能時～魔絶以降にかけて廃棄された可能性がうかがわれる。

SI103竪穴建物跡（遺構図7～9・写真10～12）

【概要】 本竪穴建物跡はグリッドI O-109～110を中心に位置する。約半分が調査区域外にあるため、全体形状は不明である。竪穴部は張り出しを有し、中央には外延溝の可能性のある溝跡(SI103SD02(旧SI103SD01))が伴う。外部付属施設としては、外周溝(SI103SD01(旧SD110))及び後壁の外部に塀(柵)跡(SI103SB01)が伴う。竪穴部には白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)が面的に堆積している。

【重複】 SI102竪穴建物跡(SI102)、SI102竪穴建物跡外周溝(SI102SD01)、SK216土坑より新しく、道跡と推定されるSX202(D)土壌硬化範囲より古い。張り出しの外部には、本竪穴建物跡に伴う可能性の高いSX202(d)土壌硬化範囲があるが、調査上の検出順序では本竪穴建物跡よりも古い。なお、SX202(d)は道跡と推定されるSX202(D)土壌硬化範囲に接している。SD118溝跡との新旧関係は不明である。

竪穴部

【構造】 平面形はほぼ正方形を呈し、左壁の左前隅が張り出す構造とみられる。

壁溝はほぼ全周する。後壁の壁溝は他に比べて幅広となっており、厚い部材もしくは複数の部材が埋め込まれるなど、他の壁とは違う構造であった可能性がある。

左壁に付随する張り出しの出幅(短軸長)は約100cmを測り、左壁長に対する張り出し範囲の長さは43%を占める。

床面は全般に平坦に仕上げられている。張り出し範囲の床面も他の部分と同様の状況であり、特に違和感はないが、張り出しの範囲にのみ2面の硬化範囲が認められる。

ピットは壁溝内と各出隅内側及び張り出しの入隅内側に穿たれている。1・2・3・4・8は柱穴と考えられる。

【カマド】 カマドは調査区壁にかするように検出されたため全体形状は不明であるが、構築位置は前壁の左寄りである。平面的に把握できた範囲は左ソデの一部のみである。土層断面図(A-A')にみえる直立した板状の礫は、左ソデの芯材と推定される(写真11-1,2)。なお、土層断面図(A-A')に現れた左ソデ粘土の面積は非常に小さく、芯材と推定される直立礫はカマド特有の砂質粘土に包まれることなく露出していたことから、このカマドは大きく壊れている可能性がある。

【付随遺構】 竪穴部中央に外延溝の可能性のある溝跡(SI103SD02)が検出されている。既設の床面を掘り込んだ後、埋め戻されて再び平坦な床面へと修復されている。末端部は調査区域外にあるため、竪穴部外に延びているかどうかは不明であるが、底面は、左壁側から右壁側へと約8cmほど下がっていることから、排水溝の跡と推定される。なお、後述する白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)は、この溝跡の上で途切れているが、本溝跡は確実にB-Tmの下位に有り、決してB-Tmを切るものではない(写真11-3参照)。

【堆積土・床構築土】 堆積土の大半は黒褐～暗褐色土(1～2層)を主体とし、4層は安定して堆積する白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)層であり、火山灰の純度は高い。全般にB-Tmは床面に近接しており、一部では床面の直上に堆積している部分もみられる。

床構築土は、黄褐色土を主体とする範囲、黒褐～暗褐色土にロームブロックを多量に混和させた土壌を主体とする範囲など様々認められる。掘方が全般に平坦であるため、一部では地山をそのまま床面としている箇所も認められ、他の竪穴建物跡に比べれば床構築土の使用量は少ない。ただし、後壁

及び左壁の後寄りとカマド付近～張り出しの範囲だけは掘方が深く、床構築土は厚く充填されている(写真11-5)。なお、カマド付近～張り出しにかけてのみは、追加の床構築土(1b層)が貼り付けられている。

【出土遺物】 土器・礫・鉄滓などが出土している。床面からは土器及び鉄滓(碗形滓)に加え、多くの礫石器及び礫が出土している(写真12-1,2参照)。

【備考】 SX202(d)土壌硬化範囲と張り出しの範囲内に認められる2面の床面硬化範囲は一体のものと推定され、張り出しの横幅の広さと両硬化範囲の位置関係より、この張り出しは出入口であったと推定される。張り出しの外部にあるSX202(d)土壌硬化範囲は、張り出しの壁溝に切られるように検出されているが、この張り出しが拡張によって構築されているような状況は認められなかった。

本堅穴建物跡より古い土坑としたSK216の底面も硬化している。このSK216土坑は、後述する塀(柵)跡との位置関係が調和的であるばかりか、もう一つの(かつての)出入口と捉えるに相応しい位置にある。このことから、このSK216土坑は、本堅穴建物跡と関連、若しくは伴っていた可能性もある(堆積土の新旧関係に基づけば、SK216土坑はあくまでも本堅穴建物跡の廃絶以前に人為的に埋め戻された古いものであるが、堅穴建物跡の存続期間中に、付属遺構が埋め戻されることはあり得る現象であるので、参考として本項に付記し、図示も併せて行った)。

多くの礫及び礫石器の床面における出土状況(写真12-1)に加え、2面の硬化範囲のあり方は、この堅穴部内で何らかの作業が行われていた様子をうかがわせる。

外周溝(SI103SD01(旧SD110))

本外周溝は、堅穴部の北壁～西壁を広く囲むもので、他の堅穴建物跡とは異質な形状を呈す。平面形はπ字状、断面形はV字形を呈す。平面形は堅穴部の壁面ラインに沿わないが、堅穴部と後述の塀(柵)跡(SI103SB01)を意識して屈曲させている様子が明らかである。検出範囲内でみると、堅穴部及び塀(柵)跡より高位に構築されていることから、恐らくは堅穴と塀を浸水から守る防水溝の跡と推定される。

出土遺物は、I O-111グリッド部分では覆土上半からある程度まとまった量の土器片等が出土しているが、この範囲外からの出土遺物は極めて少ない。底面からの遺物は全く無く、全て覆土の中位以上からの出土である。

塀(柵)跡(SI103SB01)

後壁側の外部に検出されている。後壁に平行する列と、直行する列とに分けることができる。堅穴部左後隅の外部にあるピットPit3558とPit3696を結べば掘立柱建物跡としてとらえることも可能である。いずれにしても正確なプランの抽出は不可能であるが、堅穴部の至近距離にこのようにしてピットが並ぶ状況は、何らかの構造物があった可能性は高い。

SI104竪穴建物跡（遺構図10・写真13）

【概要】本竪穴建物跡はグリッドI M-113を中心に位置する。他の竪穴建物跡とは大きく距離が離れ、カマド方位も異なる。

【重複】SD121(旧SK116)より古い。

【構造】平面形は長方形を呈し、前後壁と左右壁の比は約6:7である。正方形を基調とする本遺跡の竪穴建物跡の中では特殊な形態に属す。壁は垂直～やや斜めに立ち上がり、床面にはやや凹凸がみられる。壁溝は、後壁の左寄りと右前隅にみられ、他には検出されなかった。ピットは全く検出されなかった。

【カマド】カマドは、燃焼部から排煙部まで検出された。前壁の左寄りに構築され、煙道部は壁外に30cmほど伸びている。煙道部は、土坑状に掘り込んだ内壁面に砂質粘土を盛り付けて造られている(土層断面図は作成していない)。燃焼部側壁(ソデ)も煙道部と同じ砂質粘土で造られているが、廃絶時に壊されているようで、燃焼部から左ソデ手前の床面に、芯材の可能性がある大型礫が3点出土している(写真13-2)。火床面は不明瞭で、赤化範囲は認められなかった。

【付随遺構】SI104SK01土坑が付随する。平面形は長楕円形、断面形は鍋底状を呈す。右壁に沿うようにして床面に構築されており、土層断面図(A-A')より、廃絶時には開口していたことが分かる。

【堆積土・床構築土】堆積土は黒～暗褐色土を主体とし、ロームブロックを多く含む。床構築土は、ロームブロックを主体とする、あまり分層されない単純な層である。

【遺物の出土状態等】覆土からは土器片に混じって大型の礫等が出土した。大型の礫の出土状態より、本竪穴建物跡は、埋没過程で不要品の廃棄場所として利用されていた可能性がある(写真13-3)。床面からは土器・焼成粘土塊・礫が出土しているが、土器は極めて少なく、多くは礫である。

【備考】本竪穴建物跡よりも新しいSD121(旧SK116)溝跡の堆積土は、本竪穴建物跡の堆積土と極めて類似している。本竪穴建物跡の左壁に沿うように重複している点も併せると、SD121(旧SK116)溝跡は、本竪穴建物跡の埋没過程の回みがある程度見えていた段階で構築された可能性がある。

左壁側(東側)に位置するSK117とSK118の2基の土坑は、本竪穴建物跡と軸がほぼ一致し、等距離で並ぶように位置していることから、本竪穴建物跡の付属施設等である可能性が高いと推定される。

SI201竪穴建物跡（遺構図11～12・写真14）

【概要】本竪穴建物跡はグリッドI D・E-104～105を中心に位置する。竪穴部は張り出しを有し、SI201SK02・SI201SK03・SI201SK04の3基の土坑が伴う。後壁の後方には、外周溝(SI201SD01)と推定される溝跡があり、前壁前方には掘立柱建物跡(SI201SB01)と推定される柱穴がある。全体が大きく削平されており、さらに竪穴部中央には大型の攪乱もあるなど遺存状態は非常に良くない。

SI201SD01外周溝は、その大半が調査区域外にあり、一部の検出にとどまることから本竪穴建物跡に伴うかどうか確実性に乏しいが、後壁の後方に適切な距離で沿うように構築されている状況を重視し、本竪穴建物跡に伴うものと判断した。また、SI201SB01掘立柱建物跡は、SI204竪穴建物跡竪穴部と重複関係にあること等より認定が難しいが、SI204竪穴建物跡竪穴部内に検出されたピットがあまりに多く、さらに、本竪穴建物跡の軸線と一致する2個のピット(Pit3295・Pit3413)が、SI204竪穴建物跡の柱穴と壁溝に壊されていることから、本竪穴建物跡に伴う掘立柱建物跡が存在する可能性が高いと判断した。

【重複】SI204竪穴建物跡、SK226(旧SX201)土坑、SK227(旧SI201SK01)土坑より古い。

竪穴部

【構造】 ほぼ正方形を呈し、左壁の左前隅が張り出す構造である。

壁溝はほぼ全周していた可能性が高いが、著しく削平されているため、前壁の左半から後壁の左寄りと右壁の一部にのみ残存し、これ以外では検出されなかった。

左壁に付く張り出しの出幅(短軸長)は約75cm、左壁の全長に対する張り出し範囲の長さは46%を占める。

床面は削平が著しく、判然としなが、概ね平坦に仕上げられているようである。

ビットは壁溝中に穿たれるものがほとんどで、Pit1・7・8・9などは柱穴と考えられる。

【カマド】 カマドについても削平が著しいことから不明な点が多い。構築位置は、前壁の左寄りである。煙道部は検出されず、燃焼部付近には大型の礫が2点出土したのみ(写真14-2,4)で、カマド構築材に一般的な砂質粘土等は残存していない。火床面は暗褐色土を主体とした床面上であり、赤化範囲は不鮮明である。2点出土した礫は、左ソデの芯材に用いられていたものが倒れた状態を示すものと推定される(写真14-2,4)。

【付随遺構】 SI201SK02・SI201SK03・SI201SK04の3基の土坑が検出されている。いずれも床面上に検出された。平面形は、SI201SK02が不整形、SI201SK03が円形に近い楕円形、SI201SK04が不整形である。断面形は、SI201SK02が不整形楕円形、SI201SK03が箱形、SI201SK04が底面に凹凸が多い逆台形を呈す。これらはカマドを取り囲むように位置している。

【堆積土・床構築土】 堆積土は削平によりごくわずかしが存在しない。床構築土は、ロームブロックを多量に混和させた黒褐～暗褐色土が大半である。

【出土遺物】 土器・土製品・焼成粘土塊・剥片・礫が出土している。床面からは剥片・土器・焼成粘土塊・礫が出土している。SI201SK02からは玉髓の小礫、SI201SK04からは土器が出土している。

【備考】 本竪穴建物跡より新しいSK226(旧SX201)土坑の1層は硬化土壌である。この土坑は、左後隅において本竪穴建物跡と重複関係にあるが、本竪穴建物跡の存続期間中に追加構築された土坑であれば、調査上、新しい遺構と判断される。このことから、SK226(旧SX201)は、本竪穴建物跡竪穴部に伴う出入口であった可能性もある。

外周溝(SI201SD01(旧SD210))

後壁の後方に検出されている。平面形はやや弧状を呈し、西側調査区壁付近ではやや方向を変えるように幅広となっている。断面形は皿状を呈す。出土遺物はなし。

掘立柱部(SI201SB01)

竪穴部と切り離して単独で捉えた場合、構造的には成立し難いものであるが、Pit3295・Pit3413の2個のビットは、本竪穴建物跡の左壁ライン(張り出しを除く)と一致し、また、Pit1007とPit3064の2個は、竪穴部右壁の壁溝ラインに一致している。これらのことから、これら4個のビットは竪穴部に付属する可能性が高いと考えられる。

SI202竪穴建物跡（遺構図13～16・写真15～16）

【概要】本竪穴建物跡はグリッド I G-105を中心に位置する。古段階-1・古段階-2・中段階-1・中段階-2・新段階の5つのプランがある。新段階は焼失建物であり、床面に炭化物・炭化材が検出されている。中段階の竪穴部には2条の溝跡(SI202SD01・SI202SD02)が、新段階の竪穴部には土坑(SI202SK01)が伴う。後壁の外方には堀跡(SI202SB01)が伴うが、これは古・中・新のいずれの段階に伴ったものか不明である。全ての段階とも全体的に削平を受けており、遺存状態は良くない。なお、古段階-1・古段階-2・中段階-1・中段階-2は、精査では「古段階」と呼称されている。

【重複】SK223土坑より新しく、SI205竪穴建物跡外周溝(SI205SD01(旧SD113・旧SD115))より古い。

【構造】古段階の平面形は、正方形と長方形の2つがあり、中段階・新段階の平面形はいずれもほぼ正方形を呈する。

[古段階] 2つの段階に細分される。前壁と右壁が残存していないため、確実ではないが(精査当初は、右壁の壁溝に相当する黒色土が存在したが、数回の確認作業で消滅してしまった)、最初は正方形プラン(古段階-1)で構築された後に後壁を拡張し、長方形プラン(古段階-2)へと変遷したとみられる。

床面は古段階-1、2ともにほぼ平坦に仕上げられている。ピットは検出されなかった。

[中段階] 正方形を呈す。壁溝は、強く削平された右後隅を除いて全周する。後壁は、古段階-1の後壁と古段階-2の後壁の中間に掘り込まれていることから、中段階は古段階の構造体を利用した拡張ではなく、古段階を解体して建て直されたものと推定される。左壁の上半は当初、後壁に対して垂直にならず、やや斜めに構築されている(中段階-1)が、後に後壁に対し、垂直に修正(中段階-2)されている。床面は、古段階の床面を継続利用している。ピットは新段階のものとの分離が難しいが、Pit 2・8・10・11の4個は主柱穴に相当すると考えられる。

[新段階] 中段階を拡張したもので、正方形を呈する。壁溝は、強く削平された左後隅と後壁の右半～右壁の後半を除き、全周する。前段階からの拡張は、左壁と後壁のみであり、前壁と右壁は前段階を継続利用している。拡張幅は左壁に比べ、後壁のほうが広く拡張されている。

床面は、中段階の床面上に床構築土を盛土して施工されている。削平を受けていない範囲で見られる限りでは、ほぼ平坦に仕上げられている。ただし、左壁から右壁側にかけては若干の傾斜がみられる。

ピットは中段階のものとの分離が難しいが、Pit 2・4・6・11の4個は主柱穴であり、前壁の壁溝中にあるPit 2と11は、前段階を踏襲していると考えられる。

これら4個の主柱穴のうち、前壁の壁溝中に穿たれているPit 01と02の柱穴からは、礫が3点ずつ出土している。カマドの左方に位置するPit 2では、底面から42-②・42-③・42-①の順に3点の平らな礫が重なって出土している(写真15-4はPit 2の底面から出土した礫(写真42-②))。これは柱の沈下防止のための礎石あるいは柱の長さ調整のためのものと推定される。一方、カマドのすぐ右に位置するPit 11からも写真43-①と②と図示なしの3点が出土しているが、これら3点は全て覆土からの出土であり、Pit 2とは出土状態の違いがあることから、柱の傾き調節としての礎などが含まれている可能性もある。

いずれにしても前壁に穿たれた2個の主柱穴にこのような礫が伴うということは、固定荷重や垂直度の正確さ等に対する慎重な配慮がなされている状況と捉えられ、上屋構造を考える上で注目される。

また、Pit 6 と 4 の主柱穴は、古段階プランの左後隅と右後隅に合わせるように穿たれている。このことから、新段階においても古段階のプランを意識していた、あるいは間尺が存在していた可能性がうかがわれる。

【カマド】 2箇所に検出されている。新段階のカマドは、中段階のものを継続利用しているとみられ、古段階のカマドは、中段階への移行時に際に壊されている。

【古段階】 左上隅より近い、前壁左寄りに構築されている。中段階への移行時に壊され、さらにSI205SD01にも壊されているため、残存しているのは火床面(旧SI202SF01)のみである。よく焼けており、地山にまで赤化範囲が及んでいる。

【中段階～新段階】 前壁右寄りに構築されている。燃焼部～煙道部が残存している。火床面は同位置に中段階・新段階の2面が認められる。ただし、新段階に移る過程で、中段階の燃焼部が改修されたかどうかは不明である。燃焼部は、左右ソデが良好に残存し、煙道部の底面には平坦面を上にした礫が固定され、左側壁には直立した板状の礫が固定されている(写真16-1)。新段階火床面の上には、土師器甕(遺物図8-6)底部が支脚として外底面を上にして固定されている(写真16-2)。

【付随遺構】 中段階に2条の溝跡(SI202SD01・SI202SD02)、新段階に1基の土坑(SI202SK01)が伴う。

【古段階】 床面からは、SI202SD01とSI202SD02の弧状の溝跡2条が検出されている。SI202SD01は堅穴部中央から古段階カマド火床面付近にかけて、SI202SD02は古段階カマド火床面付近から前壁の壁溝にかけて構築されている。これらの底面に傾斜は無いが、前壁の壁溝にぶつかるSI202SD02は一時的な排水溝として機能した可能性がある。

【新段階】 床面上にSI202SK01土坑が検出されている。不整長方形を呈し、断面形は逆台形状を呈す。土層最上の1層に含まれる多量の炭化物は、堅穴部焼失時のものと考えられる。

【堆積土・床構築土】 新段階の堆積土は削平によりほとんど残存していないが、黒褐色土を主体とし、1層には後述する炭化材～炭化物が含まれている。中段階・古段階の堆積土は存在しない。

新段階の床面は、中段階床面の上に床構築土を盛土して施工されている。黒褐色土を主体とし、ロームブロックを少量含む。中段階の床面は、古段階の床面を踏襲しており、古段階の床構築土は黒褐色土等にロームブロックが少量混入する。古段階床面範囲外の、中段階床面は、地山を水平に切土し、そのまま床面にされている。

【遺物の出土状態等】 床面から建物焼失に伴う炭化物・炭化材が検出されている。削平の影響もあるが、右上隅と左上隅を結ぶ対角線の左壁側に検出され、右壁側にはほとんどみられない。床面上には床板材と推定されるものや、左壁の壁溝内に、横位に差し込まれていたような状況を示す板材など、建物構造を推測させるものが数箇所に検出されている。

遺物は、新段階の床面から土器・礫が出土している。中段階の床面からは、土器・玉髄の小礫(遺物図10-2)が出土している。新段階床面出土の遺物図8-1の礫は磨面を上にして出土したもので、建物焼失時に付着した煤が認められる。

本堅穴建物跡の出土土器は、SK213土坑出土土器との接合が認められ、総数4点を数える。特に、遺物図15-5は、SI202床面1点(底部～口縁部：大型破片)とSK213覆土1点(口縁部：小片)が接合している。本堅穴建物跡とSK213土坑との位置関係を考慮すると、SK213は本堅穴建物跡に伴う土坑である可能性がある。

【備考】床面出土の礫(写真48-①)は、SI101竪穴建物跡竪穴部の覆土上半から出土した2点の礫片と接合している。また、新段階覆土出土の遺物図15-1の土師器場は、SI101竪穴建物跡竪穴部の覆土上半(1M-106)、遺構外Ⅰ層(1M-106)、遺構外Ⅱ層(1M-107)の3片と接合した場の体部破片である。

塀(柵)跡(SI202SB01)

8個の柱穴が狭い柱間寸法で後壁の外部にほぼ垂直に並ぶものである(調査区域外にさらに並んでいる可能性がある)。調査区域外に別の竪穴建物跡が存在し、そちらに伴う可能性、或いはSI201竪穴建物跡竪穴部の右壁と平行するため、そちらに伴う可能性、など、いくつかの想定は可能性だが、至近距離にある本竪穴部に伴う可能性が最も高いと判断した。

SI203竪穴建物跡(遺構図17~19・写真17~18)

【概要】本竪穴建物跡はグリッドI K-104を中心に位置する。焼失建物であり、多くの炭化物・炭化材が検出されている。竪穴部には土坑(SI203SK01)、外部には塀(柵)跡(SI203SB01)が伴う。

【重複】なし。

竪穴部

【構造】本遺跡の竪穴建物跡の中では小型の部類に属す。平面形はほぼ正方形を呈し、壁は垂直～やや斜めに立ち上がる。壁溝及びピットは検出されなかった。

床面は新古の2面が認められる。新段階・古段階ともに概ね平坦に仕上げられているが、新段階の床面は、中央部にわずかな凹凸が認められる。

【カマド】いわゆるトンネル式の構造である。燃焼部から排煙部まで良好に検出された(天井部の残存は一部)。前壁の左側寄りに構築され、煙道部は壁外に溝状に伸び、排煙部底面は若干くぼんでいる。竪穴部壁面相当部分には、隅丸方形の煙道断面が明瞭に現れている。周囲は良く被熱し、明瞭な赤化範囲が残る(写真18-6)。

左右の各ソデには直立する芯材礫が各1点ずつ含まれ(写真18-7)、土層断面図(B-B')には、ソデ構築時の補強材と推定される杭の痕跡がみられる。

燃焼部の構築面は古段階の床面上であり、古段階における火床面は、床面がそのまま利用されているが、新段階の床面施工時に燃焼部の周囲は嵩上げされ、新段階における火床面は、古段階カマドの崩落層(15a、15b、16s層)の上面に構築土をかぶせてつくられている。古段階における火床面は良く焼けているが、新段階の火床面はほとんど赤化していない。このことから、新段階における新たな床面施工後の燃焼回数は、古段階ほど多くはなかったことが推定される。

古段階の火床面には、支脚として転用された土師器甕(遺物図10-7)の破片が2枚重ねられている。

【付随遺構】SI203SK01土坑が付随する。平面形は円形、断面形は箱形を呈す。新段階の床面に検出されたものであり、カマド焚口後方に構築されている。土層断面図(A-A')より、廃絶時(焼失時)には開口していたことが分かる。

【堆積土・床構築土】堆積土1層はロームブロックを多量に含む層で、特に1a層は黄褐色土を主体とし、一般的な見方では人為堆積として判断されるが、本竪穴建物跡が焼失建物であることを考慮す

ると、この層はいわゆる屋根土である可能性も考えられる。

新段階の床構築土は、黒色～黒褐色土にロームブロックを50%ほど混和させたものであるのに対し、古段階の床構築土は、堅穴構築時の粗掘で生じたと思われるロームブロックが主体となっている。

【遺物の出土状態等】 床面から多くの炭化物・炭化材が検出されている。左上隅と右下隅を結ぶ対角線の前壁～右壁側に検出され、左壁側にはほとんどみられない。部材としての原形をとどめている物は少なく、小ブロック～粉末状になっているものがほとんどであるため、建物構造を推測させるだけの炭化材は揃っていない。建物構造を推測させる炭化材としては唯一、右下隅付近に出土した棒材1点のみである。これは太さや出土位置及びその方向よりみて、右下隅に設置された部材の一部と推測される。

遺物は、覆土から土器・礫、床面から土器・鉄製品・礫が出土している。土器の中には完形の坏などがみられる。なお、後述するSI203SB01塀(柵)跡の南東に、粘土・焼土・土器の廃棄ブロック(廃棄ブロック1, 2)が2箇所検出されている。遺物図10-7の土器器甕は、SI203床面+SI203カマド支脚+廃棄ブロック1という接合を示していることから、これら2つの廃棄ブロックは、本堅穴建物跡に関連していると考えられる。

【備考】 本堅穴建物跡の後壁～左壁の外部には、道跡と推定されるSX202(A)土壌硬化範囲があり、後壁左寄りの外部には、本堅穴建物跡に伴うと推定されるSX202(a)土壌硬化範囲がある。SX202(a)土壌硬化範囲は、道跡と推定されるSX202(A)土壌硬化範囲に接しており、これらは互いに関連するものと推定される。SX202(a)土壌硬化範囲は、本堅穴建物跡の出入口に相当した部分と推定される。

塀(柵)跡(SI203SB01)

前壁側の外部に検出されたものであり、カマドをL字状に囲むように構築されている。堅穴部左壁を切るビットPit3181と本塀(柵)跡のPit3446を結べば掘立柱建物跡としてとらえることが可能だが、それらの間にビットは全く検出されなかったことから、無理な推定は控え、塀(柵)跡とした。

SI204堅穴建物跡 (遺構図20～21・写真16)

【概要】 本堅穴建物跡はグリッドI E・F-105～106を中心に位置する。堅穴部にはSI204SK01(旧SK211)とSI204SK03(旧SK201)の2基の土坑が伴い、前壁の前方には掘立柱建物跡(SI204SB01)が付属する。全体が大きく削平されており、遺存状態は非常に良くない。

カマドは残存していないが、周囲の堅穴建物跡におけるカマド設置位置の傾向より、本堅穴建物跡堅穴部のカマドは南東壁にあつたものと推定し、前壁・後壁・左壁・右壁の表現を用いる。

【重複】 SI205堅穴建物跡*・SK215土坑より新しく、SD108溝跡より古い。

* 本堅穴建物跡の掘立柱部(SI204SB01)が、SI205堅穴建物跡外周溝(SI205SB01)を切る。

堅穴部

【構造】 平面形はほぼ正方形を呈する。壁溝はほぼ全周していた可能性が高いが、著しく削平されているため、前壁の左半から後壁の左寄りにかけて残存し、これ以外では検出されなかった。

床面は削平により判然としないが、左壁付近にのみ検出されている。

ビットは多数検出されているが、明確に伴うもの特定は困難である。Pit 1～4は柱穴と考えられる。

【カマド】 カマドは削平され、残存していない。

【付随遺構】 SI204SK01(旧SK211)土坑・SI204SK03(旧SK201)土坑が床面上に検出されている。SI204SK01は不整長方形を呈し、底面には木の根による凹凸が著しい。SI204SK03は楕円形を呈し、断面形は台形を呈す。

【堆積土・床構築土】 堆積土は削平により全く存在しない。床構築土は、ロームブロックを混和させた黒褐～暗褐色土が主体である。他の堅穴建物跡に比べ、ロームブロックの混入度合いは少ない。

【出土遺物】 床構築土から土器が数点出土したのみである。

【備考】 本堅穴部は、SI201堅穴建物跡堅穴部と軸線が一致し、近距離で並ぶように構築されていることから、SI201の掘立柱部を堅穴部に作り替えたものである可能性がある。

掘立柱部(SI204SB01)

Pit01・Pit17の2個は、堅穴部の左壁ラインに並び、Pit17・18・19の3個は、堅穴部前壁に平行する。最前面のPit01～05の5個は、底状のものとみること可能である。いずれにしてもこれらのピットは、堅穴部に平行、垂直に並ぶことから、堅穴部に伴う掘立柱建物跡と考えられる。

なお、堅穴部前壁に平行するPit17・18・19は掘り込みが深く、17が41cm、18が33cm、19が46cmを測る。Pit19は、SI205堅穴建物跡外周溝(SI205SD01)を切るものであるが、底面はこの外周溝の覆土を掘り抜き、地山をさらに9cmも掘り込んでいる。これら3個のピットの深さより、本掘立柱部は堅穴部との緊結をかなり意識している様子がうかがわれる。

SI205堅穴建物跡(遺構図22～23・写真19)

【概要】 本堅穴建物跡はグリッドI G・I H-106を中心に位置する。堅穴部には土坑(SI205SK01)と外延溝(SI205SD02)が伴う。外部付属施設としては外周溝(SI205SD01)が伴う。全体的に削平を受けており、遺存状態は良くない。

カマドは残存していないが、付属する外周溝の開口方向及び周囲の堅穴建物跡におけるカマド設置位置の傾向より、本堅穴建物跡堅穴部のカマドは南東壁にあったものと推定し、以下では前壁・後壁・左壁・右壁の表現を用いる。

【重複】 SI204堅穴建物跡掘立柱部(SI204SB01)・SK213土坑・SD208溝跡より新しく、SI207堅穴建物跡外周溝(SI207SD01)及びSK214土坑より古い。

堅穴部

【構造】 平面形はほぼ正方形を呈する。壁溝は、削平により失われた右壁の中央を除いてほぼ全周している。床面は、一部に削平を受けているが、概ね平坦に仕上げられている。

ピットは壁溝中に穿たれるものが多く、Pit1～6は主柱穴と考えられる。

【カマド】 カマドは削平され、残存していない。火床面さえも検出されなかったことから、本堅穴部のカマドは、SI207SD01によって壊されているものと推定される。この場合、カマドの設置位置は、前壁左寄りとなる。

【付随遺構】 SI205SK01土坑が床面上に検出されている。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は皿状を呈す。同じく床面上に検出されたSI205SD02外延溝は特異な平面形を示す。左壁の左上隅付近から始まり、壁溝の左上隅に沿うようにL字状に屈曲し、前壁とやや平行しながら進み、右上隅の壁を破って壁外に伸び、堅穴部の外部2.5mのところまで右壁に平行するかのよう北西へとL字状に曲がっ

ている。末端部の底面レベルは、始発部分よりも約50cmほど低いことから、本外延溝は排水溝の跡と推定される。なお、壁溝は、本外延溝の始まる部分を境に、幅が極端に異なっている。左壁～後壁にかけては幅広で、左上隅付近～前壁にかけては狭く、一般的な幅となっている。

【堆積土・床構築土】 黒褐色～暗褐色土を主体とし、ロームブロックを含む。床面を直接覆う8層は、白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)を高純度で含む(写真19-2)。床構築土は、黒色土にロームブロックを多量に混和させたものである。

【出土遺物】 本堅穴部は削平されていることもあり、遺物は他の堅穴建物跡に比べ、極めて少ない。床面からは土器・礫が出土している。遺物図10-22の礫は、磨面らしき溝状の窪みを有すものである。

【備考】 本堅穴部は、SI202堅穴建物跡と軸方向が一致し、SI202は焼失建物であることを考慮すると、本堅穴建物跡は、SI202の建て直しによるものである可能性がうかがわれる。

掘立柱部(SI205SB01)

次項で述べる外周溝(SI205SD01)の平面形も考慮しながら、堅穴部の軸に概ね平行、垂直の位置に並ぶ柱穴を抽出した。基本的には2間×2間の長方形プランであり、北東壁側では、2条の柱穴が並ぶ。なお、後述するSI207堅穴建物跡に伴う柱穴を最大限に抽出したとしても、本堅穴建物跡堅穴部前壁前方における柱穴数は相当数であることから、掘立柱建物跡や塀(柵)跡が存在したことはほぼ確実と言える。

外周溝(SI205SD01)

堅穴部の左壁、後壁及び右下隅の屈曲する壁溝にほぼ平行し、左壁側の末端近くは南方向へ「く」の字状に折れて収束しつつ、追加構築あるいは先に構築されていたと思われる直線状の部分(旧SD116部分)と連結し、南東方向へと延びる。この直線状の部分(旧SD116部分)は、掘立柱部と連動するものと推定される。後壁側では、かつて堅穴部右下隅の屈曲に沿われていた端部付近は、直線的な形状に改修されている。堅穴部左後隅の延長上付近では、上端幅が広く構築されている。

堆積土の上位層には、白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)が濃厚に堆積している(写真19-3)。

なお、南東方向へ延びる部分は、次項で述べるSI207堅穴建物跡外周溝(SI207SD01)とほぼ平行し、末端部は、SI207SD01末端の土坑(SI207SD01SK01)に切られている。SI207SD01とほぼ平行、さらに末端部がSI207SD01SK01に丁度切られるというこの状況より、本外周溝はSI207SD01の前身であるかのような状況を示している。

またさらに興味深いことに、前述の外延溝(SI205SD02)の、堅穴部の外部2.5mのところまで右壁に平行するかのよう北西へと「し」字状に曲がった部分の末端が、本外周溝の、堅穴部右下隅の屈曲に沿う丸みを帯びた末端と丁度対峙し、両末端部の間には、SK218・SK224の2基の土坑が位置している。加えて、SD206・SD207の2条の小規模な溝跡は、このSK218土坑の方向へと走っている。

以上、このように多数多様な遺構が偶然とは考え難い位置関係を示す状況より、これらの遺構は時間的に近い関係を有し、互いに関連していたものと推定される。

SI207竪穴建物跡（遺構図24・写真19）

【概要】本竪穴建物跡はグリッド I 1-107を中心に位置する。竪穴部は削平により平面形状を全くとどめてない^{※1}ことから、本来は周溝状遺構とでもすべきものであるが、J字状の溝跡(旧SD107+104)と線状の溝跡(旧SD105)の互いの位置関係及び各溝跡の断面形と堆積土の特徴より、これらを竪穴建物跡外周溝(SI207SD01)と判断した。

外周溝で囲まれた範囲には、多数のピットがみられ、竪穴部が存在した可能性は高い。また、その南東にも多数のピットがみられることから、掘立柱部^{※2}も存在した可能性が高い。よって、以下では、竪穴部と掘立柱部の想定案も示しておく。

※1 竪穴部そのものが検出されていないため、カマド位置も不明であるが、外周溝の形状に基づいて想定した竪穴部内にカマドが存在したとすれば、周囲の竪穴建物跡におけるカマド設置位置の傾向より、その構築位置は南東壁側である可能性が高いことから、以下では前壁・後壁・左壁・右壁の表現を用いる。

※2 これまでの事例に基づけば、竪穴建物跡に付属する掘立柱建物跡は単独の掘立柱建物跡に比べると、特殊な平面形であったり歪んでいる等、しっかりした構造を示さないものが少なくない。このことから、高い確度での抽出は不可能であるが、可能性の範囲内で積極的に抽出した。

【重複】SI205竪穴建物跡(SI205)より新しく、SD211溝跡より古い。

竪穴部(推定)

【構造】竪穴部の存在が想定される範囲にみられるピットのうち、網掛けしたPit 1～11が柱穴に相当したものではないかと推定される。

掘立柱部(SI207SB01)

掘立柱部の存在が想定される範囲から、1～2間×2間のプランを推定した。

外周溝(SI207SD01)

想定竪穴部の、左壁・後壁・右壁を取り囲むように構築されている。想定竪穴部左後隅の延長上は、削平により途切れている。左壁側の南東端には土坑(SI207SD01SK01)が付加されている。この土坑の確認面には、外周溝のプランが確認できたことから、調査の上では土坑よりも外周溝が新しいものと判断されるが、一般的に外周溝の末端は立ち上がるのが通例であるにもかかわらず、本外周溝の末端は立ち上がらず、土坑の中央部でぼんやり消失している。このことから、本土坑は外周溝に伴い、土坑確認面に確認できた外周溝のプランは、掘り直しによるものと推定される。即ち、外周溝と末端の土坑の埋没は同時進行したが、外周溝のみがわずかに掘り直されたために、土坑の確認面に外周溝のプランが確認されたものと推定される。

遺物は、竪穴部左壁側部分の覆土にまとも出土した。土器・礫・鉄滓等がみられる。底面からの遺物は一切無く、全て覆土の中位以上からの出土である。よって、これらの遺物は、本竪穴建物跡の機能時～廃絶以降にかけて廃棄されたものと考えられる。

【備考】南東方向へ延びる旧SD114部分は、前項で述べたSI205竪穴建物跡外周溝(SI205SD01)とほぼ平行し、また、本外周溝の末端土坑は、SI205SD01の末端を切っている。これら2つの状況より、本竪穴建物跡は、SI205の建て直しによるものである可能性がうかがわれる。

SI208竪穴建物跡（遺構図25・写真19）

【概要】本竪穴建物跡はグリッドI J-106を中心に位置する。竪穴部、外周溝ともに、削平により大きく平面形状が失われている。

カマドは残存していないが、周囲の竪穴建物跡におけるカマド設置位置の傾向より、本竪穴建物跡竪穴部のカマドは南東壁にあったものと推定し、前壁・後壁・左壁・右壁の表現を用いる。

【重複】SI207竪穴建物跡外周溝(SI207SD01(旧SD105))・SD208溝跡より古い。

竪 穴 部

【構造】左壁(旧SD204溝跡)と後壁(旧SD209溝跡)の壁溝が残存している。これら左壁と右壁は削平により、本来の壁よりも短く検出されていると考えられ、幅は掘方の幅を示していると思われる。外周溝との位置関係より、Pit 1・2・5・6が支柱穴に相当し、壁溝中に穿たれるタイプのもので想定される。カマドは削平により残存していない。竪穴部内の付随遺構についても、削平により判然としないが、Pit3428とした浅い土坑状の遺構は、検出位置よりみて、本竪穴部に関連する可能性がある。

掘立柱部ないし塀(柵)跡(SI208SB01)

竪穴部の推定前壁に対し、平行に並ぶものを抽出した。確度の低いプランではあるが、竪穴部に伴う掘立柱部ないし塀(柵)跡があった可能性は高い。なお、SD120溝跡は柱穴列に軸方向が一致していることから、本掘立柱部ないし塀(柵)跡の壁溝であった可能性もある。

外 周 溝(SI208SD01)

想定竪穴部の、後壁・右壁を取り囲む範囲のみがJ字状に検出されている。浅く、幅広い掘り込みであり、断面形は概ね逆台形～皿状を呈す。底面には凹凸がみられる。

遺物は、覆土から土器・礫などが出土している。

【備考】本外周溝よりも新しいSD208溝跡は、本外周溝の形状に従順な軸方向を示す。これは、埋没過程にある本外周溝を掘り直すようなかたちで構築された可能性がある。

2 土 坑 (SK)

土坑は調査区の全域から検出されているが、それらの分布状況は散発的であり、出土遺物も乏しい。よって、堅穴建物跡との関連性を見出し難いものがほとんどである。平面形や堆積土のあり方より、これら土坑の中には、近世以降のものがわずかに混在している可能性がある。

重複関係や堆積土の特徴等を根拠に平安時代の構築と確定できるものは少数であり、機能がある程度わかるものはSK208土坑のみである。

ここでは、平安時代集落を考える上で重要と考えられるものに限定して記載する。なお、遺構配置図にあるように、小規模な土坑については、ピットとして調査したものもある(付図参照)。

※第487集『赤坂遺跡』で報告済のSI003SB01P11:02(旧SK008)は、本報告において再び土坑として捉え直すこととした。遺物図13には、SK008土坑から出土した前回報告漏れの煤付着礫2点を掲載している。

SK114土坑 (遺構図26・写真20)

【概要】グリッド I M-109に位置する。

【構造】平面形は、確認面、底面ともに不整隅丸長方形を呈し、断面形は箱形～逆台形状を呈す。底面は平坦である。

【堆積土】多くの薄層が堆積しており、18層に分層された。14層以上は、人為堆積と自然堆積の互層とみられ、2・3・5・9層は、ロームブロックを多く含み、これらは特に人為堆積の可能性がある。7・8層には白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)が微量含まれている。15層以下は壁面崩落土を含む水性堆積とみられる。15層の上面には、12点の礫がまとまって出土している(写真20-1,2)ことから、15層形成後に、本土坑は礫や排土の廃棄坑として機能したと思われる。15層以下はある一定期間、開口したままの状態にあった可能性が高い。

【出土遺物】上述の礫の他に、土師器の内黒壺(遺物図12-5)や坏(遺物図12-3)が出土している。

SK117土坑 (遺構図27・写真20)

【概要】グリッド I M-114に位置する。後述のSK118土坑の東側にほぼ同じ軸方向で並ぶように構築されている。

【構造】平面形は、確認面、底面ともに不正隅丸台形を呈し、断面形は箱形～皿状を呈す。底面は平坦である。

【堆積土】2層に分層した。下層にロームブロックが多量に混入している。上下層ともに人為堆積と推定される。

【出土遺物】なし。

【備考】出土遺物の乏しさから正式には時期不明とせざるを得ないが、本土坑の西側に位置するSK118土坑は、SI104堅穴建物跡の東側に同じ軸方向で構築されている。これら三者の位置関係より、本土坑はSK118土坑とともに、SI104堅穴建物跡と関連したものである可能性が高いと考えられる(図Ⅶ遺構配置図・付図参照)。

SK118土坑（遺構図27・写真20）

【概要】グリッド I M-113～114に位置する。前述のSK117土坑の西側にほぼ同じ軸方向で並ぶように構築されている。

【構造】平面形は、確認面、底面ともにほぼ長方形、断面形は箱形を呈し、北東隅の壁面はややオーバーハングしている。底面は概ね平坦である。

【堆積土】3層に分層した。2、3層にロームブロックが多量に混入している。3層は、底面の凹みを平坦に埋め均すかのように堆積し、堅穴建物跡における床構築土のような状態を呈している。

【出土遺物】礫が確認面に4点、底面に2点出土している。

【備考】本土坑は、出土遺物の乏しさから正式には時期不明とせざるを得ないが、SI104堅穴建物跡の東側に同じ軸方向で構築され、隅が角張るしっかりした長方形を呈し、底面は概ね平坦、堅穴建物跡における床構築土のような状態がみられる等、小堅穴遺構ともいうべき特徴を備えている。これらのことから本土坑は、SI104堅穴建物跡の付属施設である可能性が高い(図VII遺構配置図・付図参照)。

SK119(旧SX105)土坑（遺構図27・写真21）

【概要】グリッド I L-111に位置する。

【構造】平面形は、確認面が不整長楕円形、底面はほぼ楕円形で、断面形は鍋底状を呈す。

【堆積土】5層に分層した。4、5層にロームブロックが多量に混入している。

【出土遺物】確認面～覆土中位にかけて44点もの礫が出土している(写真21-16、17)。図示した礫は、そのごく一部である(これらを順を追って上から下へ図化すれば、5～6枚ほどの図となる)。人頭大以上の大礫～拳大ほどの小礫、円礫～角礫まで多様なサイズ、形状の礫が詰め込まれるように集積している。これらの中に使用痕をもつものはみられない。

【備考】本遺構にみられる礫の集積は、土坑への廃棄の結果、あるいは何らかの儀礼行為との関連で捉えることも可能かと思われる。時期決定遺物を伴わないため、正式には時期不明とせざるを得ないが、堆積土や出土礫の状態より、近世以降とは考え難い。周囲にみられる遺構・遺物との関連で判断すれば、平安時代の所産である可能性が高い。

SK208土坑（遺構図27・写真20）

【概要】グリッド I F-104～105に位置する。削平、攪乱を受けており、遺存状態は良くない。

【構造】平面形は、確認面、底面ともに不整楕円形を呈し、断面形は逆台形状を基本とする。底面の北側は溝状に窪んでおり、その最下部には被熱範囲が認められ、炭化物の薄層を伴う。炭化物の上位には鉄滓が出土している。溝状の窪み範囲の南端部には、断面が逆三角形のピットが掘り込まれている。

【堆積土】2層に分層された。黒褐色～暗褐色土を基調とし、ロームブロックを含む。ロームブロックの混入のあり方などより、人為堆積で埋め戻されている可能性が高い。

【出土遺物】床面から5点の鉄滓(碗型鍛冶滓)、覆土から11点の鉄滓(うち6点は鍛冶滓)及び鍛造刺

片、金床石(遺物図12-7)が出土している。土器の出土は無い。

【備考】本土坑は遺構の形状及び被熱痕跡や出土遺物の内容より、鉄関連遺構と判断され、鍛冶関係の施設(鍛冶炉[小鍛冶]か)と考えられる。土器の出土がないため、厳密には時期不明とせざるを得ないが、鉄滓の形状からは古代と考えられ、SI201・SI202・SI204等の各堅穴建物跡の至近距離に構築されていること等から、本土坑はこれらの堅穴建物跡と関連している可能性がうかがわれるとともに、構築・機能の時期は平安時代と考えられる(図VII遺構配置図・付図参照)。

なお、遺構外出土鉄滓の中には、製鉄系の流動滓が少量みられる。

SK216土坑(遺構図28・写真20)

【概要】グリッドI O-109に位置する。

【重複】SI103堅穴建物跡堅穴部より古い。

【構造】SI103堅穴建物跡堅穴部に切られているため、全形は不明であるが、確認面では不整楕円形、底面では隅丸長方形を呈す。

【堆積土】5層に分層した。全体に焼土粒を含み、特に3a層は全体が赤い。5層は硬化土壌である。全層とも人為堆積と推定される。

【出土遺物】硬化土壌である5層の上面に土器と礫が出土している。

【備考】堆積土の新旧関係に基づけば、本土坑はあくまでもSI103堅穴建物跡の廃絶以前に埋没した古い遺構である。しかしながら、堅穴建物跡の存続期間中に付属遺構が埋戻されることは十分に想定されることである。このことを踏まえ、本土坑にみられる硬化土壌のあり方、SI103堅穴建物跡との重複のバランス、SI103堅穴建物跡付属塀(柵)跡(SI103SB01)との位置関係が調和的であること等を総合的に判断すれば、本土坑はSI103堅穴建物跡の出入口として機能した可能性が推定される。

SK226(旧SX201)土坑(遺構図29・写真21)

【概要】グリッドI D・E-104に位置する。

【重複】SI201堅穴建物跡より新しい。

【構造】確認面は不整楕円形、底面は楕円形を呈す。著しく削平されているため、形状は本来とはかなり異なっていると思われる。

【堆積土】2層に分層した。1層は硬化土壌である。

【出土遺物】なし。

【備考】堆積土の新旧関係に基づけば、本土坑はあくまでもSI201堅穴建物跡よりも新しい遺構として捉えられるが、堅穴建物跡の存続期間中に付属遺構が追加されることはあり得ることである。本土坑にみられる硬化土壌のあり方、SI201堅穴建物跡との重複位置のバランスの良さ等より、本土坑はSI201堅穴建物跡の出入口であった可能性が推定される。

3 溝 跡 (SD) (遺構図31~33・写真22~23)

溝跡は、調査区の全域に検出されている。等高線に対して平行気味に走るもの、直交気味に走るもの、堅穴建物跡外周溝の一部である可能性があるもの等、いくつかの種類がみられる。

出土遺物や他の遺構との新旧関係については、「検出遺構一覧表」にまとめて掲載し、ここでは各種溝跡について、主要なものを関連づけながら概述する。

等高線に平行気味に走るもの

2つのタイプが認められる。1つのタイプはグリッドライン111~115にかけて調査区北東壁に平行するSD104・SD119溝跡及びI I-108グリッドを中心に北西-南東方向に走るSD101溝跡の3条であり、これらは調査時における実見に基づけば、いずれも地表面を流れる水を効果的に遮断していたことから、水を制御するために構築されたものと推察されるものである。なお、SD104溝跡は、現在のアスファルト道路に平行し、写真45-⑥のガラス製品が出土していることから、早くも近世以降の構築と考えられる。

もう1つのタイプは、SD013・SD201・SD117の3条であり、これらが構築されている地山は水捌けが意外に良く、雨後であっても水は直ちに地下浸透する状況であった。このことから、これらは水制御の溝跡とは考え難く、堅穴建物跡群との位置関係より察すれば、区画溝である可能性が推定される。なお、SD117溝跡は南東-北西方向に走り、SX202土壌硬化範囲(道跡)B・C・Dのほぼ延長線上に位置している。

等高線に直交気味に走るもの

SD103・SD118の2条の溝跡がある。SD103溝跡は、SI208の掘立柱部南東壁に平行し、SI101の後壁をかすめるように北東-南西に走る。SD118溝跡は、SI102堅穴建物跡の堅穴部前壁及びSI103堅穴建物跡堅穴部後壁に平行して北東-南西に走る。これら2条は堅穴建物跡の軸線によく合致することから、区画溝である可能性が推定される。

堅穴建物跡外周溝の可能性のあるもの

2条ほど認められる。SD112・SD205溝跡は、深さの割りに幅が広く、平面形はややカーブする直線状であり、外周溝の末端部によく類似している。ただし、平面形の大半が調査区域外にあるため、断定はできない。

時 期

本遺跡から検出された17棟の堅穴建物跡の存在も考慮すると、これら溝跡の多くは平安時代の構築と推定される。ただし、近世以降のものが混在している可能性は否定できない。

4 並列溝状遺構 (SX)

SD017～SD021並列溝状遺構 (遺構図34・写真23)

【概要】 グリッド I O-113を中心に位置する。

【構造】 北東～南西に延びる短い溝跡5条 (SD017・SD018・SD019・SD020・SD021) が等高線にほぼ平行するかたちで溝状に並列しているものである。個々の溝跡の幅に広狭の差はさほど認められず、また、心々距離もほぼ一定していることから、これらを一単位をなす1面の遺構として捉えた。両末端を確認できた溝跡は2条で、ほか3条は調査区域外に延びることから、全体の条数は不明である。確認面における幅は30～60cm、深さは20cm前後、心々距離は約70～80cmを測る。

断面形はいずれも皿状～箱形を呈し、底面に工具痕とみられる痕跡は確認されず、さほど凹凸は認められない。掘り込み面は第Ⅲ層上面である。底面は5条とも第Ⅳ層を基底としており、底面高を一定させる意図と、第Ⅳ層を掘り込まない意図がうかがわれる。

【堆積土】 調査区壁断面におけるSD017・SD018・SD019の堆積をみると、すべてⅡb層で覆われ、自然堆積により埋没している。Ⅱb層には、十和田 a 火山灰 (To-a) が含まれている。断面に畝状の高まりは認められない。

【出土遺物】 なし。

【備考】 本遺構が畝跡に関連した遺構であるか否かを判断するために、プラントオパール分析を実施した。結果、第Ⅱa・Ⅱb層の各サンプルより、イネのプラント・オパールが5,000個以上検出されている (詳細は第6章第7節を参照)。この結果は、本遺構が畝跡である可能性を高めるものの、陸稲栽培の遺構として安易に判断することはできない。ただし、5,000個以上のプラント・オパールが検出されている状況より、稲葉の利用等の場面を想定することは可能であろう。

※第Ⅱ層：黒褐色土(10YR2/2)平安時代の遺物を包含。第Ⅲ層：黒色腐植質土(10YR1.7/1)縄文時代前期～後期の遺物を包含。
第Ⅳ層：黒褐色土(10YR3/2)漸移層。

なお、本遺構の北西と南東には、後述する土壌硬化範囲が検出されている。遺構配置図及び付図で分かるとおり、本遺構は土壌硬化範囲に挟まれるかのような位置にある。土壌硬化範囲を道跡と捉えれば、本遺構は集落内の動線に沿って構築されているものと判断され、畝として存在した可能性は高まると言える。しかし、本遺構に畝状の高まりは認められないことから、いわゆる「波板状遺構」・「波板状凹凸面」との関連で追究する必要もある。波板状遺構は、道路跡との関連が強いことから、本遺構の性格・機能について現時点で断定するには至らない。今後の事例追加を待って判断したい。

5 焼土遺構 (SF)

SF201焼土遺構 (遺構図29)

【概要】 グリッド I J-105に位置する。焼土粒を多量に含む。

【構造】 斜めに穿たれた柱穴のような形状を呈している。

【出土遺物・時期】 遺物は出土しなかったことから時期は不明である。

6 柱穴・小穴 (Pit)

柱穴・小穴については、「柱穴・小穴一覧表(付図中)」に深さ等の情報をまとめて掲載した。

【概要】柱穴・小穴は調査区の全域から検出されている。1502個(第487集『赤坂遺跡』報告範囲含む)という膨大な数は、何らかの構造物が幾度にもわたって建て替えられていた状況を裏付けている。ただし、堆積土の状況を見ると、地山の土壌に似た土質をもつものも少なくなかった。こうした、地山土壌に似た堆積土をもつものは、地山に含まれている礫が外れた痕跡等の可能性もあるため、全てが構造物に伴うものとは判断できない。つまり、「柱穴」以上に、様々な活動の中で遺された「小穴」も実際のところは数多いものと推定される。

【規模】規模が小さく、底面が平坦にならないものも少なくない。

【堆積土】地山の土壌に似た土質をもつものについては、縄文時代の柱穴・小穴である可能性もある。平安時代と推定される柱穴・小穴の堆積土は、シルト質の柔らかい土壌であり、堅穴建物跡の堆積土に類似する傾向がある。また、白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)が含まれているもの等も希にみられる。近世以降とみられるものは、第Ⅰ層に類似した土壌が一般的である。

【構築時期】本遺跡に限らず、津軽地方における柱穴・小穴の一般傾向として、中世以降は掘り込みの輪郭が比較的明瞭である場合が多く、近世以降の柱穴・小穴は方形の平面形を呈すものが多いが、本遺跡ではそのような例は少数であった。このことに加え、本遺跡から検出された17棟の堅穴建物跡の存在も考慮すると、これら柱穴・小穴の構築時期は平安時代が主体であると推定される。

なお、遺構配置図を俯瞰すると、数カ所に柱穴・小穴が弧状に並ぶ範囲が認められる。あえてその位置は示さないが、本遺跡から出土している各時期の縄文土器(早期～晩期)の存在を考え合わせると、これら弧状にならぶものについては、縄文時代の堅穴建物跡の残痕である可能も考えられる。

【備考】柱穴・小穴は、今回報告範囲の中央部に高密度で分布し、堅穴建物跡との位置関係を注目すると、堅穴建物跡が柱穴・小穴群を取り囲んでいるような状況がうかがわれる(図Ⅶ 遺構配置図・付図参照)。

この理由については様々な解釈が可能だが、調査段階における実見に基づけば、柱穴・小穴群は、湧水の影響を受けやすい範囲にまとまり、堅穴建物跡は湧水の影響を受けにくい範囲に位置している。このことより、水に弱い構造である堅穴建物跡は湧水の影響範囲を避けて構築され、水の影響にさほど左右されない構造である柱穴・小穴群(掘立柱建物跡・塀(柵)跡など)は、必然的に堅穴建物跡の空白域に構築された可能性がある。つまり、居住用建物は水気を避けるように構築され、非居住用建物はさほど水気を考慮する必要が無かったことを示している可能性がある。

少なくともこれら両種の遺構の分布差は、意識的な空間利用の結果を示しており、津軽地方南域における平安時代の集落構造を考える上では貴重な例と考えられる。

7 掘立柱建物跡・塀(柵)跡 (SB) (遺構図35~37・写真32)

検出された柱穴・小穴の中から、掘立柱建物跡16棟、塀(柵)跡を数枚抽出した。

調査段階でプランを組むことのできたものは、SB001・SB002・SB003・SB004の4棟のみであり、他は全て図上で組んだものである。

抽出した掘立柱建物跡は、間尺と深さにあまり固執せず、柱穴・小穴の並びがある程度直線的で、概ね矩形を呈し、構造的に成立し得ると推定されるものである。よって、各プランの確度は決して高いものではなく、あくまでも「案」であることを予め断っておく。

遺構配置図(図VI)及び付図で分かるとおり、図上における掘立柱建物跡・塀(柵)跡の抽出はさらに可能である。特に、塀(柵)跡については無数と言えるほどの抽出が可能である。

しかしながら、掘り込みの浅い柱穴・小穴は、削平等により消失した可能性もあることから、遺存状況の悪い掘立柱建物跡の一部を、塀(柵)跡として無意味に抽出してしまう恐れがある。

また、本遺跡のように多数の柱穴・小穴が複雑に入り混じるかたちで検出された場合、間尺に規格性のない平安時代掘立柱建物跡を確定するのは困難であり、よほど特徴的な建物でない限りはほぼ不可能と言える。

加えて、本遺跡の柱穴・小穴は全般に規模が小さく、底面が平坦にならないものなど形がしっかりしないものも多くみられることから、これらの中には、季節性の一時的な跡等、多種多様な構造物が含まれている可能性も十分ある。つまり、掘立柱建物跡が主体ではなく、塀(柵)跡のほうが多い可能性もある。

このような状況を踏まえ、掘立柱建物跡・塀(柵)跡の過度な抽出は控えた。

掘立柱建物跡については個別に図示し、塀(柵)跡については、個別の図を作成せず、遺構配置図(付図)への結線のみとし、個別の遺構番号はあえて付けないかたちを採った。

また、本項では個々の掘立柱建物跡・塀(柵)跡に関する文章記載も控え、「掘立柱建物跡一覧表」に検出位置や深さ等の情報をまとめて掲載した。付図は1/100で作成してあるので、これを用いて今回報告の掘立柱建物跡が再検討されるとともに、新たな掘立柱建物跡の抽出も積極的になされることを期待したい。

なお、掘立柱建物跡・塀(柵)跡の抽出にあたっては、高島成侑調査員(前八戸工業大学教授・故人(建築学))より多大なご指導をいただいたことを付記しておく。

※柱穴・小穴が高密度で検出されると、無関係な柱穴・小穴同士でも直線上に並ぶ確率は高まる。それらを個々に塀跡として抽出しても限界がない。なお、3個以上の柱穴・小穴が並ぶパターンを記した遺構配置図は当センターで保管している。

※前項「6 柱穴・小穴(Pit)」でも触れたように、今回抽出した掘立柱建物跡・塀(柵)跡の中には、近世以降のものも混在している可能性がある。

8 土 壌 硬 化 範 圍 (SX)

「道跡」と推定されるものと堅穴建物跡の「出入口」と推定されるものとの2種の硬化範囲を併せて報告する。

道跡と推定される硬化範囲は、北西～南東の軸線で形成されており、その盛期は近世以降と推定されるが、堅穴建物跡の「出入口」と推定される硬化範囲は、この道跡と推定される硬化範囲に接続し、さらにこれら3棟の堅穴建物跡は、道跡と推定される硬化範囲の軸線に沿うように並んでいる。

これらのことから、道跡と推定される硬化範囲は、これら3棟の堅穴建物跡と関連しながら徐々に形成された可能性がうかがわれ、形成の初源は平安時代と推定される。

SX202土壌硬化範囲 (遺構図38・写真28～31)

【概 要】 グリッド I K-103～I P-114にかけて位置する。土壌が北西～南東の軸で直線状に硬化している範囲を括ったもので、道跡と推定される。両端は調査区域外にのびているため、全体形状は不明であるが、本遺構は、第487集『赤坂遺跡』で既報のSX006・SX010用途不明遺構とつながる可能性がある。

本遺構の硬度を客観的な数値に置き換えるため、土壌硬度計((株)藤原製作所製 山中式土壌硬度計 標準型土壌硬度計(Na351))を用いて13箇所測定(一箇所につき、66～176点の測定)したが、土壌の含水率や土質の違い、さらには同一地点であっても晴天日と雨後、朝方と昼頃とでは硬軟差が生じるなど、芳しい結果は得られなかった。よって、ここで述べる土壌硬化範囲は、あくまでも指圧により感じ得た硬さや、移植ベラを動かしたときの抵抗感によって把握したものであることを断っておく。

【重 複】 SI103堅穴建物跡外周溝(SI103SD01)・SD015溝跡・SD016溝跡より新しい。

【構 造】 4箇所に通切れる部分があることから、ここではA～Eの5つの範囲に分けて述べる。

[硬化範囲A] 本硬化範囲は第Ⅱ層の精査時に確認され始めたが、最終的に範囲を確定したのは第Ⅲ層上面である。長さ9.4m、幅80cm前後を測る。グリッド I K-104においては、ロームブロックの散布範囲が、I K-105においては、特に硬い範囲が認められる。グリッド104ラインと交わる部分では、SI203堅穴建物跡に接続する小規模な硬化範囲aが認められる。

これらAとaの2つの硬化範囲に対して、3箇所で硬度測定を行っている(硬度測定1・硬度測定11・硬度測定15)。

[硬化範囲B](旧SD111相当) 本硬化範囲は、第Ⅱ層～第Ⅲ層上面の精査段階で、幅広の溝跡のような黒い落ち込みとして確認したものである。第Ⅳ層の上面を幅広く浅く削り込んで溝状にくぼませ、その底面に幅の狭いもう一条の溝を掘り込むかたちで構築されている。長さは9.4m、幅180cm前後を測り、幅の狭い部分の幅は60cm前後cmを測る。幅の狭い部分は幅広部分の中心よりやや南側に寄り、幅広部分よりも硬度が高い。

グリッド I L-107と I M-108における幅の狭い部分では、微小な礫(円磨された砂利)の集積範囲が3箇所認められる(微小礫集積範囲1・2・3)。また、グリッド I M-108では、硬化範囲Bから枝分かれするかのような、小規模な硬化範囲b1が認められる。これは長く延びることなく途切れるものだが、この延長線上にはSI101堅穴建物跡に接続する小規模な硬化範囲b2がある。

なお、土壌硬化範囲SX202(旧SD111)確認面で採取した炭化物(No13-AKS-SD111-木)は、近世頃の年代(暦年較正1σ(yrcaBP) 1643AD-1665AD(55.0%), 1785AD-1794AD(13.2%))を示した(第6章第1節参照)。

これらBとb1・b2の3つの硬化範囲に対し、4箇所で硬度測定を行っている(硬度測定5・8・9・10)。

〔硬化範囲C〕本硬化範囲はグリッドNライン上の第Ⅱ層中に確認された。SI103竪穴建物跡外周溝(SI103SD01)より新しい。幅は40cm前後を測る。北西寄りの位置に60×30cmほどの楕円形ピットがみられ、この中には微小な礫(円磨された砂利)が集積している(微小礫集積範囲4：写真29-2)。

Cの硬化範囲に対して、硬度測定を行っている(硬度測定12)。

〔硬化範囲D〕本硬化範囲は、第Ⅱ層で確認された。グリッドI N-110からI O-112にかけて、溝状に凹んだ幅40cm前後の硬化範囲が直線的に走っている。この部分は、硬化範囲Bにみられる「幅の狭いもう一条の溝」と類似した状況を呈すが、I O-112を中心とする北側には、約200×400cmの楕円形の硬化範囲が取り付き、この範囲内における底面凹凸は著しく、土坑状の凹みを呈す部分も2箇所認められる。さらにこの範囲の東側からは、2条の線状の硬化範囲が分岐するように延びている。

本硬化範囲にも硬化範囲Bと同様の、微小な礫(円磨された砂利)の集積範囲があり、直線的な硬化範囲の中に2箇所(微小礫集積範囲5・6)、楕円形の硬化範囲の中に1箇所(微小礫集積範囲7)が認められる。

なお、I O-111グリッド杭を中心とする範囲には、小規模な硬化範囲dが本硬化範囲に接し、これはSI103竪穴建物跡の張り出し部に切られるかたちで接している。

これらDとdの硬化範囲に対し、4箇所で硬度測定を行っている(硬度測定3・4・6・7)。

〔硬化範囲E〕本硬化範囲はグリッドI O・P-114の第Ⅱ層中に確認された。SD015溝跡・SD016溝跡より新しい。長さ3m、幅40cm前後を測り、ややS字状に屈曲している。

Eの硬化範囲に対して、硬度測定を行っている(硬度測定13)。

【備考】本遺構に伴う時期決定遺物は出土しなかったことから、厳密には時期不明とせざるを得ないが、3棟の平安時代竪穴建物跡との関連性がみられることより、平安時代以降に構築・形成されたものと考えられる。ただし、硬化範囲B(旧SD111)確認面で採取した炭化物の推定年代値(暦年較正1σ(yrcaBP) 1643AD-1665AD(55.0%), 1785AD-1794AD(13.2%))及び、硬化範囲Dにみられる平安時代とは考え難い光沢と第Ⅰ層類似の堆積土より、硬化範囲B～Dの範囲は近世以降に盛期をもつ可能性が高い。

以上のことから、本遺構は平安時代に形成が始まり、近世以降も機能したものであると推定しておきたい。また、硬化範囲DとEの間に検出されている並列溝状遺構は、畚跡として考えるほかに、「波板状遺構」・「波板状凹凸面」として、道跡との関連で追究する必要もある。

なお、硬化範囲Dにみられる楕円形硬化範囲は、道跡としては認識しがたい独特な特徴を有するが、道跡として捉えるべき範囲に比べれば、相当に硬化している。機能・性格の特定は不可能であるものの、精査中の感覚では、牛馬等の大型家畜が長期間にわたって足踏みを繰り返した場所であるかのような印象を受けた(人間が形成した硬化土壌とは考えがたい硬さであった)。

9 用途不明遺構(SX)

形状が土坑や溝跡に含めがたい、特異な状況を持つものを「用途不明遺構」とした。

SX102用途不明遺構(遺構図39～40・写真24～25)

【概要】グリッド I J-110を中心に位置する大型の不整な遺構であり、形状に新古の2つの段階が認められる。掘り込み当初の平面形は、単純な掘り込みによる大型の土坑状を呈するものであり、その後、中央部と南西部にロームが盛土され、「8」の字形を呈す溝状の平面形へと移り変わる。ここでは掘り込み当初の土坑状態を古段階、「8」の字形の溝状態を新段階として記載する。

【重複】SD101溝跡より古い。

【構造】古段階における平面形は、確認面が不整隅丸三角形、底面が不整形を呈す。底面は、北東から南西にかけてなだらかに傾斜し、不整な大型土坑と言うべき単純な形態をとる。

この後、新段階では、古段階の中央部と南西部に島状にロームが盛土され、不整な環状溝の南西側から2条の溝が派生する、「8」の字形を呈す複雑な平面形へと移り変わる。

新段階における中央部のローム盛土の付加により、本遺構の北西側と北東側は溝状、南東側は土坑状を呈すようになり、南西側から派生する2条の溝は、これら北西側の溝状部分と、南東側の土坑状部分の南西端を解放するかのような形状をなす。

盛土は、黄褐色系のロームと、黒褐色系のシルトが互層となるように、1層ずつ版築状につき固められている。

【堆積土】黒褐色～暗褐色土を基調とし、上位層の2層は、カマド起源と推定される被熱痕をもつ砂質粘土のブロックである。この層以外は全て自然堆積とみられる。

【出土遺物】覆土から土器・礫石器・礫、40×20cmほどの炭化材が出土している。底面からの出土遺物は無い。

【備考】カマド起源と思われる被熱痕をもつ砂質粘土のブロック及び出土土器、炭化材の年代測定値(暦年較正2σ (yrca1BP) 669AD-827AD(90.9%), 839AD-864AD(4.5%))より、本遺構は平安時代の構築と考えられる。

※ 調査段階における実見によれば、I H-109・I I-110グリッドの地山層からは、夏期を除いて安定した湧水がみられた。ここからの湧水は、本遺構及び後述するSX103用途不明遺構へと流れ込み、本遺構はこの湧水が(夏期を除いて)常に貯まる状態になっていた。本遺構は、一般的な土坑に比べ、規模や形状が異質であり、湧水地点に近接していることから、貯水のために構築された、井戸の代役を担っていた可能性がある。なお、降雨時は本遺構からあふれた水が、今回報告範囲の中央部に分布する柱穴・小穴群を濡らしていたことを付記しておく。

(本遺構の精査は夏期に行ったため、当時は貯水等の機能が推定できなかったことから、土壌分析等は実施していない。)

SX103用途不明遺構（遺構図39～40・写真26）

【概要】グリッド I I-109を中心に位置する不整な遺構である。

【重複】SX102用途不明遺構より古い。

【構造】不整な複数の溝跡が絡まるような平面形を呈するものである。確認面からの深さは概ね5～10cm程度で、あまり浅深はみられない。自然に形成された流路に、若干の掘り込みを加えた単純なつくりとみられ、構築にあたっての計画性等は認められないが、本遺構の3箇所には長方形土坑状の窪みが伴い、この部分のみは意識的な構築の痕跡であるとみられる。

【堆積土】黒褐色～暗褐色土を基調とする。土坑状部分の3層は、砂質土である。全て自然堆積とみられる。

【出土遺物】なし。

【備考】上記SX102備考欄※参照。

SX104用途不明遺構（遺構図38・写真27）

【概要】グリッド I N-108を除く I L-106～I N-109にかけて位置し、先述のSX202土壌硬化範囲のB・Cの南西にほぼ平行する。当初は地山に残る根跡の集中範囲と認識していたが、その範囲があまりに直線的であり、先述のSX202土壌硬化範囲のB・Cの南西にほぼ平行することから、遺構として精査したものである。

【重複】SI102堅穴建物跡外周溝(SI102SD01)、SX202土壌硬化範囲(b2)より古い。

【構造】全長は14m40cm、幅は80～170cmを測る。壁面と言うほどの立ち上がりは無く、無数の凹凸がみられる線状の範囲であり、底面に接する堆積土に若干の硬さを感じることはできるが、底面の凹凸が著しいことから、面的な硬さを感じるまでには至らない。

【堆積土】黒褐色土を基調とし、全て自然堆積とみられる。

【出土遺物】覆土から土器がわずかに出土している。底面からの出土遺物は無い。

【備考】SX202土壌硬化範囲のB・Cの南西にほぼ平行し、SI103堅穴建物跡の後壁からSI101堅穴建物跡左壁付近を通過し、土壌硬化範囲Aに接続するかのような線形をとることから、現時点では、土壌硬化範囲Bの旧道跡と推定しておきたい。堆積土の状態や遺構確認面における輪郭の状況などより、時期は平安時代の範疇におさまるものと考えられる。

第2節 出土遺物

平成20～21年度の調査で出土した遺物は、段ボール箱で61箱である。量的に多いとは言えないが、種類は豊富である。

縄文時代の早期～晩期の土器・石器・土製品、弥生時代の土器、古墳時代かと推定される古式土師器、平安時代の土師器・須恵器・石器・土製品・焼成粘土塊・羽目・石製品・礫・鉄製品・鉄滓、近世以降の陶磁器・土製品・銭貨・鉄製品・銅製品・石製品等で構成される。

遺物の主体は土器であるが、大半は細片であり、復元率は極めて低い。縄文土器は平安時代の人々の営為により砕かれ、平安時代の土器は堅穴建物内に残されずに屋外廃棄され、リング畑の造成とともに細片化していった、という背景が推察される。

なお、本報告では、前巻『赤坂遺跡』における報告対象範囲である、グリッドライン116以東から出土した遺構外出土遺物を含んでいる。

1 縄文時代の遺物(遺物図16～24)

土器・石器・土製品が出土している。縄文時代の遺物は平安時代の遺物に比べ、量的には極めて少なく、接合率の低さや摩滅の状態より察し、これらの遺物は平安時代における諸活動により動かされたものがほとんどのように推定される。ただし、土器は早期～晩期まで各時期のものが出土しており、本遺跡が縄文時代の各時期を通じて行動領域の一部となっていたことを推測できる。

土器のほとんどは小破片であり、型式の特定のみならず、胴部破片については上下の判別さえも難しいものが多い。量的に卓越する時期は縄文時代中期(円筒上層式)であるが、これは1個体から生ずる破片数が多いことから、時期的な主体を占めるものとは限らない。

石器については、土器との共存が把握されたものはない。よって、帰属時期については幅広く捉える必要がある。なお、平安時代の遺構から出土した縄文時代の石器については、縄文時代石器の平安時代における再利用や転用などの問題を考える上で貴重である。

土製品には、土器片利用円板とその他がみられる。

土器(遺物図16～21)

【早期】深鉢形土器の尖底部の破片2点(遺物図2-15・16-7)が出土している。無文であり、外面は橙色、内面は黒褐色を呈す。16-12も尖底付近の破片であるが、これらと接合はしなかった。型式の特定は困難である。

16-1～6、9、11は口縁部が肥厚する深鉢形土器である。口縁部に2条の鋸歯文、その下位には横位の押し引き沈線が多条に施されている。内面には横位のケズリ調整が認められる。時期は概ね早期中葉と考えられ、大鰐町砂沢平遺跡第1群土器の中に類例がみられる。

【前期】円筒下層式(16-13～25)が出土している。13、17、18はd1式の深鉢形土器で、口縁部に自

縄自巻の原体押圧、体部に多軸絡条体が施されている。これらは同一個体とみられる。

【中期】 前葉と中葉のものが認められる。前葉は円筒上層式(16-26~18-33)、中葉は榎林式土器(18-36~40)である。17-10のa式の割口には、薄い器体の外面に、隆帯とともに粘土が面的に付加されているのが観察される(写真50)。器厚を厚くするための工夫とみられるが、初期の成形時における過失的な状況を示すのか或いは意図的に工程を分けているのか興味深い。17-26はd式の花弁状突起である。この内面には横走沈線が施され、割口には、内外面を貫く沈線状の傷が観察される(写真50)。成形終了後、あるいは加飾の初期に行われた計画線の一部かと推定される。17-29、30もd式頃の突起であり、両者とも内面に指頭(爪先)の押捺が施されている。18-35は、紐通しの孔を有す小型の鉢である。18-38の榎林式土器は、深鉢形土器口縁部の大型破片であり、口唇部外面には溝線状の沈線、体部には複節縄文の上に浅い沈線が施されている。

【後期】 前葉と後葉のものが認められる。19-1~19は十腰内I式およびその周辺、20はII式、21~38はIV式頃に比定される。19-1と2は同一個体とみられ、外面の沈線間には赤彩が施されている。20のII式は、突起部の破片であり、台形状の大型突起が3個付く深鉢形土器と考えられる。縄文・沈線・C字形の竹管刺突が施されている。口唇部上端は欠損し、割れ口には丸い接合面が観察される。この上位には土製品の大型装飾が付加されていたものと推定される。

【晩期】 前葉と中葉が出土している。20-8~10は大洞B式、11~13はBC式、16、29、21-1はC2式に比定されると考えられる。21-1は全体器形の復元された良好な個体で、条痕文が全面にみられる。

【時期不明】 21-25は深鉢形土器の胴部破片で、施文原体の判別が困難なものである。断面形状からすると、底部のすぼまる器形(丸底?)と推定され、時期的には前期以前かと推定される。

21-21は、型式特定が困難であるが、晩期の範疇に属す可能性がある。外面には極めて微細な縄文が施され、内面には赤彩痕がかすかに認められる。口唇部付近の外面に短沈線状の列点文が2段施されている。

石器(遺物図22~24)

下記の資料以外にいわゆる不定形石器や剥片等が出土している。

【石 鏃】 2点出土した。いずれも凸基有茎のもので、白色を呈す。22-1は、尖端部の状況から石鏃等の可能性も考えられる。

【石 槍】 2点出土した。22-4は基部と推定されるが、欠損範囲が大きいことから、別器種の可能性も考えられる。22-3は、両面に丁寧な加工が施され、全面に光沢がある。

【石 匙】 3点出土した。全て縦形で、つまみは素材剥片の打点側に作られている。22-6は、加工がやや粗雑であり、平坦に加工されず、凹凸が多く残されている。主要剥離面に二次加工は認められない。22-7の裏面は原稜面となっている。主要剥離面の両側縁には二次加工が認められるが、やや粗雑である。22-5は、主要剥離面の両側縁に二次加工が施され、その範囲は、片方は上位、もう片方は下

位に認められる。

【石 筥】2点出土した。22-11の刃部は素材剥片の打点側にあり、周縁の加工はほとんど施されていない。刃部の調整もあまり丁寧ではない。22-10は周縁の加工が細くくなされている。

【磨製石斧】3点出土した。いずれも小型のものとみられる。24-6は全面が研磨され、断面形は楕円形を呈す。広い平坦面の中央と基部の端には敲打痕が認められる。24-5は基部であり、面取り状に研磨され、断面形は長方形を呈している。ほかに刃部の破片1点があるが図示していない。

【敲 石】23-4は、約半分が欠損しているが、ほぼ楕円形の扁平な礫であると思われる。平坦面の片面に敲打痕が認められ、その範囲は縦位に連なっている。

【磨 石】23-1～3は、断面隅丸三角形を呈す礫の長狭面が磨られているものである。2の機能面の側縁には使用によって生じた剥離がみられる。3の機能面には、整形痕と推定される敲打の痕が残存し、広い平坦面の中央には敲打痕が認められる。23-6は、扁平な礫の長狭面が磨られているものであり、形態は半円状扁平打製石器に類似する。機能面の側縁にみられる剥離は、使用により生じたものと推定される。

【敲石と磨石の両特徴を有するもの】

23-5は、不整楕円形の扁平な礫の両面が敲打され、側縁の一部が磨られているものである。敲打痕は両面に2箇所ずつみられる。

【石 皿】

24-11は、半分以上が欠損するものである。両面の中央が磨られている。

土 製 品 (遺物図21-26～34)

【土器片利用円板】

21-27～30、31～34の8点出土した。多数出土した土器片を観察する過程で抽出された、周縁の丸い破片である。典型的な土器片利用円板は29の1点のみであり、ほかの周縁部はあまり擦られておらず、サイズも小さいことから、消極的な見方では単なる土器片として扱われるものに過ぎないが、本遺跡から出土した多数の土器片の中では、明らかに異質な丸みを呈しているものである。注意喚起の意味も込め、参考資料として掲載した。

形状は、様々認められる。胎土・焼成・縄文等の状態より、帰属時期は円筒上層期頃と推定される。(右側の断面図は、本製品を土器破片に見立てて作成している。つまり、上方が土器の口縁部方向、右辺が土器の表面。)

【そ の 他】

21-26は、約半分が欠損するものであり、残存部は舟のような形状を呈している。器面は滑沢に仕上げられ、黒褐色を呈す。胎土・焼成・器面調整などの諸特徴より、後期後葉から晩期中葉頃の所産かと推定される。

21-35は、欠損により全体形状が不明であることから土製品ではなく、土器の一部として捉えることも可能なものであるが、仮に土器の一部とした場合、部位の想定が難しい。表面は尾根状に膨隆し、その中には沈線状の浅い窪みが認められる。裏面は平坦である。胎土・焼成・器面調整などの諸特徴より、後期前葉頃の所産かと推定される。

2 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は土器のみであり、この時期の石器とみられるものは出土していない。土器は砂沢式と田舎館式の破片である。

土器（図21-2～15）

破片14点が出土した。2～5は砂沢式、7～15は田舎館式に比定される。

3～5は砂沢式台付浅鉢の脚部で、下に横走沈線が施されている。器面のミガキは丁寧で、焼成は堅緻である。

田舎館式の8～12は壺の肩部、7は甕の頸部、13・14は甕の頸部近くと推定される。10は、横走沈線と鋸歯文が組み合わせられ、鋸歯文のみが地文縄文の上に施されている。内面のミガキは丁寧である。9, 12は地文縄文の上に横走沈線と鋸歯文及びD字形の刺突列が施されている。内面には横位のケズリが施されている。14は地文縄文の上に横走沈線とD字形の刺突列が施されている。これら3点の焼成はいずれも堅緻であり、器面の状態も良い。

3 平安時代の遺物

平安時代の遺構は多数検出されているが、これらに伴う遺物は極めて少なく、ほとんどは各種遺構の覆土からのものである。I L-104～105グリッドには、土器がある程度まとまる範囲(廃棄ブロック1、廃棄ブロック2)が検出されており、堅穴建物跡に遺物はあまり残されない状況が一般的なようである。

遺物は土師器・須恵器・土製品・石器・石製品・焼成粘土塊・羽口・礫・鉄製品・鉄滓に分けられ、平安時代集落に一般的な遺物構成を示している。主体となる遺物は土師器であり、これに須恵器がわずかに加わる。ただし、土師器・須恵器ともに全体器形の分かる個体は少ない。

土師器

土師器は本遺跡における土器類の大半を占め、器種には坏・皿・長胴甕・小甕・埴・壺・羽釜・小型土器が認められる。量的に主体を占めるのは、坏と甕であり、これら以外の器種はいずれも破片が数点という程度である。以下、主要事項を中心に各器種ごとに概略を記す。なお、実測図の中で、特に甕は、同一個体が上下で2点として実測されている可能性がある。

【 坏 】 成形にはロクロと手づくねの2種が認められ、量的にはロクロが圧倒的で、手づくねはごく少数にとどまる。ロクロ製品の多くは無調整のものであるが、内面にミガキ+黒色処理を施すものも一定数認められる。底部の切り離しは回転糸切が主である。

遺物図3-1は、手づくね成形の坏で、調整は外面ケズリ→口縁部横ナデ・内面ミガキのものである。ざらついた外面に対し、内面が非常に滑沢に仕上げられており、このタイプの坏としては希少例と言える。また、7-18も手づくねの坏であり、調整は外面ナデツケ→口縁部横ナデである。外面に輪積痕を残すにもかかわらず、器面全体が極めて平滑に仕上げられ、「型」等の成形具の存在を想起させる。津軽地方には一般的にみられないものであり、搬入品の可能性がある。

7-5は内外面にやや光沢のある煤が付着しており、灯明具と推定される。6-3は内面上部に帯状に薄い煤が付着し、外面は被熱により著しく剥落している。器種的には坏に違いないが、内外面にみられるこれらの使用痕は小型甕に類似している。外面剥落は支脚転用等によっても生ずるが、内面上部の帯状煤の付着は、この坏が一時的に煮沸具に用いられたことを推測させる。

25-7の外底面は、回転糸切後に×状の線刻が施されている。回転糸切痕が二重になっており、切り離し時における失敗と関連する線刻であろうか。外底面への線刻はこれ1点のみである。

墨書土器は2点出土している。7-22は文字判読が不可能なものであるが、画数が多く、単純な文字ではなさそうである。10-5には「Ⅱ」の記号がみられる。

【 皿 】 良好な個体としては2個体が認められる。1-1は胎土が一般的な坏とほぼ同じく、適度な砂粒を含むものであるが、6-14は砂粒をほとんど含まず、「かわらけ」的な軟質な胎土・焼成のものである。一般的な坏とは大きく異なり、注意を要する。兩個体とも内外面に煤の付着が認められ、灯明具として使用されたものと推定される。

【長胴甕】ロクロ成形と手づくね成形のものとの2種に大別され、両者の量的な差はほとんどない。手づくね成形でありながらロクロ成形甕のように口唇部をしっかりと面取りするものがかなり認められることから、甕の多くはロクロ成形甕の全盛期及びそれ以降のもので占められるものと推定される。なお、タタキ痕跡の残るものは全く出土していない。

全体器形に分かるものはわずかに2個体のみであることから、部位ごとの特徴については不明な部分が多いが、ロクロ成形のものは、下半部に縦位～斜位のナデツケあるいはケズリを加えるものが主体と考えられる。一方、手づくね成形のものは、口縁部はヨコナデ・口縁部直下～胴部中央は下→上のナデツケ・以下はケズリ、という調整が一般的である。内面調整は、指あるいは布ナデ・ヘラナデがほとんどである。

なお、ロクロ目の幅に注目すると、非常に幅の狭いものが目立つ。このようなタイプは、旧浪岡町の松元遺跡等によくみられるものである。

口縁部は外反するものがほとんどであるが、外反せずに筒状となるものもごく少数認められる。

外底面の痕跡には、ケズリ・ナデツケ・筵(?)痕・砂底・木葉痕などが認められる。これらの外底面痕跡と口縁部形状がどのように組み合わせられていたかは、復元個体の不足により不明である。

【小型甕】長胴甕の出土量には及ばないが、量的には充実している。ほとんどがロクロ成形であるが、小破片の中に手づくね成形のものがわずかに認められる。多くは口縁部内面に煤が帯状に付着し、外面は被熱により著しく剥落しているものも少なくない。

12-18の内外面には、糸の圧痕が明瞭に認められ、回転糸切時に用いた糸である可能性がある。

1-8の内面には、ヘラナデ時に表面から生じた筋状の粘土が2条付着しており、ヘラの小口幅は3cm以上あることが分かる。

【 埴 】 個体数は全体でおよそ5～7個体程度と推定される。ロクロ成形と手づくね成形の2種みられ、ロクロ成形が主である。器面調整は基本的に長胴甕と同様である。

【 壺 】 破片が少数の出土に過ぎないことから、個体数は不明であるが、3～5個体はあると推定される。10-11と4-15はロクロ成形の広口壺と考えられ、10-11は口縁部、4-15は肩部である。12-5は外面横ケズリの底部で、成形は不明である。これらはいずれも内面が黒色処理されている。13-9は、長頸壺の頸部と思われ、土師器の器種としては希少なものである。

【羽 釜】 口縁部破片のみた個体数は2個体(25-8, 9)である。ロクロ成形と手づくね成形各1点ずつ出土している。両者とも「く」の字状に内傾させて鏝(羽)を作出しており、内面には凹線が形成されている。粘土帯の貼付による成形では無い点に注意したい。

【小型土器】 いわゆるミニチュア系の土器である。いずれも残存率が低く、全体器形の不明なものが多い。手づくね成形で無調整が基本とみられるが、4-4、6-2の外面にはナデが施されている。25-24はつくりの丁寧なもので、形がよく整っている。

須 恵 器

器種には坏・鉢・長頸壺・広口壺・甕が認められ、一通りの器種が揃ってはいるが、全て小破片であり、全体器形の判明したものはほとんど無い。破片数でみれば主体は甕(大甕)であるが、これは1個体から生ずる破片数が多いことから、器種の主体を占めるものとは限らない。甕以外の器種はいずれも破片が数点という程度である。よって、遺跡内に十分な量が存在していた様子にはうかがわれない。

以下、主要事項を中心に各器種ごとに概略を記す。

【 坏 】 出土数は極めて少なく、復元により全体器形が判明したものは6-9の1点のみである。これは白い焼き上がりで、五所川原製品と比較すると異質な部類に入るものである。胎土分析結果でもA生産地とされ、五所川原製品ではない可能性もある。

【 鉢 】 全体器形が判明したものは無いが、11-20と11-17は上半の器形が分かるものである。11-17にはヘラ描き記号が施され、一般的な見方では五所川原製品と推定される。11-20は胎土分析の結果、不明とされている。

【長頸壺】 15-4と11-15は頸部であり、いずれもヘラ描き記号が施されている。11-16は頸部～肩部の破片で、頸部はロクロ成形後に、横ナデされている。4-9は、五所川原製品の長頸壺と比較すると異

質な胎土・色調を有すもので、胎土分析では搬入品と判定されている。

【広口壺】7-11は口縁部～肩部にかけての破片で、内面には被熱によるはじけが認められる。25-32は口縁部で、小型品である。いずれも五所川原製品である。

【甕】口縁部破片は出土していない。1-21には内面に当具痕が認められる。3-14・9-7・7-12は同一個体と考えられる大甕の底部付近である。いずれも被熱によるはじけが著しく、偶然というよりは、転用による被熱と推定される。

土製品

【土鈴】8-2は、紐部～体部と推定され、大型のものである。全面に幅の狭いミガキ状のナデが施され、紐部の上位に孔は無く、経10mm前後の凹みが認められる。この凹みは、指で持ち上げる際に丁度、指先が合うもので、制作時の偶発かあるいは意図的な凹みか興味深いものである。

7-23・8-7は体部と推定される。両者ともに、鈴口は刃物による粗い面取り状を呈し、7-23はその面とは別の側に、接合面と考えられるもう一つの丸い面を持つ。

1-16は鈴子と考えられる。

【その他】7-2は、平面形・断面形とも楕円形を呈すものである。焼成が弱く、焼成粘土塊に近い要素もあるが、器面は平滑に仕上げられている。

26-33～35・36～39は、土器片の観察過程で抽出した、周縁の丸い破片である。平安時代における土器片利用円板は存在し得ないものと理解して差し支えないが、本遺跡から出土した多数の土器片の中では、明らかに異質な丸みを呈すものであるため、参考資料として掲載した。素材は甕の破片が主である。

(右側の断面図は、本製品を土器破片に見立てて作成している。つまり、上方が土器の口縁部方向、右辺が土器の表面。)

石器

竪穴建物跡等の平安時代遺構から出土した礫石器の中で、石材や使用痕に縄文時代らしからぬ特徴が顕著であるものを平安時代の石器として一括した。ここでは代表的なものについて概略を述べる。

- ・縄文時代の遺物も一定量みられることから、平安時代の竪穴建物跡から出土したことを根拠に、平安時代の石器と判断するのは適当でないが、出土状態に基づけば、明らかに平安時代に使用していたと判断せざるを得ないものが多い。
- ・本項に一括した石器は、縄文時代に制作された石器を二次利用したものも含んでいる可能性があるが、平安時代に二次利用された縄文時代石器については、平安時代の石器として捉えた(平安時代に二次利用された可能性のある縄文時代制作石器を、縄文時代の石器とする場合、二次利用の範囲を明確にする必要がある)。
- ・平安時代の石器は、砥石等をはじめとして一般的には「石製品」と呼称されるが、一度限りの使用で終わった可能性をもつ礫石器に対し、「石製品」の名称は適当でない。よってここではあえて「石器」の名称を用いる。

【敲打痕のあるもの】2-7は不整長楕円の扁平な礫の両極に敲打痕がみられるものである。敲打痕に使い込んだ様子は認めらず、短期使用で廃棄された可能性がある。

5-4は、SI103竪穴建物跡の床面において、土師器の破片と相伴したものである(写真12-2)。断面隅丸三角形の棒状礫の2面に2箇所ずつの敲打痕がみられる。SI103竪穴建物跡からはこれ以外にも複数の石器が出土しており、いずれも縄文時代の石器に比べれば、長期で使い込んだ様子がうかがわれず、使用痕の位置や形成に違いが認められる。

【磨面のあるもの】8-1は、磨面が上を向いた状態で、SI202新段階の床面から出土したものである。円礫の凹んだ割れ面を磨面としているもので、石皿的な用途に用いられた可能性がある。縄文時代の石皿のような成形は施されておらず、磨面だけが機能すればよしとする意識がうかがわれる。石材はデイサイトであり、縄文時代の石皿のような、多孔質のものをうけない点にも時代性が表れているようである。磨面には、この竪穴建物跡が焼けた際の煤が付着している。

【砥石】10-1はやや菱形を呈す板状のもので、4面が使われている。正面～側面にかけての1箇所には、線状のくぼみがみられる。5-2は断面四角形の棒状を呈すもので、これも4面が使われている。両者とも主要な機能面は曲面となっており、素材を切り出す際の削痕が認められる。

【金床石】12-7はSK208土坑から出土した金床石であり、鉄分の付着が2箇所に認められる。

玉髄小礫

4-16、6-20、10-02は、SI103、SI201、SI202の各竪穴建物跡から出土した玉髄の円礫である。単なる礫とみることもできるが、一般的にみられる玉髄の中では美しい部類に属し、出土位置も考慮すれば、これらは意図的に持ち込まれたものと考えられる。

礫

明確な使用痕は認められないものであるが、竪穴建物跡の床面より出土しているものは、台石のようなものとして機能したと考えられる。

焼成粘土塊

図・写真ともに省略したが、植物性の繊維の混入・圧痕が認められ、これらはカマド内壁の崩落塊と考えられる。溝跡からの出土傾向が高い。

羽 口

ある程度の形をとどめるものは2点であり、他に小片が数点出土している。遺構から出土したものは、11-19の1点(SI207SD01(旧SD107範囲)確認面)のみであり、ほかは全て遺構外(I M～N-106～111)からの出土である。

鉄製品

【刀子】3点出土している。4-17、10-13、10-14のいずれも状態が悪く、全体形状が不明であるが、全て刀子と考えられる。4-17、10-14には木質部が残存している。

【鉄鐔】1-17は状態が悪く、全体形状が不明であるが、厚さや大きさ等より鐔状の鉄鐔部分の破片と推定される。第487集『赤坂遺跡』のSK014土坑出土の鉄鐔と大きさ等がよく一致する。

【釘】図示していないが、遺構外から釘の先端部分と推定されるものが出土している。

鉄滓

鍛冶滓、碗型鍛冶滓、流動滓、鍛造剥片が出土している。製鉄系の流動滓は遺構外から2点のみの出土であり、ほかはSK208土坑からの出土(遺物図12・写真46)が多くを占める。製鉄系の流動滓は、I J-103のI層・I R-122のII層出土で、分布にまともはみられない。なお、本遺跡における鉄滓等の鉄関連遺物の分析は、第3次調査以降の成果を含めて、一括で行う予定である。

4 近世以降の遺物

陶磁器

図・写真は掲載していないが、18世紀の肥前から20世紀のものまで碗・皿類を中心に出土している。磁器には、呉須・コバルトによる染付がみられ、これらは18世紀～19世紀中葉頃のものとして推定される。陶器は灰釉～鉄釉まで各種みられ、時期の明確なものは18世紀代の肥前の播鉢のみである。

土器

写真52-⑥・⑦は、内面無調整・外面ミガキ調整のみられる皿状のものである。赤褐色を呈す。写真52-⑧は瓦質土器である。内外面無調整の盤状のもので、内外面ともに黒色を呈す。これらは焔炉や火鉢等の一部と考えられる。時期は不明である。

銭貨

拓影図・写真は掲載していないが、寛永銭2点、桐1銭硬貨1点が出土している。

金属製品

写真52-⑨・⑩は、銅製の蚊帳の吊り輪である。⑩には鮫文、⑨には松竹梅文が陽刻で表現されている。なお、図示はしていないが、Pit3298からは、銅製の箆箭の取手が出土しており、本遺跡の柱穴・小穴の中に、近世以降のものが含まれていることを示す。

その他

写真46-⑥は、SD104溝跡から出土した目薬瓶と思われる青いガラス製容器である。社名等の表記は

みられない。

写真52-⑤は、土製のホイッスルである。型打成形によるもので、中には鈴子が入っている。戦時中の金属類回収に伴って製造されたものかと推測されるが、時期・由来は全く不明である。

5 時期不明の遺物

古式土師器と推定される破片が1片出土している。

21-36は外面ハケメ、内面ナデ調整のもので、胎土は極めて精選されている。壺の体部破片と推定され、外面のハケメの中には赤彩が残り、内面にはみられない。これは小片であるため時期が判然としないが、精選された胎土やハケメの状態及び赤彩の色調等より、古墳時代の所産である可能性がある。

第6章 自然科学的分析

第1節 赤坂遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

【第1次測定】

1 測定対象試料

赤坂遺跡は、青森県黒石市大字上十川字長谷沢一番圃32-1他（北緯40° 39' 56"、東経140° 38' 10"）に所在する。遺跡は高館川と小河川（長谷沢）に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面（長谷沢側）に立地する。

測定対象試料は、SI001竪穴建物跡覆土7から出土した炭化物（No. 1-AKS-SI001-kaya : IAAA-82266）、SI003竪穴建物跡床面から出土した炭化物（No. 2-AKS-SI003-1 : IAAA-82267）、SI005竪穴建物跡内壁面土坑覆土⑦から出土した炭化物（No. 3-AKS-SI005-1 : IAAA-82268）、SI101竪穴建物跡カマド覆土8から出土した炭化物（No. 4-AKS-SI101-1 : IAAA-82269）、IHSX101覆土1から出土した炭化物（No. 5-AKS-SX101-1 : IAAA-82270）、SX102用途不明遺構覆土22から出土した炭化物（No. 6-AKS-SX102-1 : IAAA-82271）、合計6点である。

2 測定の意義

遺跡内に位置する複数の竪穴建物跡の前後関係および集落の継続期間を明らかにしたい。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA : Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として測る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は、SI001竪穴建物跡覆土7から出土した炭化物が $1040 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI003竪穴建物跡床面から出土した炭化物が $1010 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI005竪穴建物跡内壁面土坑覆土⑦から出土した炭化物が $1140 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI101竪穴建物跡カマド覆土8から出土した炭化物が $1080 \pm 30\text{yrBP}$ 、旧SX101覆土1から出土した炭化物がModern、SX102用途不明遺構覆土22から出土した炭化物が $1260 \pm 30\text{yrBP}$ である。

試料の炭素含有率は、旧SX101出土の炭化物を除いて全て60%以上であり、十分な値であった。旧SX101出土の炭化物では、形状が類似した米粒状の炭化物20点のうち、5点を対象として測定した結果である。その炭素含有率はやや低く、51%であった。そのほか、化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46(3), 1029-1058

【第2次測定】

1 測定対象試料

赤坂遺跡は、青森県黒石市大字上十川字長谷沢一番圃32-1他(北緯40° 39' 56"、東経140° 38' 10")に所在する。黒石市上十川地区の北域に位置し、高館川と小河川(長谷沢)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面(長谷沢側)に立地する。

測定対象試料は、SI001竪穴建物跡出土炭化物(No7-AKS-SI001-J1:IAAA-90498)、谷の断面から採取した炭化物(No8-AKS-谷メイン-14層:IAAA-90499、No9-AKS-谷メイン-18層:IAAA-90500、No10-AKS-谷メイン-27層:IAAA-90501)、SK019土坑出土土器内土壌から採取した炭化物(No11-AKS-SK019-P7:IAAA-90502)、SI005竪穴建物跡出土炭化物(No12-AKS-SI05-床直:IAAA-90503)、SX202(旧SD111)土壌硬化範囲B出土炭化物(No13-AKS-SD111-木:IAAA-90504)、pit0002出土炭化物(No14-AKS-pit0002-c:IAAA-90505)、SK034(旧SI007)土坑出土炭化物(No15-AKS-SI007-C1:IAAA-90506)、SI005SK01(旧SK020)竪穴建物跡内土坑出土炭化物(No16-AKS-SK020-C:IAAA-90507)、SI004竪穴建物跡出土炭化物(No17-AKS-SI004-C1:IAAA-90508)、合計11点である。

2 測定の意義

遺構、層位の年代を確かめ、集落の継続期間を明らかにする。

3 化学処理工程

第1次測定と同様。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用する。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

第1次測定と同様。

6 測定結果

¹⁴C年代は、No7-AKS-SI001-J1が 1100 ± 20 yrBP、No8-AKS-谷メイン-14層が 1170 ± 20 yrBP、No9-AKS-谷メイン-18層が 1160 ± 20 yrBP、No10-AKS-谷メイン-27層が 1180 ± 30 yrBP、No11-AKS-SK019-P7が 3070 ± 30 yrBP、No12-AKS-SI05-床直が 1120 ± 20 yrBP、No13-AKS-SD111-木が 250 ± 30 yrBP、No14-AKS-pit0002-cが 1170 ± 20 yrBP、No15-AKS-SI007-C1が 150 ± 20 yrBP、No16-AKS-SK020-Cが 3050 ± 30 yrBP、No17-AKS-SI004-C1が 1180 ± 30 yrBPである。

SK019土坑出土土器内の土壌から採取されたNo11-AKS-SK019-P7、SI005SK01(旧SK020)竪穴建物跡内

土坑出土のNo16-AKS-SK020-Cは縄文時代後期後半頃の年代を示した。

SI001竪穴建物跡床面出土のNo7-AKS-SI001-J1、SI005竪穴建物跡床直出土のNo12-AKS-SI05-床直、ピット出土のNo14-AKS-pit0002-c、SI004竪穴建物跡床面出土のNo17-AKS-SI004-C1は、いずれも平安時代で、9～10世紀頃の可能性が高い。

谷の断面から採取された3点の炭化物(No8-AKS-谷メイン-14層、No9-AKS-谷メイン-18層、No10-AKS-谷メイン-27層)の14C年代は、誤差の範囲(1 σ)で重なり合っており、ほぼ同年代を示している。平安時代と考えられる。

SX202(旧SD111)土壌硬化範囲B確認面で採取された炭化物No13-AKS-SD111-木は近世頃の年代となった。

SK034(旧SI007)土坑覆土出土のNo15-AKS-SI007-C1は近世以降の年代を示した。

炭素含有率はいずれも50%を超えており、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

第1次測定と同様。

【第3次測定】

1 測定対象試料

赤坂遺跡は、青森県黒石市大字上十川字長谷沢一番圃32-1他(北緯40° 39' 56"、東経140° 38' 10")に所在する。黒石市上十川地区の北域に位置し、高館川と小河川(長谷沢)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面(長谷沢側)に立地する。

測定対象試料は、SI101竪穴建物跡出土炭化物(No. 36-AKS-SI101-炭1: IAAA-92201、No. 37-AKS-SI101-炭2: IAAA-92202)、SI202竪穴建物跡(古段階～中段階)出土木炭(AKS-SI202旧-炭1: IAAA-92204)、SI202竪穴建物跡(新段階)出土木炭(AKS-SI202新-炭4: IAAA-92203、AKS-SI202新-炭2: IAAA-92205、AKS-SI202新-炭3: IAAA-92206)、SI203竪穴建物跡出土炭化物(No. 19-AKS-SI203-炭1: IAAA-92207、No. 20-AKS-SI203-炭2: IAAA-92208、No. 24-AKS-SI203-炭6: IAAA-92209、No. 25-AKS-SI203-炭7: IAAA-92210)、SI102竪穴建物跡外周溝(SI102SD01)出土炭化物(No. 30-AKS-SD109-炭1: IAAA-92211、No. 32-AKS-SD109-炭3: IAAA-92212)、廃棄ブロック1出土炭化物(No. 34-AKS-廃棄ブロック1-炭1: IAAA-92213)、廃棄ブロック2出土炭化物(No. 35-AKS-廃棄ブロック2-炭1: IAAA-92214)、合計14点である。

2 測定の意義

各遺構の年代と、遺構相互の前後関係および集落の継続期間を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除き、必要量の試料を採取、秤量する(付表「処理前試料量」)。

- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、遠心分離機を使用して超純水で中性になるまで希釈する。希釈後の試料を90℃で乾燥し、秤量する(付表「処理後試料量」)。
- (3) 必要量を採取、秤量(付表「燃焼量」)した試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(付表「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを製作する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

第2次測定と同様。

5 算出方法

第1次測定および第2次測定と同様。

6 測定結果

SI101堅穴建物跡床面出土炭化物の¹⁴C年代は、No. 36-AKS-SI101-炭1が1170±20yrBP、No. 37-AKS-SI101-炭2が1200±20yrBPである。誤差(±1σ)の範囲で重なる部分を持ち、近い年代を示している。暦年較正年代(1σ)は8世紀後葉から9世紀後葉頃となっている。

SI202堅穴建物跡(古段階～中段階)壁溝覆土出土木炭AKS-SI202旧-炭1の¹⁴C年代は1200±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は8世紀後葉から9世紀中葉頃の範囲である。

SI202堅穴建物跡(新段階)出土木炭の¹⁴C年代は、床面出土のAKS-SI202新-炭4が1200±20yrBP、AKS-SI202新-炭3が1120±20yrBP、覆土出土のAKS-SI202新-炭2が1230±20yrBPである。AKS-SI202新-炭4とAKS-SI202新-炭2は、誤差(±1σ)の範囲で重なる部分を持ち、近い年代を示している。暦年較正年代(1σ)の上限は8世紀の前葉と後葉に分かれるが、下限はいずれも9世紀中葉頃である。AKS-SI202新-炭3は他の2点に比べて若干新しい値で、暦年較正年代(1σ)は9世紀末葉から10世紀後半頃となっている。

SI203堅穴建物跡覆土出土炭化物の¹⁴C年代は、No. 19-AKS-SI203-炭1が1180±20yrBP、No. 20-AKS-SI203-炭2が1280±20yrBP、No. 24-AKS-SI203-炭6が1220±20yrBP、No. 25-AKS-SI203-炭7が1150±20yrBPである。4点ともおおよそ近接した年代値であるが、若干差が認められる。暦年較正年代(1σ)は、最も古いNo. 20-AKS-SI203-炭2が7世紀後葉から8世紀中葉頃、最も新しいNo. 25-AKS-SI203-炭7が9世紀前半から10世紀中葉頃の範囲で示される。

SI102堅穴建物跡外周溝(SI102SD01)覆土出土炭化物の¹⁴C年代は、No. 30-AKS-SD109-炭1が1210±20yrBP、No. 32-AKS-SD109-炭3が1170±20yrBPで、近接した値となっている。暦年較正年代(1σ)は8世紀後葉から9世紀後半頃の範囲で示される。

廃棄ブロック1出土炭化物No. 34-AKS-廃棄ブロック1-炭1の¹⁴C年代は1190±20yrBPである。暦年較正

年代(1 σ)は8世紀後葉頃から9世紀後葉頃となっている。

廃棄ブロック2出土炭化物No. 35-AKS-廃棄ブロック2-炭1の¹⁴C年代は1270±20yrBPである。暦年較正年代(1 σ)は7世紀後葉から8世紀後葉頃の範囲である。

炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

第1次測定および第2次測定と同様。

【第4次測定】

1 測定対象試料

赤坂遺跡は、青森県黒石市大字上十川字長谷沢一番圃(<世界測地系>北緯40° 39′ 55″、東経140° 38′ 11″)に所在する。測定対象試料は、堅穴建物跡や溝から出土した木炭、炭化物合計5点(IAAA-101032～101036)である(表1)。

2 測定の意義

木炭、炭化物が出土した堅穴建物跡、溝跡の年代を把握する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する(付表「処理前試料量」)。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する(付表「処理後試料量」)。AAA処理における酸処理では、通常1mo l/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量(付表「燃焼量」)した試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(付表「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹²C濃度(¹²C/¹³C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HoX II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と¹⁴Cカウント数を付表に示す。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少い)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCal v4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

SI202堅穴建物跡(新段階)出土試料の ^{14}C 年代は、床面出土の木炭AKS-SI202新-炭5が $1130 \pm 20\text{yrBP}$ 、覆土出土の炭化物AKS-SI202新-炭1が $1220 \pm 20\text{yrBP}$ である。床面と覆土の試料間に若干年代差が認められる。暦年較正年代(1σ)は、AKS-SI202新-炭5が $894 \sim 965\text{cal AD}$ 、AKS-SI202新-炭1が $772 \sim 864\text{cal AD}$ の間に各々2つの範囲で示される。

SI102堅穴建物跡外周溝(SI102SD01)出土木炭の ^{14}C 年代は、5b層出土のAKS-SD109-炭4が $1160 \pm 20\text{yrBP}$ 、覆土出土のAKS-SD109-炭2が $1130 \pm 20\text{yrBP}$ である。2点は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で重なる近い年代値を示す。暦年較正年代(1σ)は、AKS-SD109-炭4が $784 \sim 940\text{cal BP}$ 、AKS-SD109-炭2が $890 \sim 962\text{cal AD}$ の間に複数の範囲で示される。

SI101堅穴建物跡内土坑(SI101SK01)出土木炭AKS-SI101内SK01-炭1の ^{14}C 年代は $1160 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は $828 \sim 945\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60%程度を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表 1

測定番号	試料名	採取場所	資料形態	地理方法	δ ¹³ C補正あり		pMC (%)
					δ ¹³ C(‰)(AMS)	1.000 Age(yrBP)	
IAAA-82266	Na1-AKS-S1001-koya	S1001竪穴建物跡 7層	炭化物	AAA	-14.72±0.79	1040±30	87.81±0.35
IAAA-82267	Na2-AKS-S1003-1	S1003竪穴建物跡 床面	炭化物	AAA	-32.62±0.83	1010±30	88.23±0.37
IAAA-82268	Na3-AKS-S1005-1	S1005竪穴建物跡内裏面土坑(S1005SK02) 乙層	炭化物	AAA	-24.95±0.94	1140±30	86.74±0.35
IAAA-82269	Na4-AKS-S1101-1	S1101竪穴建物跡カマド 8層	炭化物	AAA	-27.49±0.80	1080±30	87.43±0.36
IAAA-82270	Na5-AKS-SX101-1	SX101用途不明遺構 1層	炭化物	AAA	-25.92±0.50	Modern	108.48±0.4
IAAA-82271	Na6-AKS-SX102-1	SX102用途不明遺構 2層	炭化物	AAa	-28.17±0.71	1260±30	85.47±0.35

【#2635】

第2次測定

測定番号	試料名	採取場所	資料形態	地理方法	δ ¹³ C補正あり		pMC (%)
					δ ¹³ C(‰)(AMS)	1.000 Age(yrBP)	
IAAA-90498	Na7-AKS-S1001-J1	S1001竪穴建物跡 床面	炭化物	AAa	-21.03±0.27	1100±20	87.25±0.26
IAAA-90499	Na8-AKS-谷メイン-14層	谷 14層	炭化物	AAA	-21.87±0.29	1170±20	86.43±0.26
IAAA-90500	Na9-AKS-谷メイン-18層	谷 18層	炭化物	AAA	-28.13±0.24	1160±20	86.60±0.26
IAAA-90501	Na10-AKS-谷メイン-27層	谷 27層	炭化物	AAa	-22.64±0.20	1180±30	86.36±0.28
IAAA-90502	Na11-AKS-SK019-P7	SK019土坑 土器内	炭化物	AAA	-20.21±0.24	3070±30	68.24±0.21
IAAA-90503	Na12-AKS-S105-床直	S1005竪穴建物跡 床面	炭化物	AAA	-25.39±0.22	1120±20	86.96±0.26
IAAA-90504	Na13-AKS-SD111-木	SX202土壌硬化範囲B 確認面	炭化物	AAA	-24.65±0.24	250±30	96.94±0.31
IAAA-90505	Na14-AKS-p1r0002-c	P1r0002柱穴・小穴 覆土	炭化物	AAA	-24.96±0.29	1170±20	86.43±0.26
IAAA-90506	Na15-AKS-S1007-C1	SK034(旧S1007)土坑 覆土	炭化物	AAA	-25.20±0.24	150±20	98.09±0.28
IAAA-90507	Na16-AKS-SK020-C	S1005竪穴建物跡内土坑(S1005SK01) 覆土	炭化物	AAA	-24.85±0.24	3050±30	68.41±0.23
IAAA-90508	Na17-AKS-S1004-C1	S1004竪穴建物跡 床面	炭化物	AAA	-26.45±0.24	1180±30	86.37±0.28

【#2995】

第3次測定

測定番号	試料名	採取場所	資料形態	地理方法	δ ¹³ C補正あり		pMC (%)
					δ ¹³ C(‰)(AMS)	1.000 Age(yrBP)	
IAAA-92201	Na36-AKS-S1101-炭1	S1101竪穴建物跡 床面	炭化物	AAA	-24.50±0.26	1170±20	86.42±0.18
IAAA-92202	Na37-AKS-S1101-炭2	S1101竪穴建物跡 床面	炭化物	AAA	-22.28±0.26	1200±20	86.14±0.19
IAAA-92203	AKS-S1202新-炭4	S1202竪穴建物跡(新段階) 床面	木炭	AAA	-26.43±0.19	1200±20	86.09±0.19
IAAA-92204	AKS-S1202旧-炭1	S1202竪穴建物跡(古段階～中段階) 壁直覆土	木炭	AAA	-27.06±0.20	1200±20	86.09±0.19
IAAA-92205	AKS-S1202新-炭2	S1202竪穴建物跡(新段階) 覆土	木炭	AAA	-28.43±0.18	1230±20	85.84±0.19
IAAA-92206	AKS-S1202新-炭3	S1202竪穴建物跡(新段階) 床面	木炭	AAA	-25.46±0.20	1120±20	87.04±0.19
IAAA-92207	Na19-AKS-S1203-炭1	S1203竪穴建物跡 床上2cm	炭化物	AAA	-27.05±0.20	1180±20	86.35±0.19
IAAA-92208	Na20-AKS-S1203-炭2	S1203竪穴建物跡 床上2cm	炭化物	AAA	-20.97±0.27	1280±20	85.32±0.19
IAAA-92209	Na24-AKS-S1203-炭6	S1203竪穴建物跡 床上3cm	炭化物	AAA	-22.40±0.24	1220±20	85.94±0.19
IAAA-92210	Na25-AKS-S1203-炭7	S1203竪穴建物跡 床上2cm	炭化物	AAA	-23.74±0.18	1150±20	86.62±0.19
IAAA-92211	Na30-AKS-SD109-炭1	SI102竪穴建物跡外周溝 覆土	炭化物	AAA	-27.49±0.24	1210±20	86.06±0.18
IAAA-92212	Na32-AKS-SD109-炭3	SI102竪穴建物跡外周溝 5b層	炭化物	AAA	-25.00±0.16	1170±20	86.47±0.18
IAAA-92213	Na34-AKS-廃棄ブロック1-炭1	廃棄ブロック1 II層	炭化物	AAA	-25.45±0.15	1190±20	86.20±0.18
IAAA-92214	Na35-AKS-廃棄ブロック2-炭1	廃棄ブロック2 II層	炭化物	AAA	-22.69±0.24	1270±20	85.33±0.18

【#3348】

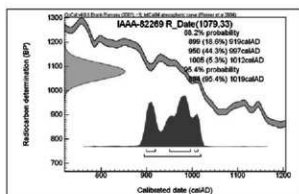
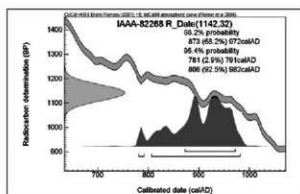
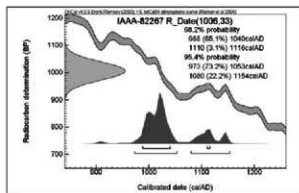
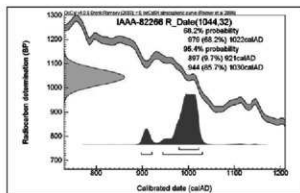
第4次測定

測定番号	試料名	採取場所	資料形態	地理方法	δ ¹³ C補正あり		pMC (%)
					δ ¹³ C(‰)(AMS)	1.000 Age(yrBP)	
IAAA-101032	AKS-S1202新-炭5	S1202竪穴建物跡(新段階) 床面	木炭	AAA	-28.36±0.28	1130±20	86.93±0.18
IAAA-101033	AKS-S1202新-炭1	S1202竪穴建物跡(新段階) 覆土	炭化物	AAA	-25.93±0.27	1220±20	85.91±0.18
IAAA-101034	AKS-SD109-炭4	SI102竪穴建物跡外周溝 覆土	木炭	AAA	-24.84±0.23	1160±20	86.53±0.19
IAAA-101035	AKS-SD109-炭2	SI102竪穴建物跡外周溝 5b層	木炭	AAA	-28.75±0.21	1130±20	86.84±0.19
IAAA-101036	AKS-S1101内SK01-炭1	S1101竪穴建物跡内土坑(S1101SK01) 確認面	木炭	AAA	-25.31±0.22	1160±20	86.59±0.18

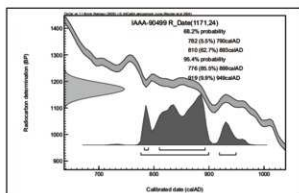
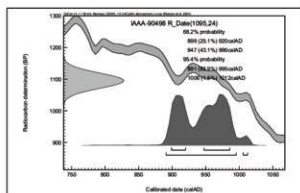
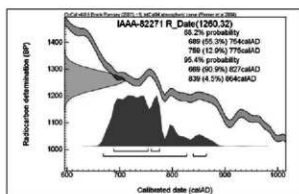
【#3738】

表 2

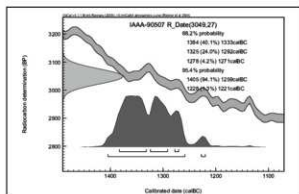
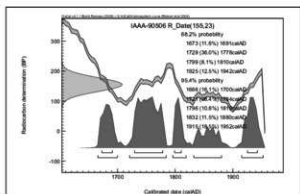
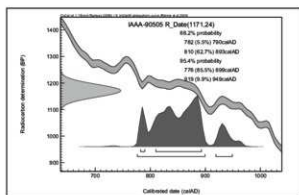
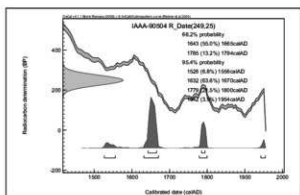
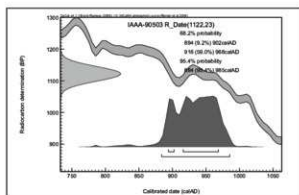
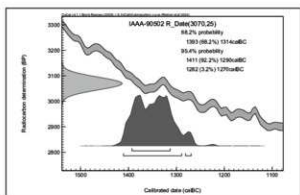
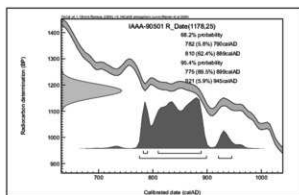
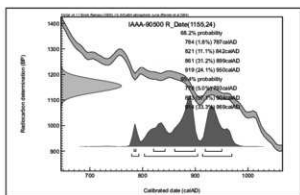
測定	測定番号	δ ¹³ C 補正なし		周年校正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
		Age (yrBP)	±σC (‰)			
第1次測定	IAAA-82266	880 ± 30	89.67 ± 0.33	1,044 ± 32	979AD - 1022AD (68.2%) 944AD - 1030AD (95.7%)	897AD - 921AD (9.7%) 944AD - 1030AD (95.7%)
第1次測定	IAAA-82267	1,130 ± 30	86.85 ± 0.33	1,006 ± 33	988AD - 1040AD (65.1%) 1110AD - 1116AD (3.1%)	973AD - 1033AD (73.2%) 1080AD - 1154AD (92.2%)
第1次測定	IAAA-82268	1,140 ± 30	86.75 ± 0.31	1,142 ± 32	873AD - 972AD (68.2%)	781AD - 791AD (2.9%) 806AD - 982AD (92.5%)
第1次測定	IAAA-82269	1,120 ± 30	86.98 ± 0.33	1,079 ± 33	899AD - 919AD (18.6%) 950AD - 997AD (44.3%) 1005AD - 1012AD (5.3%)	894AD - 1019AD (95.4%)
第1次測定	IAAA-82270	Modern	108.28 ± 0.20	Modern		
第1次測定	IAAA-82271	1,310 ± 30	84.92 ± 0.32	1,260 ± 32	689AD - 754AD (55.3%) 720AD - 775AD (12.9%)	669AD - 827AD (90.9%) 839AD - 864AD (4.2%)
第2次測定	IAAA-90498	1,030 ± 30	87.96 ± 0.26	1,095 ± 24	899AD - 920AD (25.1%) 947AD - 986AD (43.1%)	891AD - 995AD (93.9%) 1006AD - 1012AD (1.5%)
第2次測定	IAAA-90499	1,120 ± 30	86.99 ± 0.26	1,171 ± 24	782AD - 790AD (5.0%) 810AD - 893AD (62.7%)	776AD - 899AD (85.0%) 918AD - 949AD (9.9%)
第2次測定	IAAA-90500	1,210 ± 30	86.65 ± 0.26	1,155 ± 24	784AD - 787AD (1.8%) 821AD - 842AD (11.1%) 861AD - 899AD (31.2%) 918AD - 950AD (24.1%)	779AD - 793AD (5.0%) 803AD - 904AD (57.1%) 914AD - 969AD (33.3%)
第2次測定	IAAA-90501	1,140 ± 30	86.78 ± 0.28	1,178 ± 25	782AD - 790AD (5.9%) 810AD - 889AD (62.4%)	775AD - 899AD (89.5%) 921AD - 945AD (5.9%)
第2次測定	IAAA-90502	2,990 ± 30	68.91 ± 0.21	3,070 ± 25	1393BC - 1314BC (68.2%)	1411BC - 1290BC (92.2%) 1282BC - 1270BC (3.2%)
第2次測定	IAAA-90503	1,130 ± 30	86.89 ± 0.26	1,122 ± 23	894AD - 902AD (9.2%) 916AD - 968AD (59.0%)	884AD - 985AD (95.4%)
第2次測定	IAAA-90504	240 ± 30	97.01 ± 0.30	249 ± 25	1643AD - 1665AD (55.0%) 1783AD - 1794AD (13.2%)	1526AD - 1556AD (6.8%) 1623AD - 1670AD (63.4%) 1779AD - 1800AD (21.0%) 1942AD - 1954AD (3.5%)
第2次測定	IAAA-90505	1,170 ± 30	86.43 ± 0.26	1,171 ± 24	782AD - 790AD (5.0%) 810AD - 893AD (62.7%)	776AD - 899AD (85.0%) 918AD - 949AD (9.9%)
第2次測定	IAAA-90506	160 ± 20	98.65 ± 0.28	155 ± 23	1673AD - 1691AD (11.6%) 1729AD - 1778AD (36.0%) 1799AD - 1810AD (8.1%) 1925AD - 1942AD (12.3%)	1666AD - 1700AD (16.1%) 1721AD - 1784AD (38.4%) 1796AD - 1819AD (10.8%) 1832AD - 1880AD (11.3%) 1915AD - 1952AD (18.2%)
第2次測定	IAAA-90507	3,050 ± 30	68.43 ± 0.23	3,049 ± 27	1384BC - 1333BC (40.1%) 1328BC - 1292BC (24.0%) 1278BC - 1271BC (4.2%)	1403BC - 1259BC (94.1%) 1228BC - 1221BC (1.3%)
第2次測定	IAAA-90508	1,200 ± 30	86.12 ± 0.28	1,176 ± 26	782AD - 790AD (5.9%) 809AD - 890AD (62.3%)	775AD - 899AD (87.7%) 918AD - 948AD (7.7%)
第3次測定	IAAA-92201	1,160 ± 30	86.51 ± 0.18	1,172 ± 16	783AD - 788AD (4.9%) 815AD - 843AD (25.8%) 859AD - 892AD (37.6%)	778AD - 794AD (9.9%) 800AD - 853AD (84.8%) 925AD - 937AD (3.7%)
第3次測定	IAAA-92202	1,150 ± 30	86.42 ± 0.18	1,198 ± 17	780AD - 792AD (10.2%) 805AD - 870AD (68.9%)	777AD - 885AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92203	1,230 ± 30	85.84 ± 0.19	1,203 ± 17	780AD - 828AD (43.8%) 840AD - 866AD (24.4%)	775AD - 885AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92204	1,240 ± 30	85.72 ± 0.19	1,203 ± 18	780AD - 828AD (43.4%) 840AD - 866AD (24.4%)	775AD - 885AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92205	1,280 ± 30	85.24 ± 0.19	1,226 ± 17	723AD - 740AD (12.7%) 770AD - 822AD (42.9%) 842AD - 861AD (12.6%)	709AD - 747AD (19.8%) 766AD - 880AD (75.6%)
第3次測定	IAAA-92206	1,120 ± 30	86.96 ± 0.19	1,115 ± 17	893AD - 905AD (10.9%) 912AD - 925AD (15.0%) 937AD - 971AD (42.4%)	891AD - 980AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92207	1,210 ± 30	85.99 ± 0.18	1,179 ± 17	782AD - 789AD (6.9%) 814AD - 846AD (39.6%) 852AD - 888AD (31.5%)	777AD - 893AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92208	1,210 ± 30	86.02 ± 0.18	1,276 ± 17	686AD - 720AD (37.9%) 742AD - 769AD (30.3%)	679AD - 773AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92209	1,170 ± 30	86.40 ± 0.18	1,217 ± 17	774AD - 827AD (47.9%) 840AD - 864AD (20.3%)	722AD - 741AD (6.6%) 770AD - 882AD (88.8%)
第3次測定	IAAA-92210	1,130 ± 30	86.85 ± 0.19	1,153 ± 17	830AD - 837AD (3.2%) 868AD - 900AD (34.6%) 919AD - 950AD (30.9%)	781AD - 790AD (2.6%) 808AD - 904AD (54.0%) 915AD - 968AD (38.7%)
第3次測定	IAAA-92211	1,250 ± 30	85.62 ± 0.18	1,206 ± 17	779AD - 828AD (44.2%) 840AD - 865AD (24.9%)	773AD - 885AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92212	1,170 ± 30	86.47 ± 0.18	1,168 ± 16	783AD - 788AD (4.3%) 814AD - 844AD (24.2%) 858AD - 894AD (39.7%)	779AD - 793AD (8.2%) 802AD - 897AD (79.5%) 923AD - 941AD (7.6%)
第3次測定	IAAA-92213	1,200 ± 30	86.12 ± 0.18	1,193 ± 17	783AD - 790AD (6.2%) 810AD - 875AD (62.0%)	778AD - 885AD (95.4%)
第3次測定	IAAA-92214	1,240 ± 30	85.73 ± 0.18	1,274 ± 17	688AD - 721AD (37.6%) 742AD - 770AD (30.6%)	679AD - 744AD (95.4%)
第4次測定	IAAA-101032	1,180 ± 30	86.33 ± 0.17	1,125 ± 16	894calAD - 899calAD (5.9%) 919calAD - 965calAD (62.3%)	888calAD - 974calAD (95.4%)
第4次測定	IAAA-101033	1,240 ± 30	85.74 ± 0.17	1,220 ± 16	772calAD - 827calAD (49.0%) 839calAD - 864calAD (19.2%)	720calAD - 742calAD (9.3%) 769calAD - 880calAD (86.1%)
第4次測定	IAAA-101034	1,160 ± 30	86.56 ± 0.18	1,161 ± 17	784calAD - 787calAD (3.2%) 822calAD - 842calAD (13.2%) 861calAD - 891calAD (39.1%) 921calAD - 940calAD (13.6%)	779calAD - 793calAD (5.9%) 803calAD - 900calAD (70.0%) 918calAD - 952calAD (19.4%)
第4次測定	IAAA-101035	1,200 ± 30	86.17 ± 0.18	1,133 ± 17	890calAD - 899calAD (11.9%) 919calAD - 962calAD (56.3%)	880calAD - 975calAD (95.4%)
第4次測定	IAAA-101036	1,160 ± 30	86.54 ± 0.17	1,156 ± 16	828calAD - 838calAD (6.1%) 866calAD - 898calAD (37.6%) 920calAD - 941calAD (24.0%)	781calAD - 790calAD (3.2%) 808calAD - 901calAD (60.4%) 917calAD - 965calAD (31.7%)



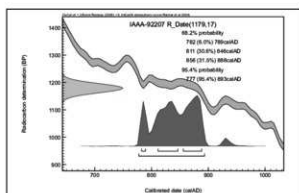
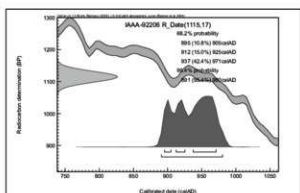
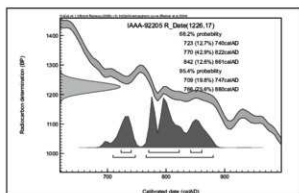
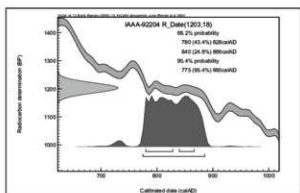
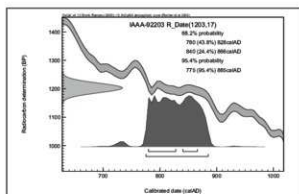
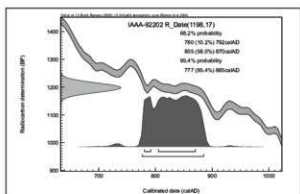
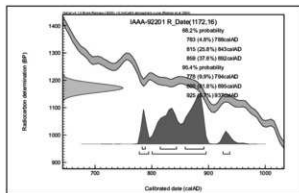
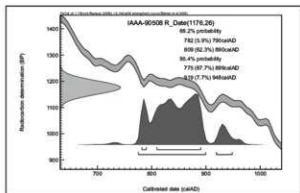
IAAA-82270は、現存する陸上生物が示すC濃度を表した(Modern)ため、表から除外した。



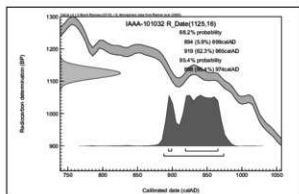
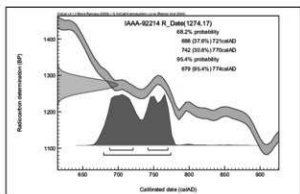
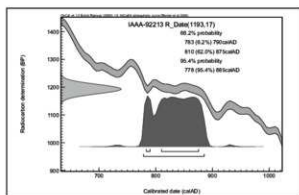
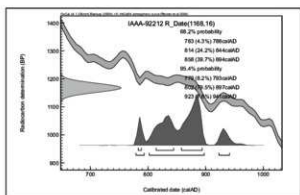
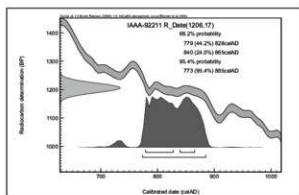
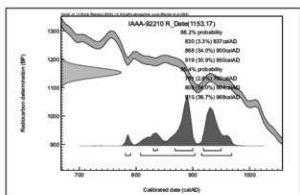
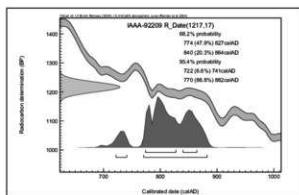
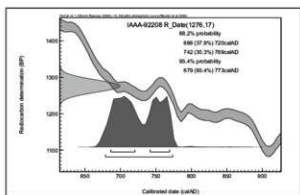
[参考] 暦年較正年代グラフ 1



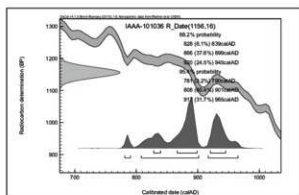
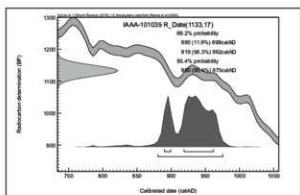
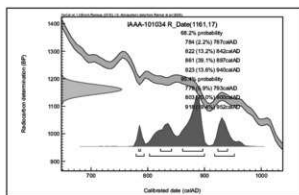
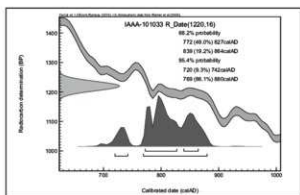
[参考] 暦年較正年代グラフ 2



[参考] 暦年較正年代グラフ 3



[参考] 暦年較正年代グラフ 4



[参考] 暦年較正年代グラフ 5

第2節 赤坂遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科 柴 正 敏

【第1次分析】

黒石市赤坂遺跡より採集された火山灰サンプル15試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井、2003)。

ガラスの形態及び構成鉱物(表1)、ならびに軽石粒子の発泡度・色(特に褐色ガラスの有無)・粒径より、ガラスは以下のように帰属される：

- (1) 白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)のガラスのみからなると推定される試料
(アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含み、褐色ガラス、石英(珪晶)及びホルンブレンドを含まないもの)
・試料番号Aka-002、-003、-005、-007、-013及びF-014(計6試料)
- (2) 白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)と十和田aテフラ(To-a)のガラスが混合したと推定される試料
(アルカリ長石、エジリンオージャイト、褐色ガラス及び石英(珪晶)を含み、ホルンブレンドを含まないもの)
・試料番号Aka-001及びF-007(計2試料)
- (3) 白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)及び十和田八戸テフラ(To-H)のガラスが混合したと推定される試料
(アルカリ長石、エジリンオージャイト及びホルンブレンドを含み、褐色ガラス及び石英(珪晶)を含まないもの)
・試料番号Aka-004(計1試料)
- (4) 白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)、十和田aテフラ及び十和田八戸テフラ(To-H)のガラスが混合したと推定される試料
(アルカリ長石、ホルンブレンド、褐色ガラス及び石英(珪晶)を含むもの)
・試料番号Aka-011及びF-012(計2試料)
上記2試料ではアルカリ長石のみが認められ、エジリンオージャイトを見出すことはできなかった。
従って、B-Tm以外の可能性もある。
- (5) 十和田aテフラ(To-a)と十和田八戸テフラ(To-H)ガラスが混合したと推定される試料
(褐色ガラス、石英(珪晶)及びホルンブレンドを含み、アルカリ長石及びエジリンオージャイトを含まないもの)
・試料番号Aka-006、-009、-010及びF-015(4試料)
試料番号Aka-006には海綿骨針が認められる。

各試料について多数のガラス及び鉱物粒子を観察することにより、以上のようなグループ分けをすることができるが、単独のガラス粒子でその帰属が明らかにはできるとは限らないことを付記しておく。

【第2次分析】

黒石市赤坂遺跡より採集された火山灰サンプル7試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表2に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井, 2003)。

ガラスの形態及び構成鉱物(表2)、ならびに軽石粒子の発泡度・色(特に褐色ガラスの有無)・粒径より、ガラスは以下のように帰属される:

- (1) 白頭山若小牧テフラ(B-Tm)のガラスのみからなると推定される試料
(アルカリ長石及びエジリンオーゾナイトを含み、褐色ガラス、石英(斑晶)及びホルンブレンドを含まないもの)
・試料番号2(計1試料)
- (2) 白頭山若小牧テフラ(B-Tm)と十和田aテフラ(To-a)のガラスが混合していると推定される試料
(アルカリ長石、エジリンオーゾナイト、褐色ガラス及び石英(斑晶)を含み、ホルンブレンドを含まないもの)
・試料番号1, 3, 4, 6及び7(計5試料)
- (3) 十和田aテフラ(To-a)ガラスのみからなると推定される試料
(褐色ガラス及び石英(斑晶)を含み、ホルンブレンド、アルカリ長石及びエジリンオーゾナイトを含まないもの)
・試料番号5(1試料)

各試料について多数のガラス及び鉱物粒子を観察することにより、以上のようなグループ分けをすることができるが、単独のガラス粒子でその帰属が明らかにはできるとは限らないことを付記しておく。

参 考 文 献 (第1次分析・第2次分析共通)

- 青木かおり・町田 洋(2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 — K2O-TiO2図によるテフラの識別、地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258。
- Hayakawa, Y. (1985), Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.
- Machida, H. (1999), Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201。
- 町田 洋・新井勇夫(2003)、新編火山灰アトラス — 日本列島とその周辺—。東京大学出版会、pp. 336。
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化 — 宇樽部の一露頭を例として—。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。
- 柴 正敏・佐々木 実(2006)、十和田火山噴出物のガラス組成変化。月刊地球、第28巻、第5号、322-325。

表1 赤坂遺跡の火山灰(第1次分析)

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
Aka-001	SI002カマド	1~3	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	2層にB-Tmブロック
Aka-002	SI004	④・5・4	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	④層にB-Tmブロック
Aka-003	SI101	1	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
Aka-004	SI002 (HFSK018)	1・2・4	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm, To-H	プラント オパールあり
Aka-005	SK114	7・8	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
Aka-006	SD018-019	IIb~III	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a, To-H	プラント オパールあり
Aka-007	SD118	1	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
Aka-008	Pit0137	覆土	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	
Aka-009	Pit0178	1	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a, To-H	プラント オパール、 海綿骨針あり
Aka-010	Pit0232	柱痕	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a, To-H	
Aka-011	谷	14	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	軽石粒 (径2~3mm)
Aka-012	谷	15	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a, To-H	
Aka-013	谷	18	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
Aka-014	谷	21	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
Aka-015	谷	24	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、ホルンブレンド、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a, To-H	

B-Tm: 白頭山苦小牧テフラ、To-a: 十和田aテフラ、To-H: 十和田八戸テフラ、>: より多い、pm: 軽石型ガラス、bw: パブルウォール型ガラス

表2 赤坂遺跡の火山灰(第2次分析)

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	SI102	覆土	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	軽石粒子 (径0.5~3mm)、 プラントオパールを含む
2	SI103	床面	ガラス(pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-Tm	
3	SI203	覆土	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	軽石粒子 (径0.5~2mm)、 プラントオパールを含む
4	SI205	8層	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	軽石粒子 (径0.5~1mm)
5	SK216	1・2層	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a	軽石粒子 (径0.5~1.5mm)
6	SI205SD01 (HSD113)	覆土	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	軽石粒子 (径0.5~1.5mm) プラントオパールを含む
7	Pit3605	覆土	ガラス(pm, bw)、褐色ガラス、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	B-Tm, To-a	軽石粒子 (径0.5~1mm)

B-Tm: 白頭山苦小牧テフラ、To-a: 十和田aテフラ、>: より多い、pm: 軽石型ガラス、bw: パブルウォール型ガラス

第3節 赤坂遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

大阪大谷大学 三 辻 利 一

1) はじめに

K, Ca, Rb, Srの長石系因子を中核にした須恵器産地推定法が開発されて、須恵器の生産と供給を再現する本格的な研究が開始された。現在、5世紀代、6世紀代、7世紀代、律令体制下、9～10世紀代という具合に、時代ごとにおいて、各地で須恵器の生産・供給問題の研究が進められている。

青森県内の須恵器の生産・供給問題は地元、五所川原窯群の操業以前はすべて、外部地域からの搬入品であるから、その産地がどこかを探る研究が中心となる。五所川原窯群が操業に入ると、五所川原製品が県内各地の遺跡にどのように供給されていたのか、さらに、この時期にも、外部地域から搬入された須恵器があるのかどうか、あれば、その産地は何処なのか須恵器生産・供給問題の研究の中心課題となる。

今回分析対象となった赤坂遺跡出土須恵器は考古学的観察で9世紀後半から10世紀代にかけての須恵器であると推定されているので、五所川原製品が含まれていることは間違いない。まず、地元、五所川原製品を検出する作業から開始された。外部地域からの搬入品はその産地が何処かを探る段階にあるので、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で定性的に産地を探ることにした。今回分析した、赤坂遺跡出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析法

須恵器片試料は表面を研磨して付着遺物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、電動プレスで高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

蛍光X線分析には理学電機製RIX2100（波長分散型）を使用した。この装置にはTAP、Ge、LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が装填されており、これらはコンピュータの制御によって自動的に交換される。

X線管球はRh管球（出力3.0kW）であり、使用条件は50kV、50mAである。この条件で微量元素Rb、Srの蛍光X線スペクトルは十分観測できることが実証されている。

また、この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、データの打ち出し、試料の交換を含めて完全自動分析ができる装置である。50試料のうち、2個は標準試料である。1個は波高分析器を調製するためのものであり、分析作業が開始される前にこの標準試料をつかって装置が点検される。他の1個は定量分析のための標準試料であり、日本地質調査所が配布した岩石標準試料JG-1が使用される。そのため、分析値はJG-1の各元素の蛍光X線強度をつかって標準化された値で表示された。日本地質調査所が配布している複数の岩石標準試料を分析した結果、JG-1による標準化値と公表されている標準試料の分析値の間に直線性があることが確かめられているので、もし、%やppm表示による分析値が必要であれば、測定されたJG-1による標準化値にJG-1の公表されている

分析値を乗ずればよい。変換の操作は簡単である。ただ、岩石学研究とは違い、土器の産地問題の研究ではわざわざ、%やppm表示する必要はなく、むしろ、JG-1による標準化値のほうが多くの点で、はるかに便利である。

3) 分析結果

分析値は表1にまとめられている。この結果に基づいて、K-Ca、Rb-Sr分布図を作成したり、Fe因子を図上で比較した。土器の地域差を比較する研究では統計計算に入る前に、分布図を作成し、目に見える形で地域差を定性的に比較することは重要である。この作業を抜きにして、統計計算に入ると、大量の数値はブラックボックス化する恐れがある。

今回分析した須恵器は9世紀後半から10世紀代と推定される須恵器であるので、この時期には地元、五所川原窯群が操業に入っている。そこで、まず、五所川原製品を抽出することからデータ解析の作業に入った。五所川原製品はFeが多いという特徴をもつ。まず、Fe因子を図1に比較してある。Feの分析値が3.0を境界線として、Feの多少を区別した。3.0を境界線としたのはこれまで分析されている五所川原製品の95%以上がこの領域に分布するからである。Feの分析値が3.0以上のものをFeが多い須恵器、3.0以下のものをFeの少ない須恵器とした。図1をみると、殆どの試料はFeの多い須恵器であることが分かる。この中に五所川原製品が含まれるはずである。Feの少ない須恵器は五所川原製品ではなく、外部地域からの搬入品と考えられる。No.609、613、627、638、713の5点の須恵器が搬入品であると判断された。

つぎに、Feの多い須恵器の中から五所川原製品を抽出するために、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成した。図2に示す。この図にはこれまでに出版されている五所川原窯群の須恵器の殆どを包含するようにして、長方形で五所川原領域を描いてある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、比較対照の領域として有効である。両分布図では大まかに見て2グループに分かれて試料集団は分布する。そのうち、番号を付した試料集団はK-Ca分布図で五所川原領域を少しずれる。これらの須恵器は五所川原製品ではない可能性が高く、産地推定では不明としておいた。他の須恵器は長石系因子でも五所川原領域に対応するところから、五所川原製品である可能性が高い。産地不明となった須恵器は五所川原製品と推定された須恵器に比べて、K、Rbがやや高く、Ca、Srもやや、多い。東北地方に生産地があるものと考えている。産地推定の結果は表1の最右欄に記載されている。

他方、Feの少ない須恵器の両分布図は図3に示されている。これらの須恵器の産地推定の結果は表1では搬入品としてある。図1のFe因子をみると、5点の搬入品のうち、No.609、713には他の3点の須恵器に比べてFeが少ないことが分かる。Feがより多いNo.613、627、638の3点は両分布図でも近接して分布しており、同じ生産地の製品とみられる。これらを外部地域A産地の製品とした。A産地も東北地方である可能性が高い。No.609とNo.713は同じ産地の製品であるかどうかは不明である。表1ではただ、搬入品としておいた。この結果、外部からの搬入品は少なくとも、3ヶ所からの搬入品である。土器型式も異なる可能性があり、須恵器の型式でも検討してみる必要がある。

生産・供給の研究では胎土分析の結果は土器型式でも点検することが必要である。そうすることによって、胎土分析の結果を考古学者も共有することができるからである。

表 1 赤坂遺跡出土須恵器の分析データ

試料 番号	三辻研No.	出土位置	器種	遺物区-No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定産地
603	22-1387	SI101SK02 覆土	甕	1-21	0.354	0.353	3.43	0.473	0.418	0.254	五所川原
606	22-1388	SI103 床構築土	壺	4-10	0.264	0.331	3.29	0.347	0.345	0.182	五所川原
609	22-1389	SI103 火山灰土層	壺	4-9	0.498	0.400	1.83	0.710	0.643	0.368	搬入品
611	22-1390	SI103 床構築土	壺	4-11	0.274	0.343	3.26	0.318	0.342	0.189	五所川原
613	22-1391	SI104 床面	坏	6-9	0.313	0.267	2.50	0.386	0.398	0.194	A生産地
619	22-1392	SI102古段階 (EIS1206) 床面	甕	2-8	0.328	0.433	3.74	0.410	0.424	0.291	不明
622	22-1393	SI207SD01 (EISD107範囲) 覆土	鉢	11-20	0.420	0.343	3.02	0.557	0.491	0.329	不明
624	22-1394	SI207SD01 (EISD107範囲) 覆土	壺	11-22	0.273	0.336	3.15	0.371	0.374	0.196	五所川原
625	22-1395	SI102SD01 (EISD109) 覆土	甕	3-10	0.307	0.521	3.44	0.398	0.502	0.305	不明
626	22-1396	SI102SD01 (EISD109) +遺構外 確認面	坏	3-6	0.343	0.405	3.69	0.417	0.482	0.235	不明
627	22-1397	SI102SD01 (EISD109) + SI103SD01 (EISD110) 確認面+覆土	壺	15-4	0.413	0.232	2.37	0.540	0.387	0.191	A生産地
630	22-1398	SI207SD01 (EISD114範囲) 覆土	壺	11-15	0.269	0.350	3.07	0.336	0.391	0.200	五所川原
631	22-1399	SI207SD01 (EISD114範囲) 覆土	壺	11-21	0.354	0.355	3.65	0.461	0.423	0.262	五所川原
634	22-1400	Pit1192 覆土	壺	14-9	0.311	0.313	3.55	0.433	0.373	0.192	五所川原
638	22-1401	SI207SD01 (EISD107+EISD114) 覆土	壺	11-16	0.406	0.257	2.37	0.541	0.463	0.249	A生産地
648	22-1402	SI202 覆土	壺	7-11	0.352	0.270	4.10	0.442	0.329	0.200	五所川原
653	22-1403	遺構外 (I G-R-105) I層	壺	25-37	0.347	0.272	4.08	0.421	0.316	0.198	五所川原
668	22-1404	SI102SD01 (EISD109) 覆土+遺構外 II層	甕	3-14	0.354	0.390	3.76	0.395	0.465	0.246	不明
687	22-1405	遺構外 (I F-105) I層	壺	26-8	0.299	0.268	3.57	0.385	0.331	0.180	五所川原
689	22-1406	遺構外 (I G-105) I層	壺	26-9	0.383	0.402	3.38	0.492	0.438	0.310	不明
692	22-1407	遺構外 (I H-103) I層	壺	26-26	0.276	0.331	3.07	0.377	0.366	0.200	五所川原
696	22-1408	遺構外 (I H-107) I層	壺	25-31	0.305	0.324	3.41	0.359	0.362	0.198	五所川原
698	22-1409	遺構外 (I I-103) I層	甕	26-21	0.341	0.447	3.40	0.469	0.486	0.286	不明
700	22-1410	遺構外 (I I-105) I層	壺	25-32	0.342	0.264	4.09	0.435	0.337	0.206	五所川原
703	22-1411	遺構外 (I J-105) II層	坏	25-33	0.306	0.283	4.12	0.371	0.329	0.168	五所川原
709	22-1412	遺構外 (I K-110) I層	壺	26-15	0.315	0.327	3.18	0.390	0.396	0.210	五所川原
713	22-1413	遺構外 (I L-110) I層	壺	26-13	0.469	0.179	1.45	0.561	0.509	0.350	搬入品
714	22-1414	遺構外 (I M-105) II層	坏	25-34	0.351	0.246	4.22	0.427	0.311	0.149	五所川原
730	22-1415	遺構外 (I N-107) II層	壺	26-2	0.378	0.333	3.15	0.462	0.433	0.244	五所川原
733	22-1416	遺構外 (I N-108) II層	壺	25-36	0.317	0.323	3.62	0.401	0.389	0.206	五所川原
745	22-1417	遺構外 (I O-109) I層	壺	25-30	0.311	0.380	3.30	0.368	0.409	0.241	五所川原
747	22-1418	遺構外 (I O-110) I層	壺	25-40	0.382	0.349	3.13	0.467	0.432	0.255	五所川原
776	22-1419	遺構外 (I Q-118) II層	坏	25-35	0.462	0.415	3.65	0.427	0.451	0.235	不明

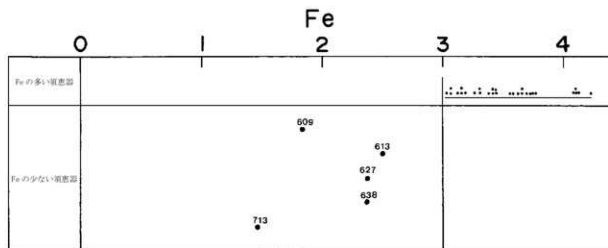


図1 Fe因子の比較

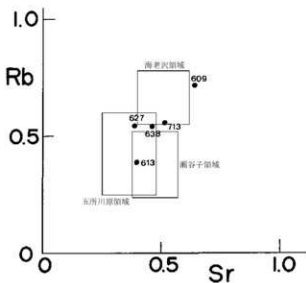
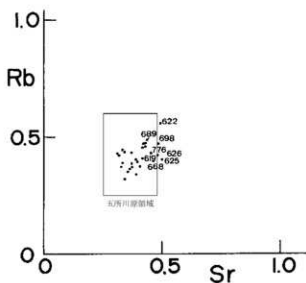
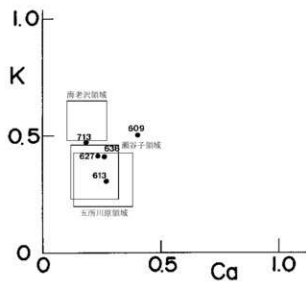
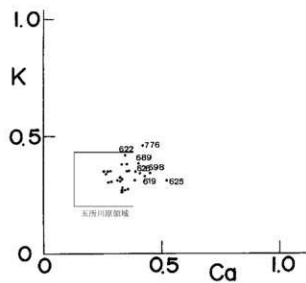


図2 Feの多い須恵器の兩分布図

図3 Feの少ない須恵器の兩分布図

第4節 赤坂遺跡出土の炭化植物種子

札幌国際大学博物館 椿坂 恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡名	: 赤坂遺跡(青森県遺跡番号204008)
遺跡の所在地	: 黒石市大字上十川字長谷澤一番町32-1外
発掘調査期間	: 平成20年6月17日～同年11月14日
調査面積	: 1,872㎡
調査担当機関	: 青森県埋蔵文化財調査センター
資料採取者	: 伊藤由美子ほか
遺跡の地形と立地	: 黒石市の中心部から北東へ約5km、上十川地区の北域に位置し、高釜川と小河川(長谷澤)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面に立地する。標高は約90～130mと高低差があり、微地形で見ると緩斜面のエリア(標高90m前後)と急斜面のエリア(約100～130m)とに分かれる。
遺構の年代	: 縄文時代、平安時代、近世の各時代に跨がる複合遺跡。 出土遺構、出土遺物の詳細については本文を参照されたい。

2. 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、平安時代の竪穴建物跡(S1)、土坑(SK)、溝跡(SD)からと時期不明(平安?近世?)の柱穴(Pit)から採取した土壌をフローテーション法で処理し、その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。これらの資料を実体顕微鏡で観察し撮影を行なった。検出された植物種子の出土表は表1に示しておく。

3. 各遺構から検出された植物種子

イネ *Oryza sativa* L. (図版1-1a, 2a, 3a: 竪穴建物跡(S1001)炭・灰範囲から出土)

竪穴建物跡(S1001, 005)、溝跡(SD013)、竪穴遺構(SH002(旧SK018)Pit01)からと柱穴(Pit0079)から出土。果実は長楕円形で腹面(写真1aの下部)に胚がある。左右の側面にやや隆起した縦の稜線がある。出土したイネは精白の状態であった。その中には短粒(写真2a)や未熟(写真3a)のものが少量混在していた。

計測値は1a: L4.60×W2.60×T2.00(mm)、2a: L3.60×W2.60×T1.90(mm)、3a: L4.10×W1.90×T0.90(mm)

オオムギ *Hordeum vulgare* L. (図版1-4a, 5a: 竪穴建物跡(S1001)炭・灰範囲から出土)

竪穴建物跡(S1001, 005)からと柱穴(Pit0079)から出土。果実は線状長楕円形。腹面には縦溝があり、背面はほぼ平らで基部に楕円形の胚がある。出土種子は4aに示したように内頰、外頰の剝離痕と形態の特徴からみて皮性のオオムギと判断される(椿坂 1998)。写真5aに示したような被熱による変形のもものが大半であった。計測値は4a: L6.20×W2.80×T2.30(mm)、5a: L6.00×W3.60×T2.70(mm)

コムギ *Triticum aestivum* L. (図版1-6a, 7a: 堅穴建物跡(S1001)炭・灰範囲から出土。

8a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)からと柱穴(Pit0079)から出土。果実は短楕円形。腹面の中央には縦溝があり、背面はほぼ平らで背面の下部にはやや円形の胚がある。出土種子は被熱で変形が著しい。その中から保存状態の良いものを写真6a, 7aに示した。筆者らのいうエゾコムギの範疇に属するものと判断される(吉崎・椿坂 1990)。その他に堅穴建物跡(S1001)から穂軸が2片出土。

計測値は6a: L3.70×W2.50×T2.10(mm)、7a: L3.40×W1.95×T1.70(mm)、8a: L3.30×W2.00(mm)

アブ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版1-9a, 10a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)からと柱穴(Pit0079)から出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの長さで胚がある。その反対側の腹面には小さなヘラ型のヘソがある(椿坂 1993)。出土種子は写真10aに示す穎果(内・外穎のとれた)がほとんどであったが、中には9aに示す有ふ果(内・外穎のついた)が少量混じる。計測値は9a: L1.60×W1.45×T1.00(mm)、10a: L1.40×W1.30×T0.90(mm)

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版1-11a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土。

12a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲3から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)、堅穴遺構(SH002(旧SK018) Pit01)からと柱穴(Pit0079)出土。穎果は広楕円形。背面には果長の2/3ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはヘラ型状の小さなヘソがある(椿坂 1993)。出土種子は写真11aに示した穎果(内・外穎のとれた)状態で栽培ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabunoとして分類される。12aに示した資料はやや狭長、胚が大きく同部の膨らみが少ないタイヌビエ *Echinochloa Oryzicola* Vasingに類するものが混在していた。出土種子は被熱による変形が著しいので、定量の計測はしていない。

計測値は11a: L1.90×W1.50×T1.05(mm)、12a: L2.05×W1.35×T0.70(mm)

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版2-13a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)、堅穴遺構(SH002(旧SK018) Pit01)からと柱穴(Pit0079)から出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、その反対側の腹面にはヘラ型状のヘソがある(椿坂 1993)。出土種子は13aに示す穎果(内・外穎のとれた)の状態である。計測値はL1.60×W1.40×T1.05(mm)

アサ *Cannabis sativa* L. (図版2-14: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲3から出土)

堅穴建物跡(S1001)から出土。種子は広楕円形。左右の側面に稜がある。これらの特徴からアサと判断される。計測値はL3.90×W3.20×T1.50(mm)

シソ属 *Perilla* L. (図版2-15a: 堅穴建物跡(S1005)床直から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)からと堅穴建物跡内土坑(S1005SK01(旧SK020))から出土。種子は扁平球形で種子の表面に大きな網目状の模様がある。エゴマ *Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Haraかシソ *Perilla frutescens* Britton var. *acuta* Kudoのいずれであるかは、両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く分類は困難である。計測値はL2.10×W1.70×T1.50(mm)

マメ科 LEGUMINOSAE (図版2-16a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土。

17a: 堅穴建物跡(S1005(古段階))のカマド火床面から出土。

18a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲3から出土)

マメ科A: 堅穴建物跡(S1001)から出土。種子は長楕円形。腹面にあるヘソは剥離していたが、子葉の内面に残る幼根とその位置から(吉崎・椿坂 2001)、アズキ *Vigna angularis* Ohwi et Ohashi と判断される。計測値は $1.5.00 \times 0.72.70 \times 0.72.70$ (mm)

マメ科B: 堅穴建物跡(S1005(古段階))から出土。資料は種子長軸に対してやや中央部下に楕円形の形をしたヘソの剥離痕が観察できた。被熱による変形が著しいが、ヘソの位置と剥離痕からみて *Glycine max* (L.) Merr. と判断される。計測値は $1.7.50 \times 0.45.40 \times 0.44.60$ (mm)

マメ科C: 堅穴建物跡(S1001)から出土。種子は扁平楕円形で腹面の中心に楕円形の小さなヘソがある。このような特徴の種子にはヤブマメなどがあるが、資料の保存状態が悪いなどから分類は困難である。計測値は $1.2.20 \times 0.91.90 \times 0.11.30$ (mm)

ホタルイ属 *Scirpus* L. (図版2-19: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲2から出土)

堅穴建物跡(S1001)から出土。種子は扁平倒卵形で背面は外湾し腹面は扁平である。形態の特徴からカンガレイ、ヒメホタルイに似るがホタルイ属は形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。計測値は $1.1.90 \times 0.91.50 \times 0.85$ (mm)

エノコログサ属 *Setaria* Beauv. (図版2-20a: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土)

堅穴建物跡(S1001)からと堅穴建物跡内土坑(S1005SK01(旧SK020))から出土。種子はやや扁平楕円形。背面には楕円形の胚があり、腹面の下部に小さなヘソがある。背面、腹面に乳頭状の組織が観察できた。これらの特徴からエノコログサ *Setaria viridis* (L.) Beauv. と判断される。計測値は $1.2.15 \times 0.1.2.0 \times 0.1.05$ (mm)

ナス科 SOLANACEAE (図版2-21: 堅穴建物跡(S1005)床直から出土)

堅穴建物跡(S1005)から出土。出土種子は扁平広楕円形で種子の全面に凹凸の網状の模様がある。これらの特徴からホオズキ属 *Physalis* L. の形態に似るが、ナス科種子は形態の類似するものが多いので詳細な分類は困難である。計測値は $1.1.90 \times 0.91.40 \times 0.80$ (mm)

タデ科 POLYGONACEAE (図版2-22: 堅穴建物跡(S1001)炭範囲4から出土)

堅穴建物跡(S1001, 005)、堅穴建物跡内土坑(S1005SK01(旧SK020))からと柱穴(Pit0079)から出土。瘦果は扁平レンズ形で先が尖る。タデ科種子は形態の類似するものが多いので詳細な分類は困難である。計測値は $1.1.20 \times 0.91.30 \times 0.11.00$ (mm)

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版2-23: 堅穴建物跡内土坑(S1005SK01(旧SK020))から出土)

堅穴建物跡(S1001)、堅穴建物跡内土坑(S1005SK01(旧SK020))から酸化した状態で出土。種子は扁平球形。側面には嚙状に突出したヘソがある(写真資料の左上)。これまで扱った各時期の遺跡から検出されたアカザ属種子には、炭化されないで検出される場合が非常に多い。このような状況は、アカザ属の種子構造上発達するクチクラ層の関係で残存することが考えられる。計測値は $1.1.25 \times 0.91.15 \times 0.60$ (mm)

サンショウ属 *Zanthoxylum* L. (図版2-24: 溝跡(SD013)から出土)

溝跡(SD013)から酸化状態で出土。種子は広卵形で表面には網状の模様がある。腹面の一端から先端までは稜状でその下部に凹んだヘソがある。これらの特徴からサンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. と判断される。計測値は $1.3.60 \times W2.40$ (mm)

マタタビ属 *Actinidia* Lindl. (図版2-25: 堅穴建物跡(SI005)床直から出土)

堅穴建物跡(SI001, 005)から出土。種子は長楕円形。種皮には凹点による網目模様がある。この仲間にはマタタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim. とサルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ている。しかし粒形の特徴からはサルナシ *Actinidia arguta* Planch. であろう。計測値は $1.45 \times W1.00 \times T0.85$ (mm)

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版2-26a: 堅穴建物跡内土坑(SI005SK01(旧SK020))から出土)

堅穴建物跡内土坑(SI005SK01(旧SK020))から出土。種子は狭楕円形。背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。

計測値は $1.2.30 \times W1.20 \times T0.70$ (mm)

タラノキ属 *Aralia* L. (図版2-27: 堅穴建物跡(SI005)床直から出土)

堅穴建物跡(SI005)から出土。種子は半円形。種子の上方には二本の横溝があり、種皮は凹凸で粗面である。粒形と大きさからタラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann と判断される。

計測値は $1.60 \times W1.10 \times T0.80$ (mm)

ミズキ属 *Cornus* L. (図版2-28: 土坑(SK019)の覆土から出土)

土坑(SK019)から出土。核は偏球形で浅い縦溝があり先に穴がある。この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値は $1.3.20 \times W3.90$ (mm)

ウルシ科 (図版2-29: 堅穴建物跡(SI005)床直から出土)

堅穴建物跡(SI005)から出土。種子は横楕円形で中央がやや凹む。大きさと形態の特徴からヌルデ *Rhus javanica* L. と判断される。ヌルデは薬用、染料としてのタンニンの原料でもある。果実の白粉は酸味があり塩の代用にされていたことがあるという。計測値は $1.2.20 \times W2.50 \times T1.40$ (mm)

ブドウ科 VITIDACEAE (図版2-30a: 堅穴建物跡(SI001)炭輪圈4から出土)

堅穴建物跡(SI001)から出土。堅果は広倒卵形。背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなし稜の両側に針形の凹みがある。形態の類似した種子にヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat.、サンカクズル *Vitis flexuosa* Thunb.、エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata*、などがある。形態の特徴からヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat であろう。計測値は $1.3.40 \times W2.30 \times T1.70$ (mm)

不明種子 1 (図版2-31: 堅穴遺構(SH002(旧SK018))のPit01から出土。32: 堅穴建物跡(SI005)床直から出土)

下記の資料は手元に現生の比較資料が無いので分類できなかったものである。

写真31: 堅穴遺構(SH002(旧SK018))のPit01から出土。アオイ科の形態に似る。計測値は $1.2.00 \times W1.60$

×TL. 25(mm)。

写真32：竪穴建物跡(SI005)から出土。計測値はL. 90×W2. 10×TL. 70(mm)

その他にスモモ、クルミ、トチノキ、クリが少量出土したが、ここでは扱っていない。不明ミレットとして扱った資料はアワ、ヒエ、キビのいずれかであるが、被熱による変形と破損が著しく分類できなかったもの。また、不明2と扱った資料は保存状態が極めて悪いので分類できなかったものである。

4. 若干のコメント

今回の調査では、平安時代(西暦9世紀後半～10世紀前葉ころ)の遺構から、野生種子のタデ科、アカザ属、エノコログサ属、マメ科、ホタルイ属で畑地、野原、道端、湿地、水田などに生育する雑草種子である。木本類はサンショウ属、マタタビ属、ニワトコ属、タラノキ属、ブドウ科、ミズキ属、ウルシ科、クルミ属、トチノキ属、クリ属、スモモが出土。いずれも、集落の周辺に見られる草本と木本類である。

栽培種はイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエ属、キビ、アズキ、ダイズ、アサ、シソ属その他にナス科などが見られた。栽培植物の組成は遺跡によっては出土量の多寡はあるものの、青森県の平安時代の遺跡に一般的に見られるものである。オオムギ、コムギについては皮性のオオムギと小型コムギのセットで出土。ヒエ属については栽培型のヒエとタイヌビエ型を示す二種類が知られている(吉崎・椿坂 1998)、この遺跡からも二種類のヒエ属種子が出土している。

この数年、青森県におけるフローテーションで得られた平安時代の栽培植物の出土状況を見ると、遺跡の存在する地域や立地によっては栽培植物の量的組成に違いがあるように見える。集落によってはその耕作条件や政治的な背景などにより栽培植物の選択が行われていた可能性は十分にあるように思う。こうした問題は植物遺体を規則的に採集し詳細に検討することによって、見えてきたのである。今後も考古植物の新しい資料の増加が待たれる。

引用文献

- 椿坂恭代 1993 「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史時代と関連科学』261-281 吉崎昌一先生還暦記念論文集刊行会
- 椿坂恭代 1998 「オオムギについて」時の絆『道を辿る』245-246 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編
- 吉崎昌一・椿坂恭代 1990 「サクシユトニ川遺跡に見られる食糧獲得戦略」『北大構内の遺跡』8, 23-25 北海道大学
- 吉崎昌一・椿坂恭代 2001 「先史時代の豆類について—考古植物学の立場から」『豆類時報』No.24, 20-28 編集 財団法人 日本特産物協会 発行 財団法人 日本豆類協会
- 吉崎昌一・椿坂恭代 1998 「高屋敷館遺跡出土の平安時代の植物種子」『高屋敷館遺跡』370-384 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集 青森県教育委員会

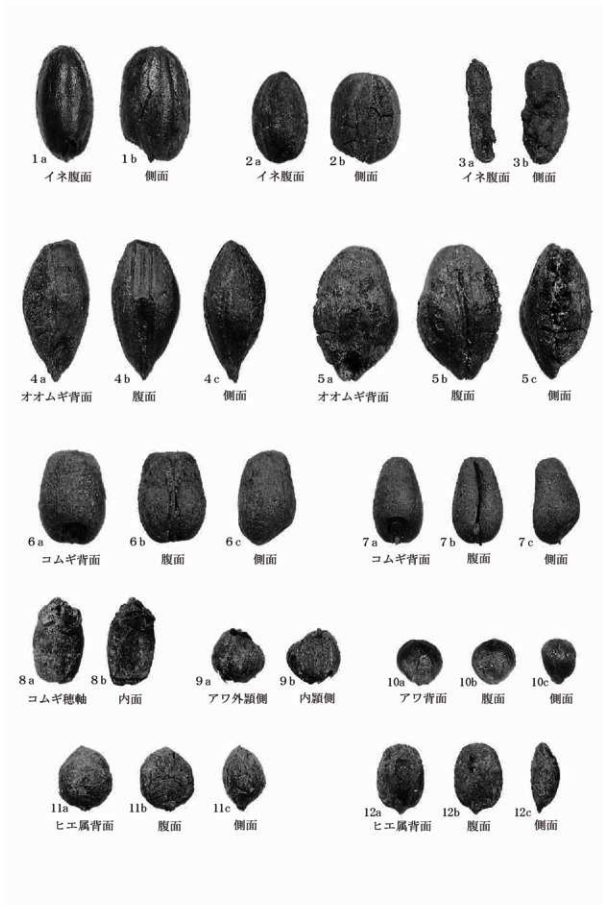


図1 赤坂遺跡出土の炭化植物種子

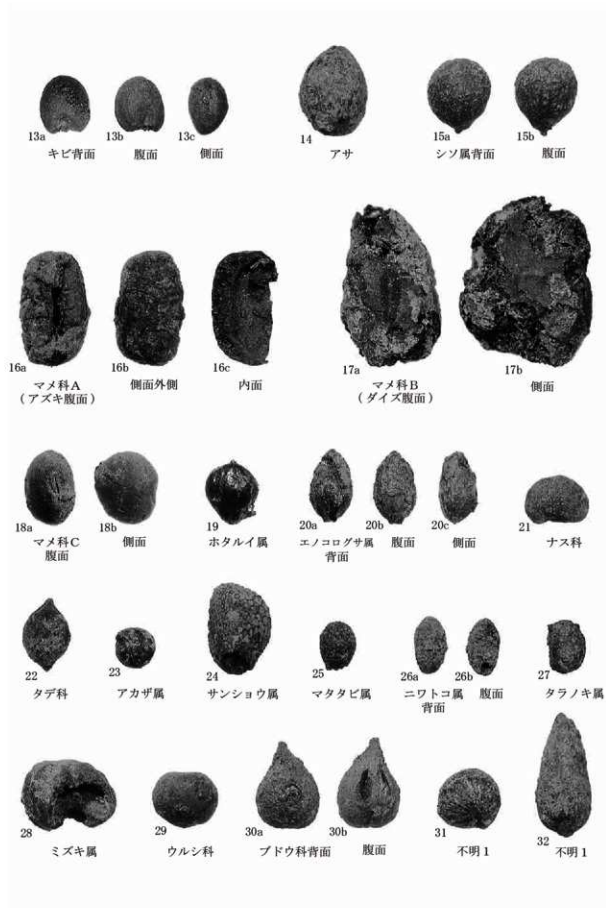


図2 赤坂遺跡出土の炭化植物種子

第5節 赤坂遺跡より出土した炭化材

吉川 純子 (古代の森研究会)

1. はじめに

赤坂遺跡は黒石市上十川地区北城の高館川と小河川に挟まれた丘陵の南西斜面に立地する。本遺跡の平安時代の竪穴建物跡等から確認された炭化材5試料の同定を行った。炭化材は剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の断面を割り、プレパラートに固定して落射顕微鏡で観察同定を行った。

2. 同定結果

表1に炭化材の同定結果を示す。また以下に木材構造の記載を行う。

ブナ属(*Fagus*): 小型の管孔が数個複合して年輪内に密に均一に分布する散孔材で、管孔の径は晩材部でやや小さくなる。道管には単一穿孔と階段穿孔があり、放射組織は単列、3-4列と広放射組織があり、異性である。

カエデ属(*Acer*): 中型の管孔がほぼ単独でまばらに年輪内に分布する散孔材。放射組織は同性で1-4細胞幅で高さは0.5mmくらいである。道管壁には密ならせん肥厚があり、穿孔板は単一である。

3. 考察

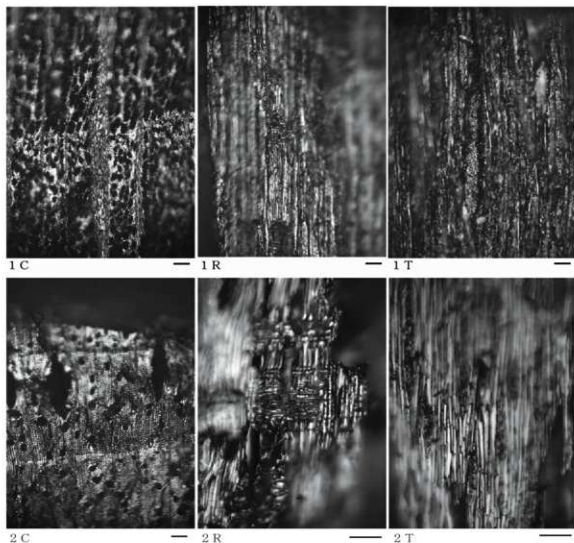
本遺跡で出土した炭化材はブナ属とカエデ属の2種類であった。SI101ではブナ属は甕から出土していることから燃料材として利用されたと考えられる。SI001では床面からカエデ属が出土しているため建築材あるいは加工品であった可能性が考えられる。ブナ属は12世紀以降は器材としての利用が一般的であるが、東北地方の8-11世紀にはブナ属が建築材や杭としても比較的多く利用され(山田1993)、SX102で出土したブナ属はこうした加工材の可能性も考えられる。

引用文献

- 山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別第1号、植生史研究会、1-244。

表1 赤坂遺跡より出土した炭化材

遺構名	層位	時期	番号	樹種	
SI101	竈8層	C 1	平安時代	木1-4	ブナ属
SI001	炭層	IS-120	平安時代	木1-14	カエデ属
SI001	床面	IS-120	平安時代	木1-16	カエデ属
SX102	22層		平安時代	木1-20A	ブナ属
SX102	22層		平安時代	木1-20B	ブナ属



図版 1 赤坂遺跡より出土した炭化材の顕微鏡写真

1. プナ属 (木 1-4) 2. カエデ属 (木 1-14)

C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面、スケールは 0.01 mm

第6節 赤坂遺跡出土炭化材の樹種同定

小林 克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

赤坂遺跡は黒石市大字上十川に所在し、津軽平野縁辺部にある長谷沢右岸段丘上に立地する、平安時代を中心とした遺跡である。赤坂遺跡では竪穴建物跡や竪穴建物跡外周溝が検出され、遺構内より炭化材が出土した。ここではこれらの炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、竪穴建物跡であるAKS-SI101で2点、AKS-SI101内SK01で1点、AKS-SI202新で5点、AKS-SI203で10点、竪穴建物跡外周溝であるAKS-SD109で1点の計19点の出土炭化材である。遺構の時期は、いずれも平安時代と考えられている。各試料について、樹種同定を行う前に木取りと残存半径、残存年輪数の記録を行った。残存半径は、試料で残存している半径を直接計測し、残存年輪数については残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)についてカミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台に両面テープで貼り付けた。その後イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行った。なお、同定試料の残りは青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のオニグルミとアサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、ケヤキ、サクラ属、カエデ属の8分類群が産出した。クリが最も多く7点で、カエデ属が3点、アサダとブナ属、サクラ属が各2点、オニグルミと

表1 赤坂遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種 / 遺構	AKS-SI101	AKS-SI101内SK01	AKS-SI202新	AKS-SI203	AKS-SD109	合計
オニグルミ				1		1
アサダ				2		2
クリ	1		2	4		7
ブナ属	1	1				2
コナラ属コナラ節				1		1
ケヤキ				1		1
サクラ属			1		1	2
カエデ属			2	1		3
合計	2	1	5	10	1	19

コナラ節、ケヤキが各1点産出した。残存年輪数の計測については、AKS-SI101ではSK01の試料No.3のみが計測でき、残存半径1.5cm内に6年輪みられた。AKS-SI202新では、試料No.6で残存半径3.4cm内に14年輪がみられるなど、クリやサクラ属の年輪幅は2～4mm程度であるが、カエデ属は試料No.8で残存半径1.5cm内に29年輪がみられ、年輪幅が狭かった。AKS-SI203では、試料No.14のクリで残存半径1.7cm内に4年輪がみられるなど年輪幅が広い樹種もみられたが、概ね年輪幅が1～4mmに収まる試料が多かった。AKS-SD109ではサクラ属1点が産出し、残存半径1.0cm内に12年輪がみられた。またこの試料の端部には加工痕がみられた。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

付表1 赤坂遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	出土遺構	遺物 No.	樹種	木取り	残存 半径 (cm)	残存 年輪数	備考
1	AKS-SI101	炭1	ブナ属	割れ	-	-	
2	AKS-SI101	炭2	クリ	割れ	-	-	
3	AKS-SI101	炭1	ブナ属	割れ	1.5	6	
4	AKS-SI202新	炭2	クリ	割れ	1.4	4	
5	AKS-SI202新	炭3	クリ	みかん割り?	1.9	5	
6	AKS-SI202新	炭4	サクラ属	道椋目?	3.4	14	板状?
7	AKS-SI202新	炭5	カエデ属	半割	1.8	19	
8	AKS-SI202新	炭6	カエデ属	半割	1.5	29	
9	AKS-SI203	炭1	カエデ属	割れ	1.4	5	
10	AKS-SI203	炭3	アサダ	割れ	1.6	9	
11	AKS-SI203	炭5	コナラ属コナラ節	椋目	2.5	17	板状?
12	AKS-SI203	炭6	クリ	半割?	1.5	4	
13	AKS-SI203	炭7	クリ	割れ	0.9	2	
14	AKS-SI203	炭8	クリ	みかん割り?	1.7	4	
15	AKS-SI203	炭9	アサダ	割れ	1.2	7	
16	AKS-SI203	炭11	ケヤキ	割れ	3.1	11	
17	AKS-SI203	炭12	クリ	割れ	1.5	5	
18	AKS-SI203	炭13	オニグルミ	割れ	1.5	6	
19	AKS-SD109	炭3	サクラ属	芯持丸木	1.0	12	樹皮付 直径2cm 片端に加工痕

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に各樹種の走査型電子顕微鏡写真とサクラ属端部加工痕の拡大写真を示す。

(1)オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino クルミ科 図版1 1a-1c (No.18)

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在し、晩材部にかけて道管は径を徐々に減じる半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅は1～3列となる。オニグルミは北海道から九州まで広く分布し、河岸や湿潤な平地の肥沃なところに生育する落葉高木の広葉樹である。材の堅さや重さは中庸だが、切削等の加工は容易である。

(2)アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版1 2a-2c (No.10)

中型の道管が単独ないし2～7個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅は1～4列となる。アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(3)クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (No.4)・図版3 9a (No.14)

年輪の始めに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(4)ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2 4a-4c (No.3)

中型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。年輪の終わりで道管が径を減じる傾向がみられる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅は大きなものでは10列以上になる。ブナ属には

ブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

(5)コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 5a-5c (No.11)

年輪の始めに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材はやや重くて強靱であり、切削加工はやや難しい。

(6)ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版2 6a-6c (No.16)

年輪の始めに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた小型の道管が多数複合して接線～斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1～8列となる。放射組織の上下端には菱形の結晶がみられる。ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(7)サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 図版3 7a-7c・10 (No.19)

中型の道管が単独または2～5個放射方向または斜めに複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～4列となる。広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウミズサクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とした。

(8)カエデ属 *Acer* カエデ科 図版3 8a-8c (No.9)

中型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや疎に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、単列のものと4～6列程度のものがみられる。カエデ属は、10列以上の放射組織を持つチドリノキ以外は種までの同定が出来ない。そのため本試料はチドリノキ以外のカエデ属と考えられる。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

4. 考察

竪穴建物跡の中で10点と最も産出数の多かったAKS-SI203ではクリが4点と比較的多く見られたが、アサダが2点、オニグルミとコナラ節、ケヤキ、カエデ属が各1点産出し、樹種数も6分類群が産出した。木取りでは試料No.11のコナラ節が榎目の板状?であり、試料No.12のクリは半割?、試料No.14のクリはみかん割り?であった。次に5点と産出数が多かったAKS-SI202新では、クリとカエデ属が各2点、サクラ属が1点産出した。木取りでは試料No.5のクリがみかん割り?で試料No.6のサクラ属が追証目?、試料No.7と8のカエデ属がいずれも半割であった。AKS-SI101では建物跡内の土坑も含めてブナ属が2点、クリが1点産出した。試料はいずれも破片状で木取りなどの形状確認が行えなかった。

竪穴建物跡から出土した炭化材の用途は、建築材や燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、カマド跡付近で出土した炭化材はみられず、出土位置から判断して、いずれも建築材であった可能性が高い。今回産出したアサダとクリ、ブナ属、コナラ属コナラ節、ケヤキ、サクラ属、カエデ属は重硬な材で、その中でもブナ属とケヤキ、サクラ属は加工性も良い樹種である。重硬な樹種以外では、重

さや硬さが中庸なオニグルミがAKS-SI203で1点みられたのみであった。赤坂遺跡の平安時代の堅穴建物跡では、建築材に重硬な樹種を多く利用していた可能性がある。板状の可能性がある炭化材の樹種はAKS-SI202新出土の炭化材がサクラ属、AKS-SI203出土の炭化材がコナラ節で、特別な傾向はみられなかった。

赤坂遺跡の所在する津軽平野では、平安時代の堅穴住居跡出土炭化材の樹種同定が数例行われている。北津軽郡鶴田町の稲元遺跡Ⅱと稲元遺跡Ⅲでは平安時代の焼失住居跡出土の炭化材の樹種同定が行われ、稲元遺跡ⅡのSI-03ではシオジ節が最も多く産出し、オニグルミとサクラ属もみられた(小林, 2009)。また稲元遺跡ⅢのSI-16ではクリやスギが多くみられ、SI-17では枝状のヤナギ属やブナ属などがみられた(小林, 2010)。

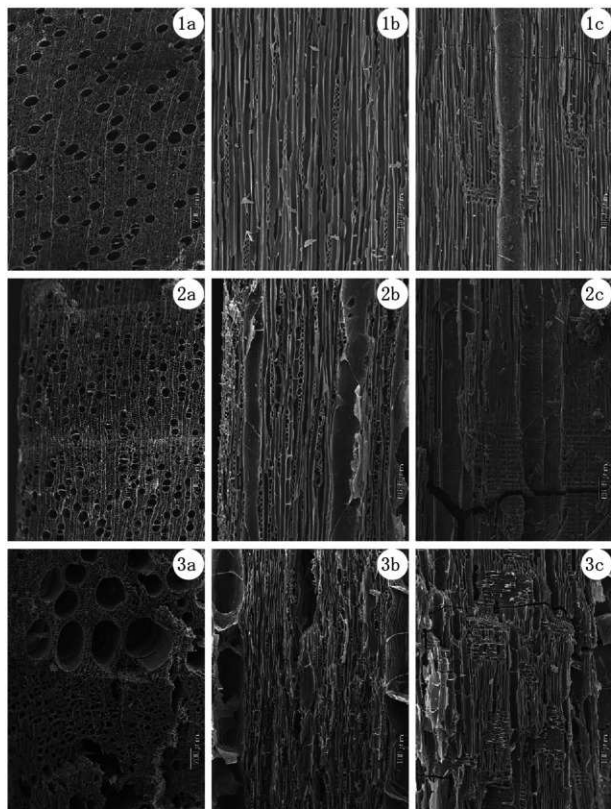
さらに、青森市浪岡の中平遺跡Ⅱで平安時代の焼失住居跡9棟から出土した炭化材の樹種同定が行われた結果、8号SI01のようにスギやアスナロ、針葉樹が49点中28点を占める針葉樹材を多く利用する住居跡がある一方で、2号SI05のように76点中クリが41点、コナラ節とモクレン属が各7点、サクラ属とハリギリが各5点産出するなど広葉樹が多くて針葉樹はスギが2点のみという住居跡もあり、異なる傾向を示す住居跡がみられた(小林・藤根, 2009)。また、中平遺跡Ⅱに近接する寺屋敷平遺跡では、平安時代の堅穴住居跡であるSI-01で10点の炭化材の樹種同定が行われた結果、スギが8点、ケヤキとイネ科の植物が各1点産出し、針葉樹が多く産出した(藤根・鈴木, 2008)。

赤坂遺跡では、以上の事例とは異なり、堅穴建物跡出土の炭化材に針葉樹は1点もみられず、分析点数の多いAKS-SI203ではクリが比較的多くみられた。1棟あたりの樹種同定数が少ないため確実ではないが、赤坂遺跡では針葉樹を建築材として利用していなかった可能性が考えられる。

堅穴建物跡外周溝であるAKS-SD109からは、サクラ属が1点産出した。試料の木取りは芯持丸木で、樹皮が確認できた。試料の片端は斜めに切断されており、炭化した加工木などの可能性がある。あるいは、直径が2cmの芯持丸木なので、木製品の一部である可能性も考えられる。いずれにしてもサクラ属は、前述のとおり重硬だが加工性の良い材質を持つため、形状と材質から選択的に利用されていたと考えられる。棒状のサクラ属の出土事例としては、青森市安田に所在する近野遺跡Ⅸで平安時代と考えられる谷の9層から出土したサクラ属の棒状木製品がある(古代の森研究舎ほか, 2006)。幅が約1.5cmであり、赤坂遺跡の例に近いが、形状は赤坂遺跡の例とは異なり、断面が長方形である。

引用文献

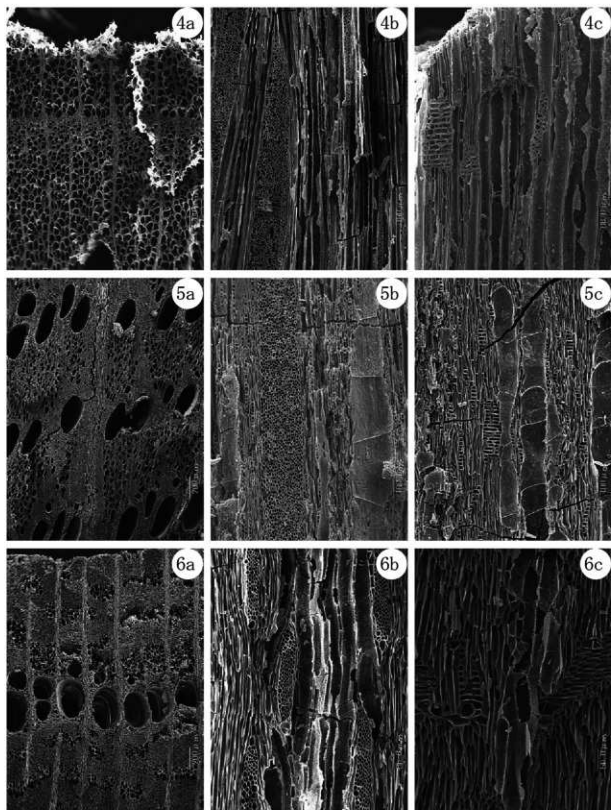
- 藤根 久・鈴木 茂(2008) 寺屋敷平遺跡の炭化材の樹種同定および炭化植物遺体同定。青森県埋蔵文化財調査センター編「寺屋敷平遺跡」: 71-73, 青森県教育委員会。
- 小林克也(2009) 樹種同定。青森県埋蔵文化財調査センター編「稲元遺跡Ⅱ」: 109-112, 青森県教育委員会。
- 小林克也(2010) 炭化材の樹種同定。青森県埋蔵文化財調査センター編「稲元遺跡Ⅲ」: 71-81, 青森県教育委員会。
- 小林克也・藤根 久(2010) 炭化材の樹種同定。青森県埋蔵文化財調査センター編「中平遺跡Ⅱ」: 236-251, 青森県教育委員会。
- 古代の森研究舎・能城修一・鈴木三男・小川とみ(2006) 木材の樹種同定。青森県埋蔵文化財調査センター編「近野遺跡Ⅸ」: 278-296, 青森県教育委員会。



図版 1 赤坂遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

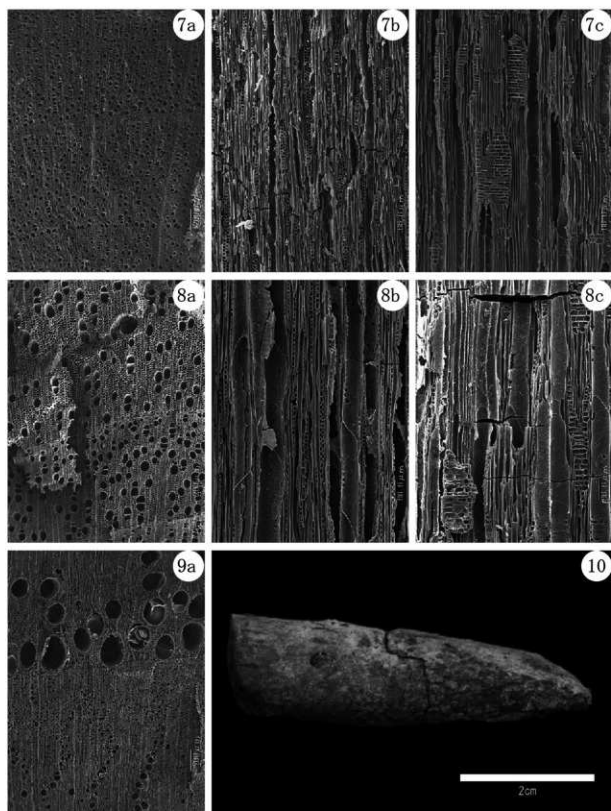
1a-1c. オニグルミ (No.18) 2a-2c. アサダ (No.10) 3a-3c. クリ (No.4)

a : 横断面 ・ b : 接線断面 ・ c : 放射断面



図版2 赤坂遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

4a-4c. ブナ属 (No. 3) 5a-5c. コナラ属コナラ節 (No. 11) 6a-6c. ケヤキ (No. 16)
a : 横断面 ・ b : 接線断面 ・ c : 放射断面



図版3 赤坂遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)・サクラ属端部加工痕拡大写真

7a-7c, サクラ属(No.19) 8a-8c, カエデ属(No.9) 9a, クリ(No.14) 10, サクラ属端部加工痕拡大写真(No.19)
 a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面

第7節 赤坂遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂・米田 恭子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

黒石市上十川に所在する赤坂遺跡は縄文時代、平安時代、近世の各時代に跨る複合遺跡である。この赤坂遺跡において行われた発掘調査で、谷部等より土壌試料が採取された。この土壌試料について、遺跡周辺のイネ科植生を検討する目的でプラント・オパール分析を行った。

2. 試料と分析方法

試料は、谷部より採取された19試料(試料番号1～23)と溝部より採取された7試料(試料番号①～⑦)の総計26試料である。各試料の土相について以下に簡単に記すが、谷部の土層断面については花粉分析の節を参照して頂きたい。

谷部の試料1(3層)は黒褐色の砂質シルト、試料2(4層)は黒褐色の砂質粘土、試料3(5層)は黒褐色の砂質粘土、試料4(8層)は黒褐色の砂質粘土、試料5(9層)は暗褐色の砂質粘土である。試料6(11層)は黒褐色粘土、試料7(12層)は暗褐色粘土、試料8(14層)は黒褐色の粘土、試料9(17層)も黒褐色の粘土、試料10, 11, 12(18層)も黒褐色粘土、試料14, 15, 17(19層)も黒褐色の粘土である。試料18(26層)は黒色の粘土質シルト、試料21(27層)は黒褐色の砂質粘土、試料23(28層)は黒褐色の粘土である。時期について、出土遺物等から14層, 17層, 18層が古代以降の生活面層、26層, 27層が縄文時代中期～後期の生活面相当層と考えられている。

溝部の試料①(SD018, II a)は黒褐色の粘土、試料②(SD018, II b)も黒褐色の粘土で、やや団粒状を呈している。試料③(SD018とSD019の間, III)は砂礫混じりの黒褐色粘土である。試料④(SD019, II a)は黒褐色の粘土、試料⑤(SD019, II b)は黒褐色粘土で、やや団粒状を呈している。試料⑥(SD018とSD019の間, II a)は黒褐色の粘土、試料⑦(SD018とSD019の間, II b)は黒褐色粘土で、やや団粒状を呈している。時期については古代以降と考えられている。これら26試料について、以下に示した手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが400個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表1)、それらの分布を図1(谷部)、図2(溝部)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

表1 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタクシ科 (個/g)	サヤヌカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	不明 (個/g)
1	7,200	0	5,400	179,800	1,800	0	0	0	9,900	16,300	9,000
2	6,600	0	3,800	239,300	900	0	1,900	0	14,100	10,400	9,400
3	0	0	0	127,200	0	0	0	0	1,900	900	900
4	9,000	0	1,000	226,000	1,000	1,000	0	2,000	25,900	21,900	19,900
5	11,400	0	6,200	375,100	0	0	1,000	0	39,300	18,600	8,300
6	11,900	0	3,900	341,900	0	0	0	0	15,900	12,900	11,900
7	8,700	0	4,400	598,300	0	0	1,100	0	22,900	25,100	9,400
8	17,100	2,300	3,400	296,100	1,100	0	4,300	0	10,200	10,200	3,400
9	15,300	1,000	2,000	438,500	0	0	2,000	0	5,100	8,200	3,100
10	8,200	1,200	4,700	220,000	1,200	0	0	0	3,500	5,900	7,100
11	20,400	2,300	5,700	454,700	1,100	0	1,100	0	10,200	13,600	7,900
12	9,100	0	3,400	392,000	2,300	0	3,400	0	17,000	19,300	8,000
13	5,000	0	1,000	256,500	0	0	2,000	0	11,000	17,000	6,000
14	8,000	0	1,100	678,800	2,300	0	0	0	16,000	27,500	12,600
15	9,600	0	2,100	249,000	1,100	0	0	0	13,800	18,100	4,300
17	4,700	0	4,700	244,000	1,200	0	7,000	0	18,700	30,400	5,800
18	3,800	0	11,300	371,000	1,300	0	71,400	0	43,900	43,900	8,800
21	18,600	0	5,000	385,900	0	0	2,600	0	18,600	17,400	7,400
23	0	0	4,700	653,300	2,400	0	2,400	0	1,200	2,400	1,200
㊶	14,300	0	20,300	613,000	1,200	0	1,200	2,400	37,000	38,200	20,300
㊷	6,600	0	10,800	609,600	1,100	0	1,100	0	4,400	19,700	9,800
㊸	0	0	10,200	800,400	900	0	900	0	12,800	11,100	9,400
㊹	11,900	0	24,900	659,600	0	0	3,200	0	43,300	66,100	19,500
㊺	5,700	0	7,600	640,700	1,900	0	2,900	0	12,400	20,900	11,400
㊻	20,100	1,100	14,500	565,900	2,200	0	4,500	0	69,100	52,400	22,300
㊼	8,800	0	14,200	757,500	0	0	2,200	1,100	58,000	51,400	15,300

谷部試料：検鏡の結果、試料3および試料23の2試料を除く17試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数的には多くが5,000個以上を示しており、試料11では20,000個を越えており、下部の試料21においても約19,000個と多産している。また、イネの類に形成される珪酸体の破片も試料8～試料11で若干観察されている。

最も多く検出されたのはクマザサ属型で、全試料100,000個以上を示しており、試料7, 14, 23では500,000個を越えている。産出傾向としては上部に向かい減少する傾向が認められ、その後増加し、上部で再び減少している。次いでキビ族とウシクサ族が多く、多くの試料で10,000個を越えている。ネザサ節型は4,000個前後と少ないながら多くの試料で観察されている。ヨシ属も少ないながら多くの試料より検出されており、試料18では突出した出現を示している。その他、サヤヌカグサ属、シバ属などが若干得られている。

溝部試料：試料③を除く6試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数的には5,000個以上を示しており、試料①, ④, ⑥では10,000個を越えている。また、試料⑥よりイネの類に形成される珪酸体の破片が若干得られている。最も多く検出されているのは全試料500,000個以上を示しているクマザサ属型で、次いでキビ族、ウシクサ族が多く観察されている。ネザサ節型も全試料においてほぼ10,000個以上を示している。ヨシ属も少ないながら全試料より得られており、シバ属も若干検出されている。

4. イネについて

上記したように、多くの試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。ここで検出個数について示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原, 1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。これに従うと、個数的にはほぼ全層準において稲作が行われていた可能性が高いと判断される。試料は谷や溝部より採取されていることから、これらの周辺において稲作が行われていた可能性が高いと推測される。

なお、下部の試料18(26層)より約4,000個、試料21(27層)より約19,000個のイネのプラント・オパールが検出されており、これらの層準は縄文時代中期～後期の生活面相当層と考えられている。時期的にはかなり古く、その割には比較的新鮮な状態で観察されており、試料21では多産している。こうしたことから、これらの層準における稲作については時期を含めさらに検討が必要と考える。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

クマザサ属型が非常に多く検出されており、遺跡周辺丘陵部にはクマザサ属型のササ類、すなわちチシマザサやチマキザサといったササ類が多く生育していたとみられる。これらクマザサ属型のササ類は主に森林の下草の存在での生育が推測される。同一試料を用いて行った花粉分析から落葉広葉樹林の存在が推測されており、この落葉広葉樹林の下草の存在でクマザサ属型のササ類が大群落を形成していたのではないかとと思われる。

ススキやチガヤなどのウシクサ族は日のあたる開けたところでの生育が考えられ、遺跡周辺の空き地や上記落葉広葉樹林の林縁部に分布していたとみられる。また、アズマネザサなどのネザサ節型のササ類も同様の所での生育が考えられ、ウシクサ族とともに群落を形成していたと推測される。

キビ族も多く得られているが、このキビ族についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種であるのかイヌビエ・エノコログサなどの雑草類であるのか分類が難しいのが現状である。しかしながらイネと似たような産出傾向を示していることから、一部は稲作にともなう雑草類(タイヌビエなど)ではないかと思われる。

ヨシ属も多くの試料より検出されており、ヨシヤツルヨシといったヨシ属が地下水位の高いところや溝などに生育していたと推測され、谷部では26層準において一時的に大群落を形成したと推測される。

引用文献

藤原宏志(1984)プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—, 考古学ジャーナル, 227, 2-7.

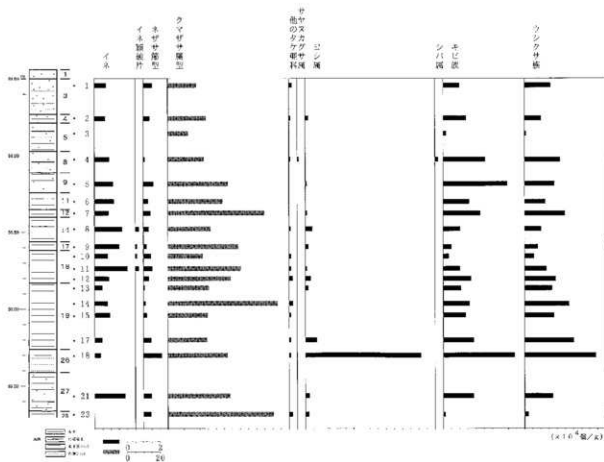


図1 谷試料のプラント・オパール分布図

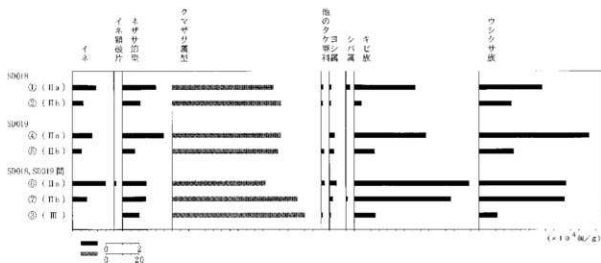
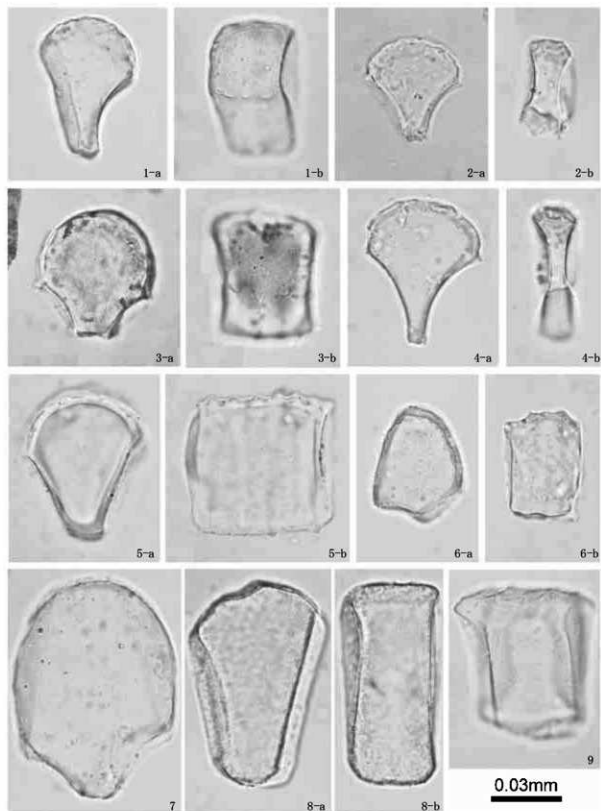


図2 溝部試料のプラント・オパール分布図



図版 赤坂遺跡のプラント・オパール

- 1～4：イネ (a：断面、b：側面) 1：試料④、2：試料⑦、3：試料9、4：試料21
 5：ネザサ節型 (a：断面、b：側面) 試料②
 6：クマザサ属型 (a：断面、b：側面) 試料15
 7：ヨシ属 (断面) 試料2
 8：ウシクサ族 (a：断面、b：側面) 試料12
 9：キビ族 (側面) 試料⑤

第8節 赤坂遺跡谷部堆積物の珪藻化石群集

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉, 1988; 安藤, 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種(陸生珪藻)も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

赤坂遺跡は、青森県黒石市大字上十川字長谷沢一番団32-1他地内に所在する縄文時代、平安時代、近世に跨る複合遺跡で、主体は平安時代の集落である。谷部の調査では、層厚約2.6mに及ぶ黒色堆積物が厚く堆積し、33層に分層された。

ここでは、これらの堆積物について、堆積環境を調べるために珪藻化石群集を調べた。なお、これらの堆積物について花粉化石とプラント・オパール化石についても検討している(花粉分析およびプラント・オパール分析を参照)。

2. 試料と処理方法

試料は、谷部において柱状で採取された土壌試料より採取した23試料(試料No.1～No.23)で、花粉分析およびプラント・オパール分析と同じ試料である(花粉分析の図1を参照)。このうち、珪藻分析は、試料No.3, 8, 17, 23の4試料を除く19試料である。各試料の特徴は以下の通りである。

試料No.1(3層)は黒褐色の砂質シルトである。この3層の直上の1層は暗褐色の砂質シルトである。試料No.2(4層)は黒褐色の砂質粘土、試料No.4(8層)は黒褐色の砂質粘土、試料No.5(9層)は暗褐色の砂質粘土である。試料No.6(11層)は黒褐色粘土、試料No.7(12層)は暗褐色粘土、試料No.9(17層)は黒褐色の粘土、試料No.10, No.12(18層)は黒褐色粘土、試料No.14, No.16(19層)は黒褐色の粘土である。試料No.18(26層)は黒色の粘土質シルト、試料No.20～No.22(27層)は黒褐色の砂質粘土である。

これら堆積物の時期は、出土遺物等から14層, 17層, 18層が古代以降の生活面層、26層, 27層が縄文時代中期～後期の生活面相当層と考えられている。

各試料は、以下に示す処理を行い、試料No.1～No.23のすべてについて珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 湿潤重量約1g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入

しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(半分以上残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g中の殻数を計算し、分布図に示した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤(1990)が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[上流性河川指標種群(J)] : 上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)] : 中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

[湖沼浮遊生指標種群(M)] : 水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢地指標種群(N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)] : 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群(P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群(Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

4. 珪藻化石の特徴と堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水種が2分類群2属2種、淡水種が77分類群23属59種4変種であった。このうち淡水種は5環境指標種群に分類された(表1)。珪藻分帯は、DI～DV帯に設定された(図1)。

以下に、環境指標種群の特徴などに基づいて、珪藻化石群集の特徴とその堆積環境について述べる。DI帯(試料No.19～22)

これらの試料では、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*や*Navicula mutica*あるいは*Pinnularia borealis*などが特徴的に出現した。なお、試料No.20において中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*などが随伴した。こうしたことから、ジメジメとした陸域環境が推定され、一時的に流水の影響を受けたと推定される。

DII帯(試料No.15～16)

これらの試料では、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*などや中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*や*Meridion circularae* var. *constrictum*などが特徴的に出現した。また、水域において出現する*Gomphonema parvulum*などの広布種が出現している。こうしたことから、河川などの水域環境が優勢で、周辺にはジメジメとした陸域を伴う環境と推定される。

DIII帯(試料No.13・14)

これらの試料では、下位珪藻DII帯と比較して出現する指標種群は類似するが、陸域指標種群の出現比率がさらに低くなる。こうしたことから、河川などの水域環境がDII帯よりも優勢であると推定される。

DIV帯(試料No.9～12)

これらの試料では、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*や*Navicula mutica*あるいは*Pinnularia borealis*などが特徴的に出現した。なお、全体的に中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*などが随伴した。なお、試料No.8は、含まれる珪藻化石が少ないが、多くの珪藻化石は陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*であった。こうしたことから、ジメジメとした陸域環境が推定され、流水の影響も受けたと推定される。

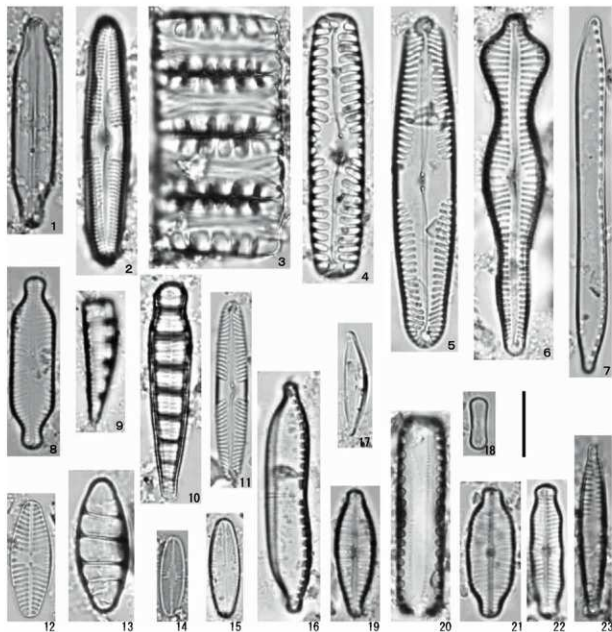
DV帯(試料No.1～7)

これらの試料では、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*や*Navicula mutica*あるいは*Pinnularia borealis*など、中～下流性河川指標種群の*Meridion circularae* var. *constrictum*などが特徴的に出現した。また、水域において出現する*Gomphonema parvulum*などの広布種が出現している。ただし、中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*は出現していない。こうしたことから、河川などの水域環境が優勢で、周辺にはジメジメとした陸域を伴う環境と推定される。なお、DIII帯やDII帯などの流水環境と比べて構成種に違いがみられたことから、水質などの違いが考えられる。

5. 堆積環境の変遷

珪藻化石の環境指標種群の出現傾向から、谷堆積物は大きくDI帯～DV帯に分帯された。下位のDI帯からDIII帯に向かってジメジメとした陸域環境から流水を伴う環境に変化した。その後、DIV帯ではジメジメとした陸域環境が優勢となり、DV帯では流水の影響を強く受ける環境へと変化した。なお、DI帯は、縄文時代中期～後期の生活面に相当し、DIV帯が古代以降の生活面層に相当するが、いずれもジメジメとした環境であった。

- 引用文献 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, 73-88.
小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27, 1-20.



図版 1 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 (bar:10 μ m)

1. *Neidium affine*(No.4) 2. *Caloneis lauta*(No.11)
 3. *Meridion circulae* var. *constrictum*(No.18) 4. *Pinnularia borealis*(No.1)
 5. *Pinnularia gibba*(No.11) 6. *Gomphonema acuminatum*(No.10)
 7. *Nitzschia parvulum*(No.14) 8. *Navicula elginensis*(No.13)
 9. *Meridion circulae* var. *constrictum*(No.18) 10. *Meridion circulae* var. *constrictum*(No.1)
 11. *Pinnularia subcapitata*(No.1) 12. *Achnanthes lanceolata*(No.10)
 13. *Diatoma hiemale* var. *quadratum*(No.1) 14. *Achnanthes marginulata*(No.2)
 15. *Navicula mutica*(No.1) 16. *Hantzschia amphioxys*(No.1)
 17. *Amphora montana*(No.12) 18. *Navicula contenta*(No.4) 19. *Gomphonema parvulum*(No.1)
 20. *Pinnularia borealis*(No.1) 21. *Navicula elginensis*(No.11)
 22. *Navicula ignota*(No.6) 23. *Synedra rumpens*(No.5)

第9節 赤坂遺跡の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

黒石市上十川に所在する赤坂遺跡は、高館川と小河川に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面に立地している。この赤坂遺跡において行われた発掘調査で、平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝跡などが検出されている。この発掘調査に際し、遺跡周辺の古環境を検討する目的で谷部より土壌試料が採取された。以下はこの土壌試料を用いて行った花粉分析結果について示す。

2. 試料と分析方法

試料は、谷部において柱状で採取された土壌試料より分割された23試料(試料1~23)である。図1に谷部の土層断面を示し、模式柱状図を花粉分布図(図2)の左側に付した。花粉分析はこの23試料のうち、11, 13, 15, 19の4試料を除く19試料について行った。各試料の土相について簡単に記すが、いずれの試料も土壌的である。試料1(3層)は黒褐色の砂質シルトである。この3層の直上の1層は暗褐色の砂質シルトである。試料2(4層)は黒褐色の砂質粘土、試料3(5層)は黒褐色の砂質粘土、試料4(8層)は黒褐色の砂質粘土、試料5(9層)は暗褐色の砂質粘土である。試料6(11層)は黒褐色粘土、試料7(12層)は暗褐色粘土、試料8(14層)は黒褐色の粘土、試料9(17層)も黒褐色の粘土、試料10, 12(18層)も黒褐色粘土、試料14, 16, 17(19層)も黒褐色の粘土である。試料18(26層)は黒色の粘土質シルト、試料20, 21, 22(27層)は黒褐色の砂質粘土、試料23(28層)は黒褐色の粘土である。時期について、出土遺物等から14層, 17層, 18層が古代以降の生活面層、26層, 27層が縄文時代中期~後期の生活面相当層と考えられている。花粉分析は上記した19試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料(湿重約5~6g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間煮沸する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分

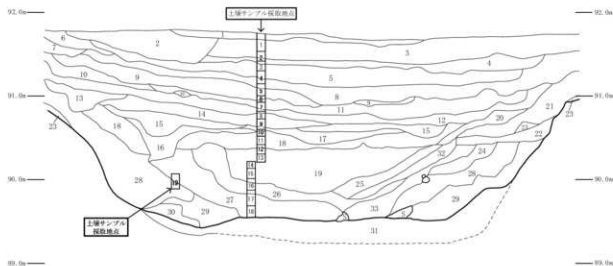


図1 谷部の断面図と試料採取位置

離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉16、草本花粉18、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計38である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、それらの分布を図2に示したが、全試料において得られた花粉化石数は少なく、分布図については参考程度にみて頂きたい。その分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表においてハイフン(-)で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。なお、マツ属(不明)について、このマツ属にはアカマツやクロマツなどの複雑管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)とハイマツやヒメコマツなどの単維管束亜属(いわゆるゴウマツ類)があるが、その区別がつかなかったものを不明としたものである。

検鏡の結果、全試料において得られた花粉化石の分類群数、個数ともに少なく、特に樹木花粉は少ない結果であった。その中には落葉広葉樹のトチノキ属が多く、試料で観察されている。その他、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などが検出されている。草本類ではヨモギ属が最も多く、20~70%の出現率を示している。次いでイネ科が多く、試料21では30%を越えている。カラマツソウ属も多くの試料で観察されており、上部試料では10~20%の出現率を示している。その他、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属以外のキク亜科(他のキク亜科)、タンポポ科亜科が多くの試料より検出されており、試料2および試料8より傷んだソバ属花粉が1個体得られている。シダ植物胞子では単条型が多くの試料で10~20%の出現率を示しており、試料7~試料10においてピークをつくるように増加・減少している。

4. 分析結果について

上記したように検出できた花粉化石数は分類群数とともにかなり少ない結果であった。多くの花粉は丈夫な外膜を持ち、水域(水成堆積環境)に落下した花粉は良好な状態で保存されることが知られているが、陸域(風成堆積)に落下した花粉は紫外線や土壌バクテリアなどによって容易に分解されてしまう。珪藻分析結果をみると陸生珪藻が多く観察されていることから、ジメジメしているもののかかなり乾いた環境であったと思われ、こうした環境下に落下した花粉の多くは分解・消失してしまったことが推測される。高い出現率を示しているヨモギ属や単条型胞子は分解・消失作用には強いことが知られており、他の多くの花粉は分解・消失してしまい、相対的にヨモギ属や単条型胞子の出現率が高くなったことが推察される。このように花粉の多くは分解・消失している可能性が高いと推測され、分布図は偏った様相を示していると思われる。

5. 古植生について

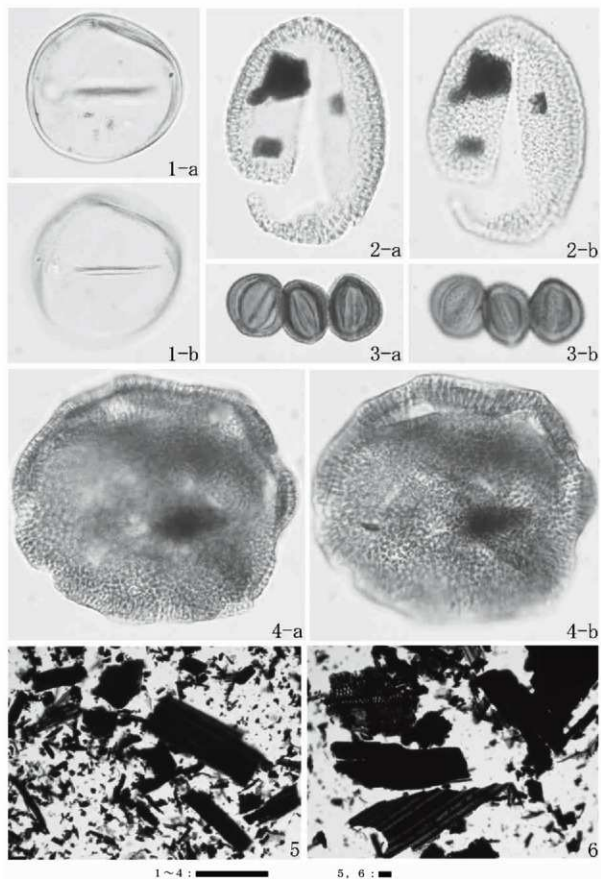
上記したように花粉化石の多くは分解・消失している可能性が高いと推察されることから古植生について詳しく言及することは難しいと考える。よって、古植生については簡単に述べるに留めたい。

分析試料の下部層は縄文時代中期～後期の生活面相当層と考えられていることから、分析試料は縄文時代中期～後期以降と推測される。花粉分析の結果、樹木花粉では針葉樹のスギ、落葉広葉樹のハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、トチノキ属などが多くの試料で検出されていることから、縄文時代中期～後期以降の遺跡周辺丘陵部ではブナ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹林やスギ林が成立していたと思われる。また、谷やその周辺にはハンノキ属、サワグルミ属-クルミ属、トチノキ属などが生育していたと推測される。この谷の土手等にはアカザ科-ヒユ科、カラマツソウ属、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科、シダ植物などの雑草類が生育していたとみられる。また、ブランド・オパール分析においてイネが多く観察されていることから、谷周辺において稲作が行われていたとみられる。さらに、古代以降の時期にはソバの栽培も行われるようになったと推測されよう。

試料8～試料10(14層, 17層, 18層)においてシダ植物胞子が増加している。これらの層準は古代以降の生活面層と考えられており、人間の活発な活動が影響している可能性が推察される。

表1 産出花粉化石一覽表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	14	16	17	18	20	21	22	23	
樺木																					
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	4	-	1	-	-	-	-	
サウグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマシラ属-アサダ属	<i>Corylus - Ostrya</i>	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	2	1	-	1	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	3	3	2	-	1	-	1	-	2	-	2	-	1	1	-	-	-	2	-	
ニレ属-ウケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノ木属	<i>Aesculus</i>	5	-	1	1	-	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	-	-	1	-	
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノ木属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-	1	2	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本																					
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	Gramineae	41	41	11	7	5	15	11	14	7	20	25	15	17	16	24	17	28	13	-	
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
タウ属	Urticaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
サナエタデ属-ウナボウカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Panicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ソバ属	<i>Polygonum</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカサ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	5	4	3	1	-	-	-	2	7	2	2	-	2	1	-	1	1	-	-	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
カナムツウ属	<i>Thalictrum</i>	24	27	21	25	11	8	4	2	3	2	6	20	8	2	10	1	2	-	-	
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アヅナ科	Cruciferae	3	1	2	3	3	2	1	4	2	2	1	-	3	1	-	-	-	-	-	
マメ科	Leguminosae	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
セリ科	Umbelliferae	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒルガオ属	<i>Calypteria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	154	115	58	62	36	70	48	33	32	22	69	48	61	38	55	79	18	15	-	
他のキク亜科	other Tubelliflorae	1	2	2	1	-	-	-	5	2	1	1	2	1	1	-	-	-	-	-	
タンポポ科	Liguliflorae	16	5	3	6	4	-	6	3	2	6	10	7	9	2	4	-	-	1	-	
シダ植物																					
ヒカゴノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ゼンマイ科	Osundaceae	1	3	2	1	-	3	4	-	-	-	3	-	3	1	2	1	-	-	-	
蕨葉型孢子	Monolete spore	45	30	17	23	17	27	32	41	37	37	28	23	35	14	16	10	26	5	14	
三葉型孢子	Trilete spore	8	1	4	2	2	14	17	1	17	1	5	2	2	1	4	1	2	-	-	
樺木花粉																					
Arboreal pollen		10	6	4	3	4	3	8	7	8	7	7	3	8	2	3	1	3	1	0	
Nonarboreal pollen		243	198	100	105	60	97	73	55	58	62	113	93	102	62	93	98	51	29	9	
Spores		54	34	23	26	19	45	53	42	54	38	36	25	37	16	22	18	31	5	14	
花粉・孢子合計	Total Pollen & Spores	307	238	127	134	83	145	134	104	130	107	156	121	147	81	118	117	85	35	14	
不明花粉																					
Unknown pollen		23	27	19	8	7	9	7	11	4	2	16	6	12	4	8	2	5	1	1	



図版 赤坂遺跡の花粉化石とプレバラーの状況 (scale bar: 0.02mm)

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1 : イネ科 PLC.SS 4949 試料8 | 4 : ヒルガオ属 PLC.SS 4951 試料10 |
| 2 : ソバ属 PLC.SS 4948 試料8 | 5 : プレバラーの状況 試料4 |
| 3 : ヨモギ属 (3葉粒) PLC.SS 4952 試料20 | 6 : プレバラーの状況 試料21 |

第7章 調査の成果と課題

第1節 遺構

ここでは、堅穴建物跡に関する分布、堅穴部と外周溝にみられる傾向及び堅穴建物跡の消長等について簡単な検討を行う。

※以下では、グリッドⅡA-124付近に位置する埋没谷を境に、北西側を「エリア1」、南東側を「エリア2」と呼称する。

1. 堅穴建物跡の分布

調査区のほぼ全域に分布し、エリア1に16棟、エリア2に1棟の計17棟が検出されている。

エリア1における16棟の堅穴建物跡は、掘立柱建物跡(柱穴・小穴)を取り囲むように分布しており、「堅穴域」と「掘立柱域」といった、構造物の種類による空間の使い分けが意図的になされている状況がうかがわれる。

一方、エリア2は調査区が狭いために、検出された堅穴建物跡はわずか1棟(SI003)であるが、この少なさは、エリア2が分厚く削平(Ⅱ～Ⅳ層が欠如)されていることも要因の一つと考えられる。ただし、エリア2の北東に位置する第3～4次調査区(今後報告予定)からは、まとまった数の堅穴建物跡が検出されていることから、このエリア2には本来、さらに1～2棟ほどの(削平により消滅した)堅穴建物跡が存在していた可能性が高い。

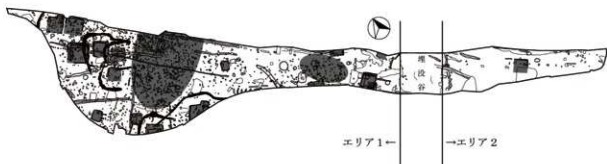


図1 堅穴建物域と掘立柱建物域

2. 堅穴建物跡堅穴部にみられる傾向

堅穴建物跡の堅穴部だけに着色してそれらの分布状況を俯瞰すると、エリア1の16棟は3つのブロックに分かれることに気づく。

1つのブロックは、グリッドラインI K以北、109以西の範囲で、ここにはSI201・SI202・SI204・SI205・SI207・SI208の6棟の堅穴建物跡が集中し、もう1つのブロックは、グリッドラインI K以南、114以西の範囲で、SI101・SI102・SI103・SI104・SI203の5棟の堅穴建物跡が弧を描くように並んでいる。また、グリッドライン117～122の範囲には、SI001・SI002・SI004・SI005・SI008の5棟

の堅穴建物跡が菱形を描くような位置関係にある。

以下では、これら3つのブロックをA領域・B領域・C領域と呼び、各領域毎の特徴を見ていく。

【堅穴部の軸方向】

16棟全てが概ね一致し、極端違いをみせるものはない。

【堅穴部の位置関係】

A領域の堅穴部は、6棟が北西から南東に階段状に連なるように分布し、B領域では5棟が西から東にやや距離を保って弧状に並ぶ。また、C領域では、5棟が菱形を描くような位置関係にある(SI001は、SI002の構築場所をほぼ踏襲するように重複している)。

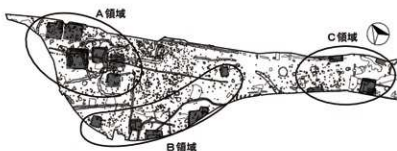


図2 A・B・Cの各領域

A領域	SI201・SI204 SI202・SI205・SI207 SI208	C領域	SI004・SI008 SI005・SI001 SI002
B領域	SI203・SI101・SI102・SI103・SI104		

【堅穴部間の距離】

A領域では堅穴部間の距離がいずれも近く、密集するような位置関係を示す。一方、B・C領域では、堅穴部間の距離に適度な余裕があり、ややまばらな状況を示す。

【堅穴部の重複】

C領域ではSI001とSI002が重複関係にあるが、A・Bの両領域に堅穴部の重複はみられない。

【カマドの付設方位】

A領域の6棟のうち、カマドが残存しているのは2棟(SI201・SI202)で、いずれも南東カマドである。ほか4棟(SI204・SI205・SI207・SI208)は、重複や削平のために残存していないが、本領域の堅穴建物跡は全棟において、堅穴部の主軸方向及び外周溝の開放方向に強い類似性が認められる。このことから、これら6棟のカマドは、全て南東壁に付設されていた可能性が高い。

B領域における5棟のうち、カマドは4棟にみられる。C領域に近い1棟(SI104)のみが南西カマドで、ほか3棟(SI101・SI103・SI203)は南東カマドで一致する。カマド位置が不明の1棟(SI102)は、外周溝の開放方向及び南東壁付近にカマド構築材の残骸が出土している点より、南東カマドであった可能性が高い。以上より、B領域におけるカマドの付設方位は南東壁が主と言える。

C領域では5棟のうちカマドが明確であったのは4棟である。2棟(SI002・SI004)が南東カマド、1棟(SI001)が南西カマド、もう1棟(SI005)が北カマドである。これらのことから、C領域におけるカマドの付設方位は一定していないことが分かる。

※もう1棟(SI008)は厚く削平され、カマド位置の推定は不可能。

3. 外周溝の傾向

【外周溝の有無】

A領域では、6棟のうち4棟に外周溝が伴い、B領域では5棟のうち2棟に伴う。C領域に外周溝を伴うものは存在しない。

【外周溝の重複】

外周溝を含めた、各領域内における竪穴建物跡同士の重複有無をみると、A・Bの両領域ともに重複が認められる。

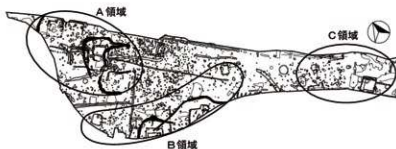


図3 外周溝の傾向

以上、3領域における各竪穴部と外周溝にみられる傾向について確認した。これらの結果をまとめると下表のようになる。

項目	A領域	B領域	C領域	備考
竪穴部の軸方向	—	—	—	全てが概ね一致
竪穴部間の距離(間隔)	□	□	□	狭い(近接)=□ 広い(適度な間隔)=□
竪穴部の重複有無	×	×	○	
カマド付設方位の一定性	○	○	×	A・B領域=南東主体 B領域=多方向
外周溝の付属有無	○	○	×	
外周溝を含めた建物同士の重複有無	○	○	△	

表で再確認すると、A・B両領域は多くの面で類似し、C領域はA・B領域とは様相が異なることが分かる。よって、C領域については、第3次調査以降に検出された竪穴建物跡と比較することが必要と考えられる。以下では、A・Bの2つの領域における11棟に焦点を絞り、検討を進める。

4. 竪穴建物跡の消長

A・B両領域における竪穴建物跡は、ある限定された期間内で存続したものと推定されるが、これら11棟の竪穴建物跡は、どのような順序で構築・廃絶されたのであろうか。これを考えるために、①遺構の重複に基づく新旧関係、②遺構間接合資料、③白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)、④放射性炭素年代(AMS測定)の各情報を整理しながら所見を述べる。

【① 遺構の重複に基づく新旧関係】

第5章で既述した、各竪穴建物跡の新旧関係は、下表の通りである。

A領域	S1201→S1204	S1205→S1204	S1202→S1205→S1207	S1208→(S208溝跡)→S1205
B領域	S1102→S1101	S1102→S1103	※ S1203とS1104は重複なし。	

表ではA領域SI202、B領域SI101・SI203の年代幅はいずれも概ね9世紀代に集中しているが、SI202の2点(SI202新-炭3、炭5：9世紀後葉～10世紀後葉)とSI101の1点(SI101-1：9世紀後葉～11世紀前葉)は、極端に新しい年代幅を示し、SI203の1点(SI203-炭2)は極端に古い年代幅を示している。

SI203の古い年代幅については、古木あるいは古材が存在したと解釈すれば特に問題ないが、SI202とSI101にみられる極端に新しい年代幅については慎重な解釈が必要となる。そこで上述の①遺構の重複に基づく新旧関係、②遺構間接合資料にみる関係、③火山灰との関係、これら3種の間関係を改めて整理すると、

SI101(廃絶) = SI202新段階(存続中) → SI202新段階(廃絶) → SI205 → B-Tm降下(10世紀中葉、ここでは930年代と仮定)

という推移が成り立つ。

このことから、SI202にみられる極端に新しい年代幅については、B-Tm降下後の10世紀後葉をまず除外することが可能である。そして、B-Tm降下の10世紀中葉とSI205の存続期間を差し引いて、年代幅を古い方へ狭めることができる。SI205は床面に直接B-Tmが堆積していることから、B-Tmの降灰期である10世紀中葉には床面中央部が露出している状況にある。SI205が20年の存続期間であったとすれば、10世紀中葉から20年を差し引き、SI205の新築時期は10世紀前葉となり、SI202新段階の廃絶時期も概ね10世紀前葉の中にほぼ収まることになる。

SI101の廃絶時期については、B-Tm降下の10世紀中葉とSI205の存続期間、そしてさらにその前段階に存在したSI202新段階の存続期間の一部を差し引いて、年代幅をより古い方へと縮めることが可能となる。SI202新段階の存続期間が20年であったとし、新段階成立から約10年後にSI101が廃絶したと想定すれば、SI101の廃絶時期は概ね9世紀末～10世紀初頭となる。

次に、SI203について考えたい。SI203は重複関係が無いため、炭素年代を用いて他の竪穴建物跡との相対的な前後関係を推定する。

SI203は、極端に古い年代幅を示す1点を除き、3点とも近似した時間幅を示す。これとよく類似した年代幅を示すのがSI101の古段階に伴う3点(SI101-炭1、炭2、SI101SK01-炭1)である。

SI203は小規模な竪穴建物跡であり、他との巨視的な比較ではSI101とよく類似し、両竪穴建物跡の床面内寸は同一と言えるほど一致している。この点を勘案して炭素年代を解釈すれば、SI203新段階=SI101古段階という大まかな並行関係を想定できる。ただし、これはあくまでも100年程の時間内での並行関係であり、両竪穴建物跡の年代真値はこの100年の時間内で前後関係にあっても構わない。

SI203は火災に遭っていることから、(建て直しによる)後続建物が存在する可能性が高く、さらに8世紀後葉以前の年代値(SI203-炭2)を1つ有すことから、SI203は古木あるいは古材を所有する、遺跡内でも古手に属す竪穴建物と言える。これらの諸事項を総合させ、SI101古段階をSI203新段階の後続建物として捉え、SI203新段階→SI101古段階という前後関係を想定したい。

以上、A・B両領域の竪穴建物跡群にみられる①遺構の重複に基づく新旧関係、②遺構間接合資料にみる関係、③火山灰との関係、④炭素年代にみる関係、を整理しながら所見を述べた。これらの事項を集落の推移(竪穴建物の新築～使用～廃絶～新築)という観点で模式化すると、下表のような状況が最も自然ではないかと思われる。

	9世紀中期	9世紀後葉	10世紀前期	10世紀中期
A 領域			SI201	SI204
		SI202 古 → 中 → 新 ^一 (火災)	SI205	SI207
		SI208	SD205	
B 領域		SI203 ^一 (火災)		
		SI101		
	SI102 古 → 新		SI103	

- ※ 各堅穴建物の存続期間は個々に異なるため、上表のように各堅穴建物の構築と廃絶の時期がはっきり揃うことはない。
 恣意的に存続期間の長短を決めるのは不適であることから、ここでは各堅穴建物の存続期間を一律で約20年と仮定し、プラン変更(拡張)のあるものについては1プラン毎に20年、床構築土の追加のあるものはプラス5年として、新旧の順序通り機械的に並べた。
- ※ 白頭山-古小牧火山灰(B-Tm)の降下を930年代と仮定した。
- ※ 黒い枠線のあるものは、外周溝を付属させるもの。
- ※ B領域SI104については、時間的位置を推定するための根拠が少ない上、B領域の中で唯一カマド方位が異なることから、この1棟については、本表に組み込むことができない。SI104はC領域との関わりで考えるべき存在と思われる。

5. A・B両領域における景観の推移

当初は、1～2棟の堅穴建物が建ち、その後3～4棟と増え、その後は再び1～2棟に減っていくという推移が想定される。また、外周溝の付属するものとしなないものが共存する期間を経て、外周溝は一般化し、その後再び外周溝の付属するものとしなないものが共存していた様相もうかがわれる。

改めて遺構配置図を俯瞰すると、これら両領域の堅穴建物跡群は、2～3単位の家族的な小集団が遺したもののように映り、A・Bの2つの集団による堅穴建物跡群とみることでもできそうである。

ここで併せて考えたいのは、A・B両領域を隔てるように位置するSX202土壌硬化範囲(道跡)の存在である。この道跡の形成初源は平安時代と推定され、B領域SI203とを繋ぐ硬化範囲a、B領域SI101とを繋ぐ硬化範囲b2、B領域SI103とを繋ぐ硬化範囲dの存在より、B領域の集団が主に使用したとみられるものである。換言すれば、この道跡はB領域集団の専有だった可能性もある。

B領域の集団は、この道に沿うように建物を構築していたが、調査区内で見える限り、B-Tmの降下前にはこの道跡付近から去るようである。この頃、A領域にはSI204とSI207が存在している。

このような景観推移の中で、さらに注目したいのは、SD103とSD117の2条の溝跡である。SD103溝跡は、SI101の後壁をかすめるように北東-南西に走るもので、SD117溝跡は南東-北西方向に走り、SX202土壌硬化範囲(道跡)B・C・Dのほぼ延長線上に位置している。これら2条の溝跡は丁字状を構成し、各堅穴建物跡の軸線と概ね一致することから、堅穴建物跡と関連した区画溝と考えられる。

SX202土壌硬化範囲(道跡)とSD103・SD117の2条の溝跡は、A・B両集団がある段階で形成した境界線であった可能性を想定したい。

以上、第1次・第2次調査で検出された堅穴建物跡17棟に関する分布、堅穴部と外周溝にみられる傾向及び今回報告の堅穴建物跡11棟の消長等について簡単な検討を行った。

堅穴建物跡は第3次調査以降においても数多く検出されている。個々の堅穴建物跡の建築学的構造等の検討は、第3次調査以降に検出された堅穴建物跡と併せて行いたい。

第2節 遺物

ここでは、前節で検討したA・B両領域の竪穴建物跡から出土した土器について若干触れておく。

1. 竪穴建物跡の出土土器

図は、各竪穴建物跡竪穴部の床面及びカマドからの出土土器を、前節で示した消長表に合わせて配置したものであり、全てB-Tm降下前のもので占められる。

※ A領域のSI204・SI205・SI207・SI208からの床面及びカマドからの出土遺物は無し。

これらは床面とカマドから出土した土器であるが、当然ながらこれらは各竪穴建物内で同時使用されたものとは言えず、あくまでも最終段階で残されていたものである。1棟の竪穴建物跡の存続期間や1個の土器の使用期間、伝世等の問題を想定すれば、ここに示した各竪穴建物跡の土器が必ずしも時系列で並んでいるという保証はない¹⁰⁾。この前提を踏まえ、ここでは土師器と須恵器に見いだされる大まかな傾向と今後の課題について述べる。

なお、年代については先の竪穴建物跡の消長表に示した案をそのまま転記したものであり、型式学的な検討結果等に基づくものではない。既存編年との対応関係等については今後の課題としておく。

【註】当時の器種構成や土器様相(生産～消費)を適切に表すものでもない。各竪穴建物跡間(家族的な小集団間)には、「器」に対する要求や指向性の違いもあったであろうから、この図が示すものはあくまでも赤坂遺跡に適應される状況である。

2. 土師器にみられる傾向

図を概観すると、坏系統には埴形(坏)と皿形(皿)の2形態が認められる。また、甕系統には長胴甕と小型甕の2形態がみられ、両者ともにロクロと手づくねの2種の成形で構成されている。

【坏と皿について】

本遺跡から出土した(埴形の)坏はそれなりにまとまった量があり、他の平安時代集落と同様、日常の中ではごく一般的な器種であったと考えられる。しかしながら、竪穴建物跡に確実に伴うものとなると意外に少ない。

一方、本遺跡から出土した皿は極めて少なく、まさに希少器種と言うべき存在である。本遺跡(本報告範囲)から出土した皿全体の中で良好な復元個体はわずか2点のみで、いずれも煤の付着より灯明具として使用されたと推定されるが、これら2点の良好な復元個体の両方がSI201とSI101竪穴建物跡に伴い、前巻『赤坂遺跡』図31-22掲載の皿も床面出土(SI003竪穴建物跡)の灯明皿である。希少器種が遺構覆土や遺構外からの出土ではなく、竪穴建物跡の床面に伴って出土するこの状況は、単なる偶然とは考え難い。

このことから、本遺跡において皿(灯明皿)は、竪穴建物跡廃絶時に、竪穴部に残すべき特別なもの(次の竪穴建物跡へは持ち出さないもの)で、一般的な(埴形の)坏とは扱いの異なる器種であった可能性が推測される。今後も皿形の坏についてはその出土状態や使用形態の検討等について、埴形の坏と対比するかたちで注視していく必要がある。

【長胴甕について】

長胴甕を古い順に見ていくと、SI203＝手づくね成形2点＋ロクロ成形1点、SI202新段階＝ロクロ成形3点＋ロクロ成形模倣1点、SI103＝ロクロ成形2点＋手づくね成形1点、SI201＝手づくね成形2点、という流れになっている。また、ロクロ成形主体で占められるSI202新段階の床構築土から出土している甕は、手づくね成形であることから、SI202中段階以前はSI203と同様、手づくね成形主体であったと推定される。

以上のことから長胴甕は、ロクロ成形と手づくね成形併存→ロクロ成形主体→ロクロ成形と手づくね成形併存→手づくね成形主体という変遷をたどったことが想定される。この変遷は、現時点における青森県域土器研究の中では暗黙の了解のごとく、さほど重視されていない傾向にあるが、同一器種の中における成形別の組成比については、未だ不明な点が多い。特に、ロクロ成形甕の盛衰については、その技術の流入経路や製品そのものの流通状況から読み取れる時間差や五所川原産須恵器との関わりも含めて未解明事項は少なくない。本遺跡のロクロ成形の長胴甕は、五所川原窯の開窯以降のものと思われるが、安易に五所川原産須恵器の技術系譜にあるものと即断せず、慎重に考えていきたい。

【小型甕について】

小型甕は、全般にわたってロクロ成形が存在している。このことは、小型甕は長胴甕よりも早くにロクロ成形の対象となったことを示している可能性がある。ただし、古い段階に手づくね成形の小型甕も確かに存在することから、ロクロ成形と手づくね成形併存→ロクロ成形主体(長期)、という流れが想定され、ロクロ成形の小型甕はロクロ成形の長胴甕よりも存続期間が長かった可能性もうかがわれる。ただしこの状況は、各堅穴建物跡間の「器」に対する要求・指向の違い等を反映している可能性も十分に考えられ、器種ごとの需要と供給に遺跡間で違いがあったことも想定すれば、この推移についてはより多くの事例を集め、追究する必要がある。

3. 須恵器にみられる傾向

須恵器は図で言うところの前半に少なく、後半に散見される。このことは、前半に存在していた須恵器が、後半に破損の段階を迎えたことを示している可能性がある。しかし、SI102古段階に出土している須恵器大甕の体部破片は、胎土分析の結果では産地不明とされており、五所川原製品ではない可能性があることから、製品そのものの供給量を表している状況とも捉えられる。

坏は、堅穴建物跡の消長表に組み込むことのできなかつたSI104の床面から1点出土している。SI104は堅穴建物跡の構造やカマド方位等、B領域の中でも特異なものであるが、本図に示した6棟の堅穴建物跡から須恵器杯は全くみられないのに対し、SI104の1棟に伴うことも、SI104が特異な状況にあることを暗示しているようである。なお、この坏は胎土分析の結果では「A生産地」とされ、五所川原製品ではない可能性が示唆されている。

このように坏が少ない状況は、時代性あるいは地域性、要求・指向の違い、またあるいは供給量の不足によるものであるのか、改めて考えなければならない問題と言えよう。

4. その他

竪穴建物跡竪穴部における床面出土遺物が少ない状況は、津軽地方における平安時代集落ではごく一般的な状況であるが、本遺跡の場合は他の集落と比べてもかなり少ない部類に属す。遺構覆土や遺構外(包含層)出土遺物を全て合わせても、検出遺構の数量と調査面積(掘削土量)の割りには随分少ない。

このことは、不要品廃棄の場所が調査区外の別な場所に設けられていた、或いは木器等の存在により土器類が元々少なかった、器の破損率が低かった、新築の竪穴建物跡へ家財道具一式を運び込み、旧竪穴建物跡へは遺物を残さない慣例があった等、様々な状況が想定される。

不要品廃棄の痕跡として、最も明瞭であるのが竪穴建物跡外周溝にみられる遺物出土状況である。特に、SI102竪穴建物跡外周溝付属土坑(SI102SD01SK01)やSI207竪穴建物跡左壁側外周溝(SI207SD01)にみられる遺物集中は、竪穴建物跡外周溝が不要品廃棄の場所となっていた可能性を示す。

この時期の土器は津軽地方ではかなり出揃った感があるものの、生産～流通～使用～廃棄に伴う諸様相については、不明な点が未だ多く残されている。他遺跡出土資料や既存編年との比較以前に、遺構と遺物のあり方について、まずは遺跡内で時系列整理を試みる必要があると思われる。

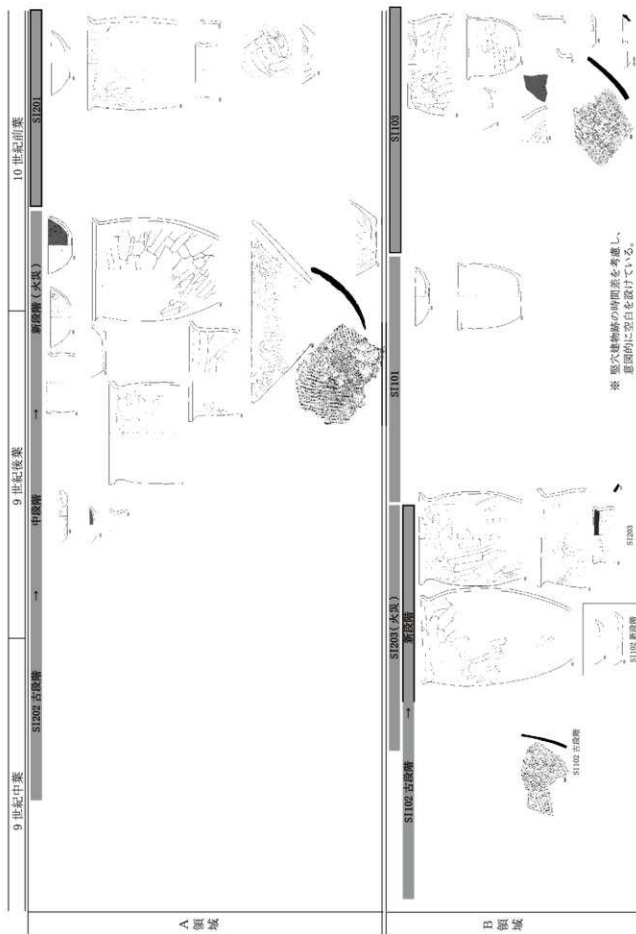


図 堅穴建物跡床面及びカマドから出土した土器

第8章 調査のまとめ

本報告は平成21年度調査区におけるグリッドライン116以西に検出された遺構と遺構内出土遺物及びグリッドライン116以東検出の柱穴・小穴群から抽出した掘立柱建物跡・塀(柵)跡、遺構外出土遺物、各種自然科学的分析に関するものである。

位置・立地・地形

赤坂遺跡は、黒石市の中心部から北東へ約4 Km、上十川地区の北域に位置し、高館川と小河川(十川水系長谷沢)に挟まれた狭長な丘陵の南西斜面(長谷沢右岸)に立地する。微地形でみると、緩斜面エリア(標高90m前後)と急斜面エリア(標高約100m～140m)とに分かれる。

※ 本報告は緩斜面エリア(長谷沢に面する崖線上部に相当)を対象とした第2次調査に関するものであり、第3次調査以降は急斜面エリアが対象。

検出遺構と出土遺物

縄文・平安・近世以降の各時代にわたり、検出遺構及び出土遺物は調査区の全域に分布する。

遺構は、竪穴建物跡・掘立柱建物跡/塀(柵)跡(柱穴・小穴)・土坑・溝跡・焼土遺構・並列溝状遺構・土壌硬化範囲・用途不明遺構が重複するかたちで多数検出された。

遺物は、縄文時代の土器(早期～晩期)・石器・土製品、弥生時代の土器、古墳時代の可能性がある土師器、平安時代の土師器・須臾器・石器・土製品・焼成粘土塊・羽口・石製品・礎・鉄製品・鉄斧、近世以降の陶磁器・土製品・銭貨・鉄製品・銅製品・石製品等がみられる。

遺跡の特徴・性格・今後の課題

赤坂遺跡(第2次調査区)の主体は、竪穴建物跡と掘立柱建物跡/塀(柵)跡(柱穴・小穴)・土坑・溝跡等で構成される平安時代の集落跡である。集落の存続期間は、数棟の竪穴建物跡に堆積する白頭山苦小牧火山灰(B-Tm・10世紀前葉～中葉降下)及び竪穴建物跡の重複関係等より、9世紀中葉～10世紀前半と考えられる。

竪穴建物跡は、掘立柱建物跡(柱穴・小穴)を取り囲むように分布しており、「竪穴城」と「掘立柱」といった、構造物の種類による空間の使い分けが意図的になされている状況がうかがわれる。また、竪穴建物跡には、外周溝を伴うものと伴わないものとの2タイプが認められ、外周溝を伴うタイプの竪穴部には明瞭な壁溝があり、外周溝を伴わないタイプの竪穴部に壁溝は明瞭でない傾向がある。また、これら両タイプの竪穴建物跡の数棟には、掘立柱建物跡や塀(柵)跡が付設されている。なお、外周溝を伴うタイプの竪穴建物跡は、急斜面エリア(第3次調査以降)には検出されていない。このことについては、時期及び地形や自然環境との関連で考えを進める必要がある。

竪穴建物跡の数棟には、拡張及び貼床の複数施工が認められ、長期使用されている可能性がうかがわれるとともに、竪穴建物跡の分布、竪穴部と外周溝にみられる傾向等の検討により、2つの集団の存在が推測された。また、竪穴建物跡の重複に基づく新旧関係、遺構間接合資料、白頭山-苦小牧火

山灰(B-Tm)、放射性炭素年代(AMS測定)等の検討により、各堅穴建物跡の構築～廃絶の時間的推移が推定された。

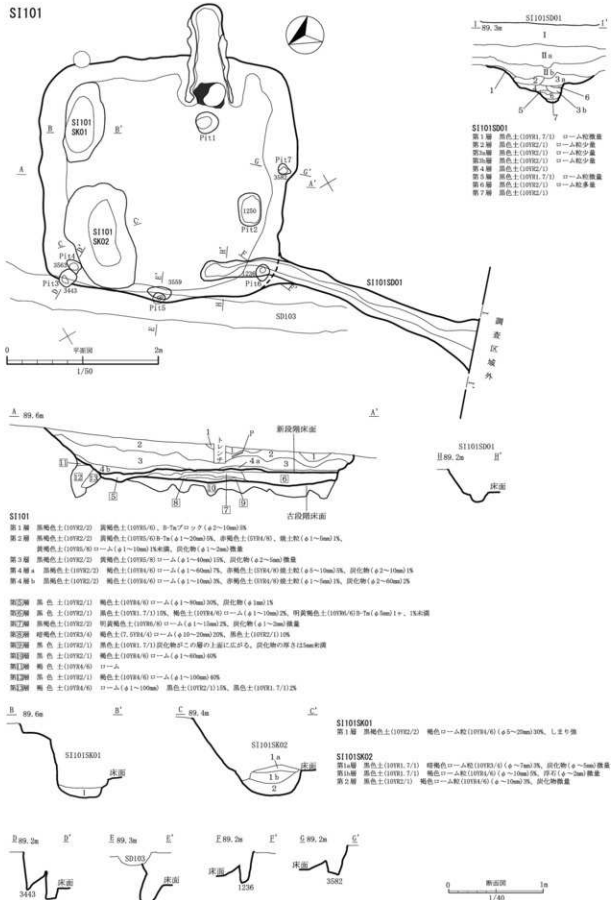
道跡と推定される土壌硬化範囲、畝跡ないし波板状遺構と推定される並列溝状遺構、そして貯水用の土坑と推定される用途不明遺構。これらの遺構は明確な時期決定遺物を伴わないことから、時間的位置の認定が困難であるものの、平安時代集落における空間利用のあり方を考える上で重要である。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1976 『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第26集
 青森県教育委員会 1978 『高館遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第40集
 青森県教育委員会 1979 『松元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第46集
 青森県教育委員会 1980 『大崎町砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第53集
 青森県埋蔵文化財調査センター 1998 『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集 青森県教育委員会
 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 『野尻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第277集 青森県教育委員会
 青森県埋蔵文化財調査センター 2010 『赤坂遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第487集 青森県教育委員会
 青森県教育庁文化財保護課 2008 『青森県遺跡詳細分布調査報告書』20 青森県埋蔵文化財調査報告書第459集 青森県教育委員会
 青森県教育庁文化財保護課 2009 『青森県遺跡詳細分布調査報告書』21 青森県埋蔵文化財調査報告書第476集 青森県教育委員会
 黒石市教育委員会 1985 『長坂1遺跡発掘調査報告書』黒石市埋蔵文化財調査報告 第3集
 黒石市教育委員会 1989 『甲里見(2)遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告 第8集
 黒石市教育委員会 1999 『長坂(1)遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告 第15集
 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡群』
 赤山容造 1982 『堅穴住居』『縄文文化の研究』8 社会・文化 雄山閣出版株式会社
 宇和 幸三 2003 『波板状凹凸面半歩形散状再論』『研究紀要 縄文の森から』新刊号 鹿児島県埋蔵文化財センター
 宇部保則 2011 『蝦夷社会の須恵器受容と地域性』『海峡と古代蝦夷』高志書院
 葛西 勲 2002 『東北北部の縄文後期(十棚Ⅰ式～Ⅱ式)土器の諸問題(1)』『研究紀要』第5号 青森大学考古学研究所
 上千真基・山田和芳・齋藤めぐみ・奥野充・安田嘉彦 2010 『男塾平島、ノノ目西・ノノ目東調査地層植物の年輪構造と白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代』『地質学雑誌』第116巻 第7号
 上十川地区振興協議会まちづくり推進委員会 2008 『上十川の歴史と文化』
 木下良・坂詰秀一編 1994 『季刊考古学』第46号 特集 古代の道と考古学
 木村 高 2000 『津軽地方における平安時代の住居跡一付属する掘立柱建物と外周溝の機能について』『月刊 考古学ジャーナル』462
 鈴木克彦 1982 『風見堂コレクション』: 岩俣, 亀型土製品, 土器片利用の円板。『調査研究年報』第7号 青森県立郷土館
 仙居伸久 1998 『石狩低地帯における石器製作の下限とその形態-旧琴似川流域の遺跡群を中心として-』『月刊 考古学ジャーナル』433
 高島成徳 1988 『発見(1)遺跡の建築跡について』『発見(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第120集 青森県教育委員会
 高島成徳 2001 『北東北にみる古代住居跡の一例』『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基礎的研究』
 1998年度～2000年度科学研究費補助金(基礎研究A(1))研究成果報告書
 高橋 学 1988 『堅穴住居と掘立柱建物が併列して構築される遺構について-一能代市福田遺跡・十二林遺跡を編織として-』
 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号
 高橋玲子 2001 『平安時代東北地方における掘立柱施設付堅穴住居について』『秋田考古学』第47号
 武井豊治 1994 『古建築辞典』理工学社
 日本民俗建築学会 2001 『図説 民俗建築大事典』柏書房
 羽柴直人 2000 『青森県内のロクロ使用土師長器製について』『村植堂先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究会08号
 早川由紀夫・小山真人 1998 『日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-』『火山』第2集 43巻
 5号 日本火山学会
 町田洋・福沢仁之 1996 『湖底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代』『日本第四紀学会講演要旨集』26 日本第四紀学会
 松下 直 1989 『北海道の再生土製陶器-その一部の実態と青森県との対比-』『北海道考古学』第28号
 松本達彦 1991 『東北北部の平安時代のなべ』『紀要』X 1 (附)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 宮本敏・中川弘光・長瀬敏郎・菅野均志・大場司・北村繁・谷口宏光 2002 『白頭山(長白山)の爆発的噴火史の再検討』
 『東北アジア研究』第7号
 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
 村植 潔 1965 『東北北部の縄文式に後続する土器』『弘前大学教育学部紀要』第14号
 村植 潔 1984 『増補 円筒土器文化』雄山閣出版
 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

遺構実測図

SI101

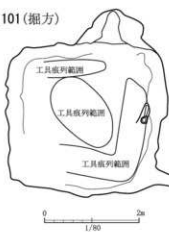


遺構図1 竪穴建物跡(SI101)

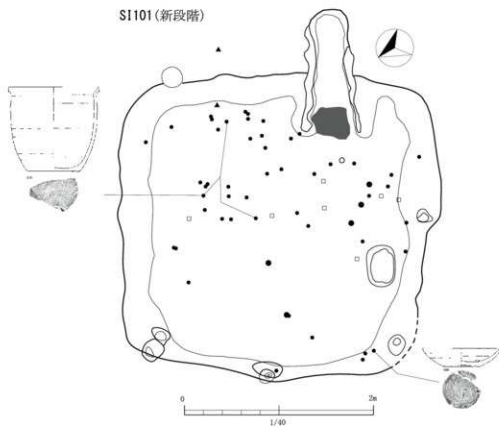
S1101(古段階)



S1101(掘方)

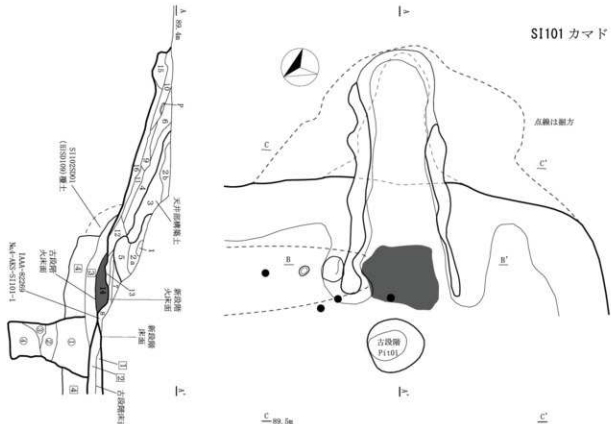


S1101(新段階)



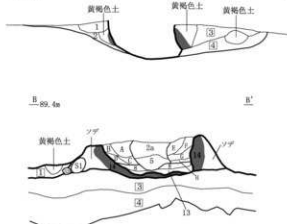
遺構圖2 竪穴建物跡 (S1101)

SI101 カマド



SI101カマド(図A'-B'4')

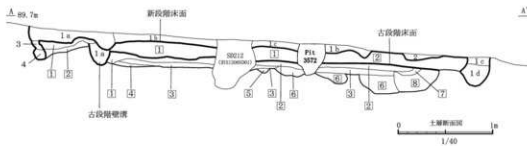
- ソク 黒褐色土(10195/4) 黒褐色土(10192/2)赤土、褐色土(7, 5194/4)2区
- 第1層 土に黄褐色ローム(10195/4) 黒褐色土(10192/2)1区
- 第2層 黒褐色土(10192/2) 褐色土(7, 5194/4)(φ<10cm)7区、
赤褐色土(5194/4)(φ1m)2区
- 第2a層 黒褐色土(10192/2) 土に黄褐色ローム(10195/4)(φ30cm)1区、
黒土(10192/7)1区、硬赤褐色土(5193/4)(φ5cm)1区(1区)
- 第3層 褐色ローム(10194/4) 暗褐色土(10193/4)2区、黒褐色土(10192/2)1区、
土に黄褐色ローム(10195/4)(φ10~40cm)7区、
硬赤褐色土(5193/4)(φ1~5cm)2区、炭化物(φ1~2cm)1区 天井土
- 第4層 赤褐色土(5194/4) 明褐色土(7, 5193/4)7区、黒褐色土(10192/2)1区
天井部崩落土層
- 第5層 黒褐色土(10192/2) 赤褐色土(5194/4)(φ1~20cm)5区、
土に黄褐色ローム(10195/4)(φ1~10cm)2区
- 第6層 黒土(10192/7) 赤褐色土(5194/4)(φ1~5cm)2区、
黄褐色ローム(10195/4)(φ1~2cm)1区
- 第7層 褐色土(10194/4) 炭化物(φ<10cm)2区、壁口天井
- 第8層 炭化物 褐色土(10194/4)7区、赤褐色土(5194/4)(φ2~10cm)2区
- 第9層 黒褐色土(10192/2) 赤褐色土(5194/4)(φ2~20cm)1区、
暗褐色土(7, 5193/4)1区、黒土(10192/1)2区
- 第10層 黒褐色土(10192/2) 赤褐色土(5194/4)(φ1~20cm)7区、
黒土(10192/7)1区
- 第11層 黒褐色土(10192/2) 赤褐色土(5194/4)(φ1~3cm)2区、
赤褐色土(5194/4)(φ1m)1区表面(1区)
- 第12層 黒褐色土(10192/2) 赤褐色土(5194/4)2区、土に黄褐色ローム(10195/4)(φ3~10cm)1区、天井部崩落土層
- 第13層 褐色土(7, 5194/4) 赤褐色土(5194/4)(φ1~5cm)7区、明褐色土(7, 5193/4)1区、炭化物(φ1~3cm)1区
- 第14層 赤褐色土(5194/4) 明褐色土(7, 5193/4)1区、黒褐色土(10192/2)1区 土面(1区)表面
- 第15層 黒土(10192/1) 土に黄褐色ローム(10195/4)(φ1~40cm)3区 土面が機能時の表面フイン
- 第16層 黒土(10192/7) 土面が機能時の表面フイン
- 第17層 土に黄褐色ローム(10195/4) 黒褐色土(10192/2)10区 天井部
- 第18層 赤褐色土(5194/4) 黒褐色土(10192/2)1区、土に黄褐色ローム(10195/4)7区 天井部(輪廊)積層土
- 第19層 暗褐色土(10193/4) 赤褐色土(10193/4)1区、土に黄褐色ローム(10195/4)10区 天井部(輪廊)積層土
- 第20層 土に黄褐色ローム(10195/4) 黒褐色土(10192/2)10区、赤褐色土(5194/4)(φ3cm)1区(1区) 天井部
- 第21層 赤褐色土(5194/4) 土に黄褐色ローム(10195/4)10区、赤褐色土(輪廊)積層土
- 第22層 褐色土(7, 5194/4) 赤褐色土(5194/4)1区、黒土(10191, 7/3)1区
- 第23層 暗褐色土(10193/4) 褐色土(10191, 7/3)1区
- 第24層 黒土(7, 5191, 7/1) 褐色土(10194/4)(φ<10cm)1区、炭化物(φ<5cm)1区
- 第25層 黒土(10192/7) 褐色土(10194/4)1区
- 第26層 黒土(10191, 7/1) 褐色土(10194/4)3区
- P1土
- 第27層 黒土(10191, 7/1) 黒褐色土(10192/2)10区、褐色土(10194/4)(φ<3cm)1区
- 第28層 暗褐色土(10193/4) 褐色土(5194/4)5区
- 第29層 黒褐色土(10192/2) 褐色土(10194/4)(φ<20cm)2区
- 第30層 黒褐色土(10192/2) 暗褐色土(10193/2)7区、黄褐色土(10195/4)(φ<10cm)2区



SI101カマド(C'-C')

- 第1層 黒褐色土(10192/2) 黄褐色土(10195/4)2区(輪廊土(1区)土)、
褐色土(7, 5194/4)(φ<2cm)1区、赤石(φ<3cm)7区、
第2層 褐色土(10192/2) 褐色土(10194/4)2区
- 第3層 黒褐色土(10191, 7/1) 褐色土(10194/4)2区
- 第4層 黒褐色土(10192/2) 褐色土(10194/4)(φ<5cm)7区

遺構図3 竪穴建物跡 (SI101カマド)



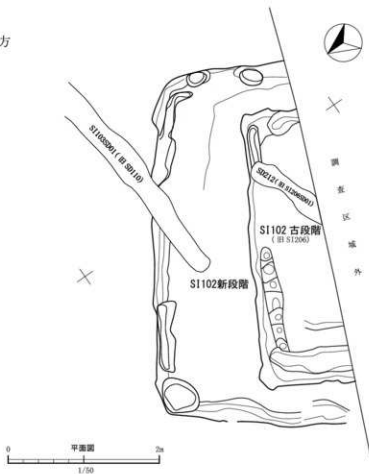
S1102新段階

- 第1層 黒色土 (10YR3/7) 褐色土 (10YR4/6) 2%、炭化物 (1~3mm) 2%、浮石 (1~2mm) 微量
- 第13層 黒色土 (10YR1/7) 褐色ローム (10YR4/6) (1~10mm) 2%、炭化物 (1~10mm) 2%、浮石 (1~5mm) 1%、赤褐色粘土 (10YR4/6) (1~2mm) 微量
- 第14層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色ローム (10YR5/4) (1~3mm) 2%、黒色土 (10YR1/7) 1%、白磁片-苦小軟火山灰 (5~7μ) 微量
- 第14層 黒色土 (10YR1/7) 褐色ローム (10YR4/6) (1~2mm) 2%、黒褐色土 (10YR2/3) 1%、炭化物 (1~5mm) 微量、浮石 (1~2mm) 微量
- 第2層 暗褐色土 (10YR3/4) 黒褐色土 (10YR2/2) 2%、黄褐色土 (10YR5/4) 2%、ローム (1~15mm) 1%、浮石 (1~3mm) 微量
- 第3層 黒色土 (10YR1/7) 褐色ローム (10YR4/6) (30mm×30mm) 1+
- 第4層 黒色土 (10YR1/7) 褐色土 (10YR4/6) 30%、浮石 (1~3mm) 微量
- 第12層 黒色土 (10YR1/7) 褐色土 (10YR4/6) 20%、浮石 (1~5mm) 2%、明赤褐色土 (10YR1/9) (1~5mm) 微量
- 第12層 黒色土 (10YR1/7) 褐色土 (10YR4/6) 20%、暗褐色土 (10YR3/4) 1%、浮石 (1~5mm) 2%、炭化物 (1~3mm) 微量

S1102古段階

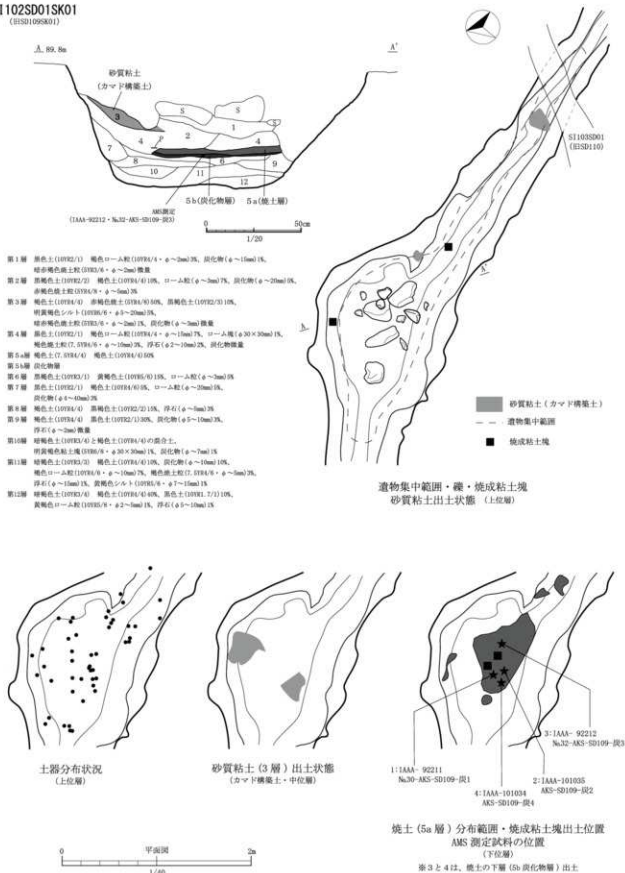
- 第1層 褐色土 (10YR4/6) 黒色土 (10YR2/1) 20%、暗褐色土 (10YR3/3) 10%、褐色土 (10YR4/6) 10%、褐色土 (7.5YR4/6) 2%、黄褐色粘土塊 (2.5YR7/6) (20mm~30mm) 1+
- 黒色ローム (10YR1/7) (1~3mm) 1%、炭化物 (1~5mm) 微量、浮石 (1~3mm) 微量
- 第2層 暗褐色土 (10YR3/4) 褐色土 (10YR4/6) 10%、黒色土 (10YR2/1) 7%、赤褐色粘土 (10YR4/6) (1~20mm) 2%、炭化物 (1~3mm) 1%、浮石 (1~2mm) 微量
- 第3層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土 (10YR5/4) 40%、黒色土 (10YR2/1) 20%、褐色土 (7.5YR4/6) 10%、浮石 (1~5mm) 1%、黄色ローム (2.5YR6/6) (1~5mm) 2%、炭化物 (1~10mm) 1%
- 第3層 黄褐色土 (10YR5/6) 黒色土 (10YR2/1) 2%、(2.5-)黄褐色土 (10YR5/4) 2%、浮石 (1~5mm) 1%
- 第4層 褐色土 (10YR4/6) 暗褐色土 (10YR3/4) 10%、ローム (30mm×30mm) 1%、黒色土 (10YR2/1) 1%、浮石 (1~3mm) 1%
- 第5層 暗褐色土 (10YR3/4) 暗褐色土 (10YR3/3) 20%、黒色土 (10YR1/7) 10%、黄褐色土 (10YR5/4) (1~10mm) 2%、浮石 (1~3mm) 2%
- 第5層 黒色土 (10YR2/1) 黄褐色土 (10YR5/4) (1~15mm) 2%
- 第5層 暗褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土 (10YR5/4) 10%~ローム (1~10mm) 6%、黒色土 (10YR2/1) 10%、赤褐色粘土 (10YR4/6) (1~5mm) 2%、浮石 (1~5mm) 2%

S1102掘方



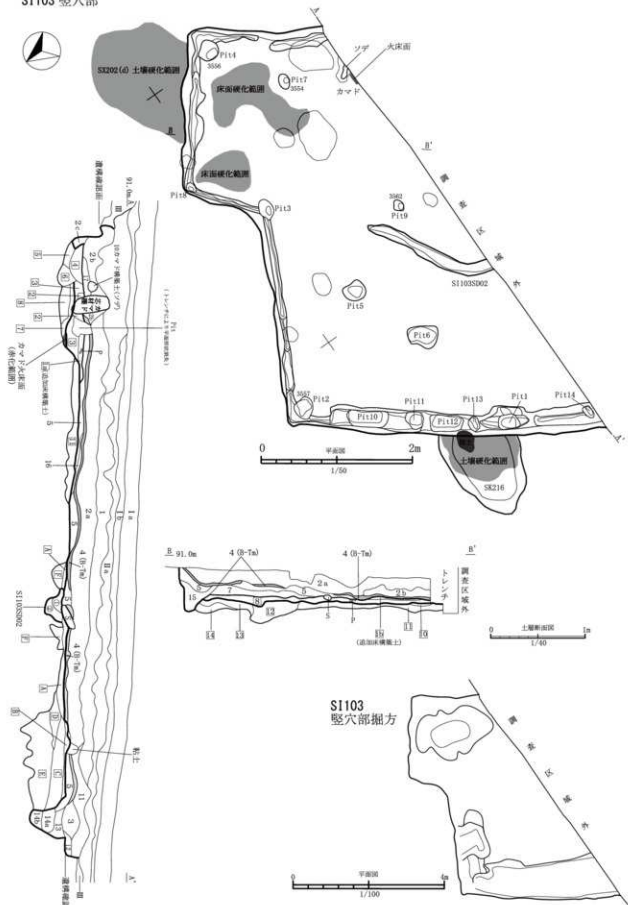
遺構図 5 竪穴建物跡 (S1102)

SI102SD01SK01
(HSD109SK01)



遺構図6 竪穴建物跡外周溝付属土坑 (SI102SD01SK01)

S1103 竪穴部



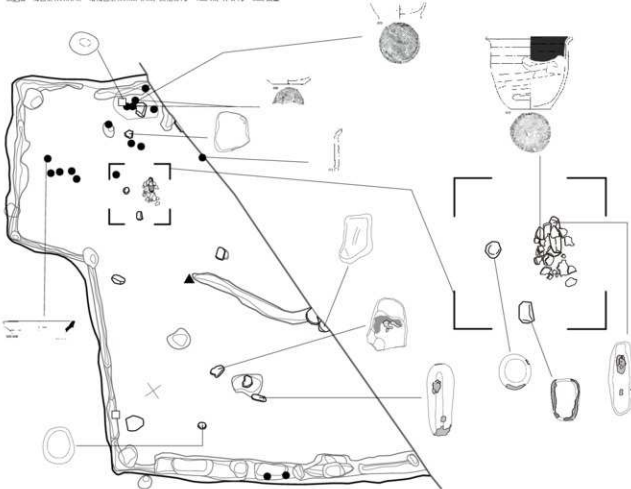
遺構図B 竪穴建物跡 (S1103)

SI103

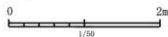
SI103(A'-A''-B'-B'')

- 第1層 黒褐色土(10932/3) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ~10m) 2区、明赤褐色土(10935/4) 2区、炭化物 1区
- 第2a層 黒褐色土(10932/3) 黄褐色ロームブロック(10935/4) (φ20~40m) 10区、炭化物2区、明赤褐色土(10935/4) 1区
- 第2b層 暗褐色土(10933/4) 黄褐色ロームブロック(10935/4) (φ20~40m) 20区、炭化物 1区
- 第3a層 暗褐色土(10933/4) 黄褐色ローム層(10935/4) (20×20m) 1区、炭化物(φ~10m) 1区、浮石(φ~3m) 1区
- 第3b層 暗褐色土(10932/3) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ5m) 1区
- 第4層 白部(土)赤小粒(土)灰部(赤) 暗褐色土(10933/4) 7区限入
- 第5層 暗褐色土(10933/4)
- 第7層 黒褐色土(10932/3) ロームブロック、暗褐色ブロック含む
- 第8層 暗褐色土(10933/4) ロームブロック多く含む、硬くしまる
- 第9層 暗褐色土(10932/3) 硬くしまる
- 第10層 褐色土(10934/4) 2区、黒褐色土(10932/3) 2区、黄褐色ローム層(10935/4) (φ~7m) 数量、浮石(φ~10m) 数量
- 第11層 暗褐色土(10932/3) 浮石(φ~7m) 2区、炭化物(φ~3m) 1区、赤褐色土(10934/4) (φ~3m) 数量、B-7a浮石含む
- 第12層 黒褐色土(10932/3) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ~10m) 2区、浮石(φ~3m) 数量
- 第14a層 暗褐色土(10933/4) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ~10m) 7区、浮石(φ~3m) 数量
- 第14b層 暗褐色土(10933/4) 褐色土(10934/4) 2区、ローム層(φ~10m) 2区
- 第15層 暗褐色土(10933/4) しまり層
- 第16層 暗褐色土(10933/4) 明黄褐色土(10936/4) 20区、炭化物(φ~10m) 1区、浮石(φ~5m) 1区
- 第17層 黒褐色土(10932/3) 炭化物(φ~7m) 2区、明黄褐色ローム層(10936/4) (φ~7m) 1区、赤褐色土(10934/4) (φ~10m) 1区

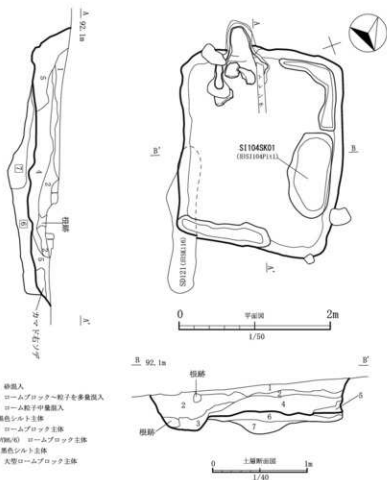
- 第18層 暗褐色土(10932/3) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ~20m) 10区、褐色土(10934/4) (φ~10m) 2区、炭化物(φ~5m) 1区
- 第19層 暗褐色土(10932/3) 硬くしまる、一部白色粒を含む
- 第20層 暗褐色土(10933/4) 明黄褐色ローム層(10936/4) (φ~5m) 2区、褐色土(10934/4) (φ~3m) 1区
- 第21層 暗褐色土(10933/4) 黄褐色ローム層(10935/4) (φ~10m) 2区、明褐色土(10935/4) (20×30m) 2区、炭化物(φ~7m) 1区
- 第22層 褐色土(10934/4) 暗褐色土(10933/4) 1区、黒色土(10932/1) 1区、明黄褐色ローム層(10937/4) (φ2~10m) 2区、明赤褐色土(10935/4) (φ~7m) 1区
- 第23層 暗褐色土(10933/4) 明黄褐色ローム層(10936/4) (φ~7m) 1区、黒色土(10932/1) 1区、褐色土(10934/4) (φ~3m) 1区
- 第24層 褐色土(10934/4) 明黄褐色ローム層(10936/4) (φ~20m) 10区、暗褐色土(10933/4) 10区、黒色土(10932/1) 2区、浮石(φ~3m) 数量
- 第25層 褐色土(10934/4) 暗褐色土(10933/4) 2区、黒色土(10932/1) 2区、明黄褐色ローム層(10937/4) (φ~7m) 2区、浮石(φ~3m) 2区、褐色土(10934/4) (φ3m) 数量、赤化凝結土(10936/4)
- 第26層 黄褐色土(10935/4) 暗褐色土(10932/3) 2区、浮石(φ~3m) 数量
- 第27層 主に赤褐色土(10936/4) 粘土層、硬くしまる
- 第28層 暗褐色土(10933/4) ロームブロック限入
- 第29層 暗褐色土(10933/4)
- 第30層 明褐色土(10935/4)
- 第31層 褐色土(10931/7)
- 第32層 黄褐色土(10935/4) 暗褐色土(10933/4) 2区、褐色土(10934/4) 2区、浮石(φ~3m) 数量
- 第33層 暗褐色土(10933/4) 黄褐色土(10935/4) 20区、浮石(φ~3m) 2区、炭化物(φ~3m) 1区
- 第34層 黄褐色土(10935/4) ローム
- 第35層 褐色土(10934/4) 暗褐色土(10933/4) 7区、浮石(φ~3m) 2区
- 第36層 褐色土(10934/4) と黒褐色土(10932/3) の混合土
- 第37層 褐色土(10934/4) 暗褐色土(10933/4) 2区、炭化物(φ~7m) 1区、浮石(φ~3m) 数量



遺構図9 竪穴建物跡 (SI103)



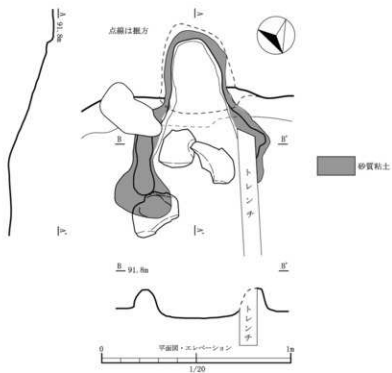
SI104



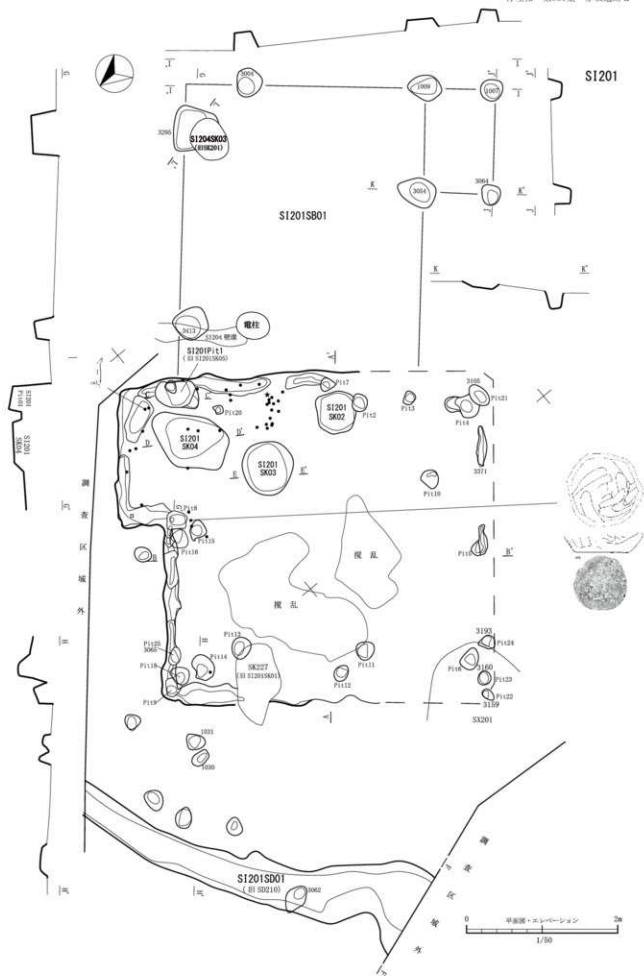
SI104(本穴) (参考)

- 第1層 黒褐色土主体 (10192/3) 砂混入
- 第2層 黒褐色土主体 (10192/3) ロームブロック-粒子を多数混入
- 第3層 黒褐色土主体 (10192/2) ローム粒子中量混入
- 第4層 黒色土主体 (10192/1) 黒色シルト主体
- 第5層 暗褐色土主体 (10193/3) ロームブロック主体
- 第6層 暗褐色ローム主体 (10193/4) ロームブロック主体
- 第7層 黒色土主体 (10192/1) 黒色シルト主体
- 第7層 暗褐色土主体 (10193/4) 大塊ロームブロック主体

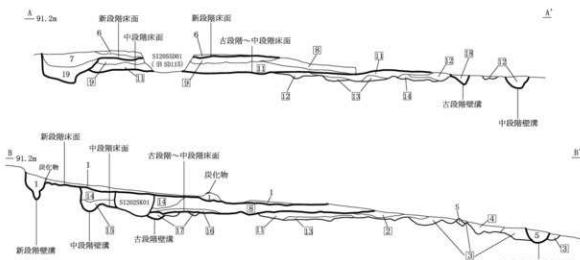
SI104 カマド



遺構図10 竪穴建物跡 (SI104)



遺構図11 竪穴建物跡 (S1201)



S1202(4-4') (部分)

- 第1層 基層色土 (10YR2/2) 炭化物中量, ローム塊少量, ローム粒少量
- 第3層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第6層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第7層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第19層 基層色土 (10YR2/1) ローム塊少量, ローム粒少量

- 第2層 基層色土 (10YR3/2) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第3層 基層色土 (10YR3/2) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第4層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第5層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第6層 基層色土 (10YR2/1) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第7層 基層色土 (10YR2/2) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第8層 濃い黄褐色土 (5YR4/4) (10YR3/4) 基層色土 (10YR2/2) 少量混
- 第9層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第10層 基層色土 (10YR2/2) ローム粒少量
- 第11層 基層色土 (10YR3/2) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第12層 基層色土 (10YR2/2) ローム塊少量, ローム粒少量
- 第13層 基層色土 (10YR2/2) ローム塊少量, ローム粒少量

S1202S001

—90.9m

炭化物多量

S1202S001

第1層 基層色土 (10YR1.7/1) ローム塊 (φ1~20mm) 少量, ローム粒 (φ1~5mm) 少量, 炭化物 (φ1~30mm) 多量

第2層 基層色土 (10YR2/2) ローム塊 (φ1~10mm) 少量, ローム粒 (φ1~5mm) 少量

S1202古段階カマド火床面 (H/S1202SP1)

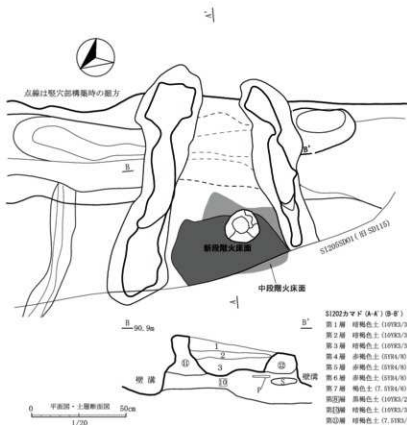
—91.6m

炭化物多量

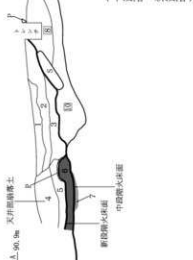
S1202古段階カマド火床面 (H/S1202SP1)

第1層 赤褐色土 (5YR4/0) 濃い褐色ローム粒 (5YR4/0) (φ1~10mm) 少量

0 土層断面図 1m
1/40



S1202 カマド (中段階～新設階)

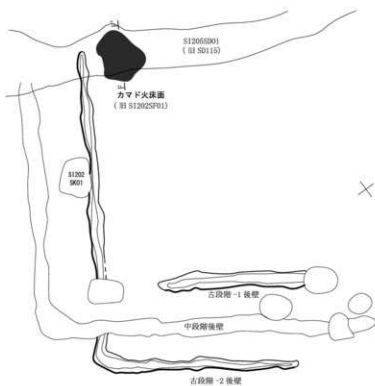


S1202カマド(4-4') (部分)

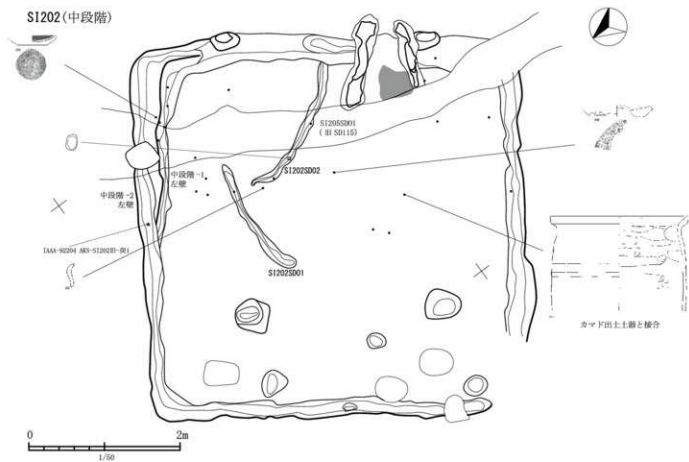
- 第1層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土粒 (φ5~10mm) 少量, 炭化物 (φ1~10mm) 少量, ローム (φ1~10mm) 少量
- 第2層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土粒 (φ1mm) 少量, 炭化物 (φ1~5mm) 少量, ローム粒 (φ1mm) 少量
- 第3層 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土粒 (φ1~5mm) 少量, ローム粒 (φ1~5mm) 少量
- 第4層 多褐色土 (5YR4/0) 暗褐色土 (7.5YR4/0) 中量, 浮石 (φ1~5mm) 少量
- 第5層 多褐色土 (5YR4/0) 浮石 (φ1~3mm) 少量
- 第6層 多褐色土 (5YR4/0) 浮石 (φ1~3mm) 少量
- 第7層 褐色土 (7.5YR4/0) 浮石 (φ1~3mm) 少量
- 第8層 多褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (φ1~20mm) 少量, 浮石 (φ1~7mm) 少量
- 第9層 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒 (φ1~3mm) 少量, 暗褐色土 (7.5YR2/3) 極少量混
- 第10層 暗褐色土 (7.5YR3/0) 褐色塊土粒 (7.5YR4/0) 少量, 褐色土 (10YR4/0) 少量混
- 第11層 暗褐色土 (10YR3/0) 粘土粒少量 (φ1~7mm), ローム粒 (φ1~7mm) 少量, 浮石 (φ1~3mm) 少量

遺構図14 竪穴建物跡 (S1202)

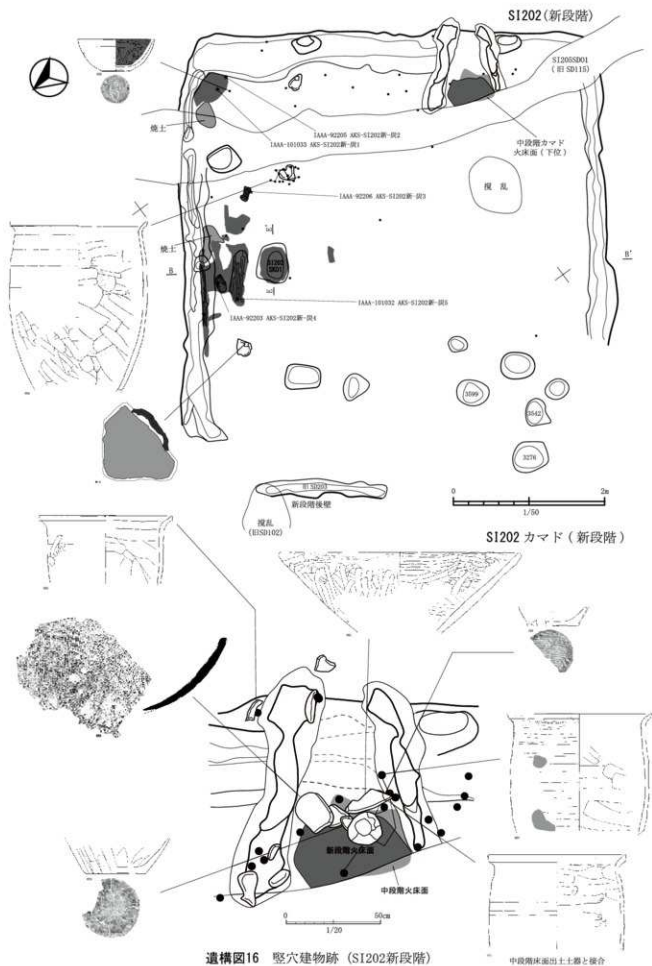
S1202(古段階)



S1202(中段階)

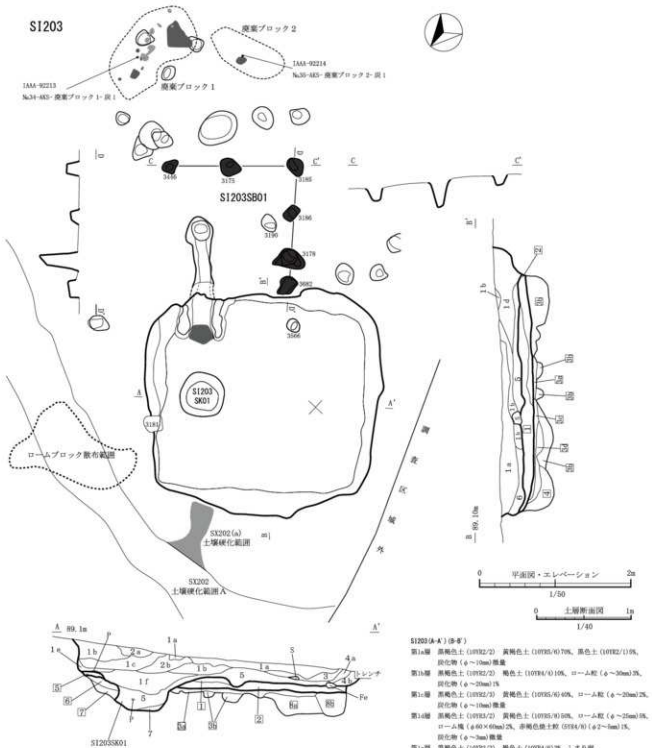


遺構図15 竪穴建物跡 (S1202古段階・中段階)



遺構図16 竪穴建物跡 (S1202新段階)

中段階床面出土土器と壁合

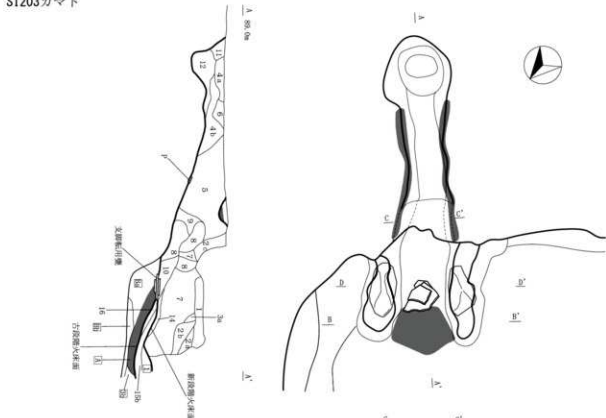


- 第1層 赤褐色土 (10192/3) 黄褐色土 (10195/4) 60%, ローム塊 (φ20~40cm) 10%, ローム殻 (φ~15cm) 20%, 浮石 (φ~5cm) 少量
- 第2層 黒色土 (10192/7) 褐色土 (10194/4) 40%, 炭化物 (φ~10cm) 1%, にがい黄褐色シロト (10197/4) (φ~10cm) 1%, 浮石 (φ~5cm) 1%
- 第3層 黄褐色土 (10194/4) 赤褐色土 (10192/2) 10%, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ3~10cm) 2%, 浮石 (φ~3cm) 少量
- 第4層 褐色土 (10194/4) 黒色土 (10192/1) 20%, 浮石 (φ~3cm) 1%, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ~7cm) 1%
- 第5層 黒色土 (10192/7) 明黄褐色ローム殻 (10194/5) (φ~20cm) 10%, 褐色ローム殻 (10194/4) (φ~10cm) 2%, 炭化物 (φ~3cm) 少量
- 第6層 褐色土 (10194/4) と黒色土 (10192/1) との混合土, 浮石 (φ~3cm) 1%, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ~5cm) 少量
- 第7層 褐色土 (10194/4) 赤褐色土 (10192/2) 20%, 浮石 (φ~3cm) 1%
- 第8層 黄褐色土 (10195/4) 赤褐色土 (10192/2) 20%, 赤褐色土殻 (5194/4) (φ~3cm) 少量
- 第9層 黒色土 (10191/7) 赤褐色土 (10195/4) 70%, 赤褐色土殻 (5194/4) (φ~3cm) 少量, 浮石 (φ~3cm) 少量
- 第10層 黄褐色土 (10195/4) 赤褐色土 (10192/2) 20%, 褐色土殻土殻 (7.5194/4) (φ~3cm) 少量
- 第11層 黄褐色土 (10195/4) (~φ100cm) と赤褐色土 (10192/2) (~φ10m) との混合土
- 第12層 黄褐色土 (10195/4) (~φ80cm) と赤褐色土 (10192/2) (~φ40cm) との混合土, Baよりしまり弱い

- S1203(A-A') (参考)
- 第1a層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 70%, 黒色土 (10192/1) 10%, 炭化物 (φ~10cm) 少量
- 第1b層 赤褐色土 (10192/2) 褐色土 (10194/4) 10%, ローム殻 (φ~30cm) 2%, 炭化物 (φ~25cm) 1%
- 第1c層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 40%, ローム殻 (φ~20cm) 2%, 炭化物 (φ~10cm) 少量
- 第1d層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 40%, ローム殻 (φ~25cm) 10%, ローム塊 (φ40×60cm) 2%, 赤褐色土殻 (5194/4) (φ~5cm) 1%, 炭化物 (φ~3cm) 少量
- 第1e層 赤褐色土 (10192/2) 褐色土 (10194/4) 20%, しまり弱
- 第1f層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 10%, ローム殻 (φ~25cm) 10%, 炭化物 (φ~25cm) 2%, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ3~25cm) 1%, 明黄褐色シロト (10196/4) (φ~10cm) 少量
- 第2a層 黒色土 (10192/1) 褐色土 (10194/4) 20%, 浮石 (φ~2cm) 少量, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ~2cm) 少量
- 第2b層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) (φ~10cm) 10%, 炭化物 (φ~5cm) 1%
- 第3層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 20%, ローム殻 (φ~2cm) 1%, 炭化物 (φ~25cm) 1%, 褐色土殻 (7.5194/4) (φ~7cm) 少量, しまり弱
- 第4a層 黒色土 (10192/1) 明褐色土 (10195/4) 20%, 炭化物 0%
- 第4b層 黒色土 (10192/1) 褐色土 (10194/4) (φ~10cm) 10%, 炭化物 0%
- 第5層 赤褐色土 (10192/2) 褐色土 (10194/4) (φ~10cm) 2%, 炭化物 (φ~25cm) 2%
- 第6層 赤褐色土 (10192/2) 黄褐色土 (10195/4) 20%, ローム殻 (φ~10cm) 1%, 炭化物 (φ~10cm) 2%
- 第7層 赤褐色土 (10192/2) 褐色土 (10194/4) 10%, ローム殻 (φ~4cm) 1%

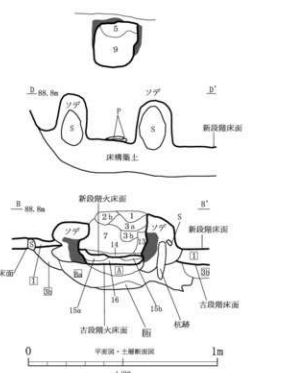
遺構図17 堅穴建物跡 (S1203)

SI203カマド



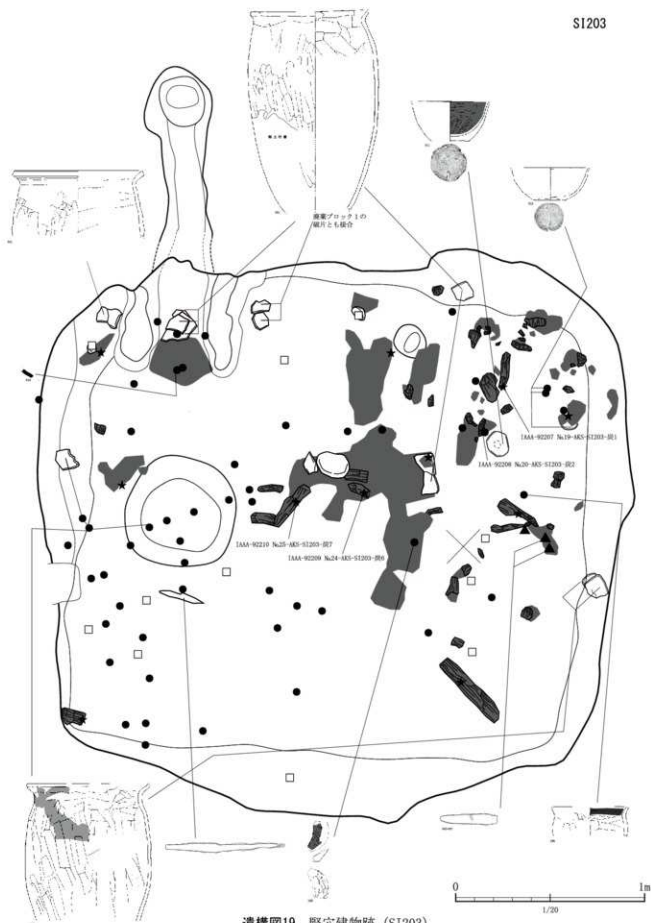
SI203カマド

- 第1層 黒土 (10193/7/1) 明赤褐色土 (10196/9/10)K,
明黄褐色ロームブロック (10194/0) (φ10×10cm)2K, 褐色土 (10193/1)1K,
浮石 (φ~2cm)少量 壺穴部 (φ~7)1個目
- 第2a層 黒土 (10193/7/1) 黄褐色土 (10195/9/2)5 壺穴部 (1a)2a相当
- 第2b層 黒土 (10193/7/1) 黄褐色土 (10195/9/6)9, 浮石 (φ~2cm)少量,
明赤褐色土粒 (10195/9/0) (φ~2cm)少量 壺穴部 (1a)2a相当
- 第3a層 黒土 (10193/7/1) 褐色土 (10194/9/2)5, 浮石 (φ~3cm)15
- 第3b層 黒土 (10192/1) 黄褐色土 (10191/9/2)5, 浮石 (φ~2cm)少量 壺穴部 (φ~7)2a相当
- 第3c層 黒土 (10192/1) 褐色ローム粒 (10194/0) (φ~10cm)30K, 暗褐色土 (10193/0)10K,
暗褐色土粒 (10194/0) (φ~1cm)少量, 浮石 (φ~2cm)少量 壺穴部 (φ~7)2a相当
- 第4a層 黒褐色土 (10192/2) 暗褐色土粒 (10193/4) (φ~20cm)0K,
褐色ローム粒 (10194/0) (φ~10cm)25, 炭化物 (φ~15cm)15 天井部腐土
- 第4b層 黒褐色土 (10192/2) 暗褐色土粒 (10193/0)30K, 褐色ローム粒 (10194/0) (φ~3cm)15,
炭化物 (φ~2cm)少量 天井部腐土
- 第5層 黒土 (10193/7/1) 褐色ローム粒 (10194/0) (φ~5cm)1K,
暗褐色土粒 (10193/4) (φ~15cm)15, 炭化物少量
- 第6層 黒褐色土 (10192/2) 暗褐色土粒 (10193/4) (φ~15cm)12K,
黄褐色ローム粒 (10195/0) (φ~2cm)少量, 炭化物少量
- 第7層 黒土 (10192/1) 黄褐色ローム粒 (10195/0) (φ~3cm)1K, 炭化物 (φ~2cm)1K,
明赤褐色土粒 (10195/0) (φ~2cm)少量
- 第8層 褐色土 (10194/0) 褐色土 (10194/0)40K, 赤褐色土 (10192/2)0K 天井部腐土
- 第9層 黒土 (10192/1) 明赤褐色土粒 (10195/0) (φ~3cm)15K, 炭化物 (φ~3cm)少量,
黄褐色ローム粒 (10195/0) (φ~3cm)少量
- 第10層 黒褐色土 (10192/2) 褐色ローム粒 (10194/0) (φ~7cm)2K,
明赤褐色土粒 (10195/0) (φ~2cm)少量
- 第12層 褐色土 (10195/0) (φ~7cm)2K, 黒土 (10192/1)と
暗褐色土 (10193/0)の混合土, しまりなし(そりど)
- 第13層 赤褐色土ブロック主体 (10194/0) 黄褐色土 (10192/2)10K,
炭化物 (φ~15cm)25 壺穴部内壁腐土
- 第14層 暗褐色土 (10193/4) 黒土 (10192/1)10K, 黒色ローム粒 (10192/1) (φ~20cm)10K,
暗赤褐色土粒 (10193/0) (φ~20cm)0K, 炭化物少量 ソダ腐土
- 第15a層 赤褐色土ブロック主体 (10194/0) 暗褐色土 (10193/0)7K,
褐色ローム粒 (10192/1) (φ~5cm)1K, 浮石 (φ~2cm)少量 壺穴部内壁腐土
- 第15b層 黄褐色土 (10192/2) 赤褐色土粒 (10194/0) (φ~10cm)10K 壺穴部内壁腐土
- 第16層 暗褐色土 (10193/4) 黄褐色土 (10192/2)5, 浮石 (φ~15cm)1K
- ソダ 1c, 2c上黄褐色土 (10194/2) 褐色土 (10194/0)20K, 褐色ローム粒 (10192/1) (φ~5cm)0K,
浮石 (φ~5cm)5K, 瓦 (φ35×30cm)1K, 暗赤褐色土粒 (10193/0) (φ~5cm)少量, 炭化物少量
- 柱 跡 暗褐色土 (10192/2) 褐色土 (10194/0)0K, 黒色ローム粒 (10192/1) (φ~3cm)15, 暗赤褐色土粒 (10193/0) (φ~1cm)少量, 浮石 (φ~2cm)少量, しまりなし
- 瓦跡 暗赤褐色土ブロック (10194/0) 暗褐色土 (10193/0)40K
- 第17層 褐色土 (10194/0) 暗褐色土 (10193/0)10K, 褐色ローム粒 (10192/1) (φ~10cm)2K, 浮石 (φ~3cm)0K, 褐色土粒 (10194/0) (φ~1cm)少量
- 第18層 暗褐色土 (10193/0) 暗褐色ローム粒 (10193/0) (φ~15cm)2K, 浮石 (φ~2cm)15

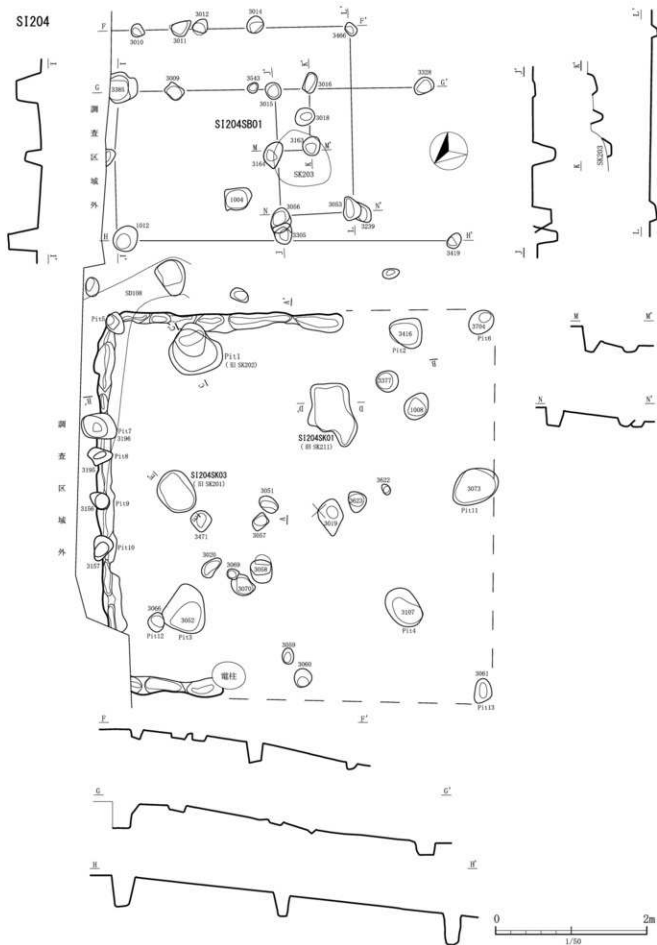


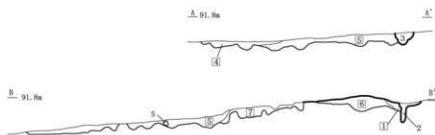
遺構図18 竪穴建物跡 (SI203)

SI203



遺構図19 竪穴建物跡 (SI203)

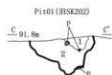




S1204 (A-A') (參考)

第2層 褐色土 (10YR4/0) 明黃褐色 α - β -A₂ (10YR5/0) 中量, 炭化物少量, 浮石微量第3層 暗褐色土 (10YR3/3) 黃褐色 α - β -A₂ (10YR5/0) 微量第4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黃褐色 α - β -A₂ (10YR5/0) 少量第5層 褐色土 (10YR2/1) 明黃褐色 α - β -A₂ (10YR5/0) 微量, 炭化物微量第6層 暗褐色土 (10YR3/3) 黃褐色 α - β -A₂ (10YR5/0) 少量, 小礫微量第7層 2:5 α -黃褐色土 (10YR4/2) 上位2:2 α - β -黃褐色土塊主層, 下段以圓狀 α 混入, 硬質

第8層 褐色土 (10YR4/0) 浮石, 小礫少量, 硬質



P1+01 (HSK202)

S1204SK01 (HSK211)



S1204SK03 (HSK201)



P1101 (HSK202)

第1層 灰褐色土 (10YR2/3) α - β -A₂ (ϕ ~10mm) 微量第2層 灰褐色土 (10YR2/3) α - β -A₂ (ϕ 1~30mm) 10%, 炭化物 (ϕ 1~2mm) 微量

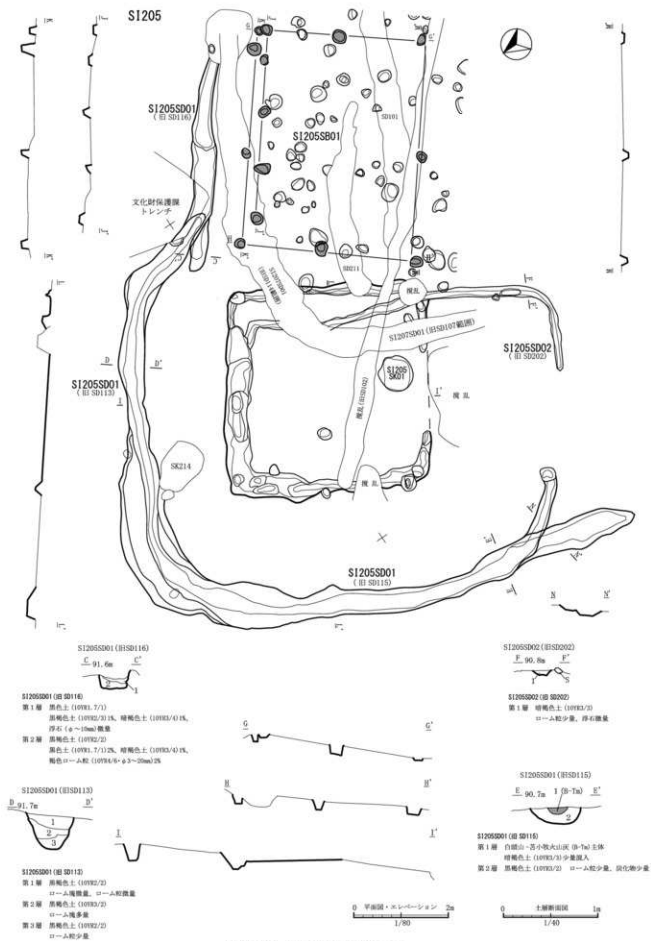
S1204SK01 (HSK211)

第1層 褐色土 (10YR4/0) 暗褐色土 (10YR3/0) 2%, α - β -A₂ (ϕ ~2mm) 1%, 炭化物 (ϕ 1~2mm)第2層 灰褐色土 (10YR2/3) α - β -A₂ (ϕ ~2mm) 微量

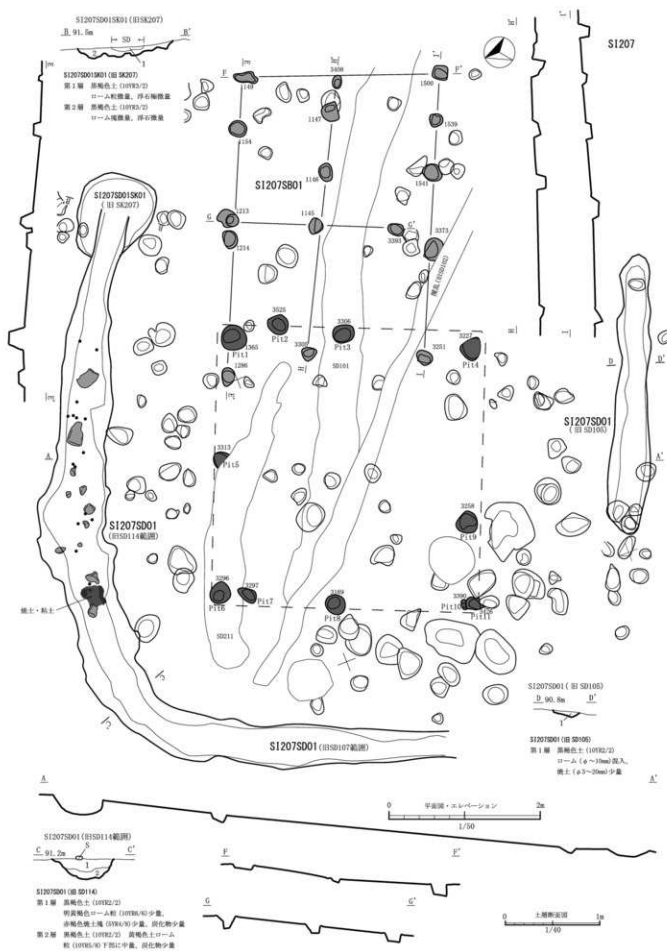
S1204SK03 (HSK201)

第1層 褐色土 (10YR3/0) α - β -A₂ (ϕ ~10mm) 1%, 炭化物 (ϕ ~2mm) 微量第2層 褐色土 (10YR3/4) α - β -A₂ (ϕ ~10mm) 10%, 炭化物 (ϕ ~2mm) 1%

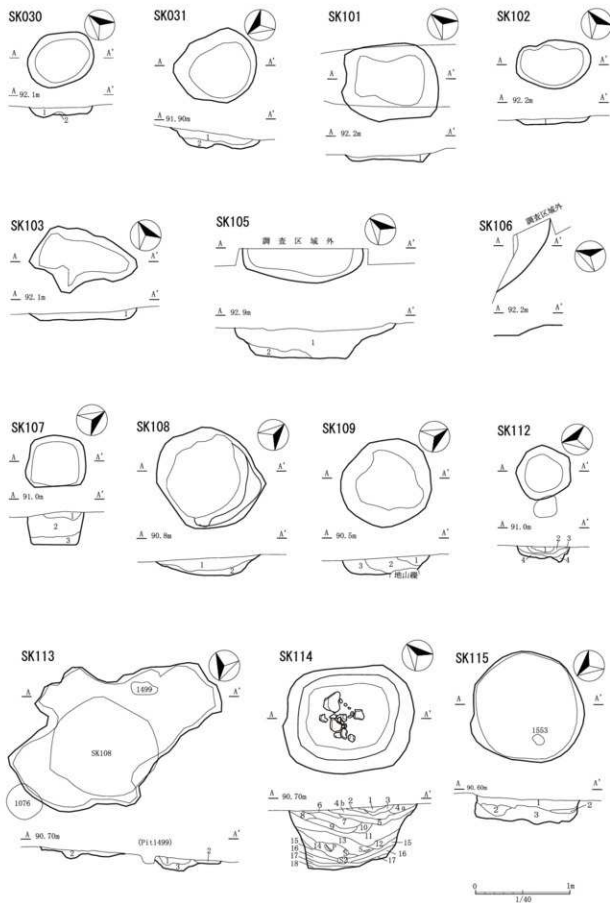
遺構圖21 竪穴建物跡 (S1204)



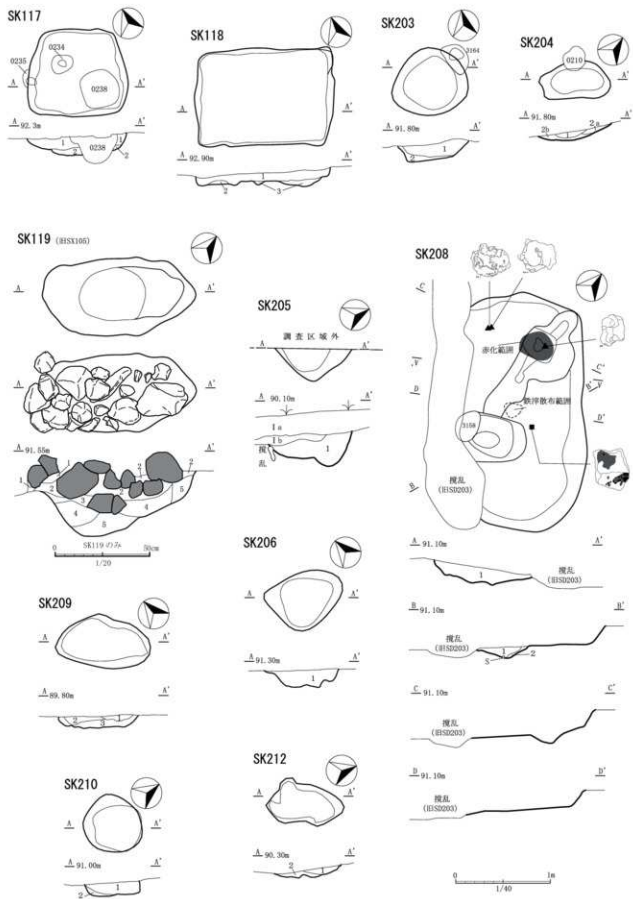
遺構図22 竪穴建物跡 (S1205)



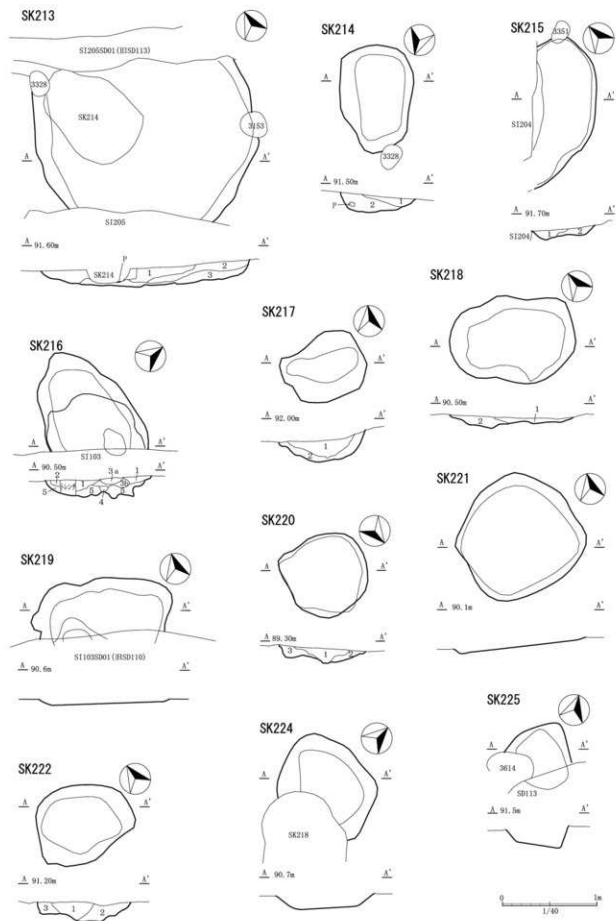
遺構図24 堅穴建物跡 (S1207)



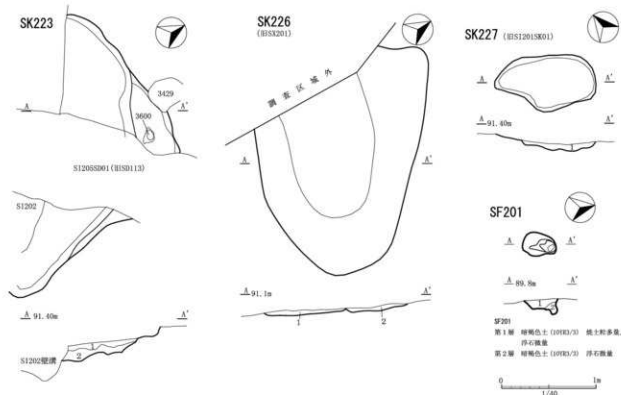
遺構図26 土坑 (SK030~115)



遺構図27 土坑 (SK117~212)



遺構図28 土坑 (SK213~225)



- SK223**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2)
 第2層 埴輪色土 (10YR2/4) 褐色土 (10YR4/0) 10%
- SK226**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 2%
- SK227**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 10%
 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 1%
- SF201**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 多量
 第2層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 多量
 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 1%
- SK303**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~10m) 1%
- SK305**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~20m) 2%
- SK306**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~20m) 1%
- SK307**
 第1層 褐色土 (10YR3/3) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~50m) 主体、黒色シルト 10%
- SK308**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~10m) 1%
- SK309**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~10m) 2%
- SK312**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~20m) 1%

- SK313**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~10m) 1%
- SK314**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~20m) 1%
- SK315**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) コーム (φ1~20m) 1%
- SK316**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 赤褐色土 (10YR3/3) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 1%
- SK317**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 1%
- SK318**
 第1層 埴輪色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/0) (φ1~5m) 1%

遺構図29 土坑 (SK223~227)・焼土遺構 (SF201) / SK030~118土層注記

SK119(図 5319)

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) 褐色ローム (0194/0) (φ2~10cm) 2%
 第2層 赤褐色土 (0192/2) 褐色ローム (0194/0) (φ1~2cm) 2%
 第3層 赤褐色土 (0192/2) 褐色ローム (0194/0) (φ2~15cm) 7%
 第4層 褐色ローム (0194/0) 黒色土 (0192/1)0%、礫 (φ20~30cm) 0%
 第5層 褐色ローム (0194/0) 黒色土 (0192/1) 7%

SK203

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒少量

SK204

- 第1層 黒色土 (0191.7/1) ローム粒 (φ1~2cm) 微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒 (φ1~3cm) 2%
 第3層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒 (φ1~6cm) 2%、炭化物 (φ1~2cm) 微量

SK205

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒微量

SK206

- 第1層 暗褐色土 (0193/2) 明黄褐色土 (0196/0) 微量、浮石微量

SK208(A-K)

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒少量、浮石少量、炭化物微量

SK208(中子)

- 第1層 暗褐色土 (0193/2) 黄褐色土 (0195/0) 少量、鉄分微量、浮石微量、ローム粒少量
 第2層 暗褐色土 (0193/0) 鉄分微量、浮石微量

SK209

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) 明黄褐色ローム粒 (0197/0) 微量、赤褐色土 (0194/0) 微量、炭化物微量、磁性あり
 第2層 赤褐色土 (0192/2) 明黄褐色ローム粒 (0196/0) 微量、磁性あり
 第3層 赤褐色土 (0193/2) 明黄褐色ローム粒 (0196/0) 少量、浮石微量

SK210

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒少量、浮石微量
 第2層 黒色土 (0192/1) ローム粒微量

SK212

- 第1層 暗褐色土 (0193/2) ローム粒微量、浮石微量
 第2層 暗褐色土 (0193/2) ローム粒微量、浮石微量

SK213

- 第1層 黒色土 (0192/1) ローム塊 (φ5~20cm) 微量、ローム粒 (φ~1cm) 微量、炭化物 (φ3~5cm) 微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) ローム塊 (φ5~20cm) 少量、ローム粒 (φ~1cm) 微量、炭化物 (φ1~5cm) 微量
 第3層 赤褐色土 (0192/2) ローム塊 (φ5~20cm) 少量、ローム粒 (φ~1cm) 少量、炭化物 (φ1~5cm) 微量、粘土粒 (φ~3cm) 微量

SK214

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒微量

SK215

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム塊微量 (φ10~20cm)、礫微量 (φ1~10cm)、ローム粒少量 (φ1~3cm)
 第2層 紅土系黄褐色土 (0194/2) ローム塊微量 (φ10~20cm)、ローム粒少量 (φ1~3cm)

SK216

- 第1層 黒色土 (0191.7/1) 黄褐色ローム粒 (0195/0) (φ~5cm) 1%、浮石 (φ~3cm) 1%、炭化物 (φ~3cm) 微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) 明褐色土 (0195/0) (φ~10cm) 2%、炭化物 (φ~7cm) 1%、火山噴出物含有
 第3層 褐色土 (0194/0) 赤褐色土 (0192/2) 0%、暗褐色土 (0193/2) 0%、明赤褐色土 (0194/0) (φ~10cm) 2%
 第3b層 赤褐色土 (0192/2) 黒色土 (0192/1) 0%、暗褐色土 (0193/2) 0%、明赤褐色土 (0194/0) (φ~7cm) 2%、炭化物 (φ~3cm) 微量
 第4層 赤褐色土 (0192/2) 褐色ローム粒 (0194/1) (φ~10cm) 2%、明赤褐色土 (0194/0) (φ~10cm) 2%
 第5層 褐色土 (0192/1) 硬粘土層 褐色ローム粒 (0194/0) (φ~15cm) 0%、浮石 (φ~3m) 7%、炭化物 (φ~7m) 1%、明赤褐色土 (0194/0) (φ~5m) 微量

SK217

- 第1層 黒色土 (0192/1) 暗褐色土 (0193/2) 少量、浮石微量
 第2層 褐色土 (0191.7/1) 暗褐色土 (0193/0) 中量、浮石微量

SK218

- 第1層 褐色土 (0192/1) 褐色ローム粒 (0194/0) (φ1~5cm) 2%
 第2層 褐色土 (0192/2) 黄褐色ローム粒 (0195/0) (φ~5cm) 2%、浮石 (φ~3cm) 微量

SK220

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒 (φ1~5cm) 微量
 第2層 暗褐色土 (0193/2) ローム塊 (φ~10cm) 微量、ローム粒 (φ~1cm) 微量
 第3層 暗褐色土 (0193/1) ローム粒 (φ1~5cm) 微量

SK222

- 第1層 暗褐色土 (0193/2) 黄褐色土 (0195/0) 少量、ローム粒微量
 第2層 褐色土 (0194/0) ローム粒少量
 第3層 褐色土 (0194/0) ローム粒少量

SK223

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒 (φ~3cm) 少量、ローム塊 (φ5~10cm) 微量
 第2層 暗褐色土 (0193/0) ローム粒 (φ~3cm) 少量、ローム塊 (φ3~20cm) 微量

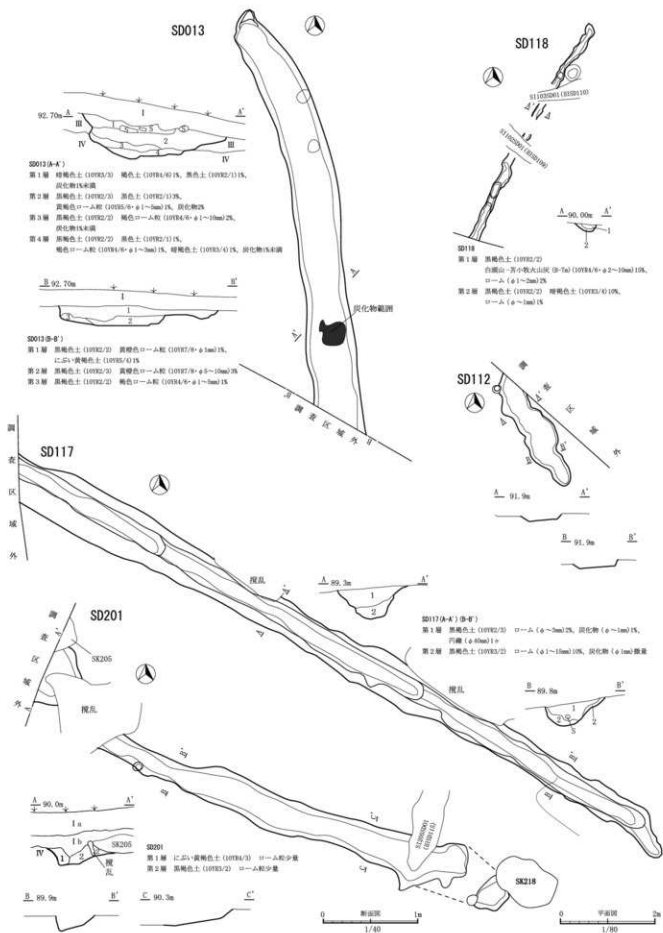
SK226(図 SK20)

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) 硬粘土層、暗褐色土 (0193/0) 7%、ローム粒 (φ~2cm) 微量、炭化物 (φ~3cm) 微量
 第2層 赤褐色土 (0192/2) 暗褐色土 (0193/0) 0%、ローム粒 (φ~3cm) 1%

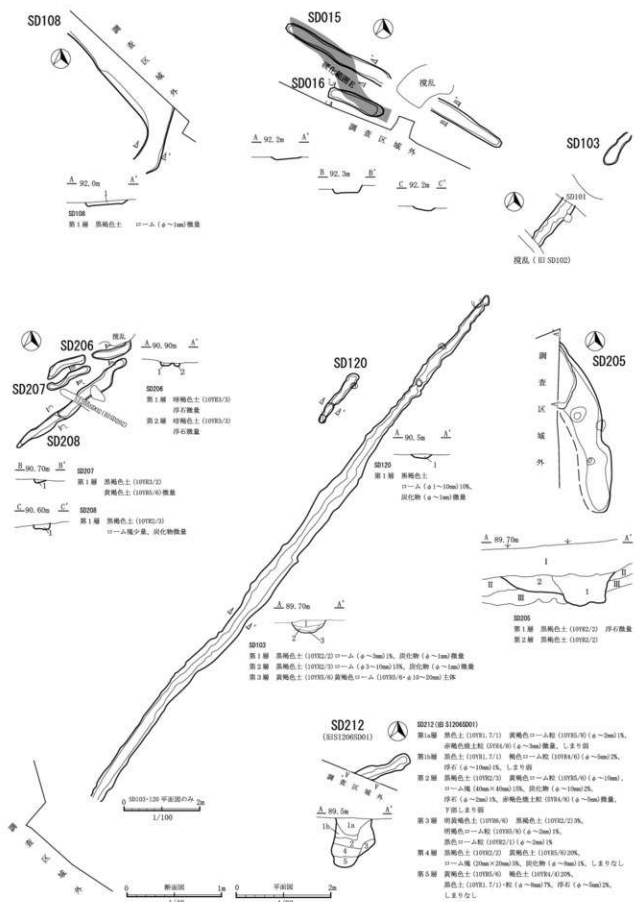
SK227(図 5320内 301)

- 第1層 赤褐色土 (0192/2) ローム粒微量、浮石微量

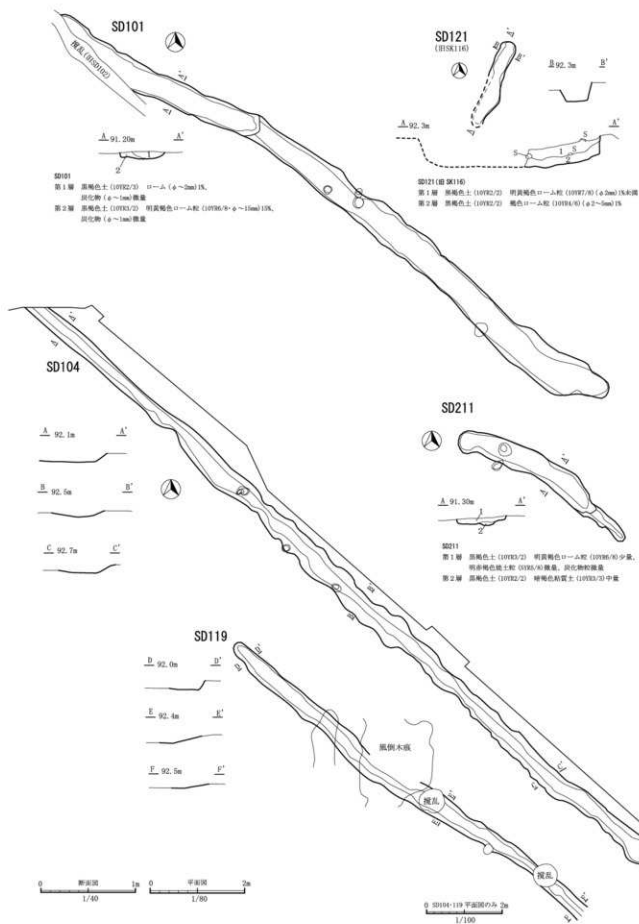
遺構図30 土坑 (SK119~227土層注記)



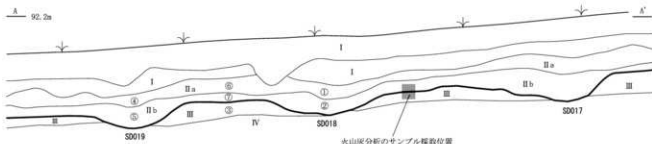
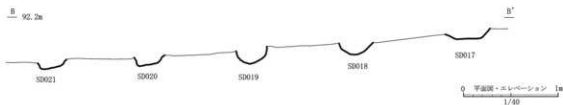
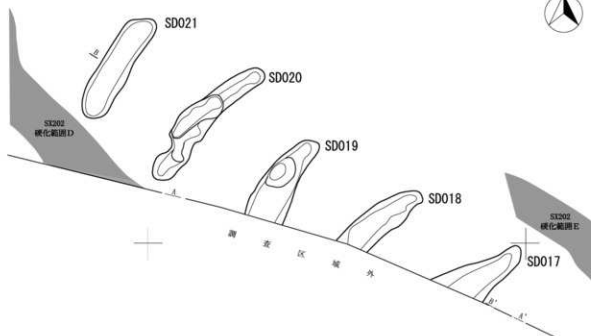
遺構図31 溝跡 (SD013・112・117~118・201)



遺構図32 溝跡 (SD015~016・103・108・120・205~208・212)



遺構図33 溝跡 (SD101・104・119・121・211)



SD017・SD018・SD019・SD020・SD021

第IIa層 黒褐色土 (10192/2) 黒褐色土 (10192/3) 10%

第IIb層 黒褐色土 (10192/2) 暗褐色土 (10193/2) 7%

第III層 黒褐色土 (10192/3) 黒褐色コアム (10193/4+φ5~30mm) 15%

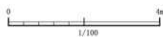
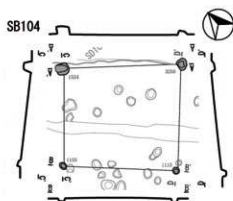
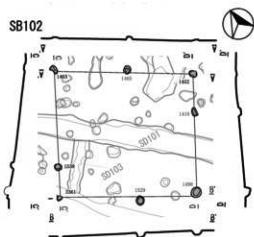
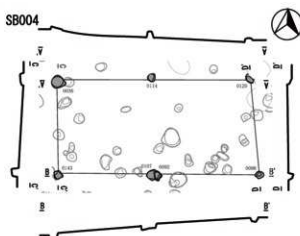
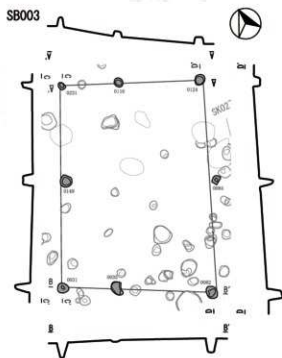
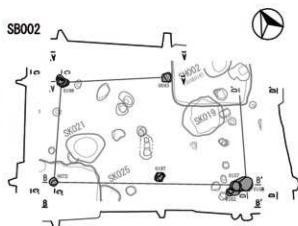
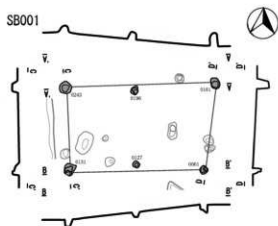
火山灰分析のサンプル採取位置

※丸付き番号は、プラント・オパール分析の
サンプル採取位置とサンプル番号を示す。

※土層断面図は反転している。

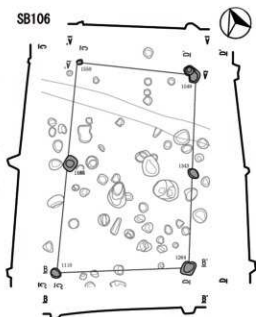


遺構図34 並列溝状遺構 (SD017・SD018・SD019・SD020・SD021)

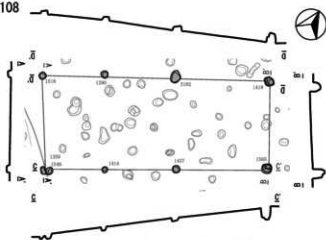


遺構図35 掘立柱建物跡 (SB001~SB004・102・104)

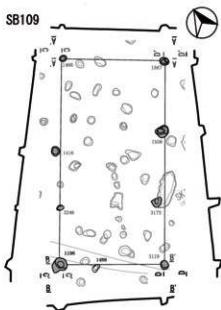
SB106



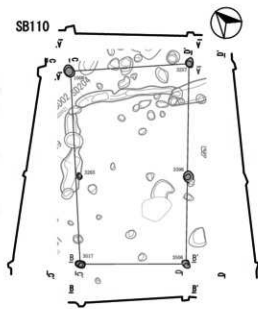
SB108



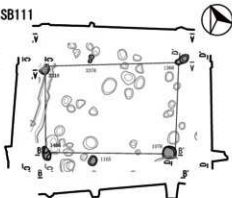
SB109



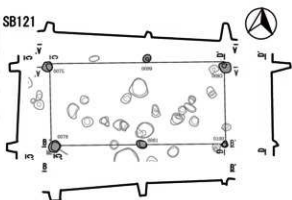
SB110



SB111

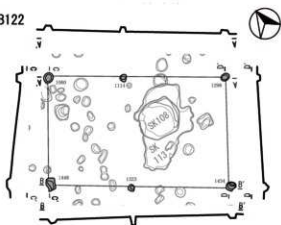


SB121

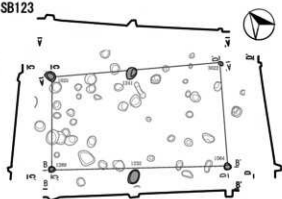


遺構図36 掘立柱建物跡 (SB106・108～111・121)

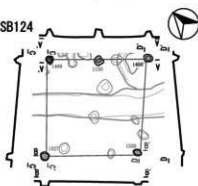
SB122



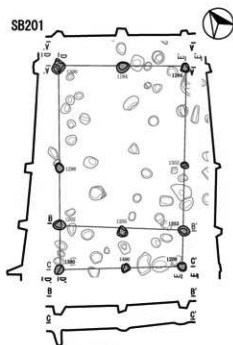
SB123



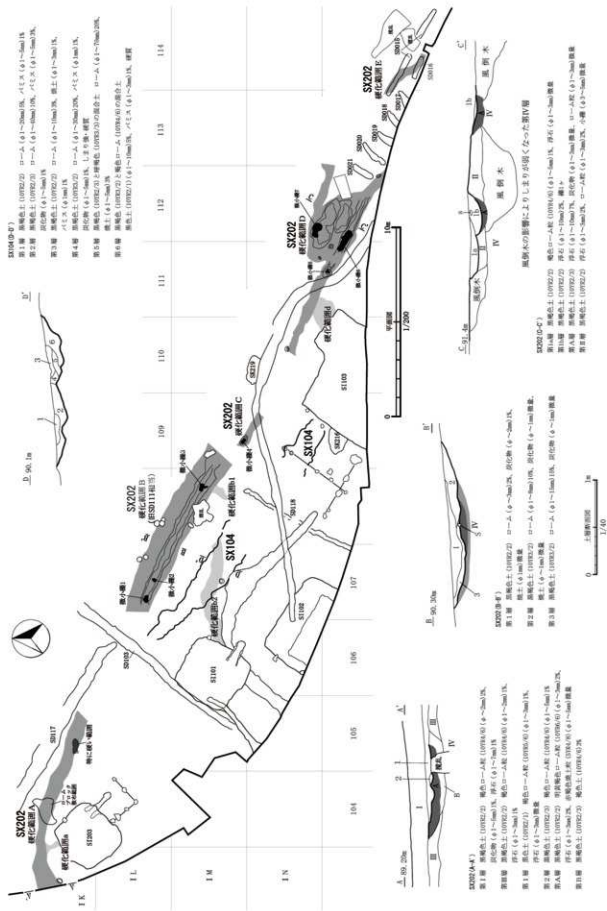
SB124



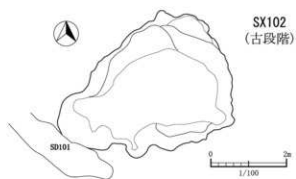
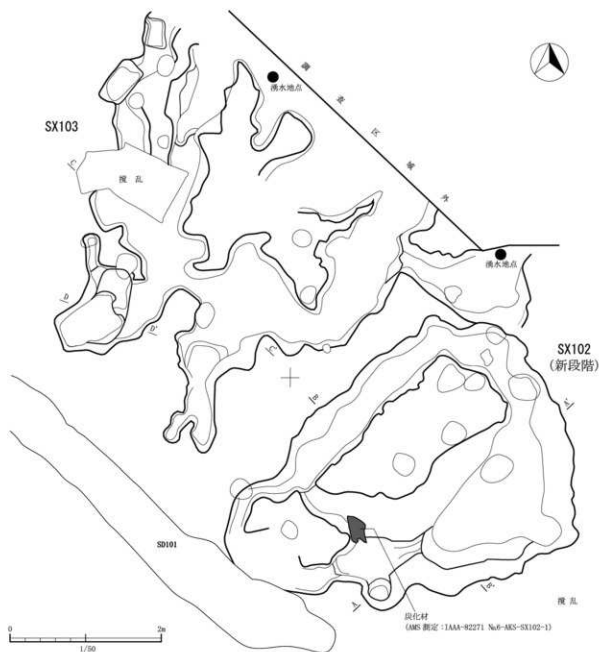
SB201



遺構図37 掘立柱建物跡 (SB122~124・201)

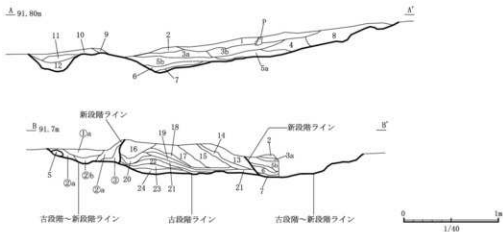


遺構図38 土壌硬化範囲(SX202)・用途不明遺構(SX104)



遺構図39 用途不明遺構(SX102・SX103)

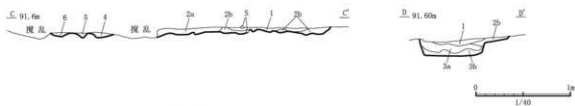
SX102



SX102 (A-F) (参考)

- 第1層 黒褐色土 (10192/3) ローム (φ~30cm)10%, 炭化物 (φ1~3cm)1%, パリス (φ~1cm)2%
- 第2層 黒褐色ローム (10193/4) (φ30~60cm) 暗褐色シルト (10193/3)10%, 粘土 (φ2~3cm)2%
- 第3a層 暗褐色土 (10193/3) ローム (φ1~10cm)2%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第3b層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ~2cm)1%, 炭化物 (φ~3cm)1%, パリス (φ~1cm)微量
- 第4層 黒褐色土 (10192/3) ローム (φ~40cm)1%, 炭化物 (φ~1cm)1%, パリス (φ~5cm)1%
- 第5a層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~3cm)1%, 炭化物 (φ~1cm)1%, パリス (φ~2cm)1%
- 第5b層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~10cm)1%, 炭化物 (φ~1cm)1%, パリス (φ~10cm)1%
- 第6層 にごい黄褐色ローム (10193/4) 暗褐色シルト (10193/3)10%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第7層 暗褐色土 (10193/4) ローム (φ~20cm)7%
- 第8層 黒褐色土 (10193/2) ローム (φ20~30cm)40%, 炭化物 (φ~3cm)2%, 粘土 (φ~2cm)1%, パリス (φ~5cm)0%
- 第9層 暗褐色土 (10193/3) ローム (φ~3cm)2%
- 第10層 黒褐色土 (10192/3) ローム (φ1~5cm)1%, パリス (φ~3cm)2%
- 第11層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~2cm)1%
- 第12層 黒褐色土 (10192/3) ローム (φ1~20cm)20%, パリス (φ~1cm)微量
- 第13層 明黄褐色ローム (10192/4) 黄褐色ローム粒 (10193/4) (φ1~3cm)2%, 灰白色粒 (φ.5/3/3) (φ1~5cm)1%
- 第14層 暗褐色土 (10193/4) 明黄褐色ローム (10196/4) まだらに1%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~2cm)2%, 灰白色粒 (φ.5/3/3) (φ1~2cm)1%, 炭化物微量
- 第15層 黄褐色ローム (10193/4) 暗褐色粒状 (10193/4) (φ2~10cm)7%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~10cm)2%, 灰白色粒 (φ.5/3/3) (φ2~10cm)2%
- 第16層 明褐色ローム (10197/4) にごい黄褐色粘土ブロック (10197/4) (φ60cm)15%, 黄褐色ローム (10195/4)30%, 暗褐色 (10193/4)10%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~2cm)2%
- 第17層 黄褐色ローム (10193/4) 褐色土 (10192/3)1%, 明黄褐色粒 (10196/4) (φ1~2cm)1%, 灰白色粒 (φ.5/3/3) (φ3cm)1%
- 第18層 褐色ローム (10194/4) 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~5cm)10%, 黒褐色粒状 (10192/3) (φ10~20cm)1%
- 第19層 褐色ローム (10194/4) 黒褐色土 (10192/3)40%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~5cm)2%
- 第20層 黒褐色ローム (10194/4) 黒褐色土 (10192/3)20%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~2cm)1%, 赤褐色粒 (φ.5/4/4) (φ2cm)1%微量
- 第21層 黄褐色ローム (10193/4) 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~10cm)1%, 黒褐色土 (10192/3)2%, 炭化物微量
- 第22層 黒褐色土 (10192/3) 黄褐色ローム (10193/4) (φ1~5cm)1%, 明黄褐色ローム粒 (10196/4) (φ1~2cm)2%
- 第23層 黄褐色ローム (10193/4) 黒褐色土 (10192/3)20%, 明黄褐色ローム (10196/4)7%
- 第24層 黒褐色土 (10192/2) 明褐色ロームブロック (φ.5/5/5) (φ30~60cm)10%, 黄褐色ロームブロック (10195/4) (φ20~30cm)10%
- 第25a層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~5cm)2%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第25b層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~10cm)10%, 炭化物 (φ1~2cm)1%, 粘土 (φ~1cm)微量
- 第26層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ~5cm)2%, 炭化物 (φ~2cm)2%, 粘土 (φ1cm)1%, 砂質
- 第27層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ1~20cm)10%, 炭化物 (φ~1cm)微量, 砂質
- 第4層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ~20cm)10%
- 第5層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ1~10cm)1%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第6層 暗褐色土 (10192/2) ローム (φ~10cm)10%, 炭化物 (φ~1cm)微量, 粘土 (φ~1cm)微量

SX103

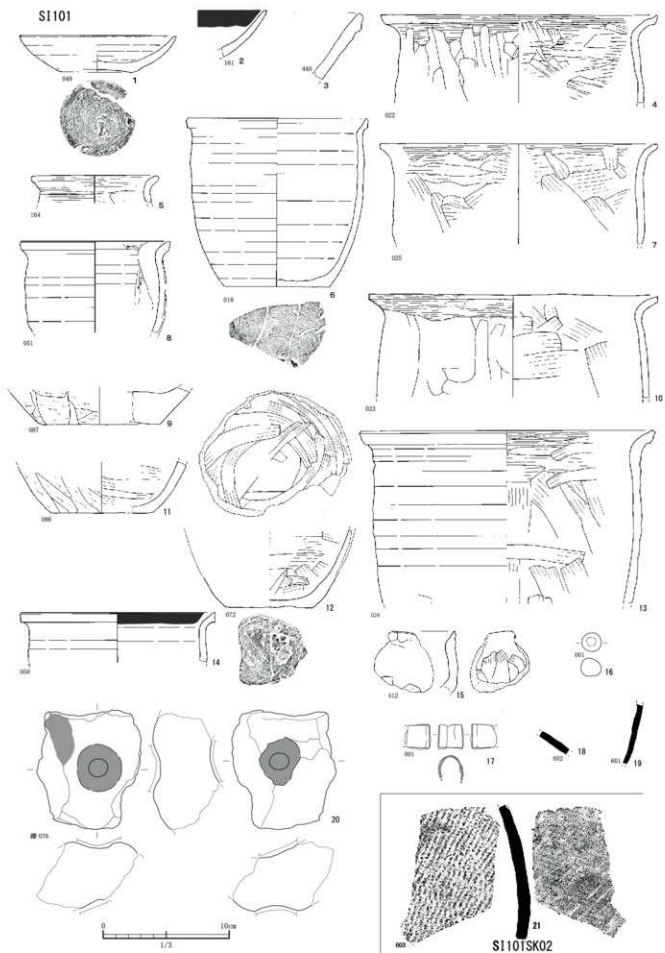


SX103 (A-F) (参考)

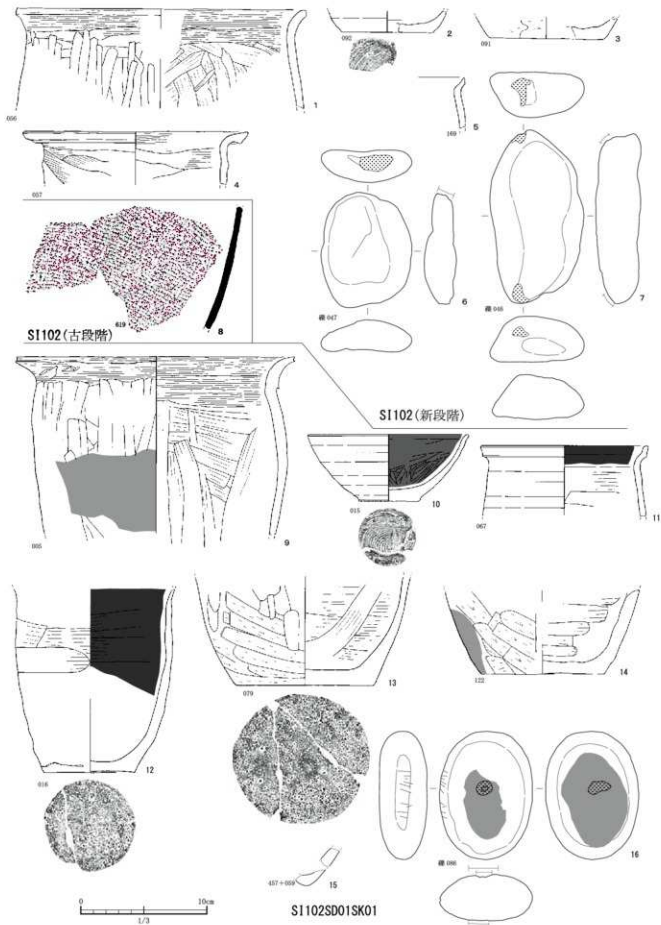
- 第1層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ~5cm)2%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第2a層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ1~10cm)7%, 炭化物 (φ1~2cm)1%, 粘土 (φ~1cm)微量
- 第2b層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ1~20cm)10%, 炭化物 (φ1~2cm)2%
- 第3a層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ~5cm)2%, 炭化物 (φ~2cm)2%, 粘土 (φ1cm)1%, 砂質
- 第3b層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ1~20cm)10%, 炭化物 (φ~1cm)微量, 砂質
- 第4層 暗褐色土 (10192/3) ローム (φ~20cm)10%
- 第5層 黒褐色土 (10192/2) ローム (φ1~10cm)1%, 炭化物 (φ~1cm)微量
- 第6層 暗褐色土 (10192/2) ローム (φ~10cm)10%, 炭化物 (φ~1cm)微量, 粘土 (φ~1cm)微量

遺構図40 用途不明遺構 (SX102・SX103)

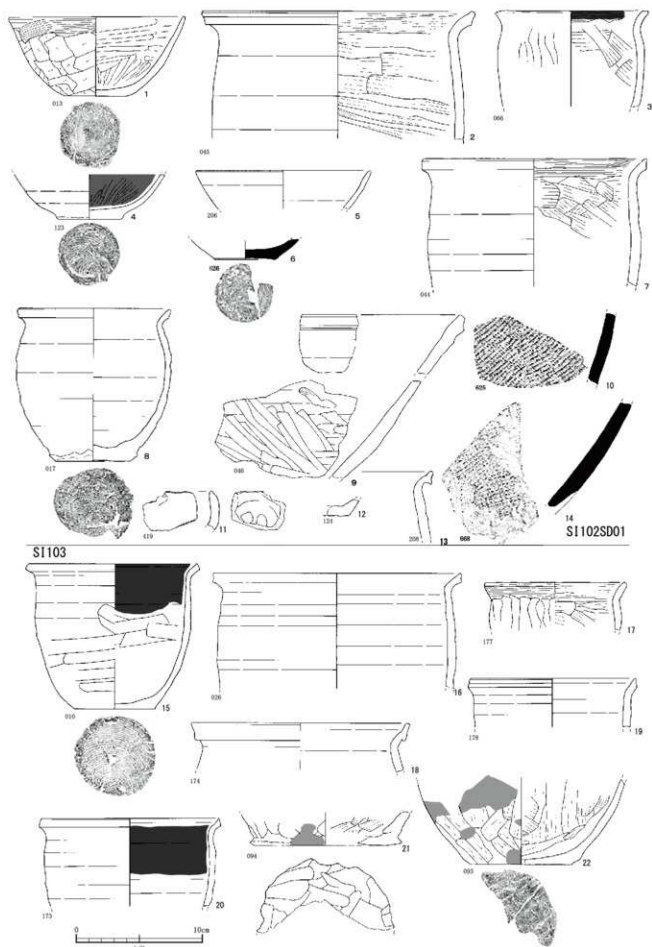
遺物実測図



遺物図 1 竪穴建物跡出土遺物 (S1101)

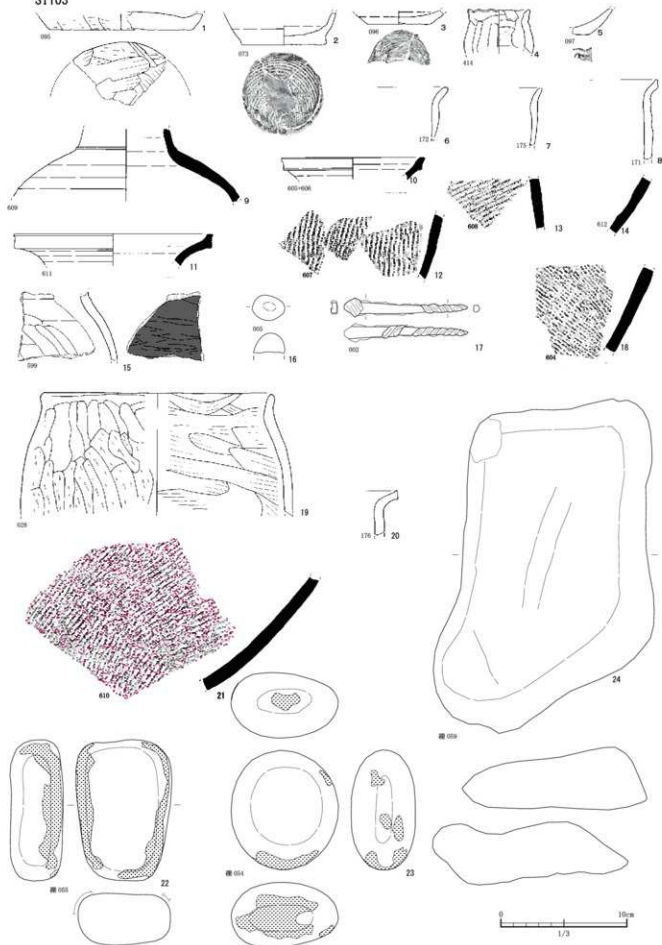


遺物圖2 竪穴建物跡出土遺物 (SI102)



遺物図3 竪穴建物跡出土遺物 (S1102・S1103)

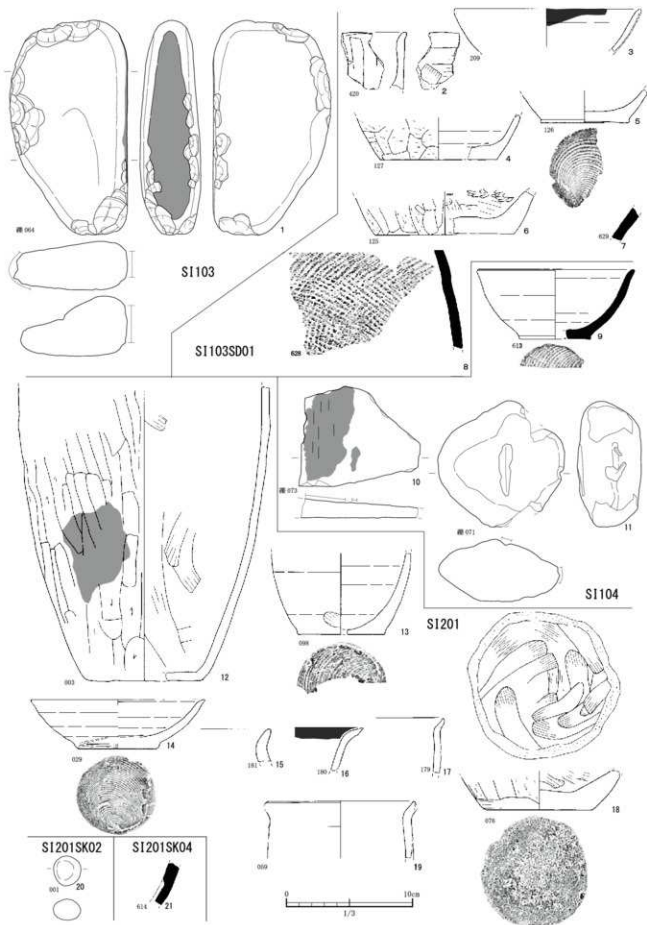
SI103



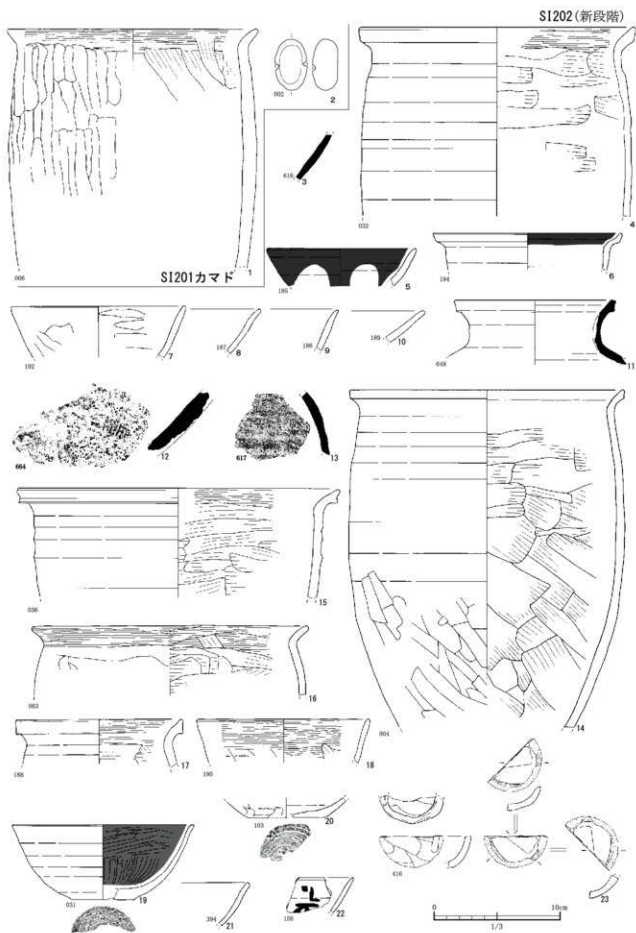
遺物図4 竪穴建物跡出土遺物 (SI103)



遺物圖5 竪穴建物跡出土遺物 (S1103)

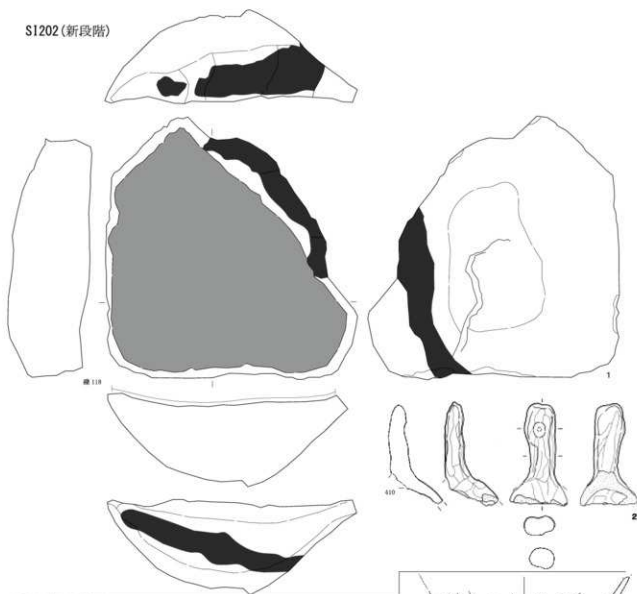


遺物圖 6 竪穴建物跡出土遺物 (SI103・104・201)

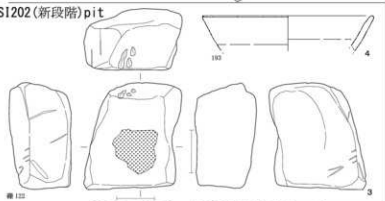


遺物図 7 竪穴建物跡出土遺物 (SI201・SI202新段階)

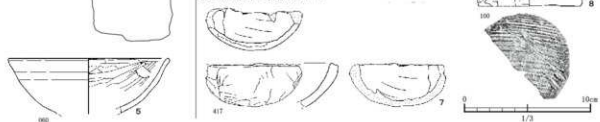
S1202(新段階)



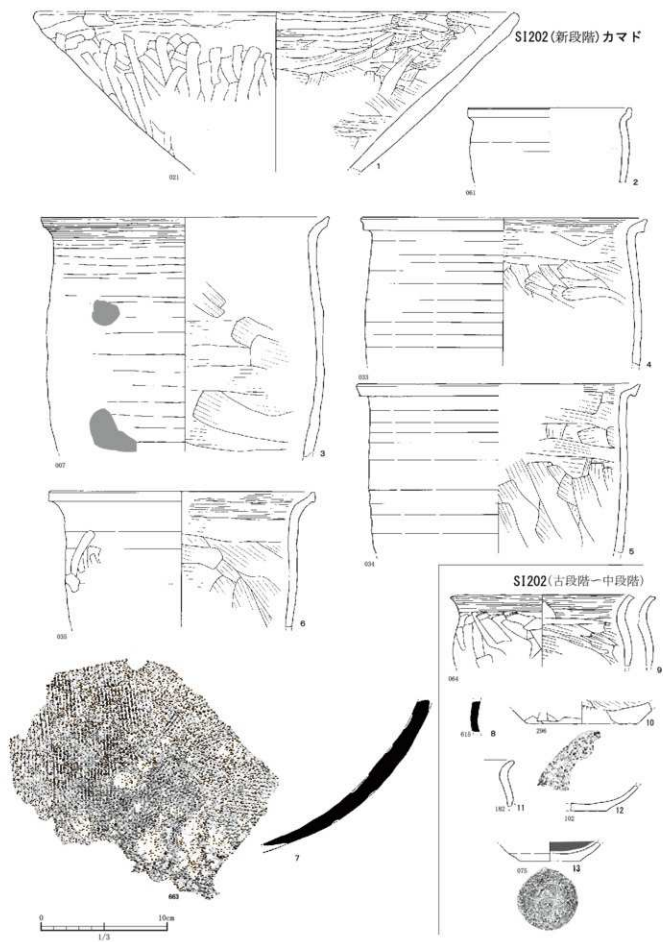
S1202(新段階)pit



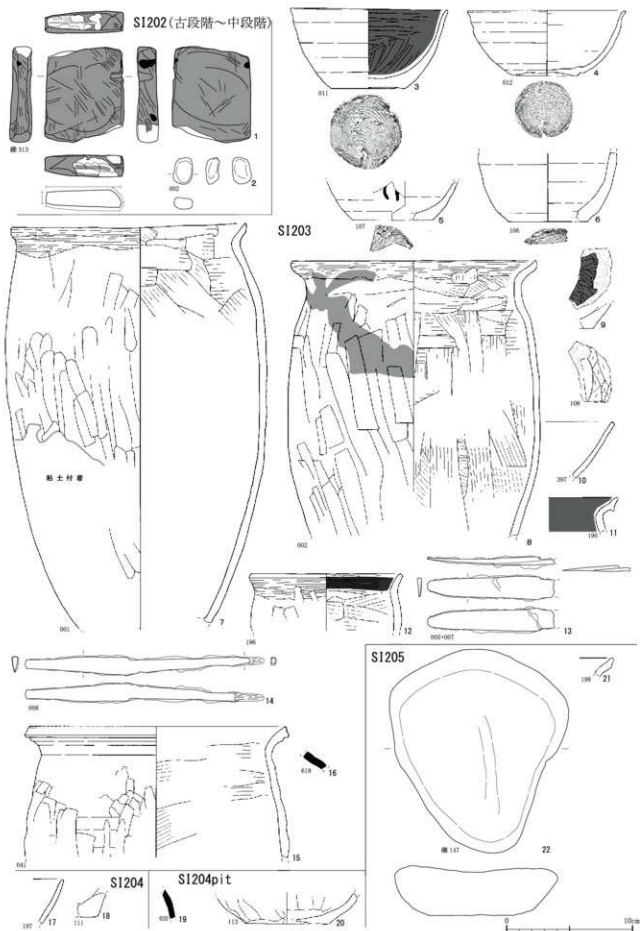
S1202(新段階)カマド



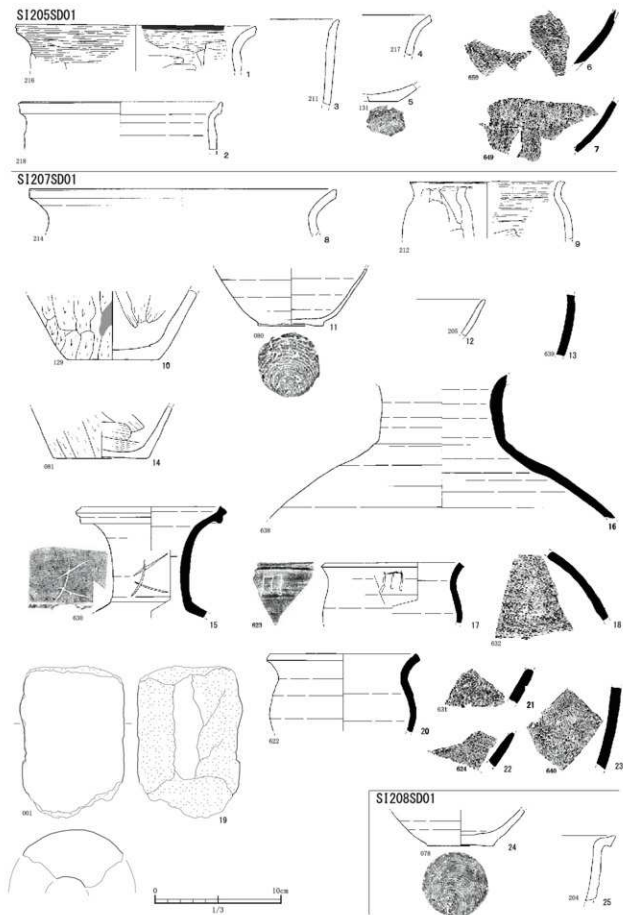
遺物図8 竪穴建物跡出土遺物 (S1202)



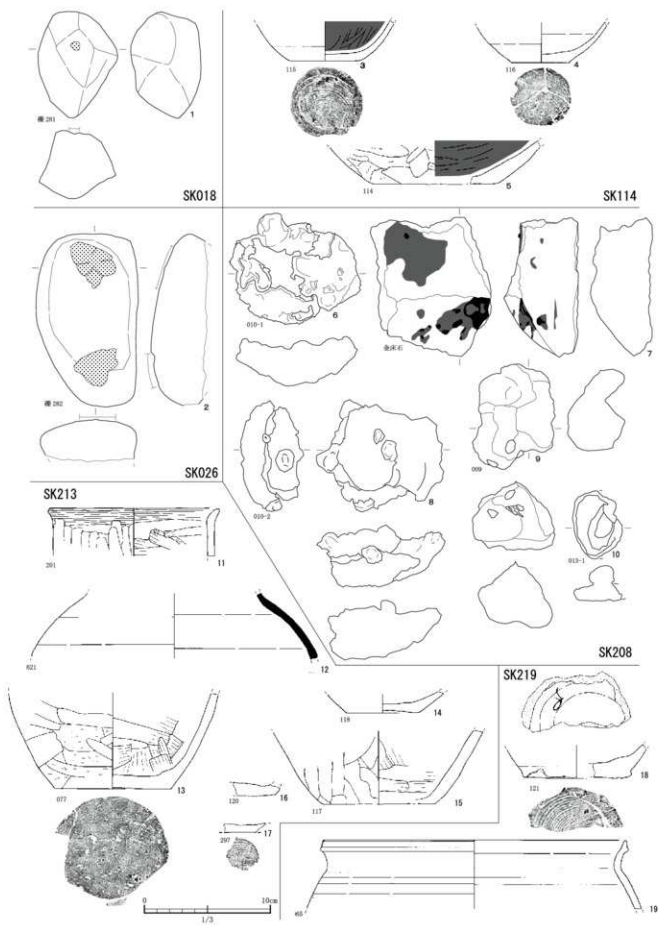
遺物図9 竪穴建物跡出土遺物 (SI202新段階・古段階～中段階)



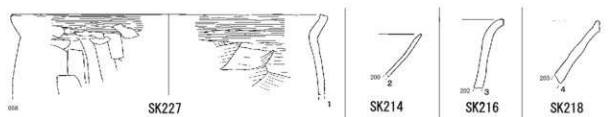
遺物圖10 竪穴建物跡出土遺物 (SI202古段階～中段階・SI203・SI204・SI205)



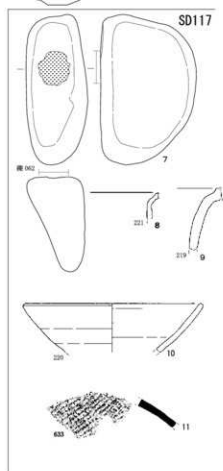
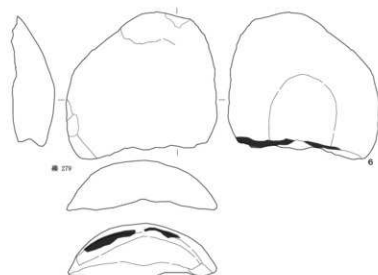
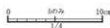
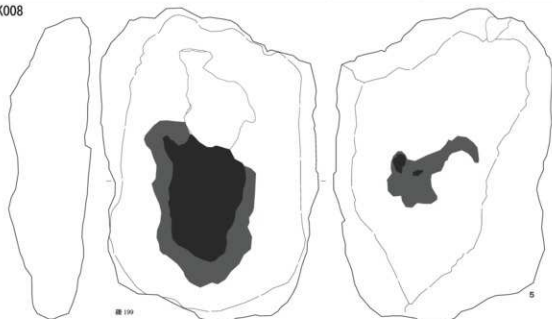
遺物図11 竪穴建物跡出土遺物 (S1205・207・208)



遺物圖12 土坑出土遺物 (SK018・026・114・208・213・219)

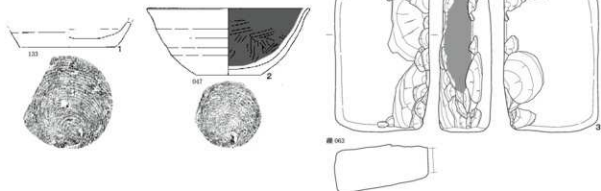


SK008

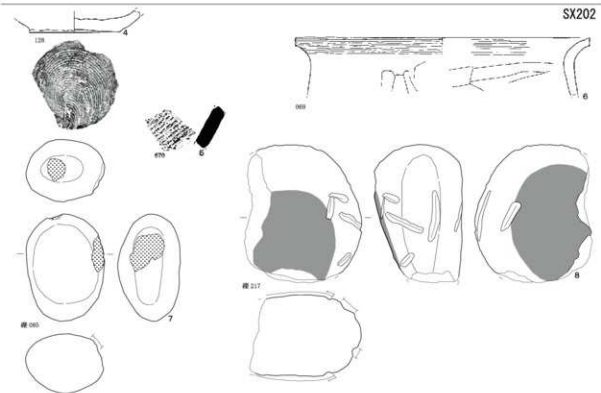


遺物圖13 土坑・溝跡出土遺物 (SK008・214・216・218・227・SD117)

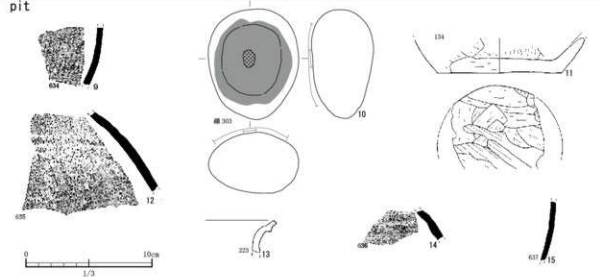
SX102



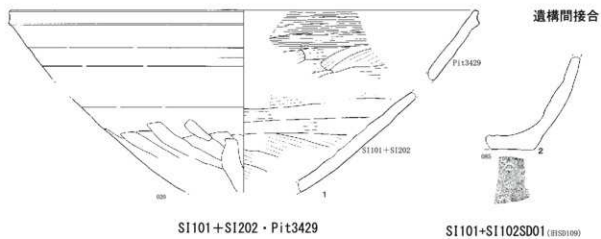
SX202



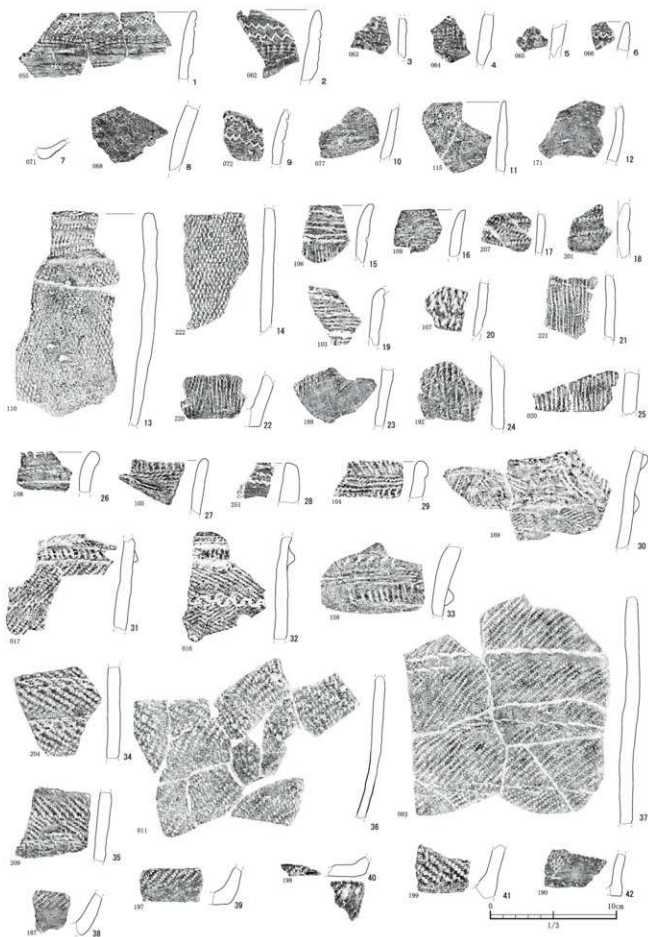
pit



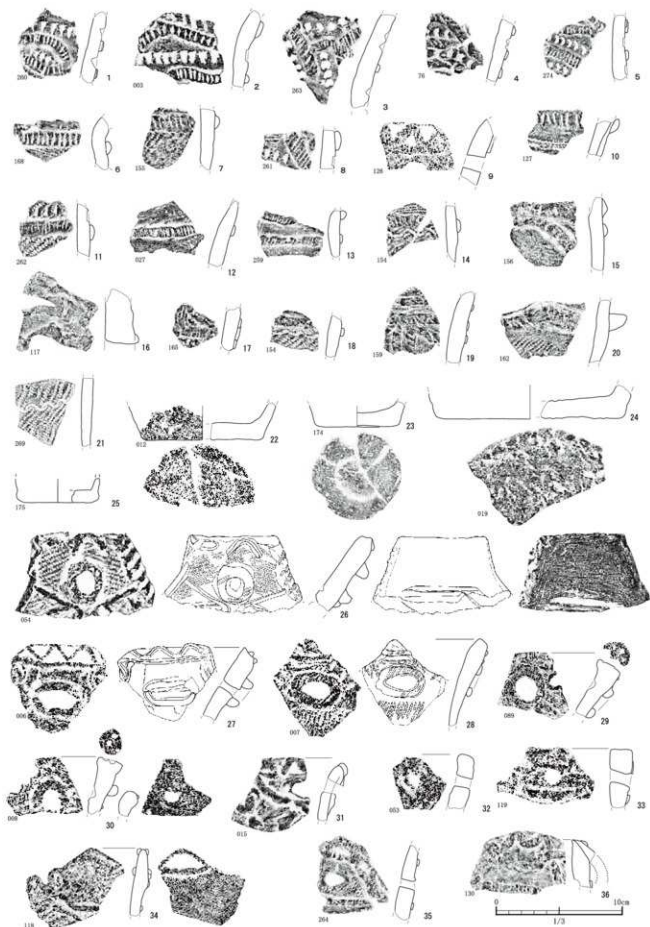
遺物圖14 用途不明遺構・柱穴出土遺物 (SX102・SX202・pit)



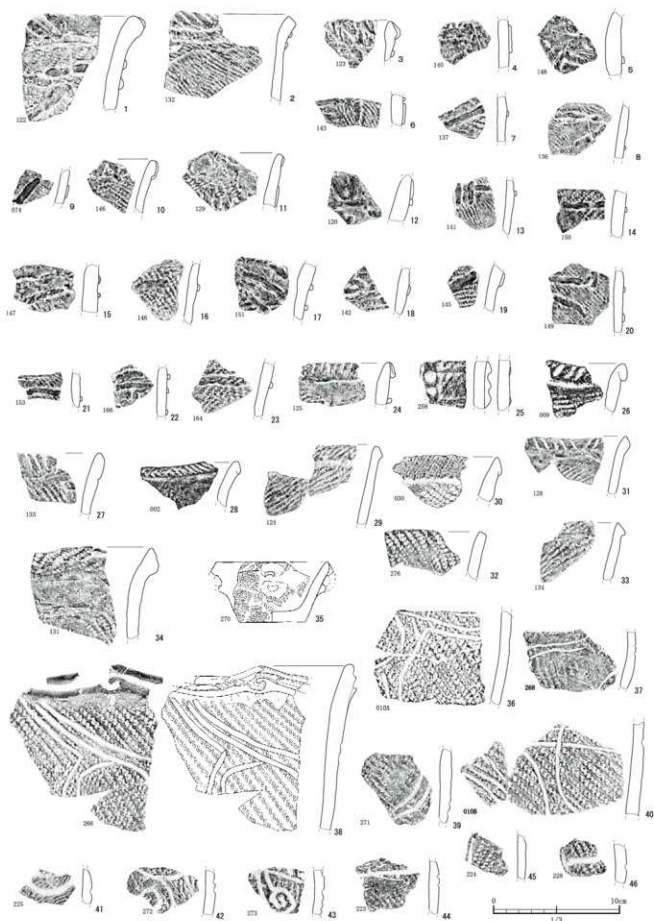
遺物図15 遺構間接合遺物



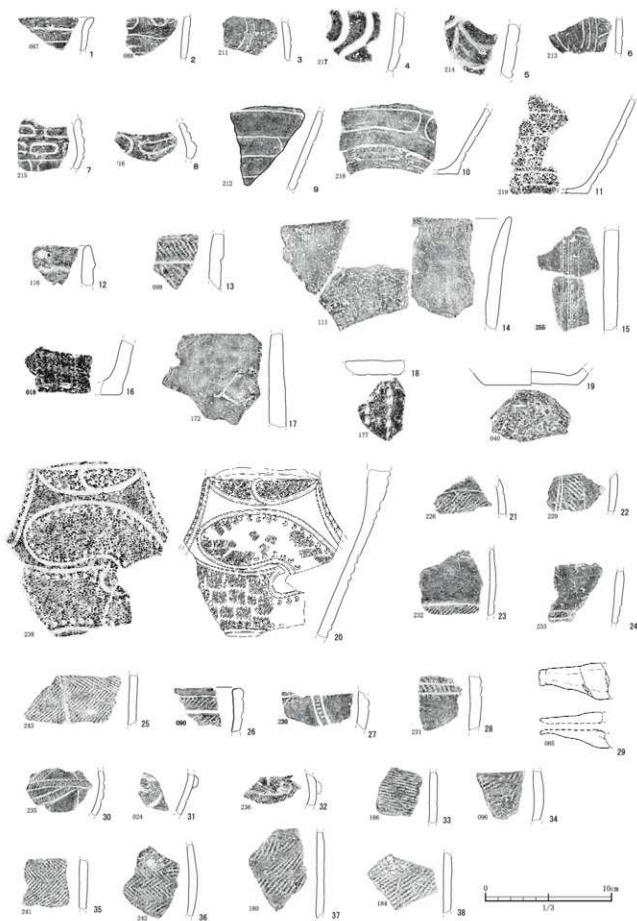
遺物図16 遺構外出土遺物（縄文時代）



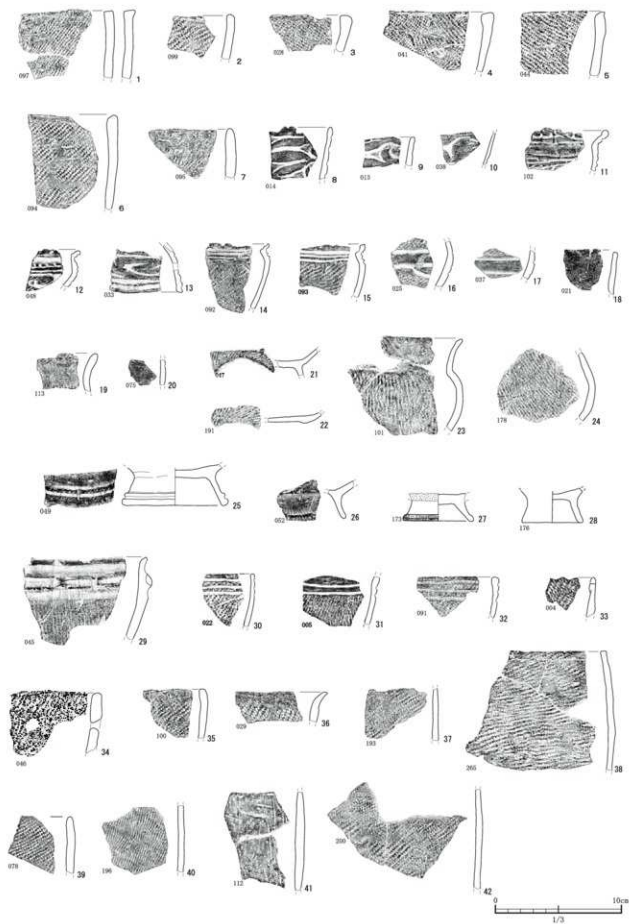
遺物図17 遺構外出土遺物（縄文時代）



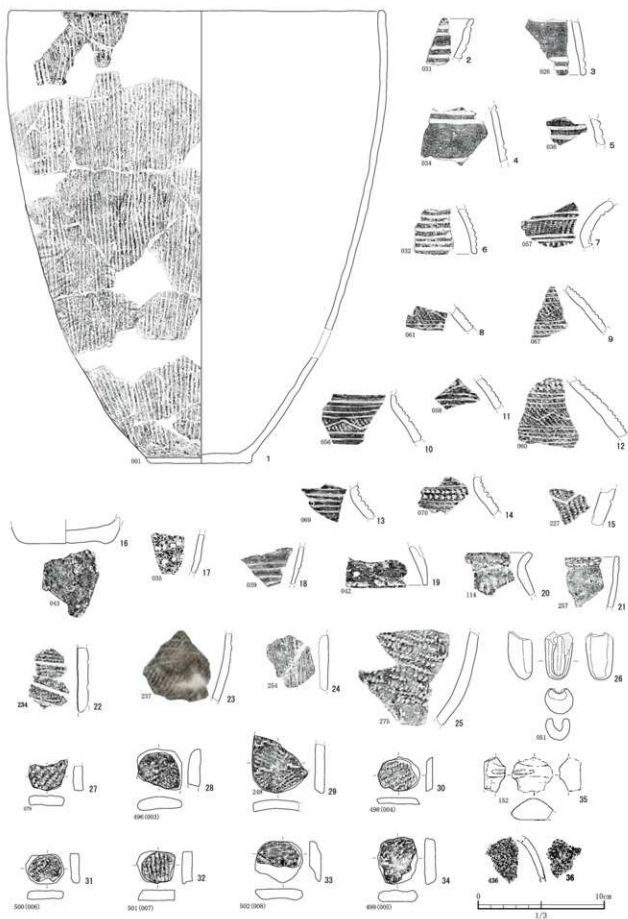
遺物図18 遺構外出土遺物 (縄文時代)



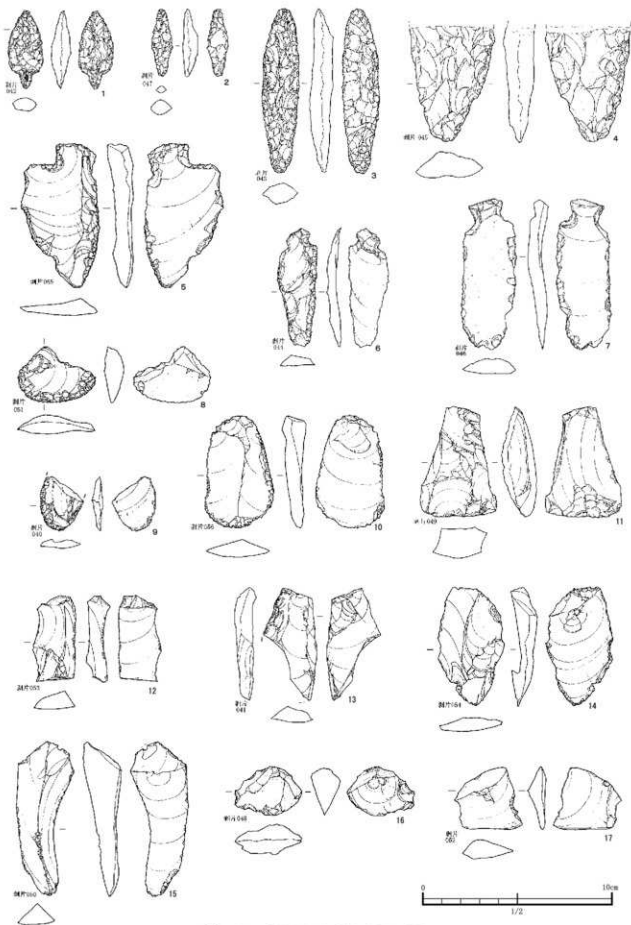
遺物図19 遺構外出土遺物 (縄文時代)



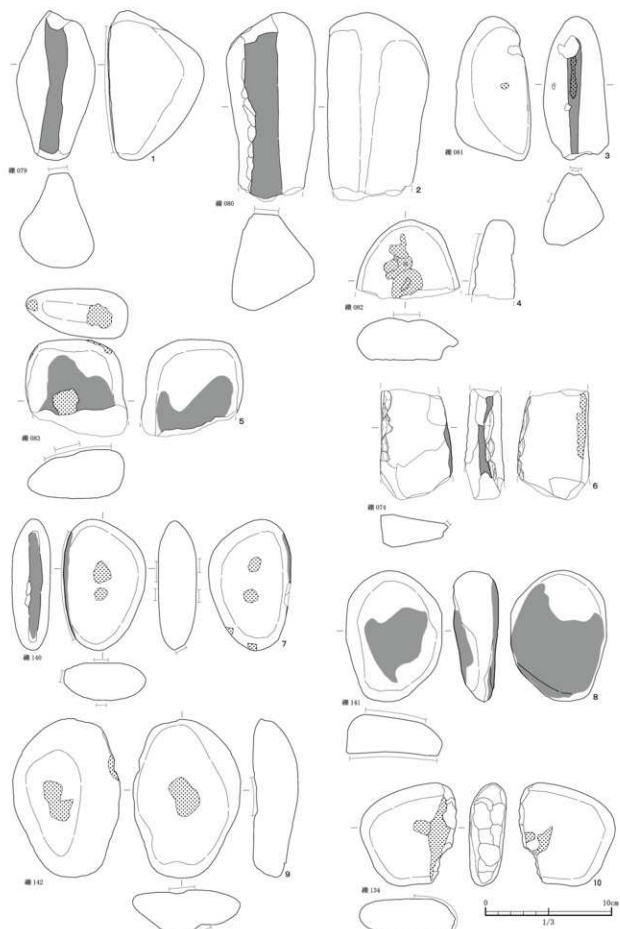
遺物図20 遺構外出土遺物（縄文時代）



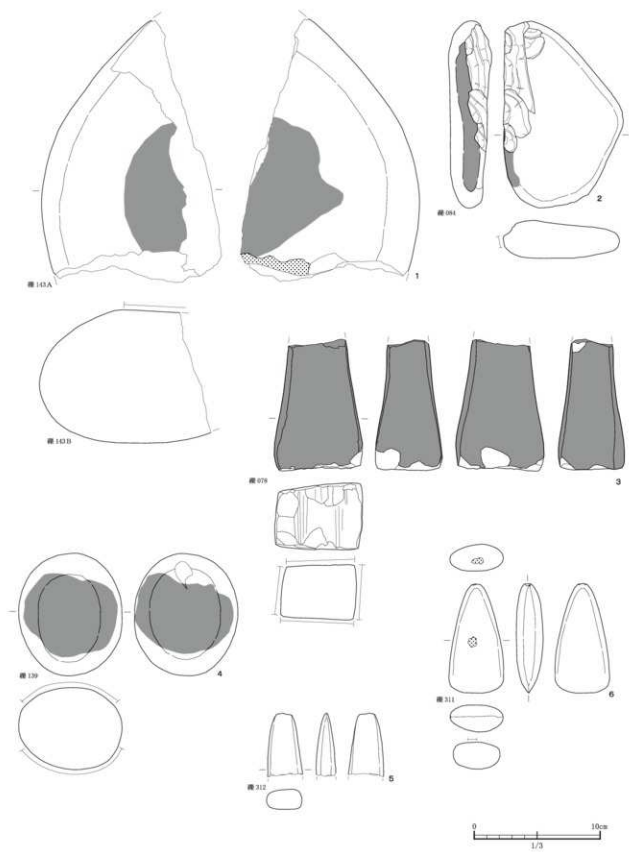
遺物図21 遺構外出土遺物（縄文時代・弥生時代・古墳時代か）



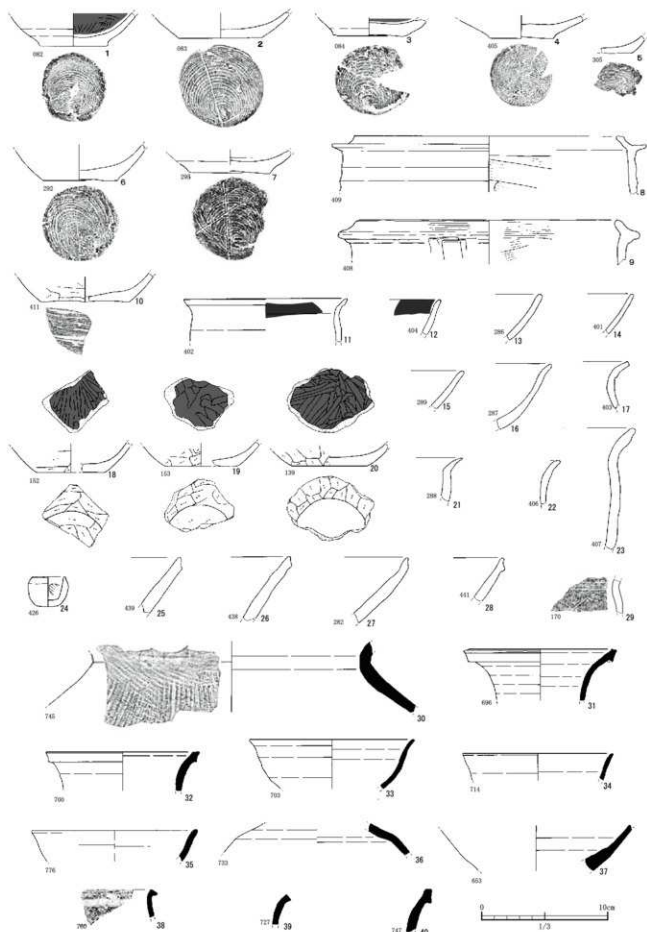
遺物図22 遺構外出土遺物(縄文時代)



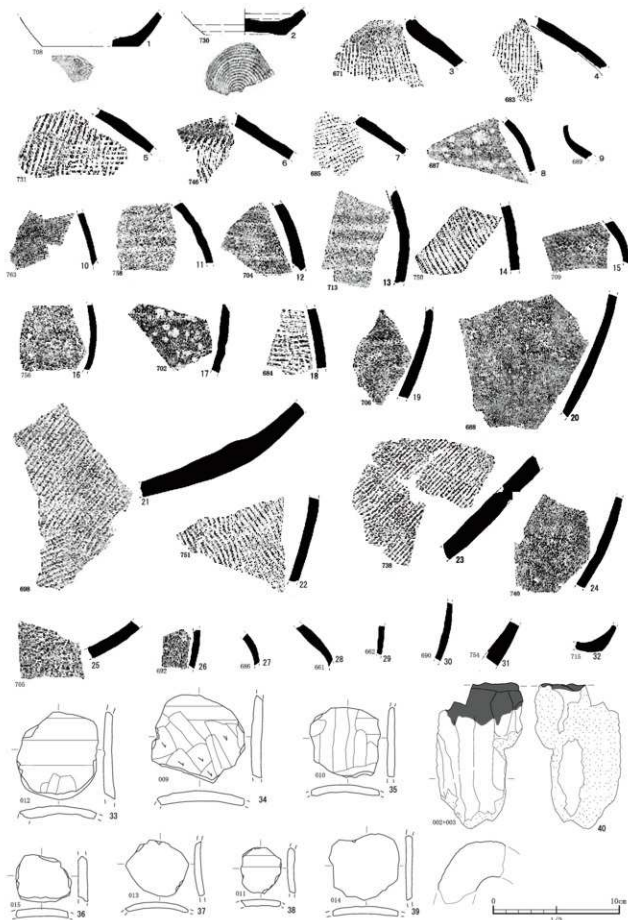
遺物圖23 遺構外出土遺物（縄文時代・平安時代）



遺物図24 遺構外出土遺物（縄文時代・平安時代）



遺物図25 遺構外出土遺物（平安時代）



遺物図26 遺構外出土遺物(平安時代)

検出遺構一覽表

検出遺構一覧表(2)

遺構種別	遺構名	遺構 面	写 真	グリッド	長さ 長(m)	幅 幅(m)	深さ 深(m)	本遺構より右	本遺構より左	新旧不明	本遺構より新	遺構 上層	埋 込
土	SK206	27	29	1F-104・105	253 (131)	34	---	---	---	---	---	---	---
	SK209	27	29	1F-103・104	101	57	12	---	---	---	---	---	---
	SK210	27	29	1F-107	43	49	---	---	---	---	---	---	---
	SK211	27	29	1F-107・108	43	49	---	---	---	---	---	---	---
	SK213	29	31	1G-106・107	650	237	30	---	---	---	---	---	---
	SK214	29	31	1G-106・107	115	77	18	---	---	---	---	---	---
	SK215	29	31	1F-106	161	67	10	---	---	---	---	---	---
	SK216	29	31	1F-109	142	91	23	---	---	---	---	---	---
	SK217	29	31	1F-107	93	73	28	---	---	---	---	---	---
	SK218	29	31	1F-103・106	134	90	12	---	---	---	---	---	---
	SK219	29	31	1F-103・104	98	91	16	---	---	---	---	---	---
	瓦	SK220	29	31	1F-103・104	98	91	16	---	---	---	---	---
SK221		29	31	1F-103・105	133	139	6	---	---	---	---	---	---
SK222		29	31	1F-103・106	103	174	20	---	---	---	---	---	---
SK223		29	31	1F-103・106	121	96	16	---	---	---	---	---	---
SK224		29	31	1F-105	170	68	22	---	---	---	---	---	---
SK225		29	31	1F-106	250	173	6	---	---	---	---	---	---
SK226 (HNS201)		29	31	1F-104	108	59	12	---	---	---	---	---	---
SK227 (HNS203)		29	31	1F-104	96	52	12	---	---	---	---	---	---
SK228		32	32	1F-103・115	69	62	40	---	---	---	---	---	---
SK229		32	32	1F-113	109	116	1F-115	---	---	---	---	---	---
SK230		32	32	1F-114	121	29	4	---	---	---	---	---	---
溝		SK231	33	---	1F-107	11	---	---	---	---	---	---	---
	SK232	33	---	1F-105	1K-106	1J-107	1J-108	---	---	---	---	---	---
	SK233	33	---	1F-105	1K-106	1J-107	1J-108	---	---	---	---	---	---
	SK234	33	---	1F-105	1K-106	1J-107	1J-108	---	---	---	---	---	---
	SK235	33	---	1F-106	1E-1F-107	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK236	31	22	1G-108	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK237	31	22	1F-103	1J-1K-104	1K-105	1K-110	---	---	---	---	---	---
	SK238	31	23	1F-108	1V-106	1F-107-108	---	---	---	---	---	---	---
	SK239	33	23	1K-112	1L-1F-113	1F-114	---	---	---	---	---	---	---
	SK240	31	23	1K-107	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK241 (HNS116)	33	---	1F-113	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	跡	SK242	31	23	1F-103	---	---	---	---	---	---	---	---
SK243		32	---	1F-103	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK244		32	---	1F-106	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK245		32	---	1F-106	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK246		32	---	1F-106	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK247		32	---	1F-105-106	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK248		33	---	1F-107	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK249		32	---	1V-10-106	1V-10-107	---	---	---	---	---	---	---	---
SK250		34	23	1F-113	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK251		34	23	1F-113	---	---	---	---	---	---	---	---	---
SK252		34	23	1F-113	---	---	---	---	---	---	---	---	---
埋込遺構		SK253	29	---	1F-105	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK254	29	---	1F-105	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK255	29	---	1F-103	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK256	29	---	1F-110	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK257	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK258	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK259	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK260	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK261	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK262	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	SK263	29	---	1F-109	---	---	---	---	---	---	---	---	---
	埋込不明	SK264	38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---
SK265		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK266		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK267		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK268		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK269		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK270		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK271		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK272		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK273		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---
SK274		38	27	1F-106・107	1F-106-108	1V-108・109	1F-109	---	---	---	---	---	---

竪穴建物跡一覧表

竪穴建物跡	付随遺構	図	写真	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	備 考
SI101	竪穴部新段階	1	7	325.0	340.0	50.0	
	竪穴部古段階	1	7	-	-	70.0	
	P101	1		30.4	28.9	33.6	
	P102	1	7	44.1	30.6	19.2	
	P103	1		24.7	21.0	43.2	
	P104	1		20.6	17.0	33.6	
	P105	1	7	31.9	15.5	33.0	
	P106	1		21.8	18.0	36.6	
	P107	1		17.8	14.0	16.8	
	SD01	1	7	(294.5)	56.6	105.6	
SI102	竪穴部新段階	4	8	485.0	(385)	18.0	
	竪穴部古段階	4	8	365.0	(315)	33.0	
	P101	4		33.3	15.7	22.2	
	P102	4		32.2	21.2	24.6	
	P103	4		16.8	14.6	51.0	
	P104	4		38.1	26.7	29.4	
	P105	4		23.5	14.6	8.4	
	P106	4		26.0	20.7	16.2	
	P107	4		11.0	6.6	18.0	
	P108	4		8.0	5.9	19.2	
SI103	竪穴部本体	8	10	530.0	(420)	40.0	
	竪穴部露出部	8	12	225.0	68-100	40.0	
	P101	8		28.7	18.3	22.8	
	P102	8		30.3	25.4	60.4	
	P103	8		28.4	18.9	36.0	
	P104	8		28.4	27.5	43.2	
	P105	8		31.0	27.9	8.4	
	P106	8		41.1	31.4	4.2	
	P107	8		2.1	13.6	18.0	
	P108	8		15.3	9.4	4.8	
SI104	竪穴部	10	13	270.0	215.0	45.0	
	SD01	10	13	113.5	57.5	19.8	
	竪穴部本体	11	14	430.0	-	-	
	竪穴部露出部	11	14	185.0	75.0	-	
	P101	11		17.5	13.6	44.4	
	P102	11		24.0	21.1	61.8	
	P103	11		18.1	15.3	21.0	
	P104	11		46.2	(31.5)	15.0	
	P105	11		18.3	(11.6)	7.2	
	P106	11		29.7	22.6	15.0	
SI201	P107	11		19.8	16.5	12.0	
	P108	11		25.8	17.7	22.2	
	P109	11		24.7	13.3	25.2	
	P110	11		25.1	22.1	27.6	
	P111	11		25.2	23.8	21.0	
	P112	11		23.0	17.5	13.8	
	P113	11		29.0	25.2	19.2	
	P114	11		35.1	25.8	23.4	
	P115	11		27.7	21.7	24.6	
	P116	11		30.7	24.9	22.2	
SI202	新段階	13	15	616.0	560.0	10.0	
	中段階-1	13	15	505.0	475.0	25.0	
	中段階-2	13	15	505.0	515.0	25.0	
	古段階-1	13	15	(340)	-	25.0	
	古段階-2	13	15	(450)	-	25.0	
	P1101	13		23.7	21.7	74.4	
	P1102	13	15	39.1	23.0	28.2	
	P1103	13		45.9	36.5	10.2	
	P1104	13		45.1	36.0	16.8	
	P1105	13		32.1	26.4	13.2	
SI203	P1106	13		47.6	31.1	15.6	
	P1107	13		37.0	31.8	13.2	
	P1108	13		46.6	30.9	37.8	
	P1109	13		25.7	29.0	10.8	
	P1110	13		48.9	44.2	47.4	
	P1111	13		39.3	24.5	36.6	
	P1113	13		19.0	9.3	4.8	
	P1114	13		42.9	33.9	13.2	
	P1115	13		39.2	34.9	13.2	
	SD01	13		53.1	39.4	24.0	
SI204	竪穴部新段階	17	17	290.0	315.0	43.0	
	竪穴部古段階	17	17	-	-	58.0	
	SD01	17	17	58.0	60	50.0	
	竪穴部	20	16	500.0	-	-	
	SD01	20	16	85.0	58.9	15.6	
	P101	20	16	71.0	70.0	39.0	
	P102	20		42.0	36.1	13.2	
	P103	20		64.9	57.7	36.6	
	P104	20		56.7	39.8	34.2	
	P105	20		28.9	21.0	30.0	
SI205	P106	20		33.8	34.0	34.0	
	P107	20		49.3	36.3	25.2	
	P108	20		33.3	24.6	13.8	
	P109	20		28.7	21.3	6.3	
	P110	20		33.9	26.0	8.2	
	P111	20		84.7	61.5	24.6	
	P112	20		26.0	21.4	12.0	
	P113	20		32.8	22.9	19.2	
	竪穴部	23	19	440.0	425.0	15.0	
	P1101	23		33.0	26.0	28.8	
SI207	P1102	23		26.0	23.0	18.6	
	P1103	23		26.0	25.0	22.8	
	P1104	23		20.0	10.0	4.0	
	P1105	23		46.0	22.0	4.0	
	P1106	23		22.0	16.0	19.2	
	P1107	23		31.0	24.0	22.8	
	P1108	23		37.0	32.0	26.4	
	SD01	23		39.0	49.0	13.0	
	竪穴部	24		(375)	(360)	-	
	P1101	24		34.0	24.0	22.8	
SI208	P1102	24		28.0	25.0	20.4	
	P1103	24		29.0	25.0	10.2	
	P1104	24		31.0	26.0	13.2	
	P1105	24		(20.0)	(15.0)	13.2	
	P1106	24		29.0	27.0	16.8	
	P1107	24		27.0	17.0	6.6	
	P1108	24		28.0	25.0	25.2	
	P1109	24		29.0	28.0	18.0	
	P1110	24		14.0	7.0	23.4	
	P1111	24		17.0	16.0	12.0	
SI209	SD01(SD105)	24		(391.0)	(62.0)	23.0	
	SD01(SD107)	24		(709.0)	(82.0)	24.0	
	竪穴部	25		(375)	(400)	-	
	P1101	25		27.0	23.0	9.6	
	P1102	25		31.0	29.0	13.8	
	P1103	25		30.0	28.0	15.0	
	P1104	25		25.0	16.0	10.8	
	P1105	25		27.0	21.0	9.6	
	P1106	25		26.0	23.0	27.0	

掘立柱建物跡一覧表

掘立柱建物跡	該当Pit	遺構図	グリッド	深さ (cm)	掘立柱建物跡	該当Pit	遺構図	グリッド	深さ (cm)
SB001	Pit0243	35	I P-115	16	SB109	Pit1468	36	I K-110	7
	Pit0196	35	I P-116	20		Pit1416	36	I K-111	14
	Pit0161	35	I P-116	32		Pit3246	36	I L-110	6
	Pit0131	35	I P~Q-116	22		Pit1198	36	I L-110	16
	Pit0127	35	I P-116	12		Pit3119	36	I L-111	19
Pit0061	35	I P-116	19	Pit3173		36	I L-111	30	
SB002	Pit0198	35	I P-117	27		Pit1558	36	I L-111	19
	Pit0043	35	I P-118	37		Pit1567	36	I K-112	20
	Pit0072	35	I Q-117	22		Pit3517	36	I J-105	13
	Pit0197	35	I Q-117~118	18		Pit3265	36	I T-106	11
	Pit0157	35	I Q-118	40	Pit1006	36	I T-106	22	
SB003	Pit0158	35	I Q-118	7	Pit3257	36	I T-107	13	
	Pit0162	35	I Q-118	12	Pit3398	36	I J-106	9	
	Pit0231	35	I Q-119	29	Pit3506	36	I J-106	10	
	Pit0149	35	I Q-118	28	Pit3318	36	I J-108	5	
	Pit0031	35	I R-118	40	Pit3376	36	I J-108	9	
SB004	Pit0035	35	I R-118	17	SB111	Pit1366	36	I J-108	17
	Pit0082	35	I R-119	37		Pit1076	36	I K-108	42
	Pit0084	35	I R-119	36		Pit1105	36	I K-108	13
	Pit0124	35	I Q-119~120	15		Pit1466	36	I K-107	16
	Pit0110	35	I Q-119	15		Pit0075	36	I R-118	30
SB005	Pit0036	35	I R-118	10	Pit0099	36	I R-119	15	
	Pit0114	35	I Q-119	16	Pit0083	36	I R-119	44	
	Pit0120	35	I Q-119	10	Pit0100	36	I R-119	24	
	Pit0098	35	I R-119	11	Pit0081	36	I R-119	32	
	Pit0092	35	I R-119	10	Pit0078	36	I R-118	30	
SB006	Pit0143	35	I R-118	20	SB121	Pit1060	37	I J-107~108	14
	Pit1463	35	I L-108	6		Pit1114	37	I K-108	13
	Pit1538	35	I L-108	10		Pit1298	37	I K-108	9
	Pit3361	35	I J-108	5		Pit1434	37	I L-108	15
	Pit1529	35	I J-108	12		Pit1323	37	I K-108	25
SB007	Pit1498	35	I J-108	12	SB122	Pit1448	37	I K-107	15
	Pit1410	35	I J-109	9		Pit1025	37	I J-111	14
	Pit1452	35	I J-109	4		Pit1241	37	I J-111	16
	Pit1465	35	I L-109	7		Pit3022	37	I K-112	8
	Pit1524	35	I J-108	22		Pit1564	37	I K-111	18
SB008	Pit1103	35	I J-108	10	SB123	Pit1232	37	I K-111	12
	Pit1115	35	I K-108	13		Pit1289	37	I J-110	9
	Pit3250	35	I J-109	12		Pit1469	37	I J-109	21
SB009	Pit1550	36	I K-109	9	SB124	Pit1155	37	I J-109	25
	Pit1185	36	I K-109	35		Pit1450	37	I J-109~110	16
	Pit1110	36	I L-109	11		Pit1520	37	I J-109	5
	Pit1264	36	I L-110	20		Pit1527	37	I J-109	16
	Pit1343	36	I L-110	17		SB201	Pit1300	37	I K-109
Pit1549	36	I K-110	18	Pit1296	37		I L-108	22	
Pit1516	36	I K-110	10	Pit1202	37		I L-108	22	
Pit1290	36	I K-110	10	Pit1380	37		I L-108	39	
Pit3182	36	I K-111	13	Pit1406	37		I W-108	13	
Pit1418	36	I J-111	28	Pit1208	37		I W-109	6	
Pit1565	36	I K-111	34	Pit1253	37		I W-109	18	
Pit1437	36	I K-111	10	Pit1284	37		I L-109	15	
Pit1414	36	I K-111	18	Pit1184	37		I K-109	19	
Pit1546	36	I L-110	15	Pit1352	37		I L-109	14	
Pit1359	36	I L-110	10	Pit1205	37	I L-108	19		

遺物觀察表

遺物観察表 (1)

図 - No.	写真	種別	器種	遺構名	グリッド上	層位	部位・遺物・サイズ(縦)・重量(横)等 (10×10cmグリッド内測り)	整理 No.
1 - 1	33	土師器	皿	SI101	1W - 106	覆土上半 +床面	口縁部～底部 ロクロ成形 底面回転染切痕 口径12.5φ 底径6.0 器高2.9	土師019
1 - 2	33	土師器	外	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 内面履付着	土師016
1 - 3	33	土師器	外	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部	土師010
1 - 4	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部ナズ 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径22.0 器高7.0	土師022
1 - 5	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 口縁部ナズ 口径10.2 器高2.2	土師014
1 - 6	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半 埋中 覆土 埋中 覆土 埋中	口縁部～底部 ロクロ成形 底面回転染切痕 口径14.5 底径8.4 器高13.5 P-1, 3, 19, 51	土師018
1 - 7	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 口縁部ナズ 胴部ナズ 口径22.2 器高8.0	土師025
1 - 8	33	土師器	甕	SI101+P11256	1W - 106	覆土上半	口縁部～底部 ロクロ成形 口径12.0 器高17.3	土師051
1 - 9	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部～底面 胴部外面ケズリ 底径19.4 器高23.9	土師087
1 - 10	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 口縁部ナズ 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径23.0 器高8.2	土師023
1 - 11	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部～底部 胴部内面ナズ 底径8.0 器高4.1	土師086
1 - 12	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部～底部 胴部内面ナズ 底面木葉痕 底径17.0 器高6.3 P-28	土師072
1 - 13	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半 埋中 覆土 埋中	口縁部～胴部 ロクロ成形 胴部内面ナズ 口径23.6 器高13.8 P-15	土師024
1 - 14	33	土師器	甕	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 ロクロ成形 口縁部内面履付着 口径15.6 器高4.0	土師050
1 - 15	33	土師器	小甕土器	SI101	1W - 106	覆土上半	口縁部～胴部 内面ナズ	土師012
1 - 16	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	覆土上半	鈴子 長さ1.5 幅1.4 厚さ1.4	土師品001
1 - 17	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	埋中	磁石○ 磁石径10 メタロ○ 長さ1.8 厚さ1.9 P-6-1	鉄製品001
1 - 18	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部	土師002
1 - 19	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部	土師001
1 - 20	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	覆土上半	胴部	土師002
1 - 21	33	土師器	土製品	SI101	1W - 106	覆土上半	安山質 長さ8.2 幅9.4 厚さ5.2 重量100.0 S-1	土師001
2 - 1	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	胴部 胴部外面ケズリ 胴七分野No03(赤野用炭)	土師003
2 - 2	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	胴部～底部 口縁部ナズ 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径23.1 器高7.9	土師056
2 - 3	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	胴部～底部 ロクロ成形 底面回転染切痕 底径7.3 器高11.7	土師092
2 - 4	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	胴部～底部 胴部外面ケズリ 底径9.2 器高11.7	土師091
2 - 5	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	口縁部～胴部 胴部外面ナズ 胴部内面ナズ 口径17.8 器高4.2	土師057
2 - 6	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	口縁部～胴部 口径12.8 器高5.4 P-14	土師059
2 - 7	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	底径7.8 長さ7.2 幅9.1 厚さ2.5 重量203.0 S-1	埋中017
2 - 8	34	土師器	甕	SI102	1X - 107	埋中	底径7.8 長さ7.2 幅9.1 厚さ2.5 重量203.0 S-2	埋中018
2 - 9	35	土師器	甕	SI102	1X - 108	埋中	底径7.8 長さ7.2 幅9.1 厚さ2.5 重量203.0 S-2	埋中019
2 - 10	35	土師器	片	SI102S001SK01	1X - 107	覆土	口縁部～胴部 口縁部ナズ 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径22.1 器高14.2	土師005
2 - 11	35	土師器	甕	SI102S001SK01	1X - 107	覆土	口縁部～胴部 口径12.8 底径4.9 器高5.4 P-14	土師015
2 - 12	35	土師器	甕	SI102S001SK01	1W - 106	埋中	口縁部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径13.4 器高6.1 口縁部内面履付着	土師067
2 - 13	35	土師器	甕	SI102S001SK01	1W - 107	埋中	口縁部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 口径11.0 器高8.7	土師016
2 - 14	35	土師器	甕	SI102S001SK01	1W - 107	埋中	口縁部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底面砂底 底径11.0 器高8.7	土師079

遺物観察表 (2)

図 - No.	写真	種別	器種	遺構名	グリッド上	層位	部位	調査・サイズ(φ)・重量(重)等	出土層	整理 No.
2 - 14	35	土師器	甕	SI102S001SK01		腰土	胴部～底部	胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 底径(6.7)	P-10, 11, 32	土師122 土師209+
2 - 15	34	縄文土器	深鉢	SI102S001SK01		腰土	底部	底径	P-30	土師157 土師086
2 - 16	36	縄文土器	高背器	SI102S001SK01	1W-107	腰土	縁部～スリ	サイズ上 長さ3.3 幅1.0 厚さ3.0 重量300.0		S-4
3 - 1	34	土師器	杯	SI102S001	1W-106	腰土上層	口縁部～底部	口縁部ケズリ 外面ケズリ 内面ケズリ 底面回転糸切痕		土師013
3 - 2	35	土師器	甕	SI102S001	1X-107	腰土	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 口径(21.0) 器高(10.2)		土師045
3 - 3	34	土師器	甕	SI102S001	1X-107	腰土	口縁部～胴部	口縁部内面付着 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口径(12.1) 器高(7.7)		土師066
3 - 4	35	土師器	杯	SI102S001	1X-107	腰土	胴部～底部	口縁部ケズリ 内面ミガキ・黒色処理 底面回転糸切痕 底径(5.0) 器高(3.0)		土師123
3 - 5	34	土師器	杯	SI102S001	1X-107	腰土	口縁部～底部	口縁部ケズリ 口径(11.0) 器高(3.1)		土師206
3 - 6	35	須成器	杯	SI102S001	1X-108	腰土	胴部～底部	底面回転糸切痕 軸土分析№629(不明) 底径4.8 器高(1.6)		土師625
3 - 7	35	土師器	須成器	SI102S001	1.0-109	1層	底部	口縁部ケズリ 口径(17.9) 器高(10.2)		土師419
3 - 8	34	土師器	甕	SI102S001	1X-107	腰土	口縁部～底部	口縁部ケズリ 底面回転糸切痕 口径(12.2) 底径(6.0) 器高(2.2)		土師017
3 - 9	35	土師器	埴	SI102S001	11-105	1層	口縁部～胴部	口縁部外面ケズリ P-5		土師046
3 - 10	34	須成器	甕	SI102S001	1X-107	腰土	胴部	胴部外面ケズリ 軸土分析№625(不明)		土師625
3 - 11	34	土師器	小甕土器	SI102S001	1X-107	腰土	口縁部～胴部	内面指部圧痕		土師419
3 - 12	35	土師器	甕	SI102S001	1W-106	腰土	底部	底径		土師124
3 - 13	35	土師器	甕	SI102S001	1W-106	腰土	口縁部～胴部			土師208
3 - 14	35	須成器	甕	SI102S001	1X-108	腰土	胴部	胴部外面ケズリ 軸土分析№668(不明)		土師668
3 - 15	36	土師器	甕	SI103		2層	口縁部～底部	口縁部ケズリ 胴部外面ケズリ 口縁部内面付着 底面回転糸切痕 口径(3.8) 底径(6.4) 器高(11.6)	P-8, 9	土師010
3 - 16	36	土師器	甕	SI103		大山成土層	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 口径(18.8) 器高(9.2)		土師026
3 - 17	36	土師器	甕	SI103		腰土	口縁部～胴部	口縁部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口径(11.3) 器高(3.8)		土師177
3 - 18	39	土師器	甕	SI103	1.0-110	貼床	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 口径(17.4) 器高(3.7)		土師174
3 - 19	36	土師器	甕	SI103	1.0-113	貼床	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 口径(13.4) 器高(3.9)		土師178
3 - 20	36	土師器	甕	SI103		貼床	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 胴部内面付着 口径(14.4) 器高(7.0)	P-17	土師173
3 - 21		土師器	甕	SI103		1層	胴部～底部	胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 底面ケズリ 底径(12.0) 器高(2.7)		土師094
3 - 22	36	土師器	甕	SI103		腰土	胴部～底部	胴部内面ケズリ 胴部内面ケズリ 底面木製痕 底径(8.0) 器高(6.8)	P-18	土師093
3 - 23	36	土師器	甕	SI103		大山成土層	底部	底面ケズリ・ナデ 底径(11.3) 器高(1.3)		土師073
4 - 1	3	土師器	甕	SI103		大山成土層 +腰土上層	胴部～底部	口縁部ケズリ 口縁部ケズリ 底面回転糸切痕 底径(6.8) 器高(2.5)	P-13, 18	土師005
4 - 2	37	土師器	杯	SI103		底土	底面	底面 口縁部ケズリ 底面回転糸切痕 底径(5.0) 器高(1.1)	P-12, 15	土師006
4 - 3	5	土師器	小甕土器	SI103	1.0-109	底土	口縁部～胴部	胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口径(5.0) 器高(3.3)		土師114
4 - 4	6	土師器	杯	SI103		腰土	底部	口縁部ケズリ 底面回転糸切痕 P-17		土師007
4 - 5	6	土師器	甕	SI103		大山成土層	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 底面回転糸切痕 P-19		土師172
4 - 7	36	土師器	甕	SI103		腰土	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 底面ケズリ		土師175
4 - 8	36	土師器	甕	SI103		腰土	口縁部～胴部	口縁部ケズリ 底面ケズリ		土師171
4 - 9	37	須成器	長頸甕	SI103		腰土	口縁部～胴部	胴部胴部裏面に環状凸部 軸土分析№609【輸入品】		土師609
4 - 10	37	須成器	長頸甕	SI103		底面	口縁部～胴部	口縁部(11.4) 器高(1.8) 軸土分析№606(玉所川原)	P-10	土師606

遺物観察表 (3)

図	No.	写真	種別	器種	遺構名	グリッド	層位	部位	説明	出土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)	整理No.
4	- 11	37	須置器	長須置	SI103	10-110	腰土	口縁部	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)	土器611	
4	- 12		須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器607	
4	- 13		須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器608	
4	- 14		須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器612	
4	- 15		須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器609	
3	- 16	37	白磁器	土師土器	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
3	- 17	37	白磁器	土師土器	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器606	
3	- 18	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
3	- 19	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器608	
3	- 20	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
3	- 21	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
4	- 22	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
4	- 23	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
4	- 24	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器610	
5	- 1	38	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
5	- 2	38	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
5	- 3	38	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
5	- 4	38	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
5	- 5	38	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
5	- 6	37	須置器	須置	SI103		腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器605	
6	- 1		須置器	須置	SI103	10-109	腰土	安山岩質 長さ3.3 幅17.0 厚さ4.7 重量1,000.0		遺物61	
6	- 2	39	土師器	小型土器	SI103S001	10-111	腰土	口縁部→胴部 外面ケズリ 内面ナズ		土器20	
6	- 3	39	土師器	環	SI103S001	10-112	確認面	口縁部→胴部 内面僅存層 口径(14.8) 器高(3.4)		土器207	
6	- 4	39	土師器	環	SI103S001	10-113	確認面	胴部→底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底径(0.2) 器高(3.5)		土器127	
6	- 5	39	土師器	環	SI103S001	10-113	確認面	胴部→底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底径(0.2) 器高(2.6)		土器126	
6	- 6	39	土師器	環	SI103S001	1A-108	腰土	胴部→底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底径(1.0) 器高(3.4)		土器125	
6	- 7		須置器	須置	SI103S001	1A-108	腰土	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器609	
6	- 8	39	須置器	須置	SI103S001	1A-107	確認面	胴部 胴部外面ケズリ		土器628	
6	- 9	39	須置器	環	SI104		底面	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 胎土分析No.613 【A土生産】 口径(12.6) 底径(5.6) 器高(3.6)		土器613	
6	- 10	39	須置器	須置	SI104	2~4層	2~4層	安山岩質 長さ3.6 幅17.9 厚さ1.3 重量100.0		遺物73	
6	- 11	39	須置器	須置	SI104	2~4層	2~4層	安山岩質 主軸石の径径 長さ10.1 幅15.0 厚さ1.9 重量400.0		遺物71	
6	- 12	39	土師器	環	SI201	1D-105	胎土	胴部→底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底径(0.2) 器高(20.5)		土器603	
6	- 13	39	土師器	環	SI201	1E-105	胎土	胴部→底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底径(0.2) 器高(20.5)		土器608	
6	- 14	39	土師器	皿	SI201カマド		胎土	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 底径(7.0) 器高(12.6)		土器629	
6	- 15	39	土師器	環	SI201		胎土	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 口径(13.8) 底径6.0 器高4.0 P-27,28		土器81	
6	- 16	39	土師器	環	SI201		胎土	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 口径(13.8) 底径6.0 器高4.0 P-27,28		土器81	
6	- 17	39	土師器	環	SI201		胎土	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 口径(13.8) 底径6.0 器高4.0 P-27,28		土器81	
6	- 18	39	土師器	環	SI201		胎土	口縁部→底部 ロクロ成形 底面凹陥浅切痕 口径(13.8) 底径6.0 器高4.0 P-27,28		土器81	
6	- 19	40	白磁器	土師土器	SI201		腰土	口縁部→胴部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナズ 底面砂底 底径8.4 器高(3.1) P-1		土器676	
6	- 20	40	白磁器	土師土器	SI201カマド		1層	口縁部→胴部 口径(12.0) 器高(4.5) P-17,34		土器609	
6	- 21		須置器	須置	SI201S002		1層	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器601	
6	- 21		須置器	須置	SI201S004		1E-105	胎土分析No.11(土器用原) 口径(15.8) 器高(2.5)		土器614	

遺物観察表 (4)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	サイズ	部位	部名・諸特徴・サイズ(mm)・重量(g)等 (口内面・外面・口縁部)	整理 No.
7 - 1	40	土師器	甕	SI201カマド	2層	口縁部～胴部	胴部外周ノズリ 胴部内周ノズリ	土師006
7 - 2	40	土師器	土玉状	SI201カマド	2層	口縁部	口径(20.0) 器高(19.1) P-31, 33	土師002
7 - 3		須恵器	蓋	SI202 遺物外	1G - 105 1K - 109	胴部	長さ2.5 幅4.0 厚さ1.9	土師016
7 - 4	41	土師器	甕	SI202 SI202と同部カマド SI202古～中段層	1G - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 胴部内周ノズリ 口径(22.0) 器高(15.2) P-4, 12	土師002
7 - 5	41	土師器	坏	SI202	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(12.0) 器高(3.0)	土師185
7 - 6	40	土師器	甕	SI202新段層	1G - 106	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.9) 器高(2.9)	土師184
7 - 7	41	土師器	坏	SI202	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(4.1)	土師192
7 - 8		土師器	坏	SI202	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.3) 器高(4.1)	土師187
7 - 9		土師器	坏	SI202	1G - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.3) 器高(3.8)	土師186
7 - 10	41	土師器	坏	SI202	1H - 106	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.8) 器高(3.5)	土師189
7 - 11	41	須恵器	広口蓋	SI202	1G - 105	口縁部	胎土分析№688(京府出願) 口径(12.9) 器高(5.1)	土師648
7 - 12		須恵器	甕	SI202	1H - 106	胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師664
7 - 13		須恵器	甕	SI202	1G - 105	胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師617
7 - 14	41	土師器	甕	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 胴部内周ノズリ 口径(22.0) 器高(20.8) P-1, 7, 16, 17, 18, 19, 20, 27	土師004
7 - 15	41	土師器	甕	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(25.6) 器高(8.6)	土師036
7 - 16	41	土師器	甕	SI202新段層	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(22.0) 器高(5.4)	土師063
7 - 17	41	土師器	甕	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.3) 器高(3.8)	土師188
7 - 18	41	土師器	坏	SI202新段層	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(13.8) 器高(3.5)	土師190
7 - 19	40	土師器	坏	SI202古～中段層	1H - 105	口縁部～胴部	口縁部内周ノズリ 口径(14.4) 器高(5.0) P-1	土師031
7 - 20	41	土師器	坏	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願) 口径(12.9) 器高(5.1)	土師103
7 - 21		土師器	坏	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師394
7 - 22		土師器	坏	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師156
7 - 23	40	土師器	小甕土器	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師116
8 - 1	41	須恵器	石皿	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師118
8 - 2	40	土師器	土釘	SI202新段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師410
8 - 3	42	須古器	漆打箱のお名敷	SI202新段層112	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師122
8 - 4	42	土師器	坏	SI202新段層112	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師193
8 - 5	40	土師器	坏	SI202新段層112	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師060
8 - 6	42	土師器	甕	SI202古～中段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師074
8 - 7	42	土師器	小甕土器	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師171
8 - 8	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師108
8 - 9	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師021
9 - 1	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師007
9 - 2	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師033
9 - 3	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師013
9 - 4	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師005
9 - 5	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師035
9 - 6	42	土師器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師063
9 - 7	41	須恵器	甕	SI202新段層カマド	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師615
9 - 8		須恵器	甕	SI202古中段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師064
9 - 9		土師器	甕	SI202古～中段層	1H - 106	口縁部～胴部	胎土分析№688(京府出願)	土師064

遺物観察表 (6)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	グラマ	層位	口縁部～胴部	整理 No.
11 - 12	土師器	環	SI207S001	遺物外	14 - 107	環土	胴部	土師205
11 - 13	須恵器	蓋	SI207S001	遺物外	14 - 107	環土	胴部	土師639
11 - 14	土師器	須恵	SI207S001	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 底径7.5 器高(4.2) P-4	土師681
11 - 15	須恵器	長頸壺	SI207S001	遺物外		環土	口縁部 胴部外縁に凸帯 頸部狭帯 P-10, 16, 17 胎土分率%6300(五所川原) 口径12.0 器高(8.9)	土師630
11 - 16	須恵器	長頸壺	SI207S001	遺物外		環土	口縁部～胴部 胎土分率%638 (八生産地) P-13	土師638
11 - 17	土師器	鉢	SI207S001	遺物外		環土	口縁部～胴部 胎土分率%638 (八生産地) P-12	土師623
11 - 18	土師器	鉢	SI207S001	遺物外		環土	口縁部 胎土分率%638 (八生産地) P-12	土師632
11 - 19	土師器	鉢	SI207S001	遺物外		環土	口縁部 胎土分率%638 (八生産地) P-12	土師631
11 - 20	土師器	鉢	SI207S001	遺物外		環土	口縁部 P-11 胎土分率%631(五所川原) 口径(12.2) 器高(6.3)	土師602
11 - 21	須恵器	壺	SI207S001	遺物外		環土	胴部 胎土分率%624(五所川原)	土師651
11 - 22	須恵器	壺	SI207S001	遺物外		環土	胴部 胎土分率%624(五所川原)	土師624
11 - 23	土師器	環	SI207S001	遺物外		環土	胴部～底部 ロク口成形 底面回転糸切痕 底径5.3 器高(2.9)	土師640
11 - 24	土師器	環	SI207S001	遺物外		環土	胴部～底部	土師678
11 - 25	土師器	環	SI208S001	遺物外		環土	胎土分率 長56.3 幅8.4 厚55.3 重200.0 S-2	土師204
12 - 1	土師器	環	SK018	遺物外		環土	胎土分率 長58.1 幅13.7 厚53.1 重600.0 S-2	環281
12 - 2	土師器	環	SK026	遺物外		環土	胴部～底部 ロク口成形 内面ミガキ・黒色処理 底面回転糸切痕 底径5.6 器高(3.2)	環282
12 - 3	土師器	環	SK114	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師115
12 - 4	土師器	環	SK114	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師116
12 - 5	土師器	環	SK114	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師114
12 - 6	須恵器	銅形鍔	SK208	遺物外		環土	胎土分率 長59.6 幅11.0 厚55.9 P-3	鉄製品010-1
12 - 7	須恵器	銅形鍔	SK208	遺物外		環土	胎土分率 長59.6 幅11.0 厚55.9 P-3	鉄製品029
12 - 8	須恵器	銅形鍔	SK208	遺物外		環土	胎土分率 長59.6 幅11.0 厚55.9 P-3	鉄製品010-2
12 - 9	須恵器	銅形鍔	SK208	遺物外		環土	胎土分率 長59.6 幅11.0 厚55.9 P-3	鉄製品009
12 - 10	須恵器	銅形鍔	SK208	遺物外		環土	胎土分率 長59.6 幅11.0 厚55.9 P-3	鉄製品013-1
12 - 11	須恵器	銅形鍔	SK213	遺物外		環土	胴部～底部 口縁部ケズリ 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口径(13.6) 器高(3.8)	土師201
12 - 12	須恵器	蓋	SK213	遺物外	14 - 108	環土	胴部	土師621
12 - 13	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 105	環土	胴部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 底面砂底 底径9.2 器高(7.7)	土師077
12 - 14	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 105	環土	胴部～底部	土師118
12 - 15	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師117
12 - 16	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師120
12 - 17	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師297
12 - 18	土師器	環	SK213	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師121
12 - 19	土師器	環	SK219	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師205
13 - 1	土師器	環	SK227	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師208
13 - 2	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師202
13 - 3	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 4	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 5	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 6	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 7	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 8	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 9	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 10	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
13 - 11	土師器	環	SK216	遺物外	14 - 106	環土	胴部～底部	土師203
14 - 1	土師器	環	SK102	遺物外	14 - 110	環土	胴部～底部	土師133

遺物観察表 (7)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	タテ上	位置	部位・遺物数・サイズ(cm)・重量(g)等 (注1) (注2) (注3) (注4) (注5) (注6)	整理 No.
14 - 2	46	土師器	外	SI102 SX102	1K - 110 1L - 111	1層 礎土	口縁部～胴部 ロクロ成形 内面ミガキ・黒色処理 口径(13.0) 底径5.2 器高5.3	P-1 土師047
14 - 3	46	土師器	礎石	遺物外	1G - 106	1層	礎石製 長3.7, 幅12.7 厚33.8 重量600.0	礎063
14 - 4	47	土師器	礎	SI202	1X - 109	礎土	底部 ロクロ成形 底面回転糸切痕 底径7.2 器高(1.7)	土師128
14 - 5	47	土師器	礎	SI202	1X - 109	礎土	胴部 胴部外面ケズリ	土師170
14 - 6	47	土師器	礎	SI202	1X - 108	礎土	口縁部～胴部 口縁部ナデ 胴部外面ケズリ 胴部内面ナデ 口径(23.4) 器高(4.6)	土師209
14 - 7	47	土師器	礎	SI202	1X - 108	礎土	底面 底面ケズリ	礎085
14 - 8	47	土師器	礎	SI202	1X - 108	礎土	口縁部～胴部 長3.6, 幅8.5 厚34.7 重量200.0	礎085
14 - 9	47	土師器	礎	SI202	1X - 109	礎土	底面 底面ケズリ	礎085
14 - 10	47	土師器	礎	SI202	1X - 109	礎土	底面 底面ケズリ	礎085
14 - 11	47	土師器	礎	P112602 P112603	1L - 110	礎土	底面 底面ケズリ	礎085
14 - 12	47	土師器	礎	P113106		礎土	底面 底面ケズリ	土師134
14 - 13	47	土師器	礎	P113205	1L - 107	礎土	胴部	土師635
14 - 14	47	土師器	礎	P113405		礎土	口縁部～胴部	土師223
14 - 15	47	土師器	礎	P113502		礎土	胴部	土師636 土師637
15 - 1	48	土師器	塀	SI101 SI202	1M - 106 1M - 107	礎土上半 礎土	口縁部～胴部 口縁部ナデ 胴部外面下半ケズリ 胴部内面ナデ 口径(37.2) 器高(14.6)	土師020
15 - 2	48	土師器	礎	SI102SD01 遺物外	1M - 107 1M - 108	礎土上半 礎土	胴部～底部 底面砂底	土師065
15 - 3	47	土師器	坏	SI102SD01 SI102SD01 SI103SD01	1X - 107 1X - 108 1X - 109	礎土 礎土 礎土	口縁部～底部 ロクロ成形 内面ミガキ・黒色処理 底面回転糸切痕 口径13.1 底径4.0 器高5.0	土師014
15 - 4	47	須器器	長頸壺	SI102SD01	1X - 108	礎土	胴部境界に凸部 頸部隆起 胎土分粒№627【A生産】 口径11.2 器高(7.5)	土師627
15 - 5	47	土師器	坏	SI202新段階 SK213	1G - 106	礎土	ロクロ成形 内面ミガキ・黒色処理 底面回転糸切痕 口径(12.3) 底径4.6 器高5.1	P-29 土師030
15 - 6	47	土師器	礎	SI202新段階 SK213		礎土	口縁部ナデ 胴部外面ケズリ 口径(15.8) 器高(6.6)	土師062
15 - 7	47	土師器	礎	SI202 SK213	1G - 106 1G - 107	礎土 礎土	胴部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ナデ 底径(5.6) 器高(2.1)	土師104
15 - 8	47	土師器	坏	SK213	1G - 106	礎土	胴部～底部 ロクロ成形 底面回転糸切痕 底径(4.8) 器高(4.0)	土師101
16 - 1	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	口縁部 沈線 神引沈線 配享	縄文055
16 - 2	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	16-1と同一胴体	縄文062
16 - 3	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	胎土 沈線	縄文063
16 - 4	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	胎土 沈線	縄文064
16 - 5	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	胎土 沈線	縄文065
16 - 6	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1O - 115	1層	口縁部 沈線	縄文066
16 - 7	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1X - 109	1層	底部 沈線	縄文071
16 - 8	50	縄文土器	深鉢	遺物外	1P - 116	1層	胴部下半 ナデ	縄文068

遺物観察表 (8)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	グリッパ上	層位	部位	諸特徴・サイズ(cm)・重量(g)等 (10-100倍撮影(原寸・拡大))	整理 No.
16 - 9		縄文土器	深鉢	風切木皿	Q - 115	層上	胴部	内縁 浅い切欠	縄文2072
16 - 10	50	縄文土器	深鉢	風切木皿	Q - 116	層上	胴部	無かな無脚口縁文	縄文2077
16 - 11		縄文土器	深鉢	風切木皿	Q - 116	層上	口縁部	無文	縄文115
16 - 12	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 115	層上	胴部		縄文171
16 - 13	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 107	層上	口縁部	胴部→胴部 L.R.側面圧痕 自働自巻 L.R.調文	縄文110
16 - 14	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 115	風切木皿	胴部	R.側面圧痕 切欠 車輪絡糸体 R	縄文2222
16 - 15		縄文土器	深鉢	SI203	Q - 115	灰土付笠	口縁部	R.側面圧痕 自働自巻 P-23	縄文106
16 - 16		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 110	I層	口縁部	L.R.側面圧痕	縄文109
16 - 17		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 112	風切木皿	胴部	R.L.側面圧痕 自働自巻	縄文207
16 - 18		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 112	層上	胴部	R.L.側面圧痕	縄文103
16 - 19		縄文土器	深鉢	遺物外	P - 115	層上	胴部	R.L.側面圧痕 車輪絡糸体(R)か	縄文107
16 - 20		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 112	層上	胴部	R.L.側面圧痕	縄文107
16 - 21		縄文土器	深鉢	SI203/S2801	-	層上	胴部	P-1	縄文2221
16 - 22		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 117	層上	胴部	底面	縄文220
16 - 23		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 118	I層	胴部	不明	縄文188
16 - 24		縄文土器	深鉢	遺物外	II - 112	II	胴部	R.L.調文か	縄文192
16 - 25		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 117	層上	胴部	0注 筋本	縄文2020
16 - 26		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 115	I層	口縁部	R.側面圧痕	縄文108
16 - 27		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 115	I層	口縁部	R.側面圧痕	縄文105
16 - 28		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 117	I層	口縁部	口縁部に切欠 横方向にR側面圧痕	縄文251
16 - 29	50	縄文土器	深鉢	7トレンチ	IP - 117	I層	口縁部	R側面圧痕	縄文104
16 - 30	50	縄文土器	深鉢	4トレンチ	IP - 117	I層	胴部	R側面圧痕 自働で筋落したL.R.調文	縄文169
16 - 31	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 118	層上	胴部	隆帯貼付→隆帯上位にL.R.側面圧痕→隆帯上位にL.R.側面圧痕→L.R.調文	縄文017
16 - 32	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 117	I層	胴部	LとRの側面圧痕 隆帯上にL.側面圧痕 結東第2種(R.L.+L.R)	縄文016
16 - 33		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 110	I層	胴部	隆帯上→R側面圧痕、器面には隆帯方向にR側面圧痕、L.R.の側面圧痕	縄文158
16 - 34		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 110	I層	胴部	R.L. 結節回転文か→筋の塊か	縄文204
16 - 35	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	層上	胴部	R.L.調文	縄文209
16 - 36		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	層上	胴部	結東第1種羽状調文(L.R.+R.L)	縄文011
16 - 37	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IP -	I・II層	胴部	不明	縄文083
16 - 38		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 118	層上	胴部	底面	縄文187
16 - 39		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	層上	胴部	底面	縄文197
16 - 40		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 107	層上	胴部	底面	縄文198
16 - 41		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 116	I層	胴部	底面	縄文199
16 - 42		縄文土器	深鉢	遺物外	II - 105	I層	胴部	底面	縄文190
17 - 1	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 115	層上	胴部	隆帯→隆帯上→胴突→器面に切欠	縄文260
17 - 2	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	層上	胴部	隆帯→隆帯上→胴突→器面に切欠	縄文203
17 - 3	50	縄文土器	深鉢	風切木皿	Q - 112	層上	胴部	切欠 隆帯上にL.側面圧痕	縄文255
17 - 4	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 118	層上	胴部	切欠 隆帯上にL.側面圧痕	縄文274
17 - 5		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 113	I層	胴部	筋本	縄文168
17 - 6		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	I層	胴部	筋本	縄文155
17 - 7		縄文土器	深鉢	SI202	Q - 113	灰土	胴部	結東第2種(R.L.+R.L)→隆帯上→L.側面圧痕	縄文261
17 - 8		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 107	層上	胴部	筋本	縄文126
17 - 9	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 110	I層	胴部	筋本	縄文127
17 - 10	50	縄文土器	深鉢	SI102/S001	IX - 107	層上	胴部	隆帯上にL.側面圧痕 RとLの側面圧痕	縄文262
17 - 11	50	縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 118	I層	胴部	R.L.調文→切欠 隆帯上にL.側面圧痕	縄文207
17 - 12		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 105	I層	胴部	隆帯貼付→隆帯上に筋本	縄文259
17 - 13		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	層上	胴部	隆帯貼付→筋本	縄文259
17 - 14		縄文土器	深鉢	遺物外	Q - 116	層上	胴部	R側面圧痕、隆帯上にR側面圧痕、結東第2種(R.L)	縄文154

遺物観察表 (9)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	グリップ上	層位	部位・遺物産・サイズ(cm)・重量(g)等 (10mm以内の断面に1箇所以上を指定)	調査用 No.
17 - 15		縄文土器	深鉢	遺物外	0 - 109	1層	胴部 L.R.縄文か、隆帯上にL.R.側面圧痕	縄文156
17 - 16	50	縄文土器	深鉢	エアリア		1層	胴部 貫通孔 隆帯	縄文117
17 - 17		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯上にL.R.側面圧痕	縄文165
17 - 18		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 116	1層	胴部 肩周部(内L.R.)→隆帯	縄文167
17 - 19		縄文土器	深鉢	SI102S001	1層 - 107	確認面	胴部 隆帯上にL.R.側面圧痕→L.R.縄文か	縄文159
17 - 20	50	縄文土器	深鉢	4 トレンチ			胴部 L.R.縄文、隆帯上にL.R.側面圧痕	縄文162
17 - 21		縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 118	1層	胴部	縄文269
17 - 22		縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	胴部	縄文2012
17 - 23		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 110	層上	胴部	縄文174
17 - 24		縄文土器	深鉢	SI102S001			胴部	縄文175
17 - 25		縄文土器	深鉢	遺物外	11 - 117	1層	胴部	縄文172
17 - 26	50	縄文土器	深鉢	エアリア1			胴部	縄文173
17 - 27	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部 L.R.縄文→隆帯 一部隆帯上にL.R.側面圧痕 ドーナツ状貼付 貼付上にL.R.縄文	縄文164
17 - 29	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部	縄文2007
17 - 30	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部	縄文2089
17 - 31	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部	縄文2008
17 - 32	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 117	1層	口縁部 貫通孔 隆帯貼付	縄文2015
17 - 33	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 118	1層	口縁部 貫通孔(使成前)	縄文2053
17 - 34	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 109	1層	口縁部 貫通孔 隆帯 縄文(部体不明)	縄文119
17 - 35	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 114	風船木製	口縁部 L.R.縄文→隆帯 裏の頂部にも隆帯	縄文264
17 - 36	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 121	1層	口縁部 貫通孔 L.R.縄文か、隆帯上にL.R.側面圧痕	縄文294
18 - 1	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	口縁部 隆帯上にL.R.側面圧痕 裏面に凸線状の凹み	縄文130
18 - 2	50	縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 109	1層	口縁部 L.R.縄文、口唇部隆帯の縁にナツ	縄文122
18 - 3		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 114	風船木製	口縁部 口唇部にL.R.側面圧痕 R.L.縄文 隆帯上にもL.R.縄文	縄文132
18 - 4		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	口縁部 隆帯上にL.R.側面圧痕 0段条Lか	縄文123
18 - 5		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 107	確認面	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文148
18 - 6		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 107	1層	胴部 隆帯	縄文143
18 - 7		縄文土器	深鉢	3 トレンチ			胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文137
18 - 8		縄文土器	深鉢	遺物外			胴部 R.L.縄文→隆帯	縄文136
18 - 9		縄文土器	深鉢	風船木製			胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文2074
18 - 10		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 120	1層	口縁部 R.L.側面圧痕か、L.R.縄文 隆帯	縄文146
18 - 11		縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 117	1層	口縁部 隆帯上にL.R.側面圧痕 R.L.縄文	縄文129
18 - 12		縄文土器	深鉢	SI103		層上	口縁部 貫通孔 隆帯	縄文120
18 - 13		縄文土器	深鉢	7 トレンチ			胴部 R.L.縄文→隆帯	縄文111
18 - 14		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 116	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文150
18 - 15		縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	胴部 R.L.縄文→隆帯	縄文117
18 - 16		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 117	1層	胴部 肩周部(内L.R.→R.L.)→隆帯	縄文171
18 - 17		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部 肩周部(内L.R.→R.L.)→隆帯	縄文170
18 - 18		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文145
18 - 19		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 112	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文149
18 - 20		縄文土器	深鉢	遺物外	IP - 114	風船木製	胴部 R.L.縄文→隆帯	縄文153
18 - 21		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文166
18 - 22		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 113	1層	胴部 L.R.縄文→隆帯	縄文164
18 - 23		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部 隆帯上にR.L.側面圧痕 L.R.縄文 無文の隆帯	縄文125
18 - 24		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 114	1層	胴部 隆帯上にR.L.側面圧痕 隆帯上に指印圧痕 紐い隆帯 P-59	縄文258
18 - 25		縄文土器	深鉢	SI101		古瓦張床面	胴部 指り返し口縁 口縁にL.R.指印→L.R.側面圧痕 L.R.縄文	縄文2009
18 - 26		縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部 L.R.側面圧痕 R.L.縄文	縄文133
18 - 27		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 109	1層	口縁部 L.R.側面圧痕 口・胴ともL.R.縄文か	縄文135
18 - 28	50	縄文土器	深鉢	遺物外	10 - 116	1層	口縁部 (L.側面圧痕)口・胴ともL.R.縄文か	縄文2002

遺物観察表 (10)

図 - No.	写真	種別	図名	遺物名	グリッパ上	層位	部位	部名・遺物種・サイズ(cm)・重量(g)等 (1000以内は省略)	整理 No.
18 - 29		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	口縁部	口縁部 L.R. 縄文	縄文124
18 - 30		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 117	1層	口縁部	R.L. 縄文	縄文2030
18 - 31		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 114	1層	口縁部	R.L. 縄文 口縁に上断面圧痕	縄文128
18 - 32		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 121	1層	口縁部	L.R. 縄文 口縁に上断面圧痕 L.R.	縄文276
18 - 33		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	口縁部	L.R. 縄文	縄文134
18 - 34		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 113	1層	口縁部	R.L. 縄文	縄文131
18 - 35		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	口縁部	R.L. 縄文	縄文210
18 - 36		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部	R.L.R. 縄文→沈痕	縄文2010
18 - 37		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 117	1層	胴部	沈痕	縄文208
18 - 38		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 115	I - II層	口縁部	口縁部→胴部 R.L.R. 縄文→沈痕	縄文246
18 - 39		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 115	1層	胴部	沈痕	縄文271
18 - 40		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部	R.L.R. 縄文→沈痕	縄文510
18 - 41		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 113	1層	胴部	R.L.R. 縄文→沈痕	縄文225
18 - 42		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部	沈痕	縄文272
18 - 43		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 116	1層	胴部	沈痕	縄文273
18 - 44		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 109	1層	胴部	R.L. 縄文→沈痕	縄文223
18 - 45		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 112	1層	胴部	R.L.R. 縄文→沈痕	縄文224
18 - 46		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 114	1層	胴部	R.L. 縄文→沈痕	縄文228
19 - 1		縄文土器	鉢か	SI101			確認部	口縁部 赤彩あり	縄文2087
19 - 2		縄文土器	鉢か	遺物外	IX - 108	1層	胴部	赤彩あり	縄文2088
19 - 3		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 111	1層	胴部	沈痕	縄文211
19 - 4		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 114	1層	胴部	沈痕	縄文217
19 - 5		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 112	1層	胴部	沈痕	縄文214
19 - 6		縄文土器	深鉢	SI103			火山灰上層	胴部	縄文213
19 - 7		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 103	1層	胴部	沈痕	縄文215
19 - 8		縄文土器	鉢か	遺物外	IX - 105	1層	胴部	沈痕	縄文216
19 - 9		縄文土器	鉢か	遺物外	IX - 103	1層	胴部	沈痕	縄文212
19 - 10		縄文土器	鉢か	遺物外	IX - 103	1層	胴部	沈痕	縄文218
19 - 11		縄文土器	鉢か	PT15415			腰上	胴部	縄文219
19 - 12		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 113	1層	口縁部	折り返し口縁	縄文216
19 - 13		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 110	1層	胴部	折り返し口縁 R.L. 縄文	縄文116
19 - 14		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 115	1層	口縁部	腰文	縄文2098
19 - 15		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 109	1層	胴部	口縁部 腰文	縄文111
19 - 16		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部	胴部	縄文255
19 - 17		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 117	1層	胴部	胴部	縄文2018
19 - 18		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 122	1層	胴部	胴部	縄文212
19 - 19		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 114	1層	胴部	胴部	縄文172
19 - 20		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部	胴部	縄文209
19 - 21		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部	胴部	縄文206
19 - 22		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部	胴部	縄文229
19 - 23		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 120	1層	胴部	胴部	縄文232
19 - 24		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 115	1層	胴部	胴部	縄文233
19 - 25		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 118	1層	胴部	胴部	縄文243
19 - 26		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 108	1層	胴部	胴部	縄文200
19 - 27		縄文土器	深鉢	SI103S001			胴部	沈痕部に縄文原形体断面圧痕か	縄文220
19 - 28		縄文土器	深鉢	遺物外	IX - 112	1層	胴部	R.L. 縄文→沈痕	縄文231
19 - 29		縄文土器	注口部	遺物外	IX - 112	1層	注口部	注口部	縄文2085
19 - 30		縄文土器	壺か	遺物外	IX - 115	1層	胴部	沈痕→L.R. 縄文	縄文235

遺物観察表 (11)

図 - No.	写真	種別	器種	遺物名	グリップ上	層位	部位	部名	整理 No.
19 - 31		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	福広付-穴縁→L.R.縄文	縄文2024
19 - 32		縄文土器	壺小	遺物外	Q-118	1層	胴部	福広付-穴縁→L.R.縄文	縄文236
19 - 33		縄文土器	深鉢	遺物外	-	大山成上層	胴部	L.R.縄文	縄文186
19 - 34		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-115	1層	胴部	L.R.縄文	縄文2096
19 - 35		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-120	1層	胴部	L.R.縄文	縄文231
19 - 36		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-113	1層	胴部	L.R. L. 羽付縄文	縄文232
19 - 37		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	L.R.縄文	縄文180
19 - 38		縄文土器	深鉢	遺物外	HD-130	埋土	胴部	L.R.縄文	縄文184
20 - 1		縄文土器	深鉢	遺物外	-	風層	口縁部	L.R.縄文	縄文097
20 - 2		縄文土器	深鉢	遺物外	IX-112	1層	口縁部	L.R.縄文	縄文099
20 - 3		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-116	1層	口縁部	R.L.縄文	縄文028
20 - 4		縄文土器	深鉢	遺物外	S-121	1層	口縁部	R.L.縄文	縄文041
20 - 5		縄文土器	深鉢	遺物外	HD-127	1層	口縁部	R.L.縄文	縄文044
20 - 6		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-115	1層	口縁部	縄文縁に口縁部ナド	縄文094
20 - 7		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-114	風層木炭	口縁部	L.R.縄文	縄文095
20 - 8		縄文土器	鉢	遺物外	Q-116	1層	口縁部	口縁部に朝霞 突縁 穴縁	縄文014
20 - 9		縄文土器	鉢	遺物外	Q-116	1層	口縁部	口縁部に朝霞 穴縁	縄文013
20 - 10		縄文土器	鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	穴縁	縄文038
20 - 11		縄文土器	鉢	遺物外	SK114	6層	口縁部	突縁 穴縁	縄文102
20 - 12		縄文土器	鉢	遺物外	IP-118	1層	口縁部	突縁 穴縁→朝霞 L.R.縄文→穴縁	縄文048
20 - 13		縄文土器	台付鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	穴縁 溝かし	縄文033
20 - 14		縄文土器	鉢	遺物外	IX-114	1層	口縁部	→胴部	縄文092
20 - 15		縄文土器	鉢	遺物外	-	大山成上層	口縁部	L.R.縄文	縄文093
20 - 16		縄文土器	鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	L.R.縄文 穴縁 ミガキ	縄文025
20 - 17		縄文土器	鉢	遺物外	Q-118	1層	胴部	16と同じ個体小 L.R.縄文 穴縁 ミガキ	縄文037
20 - 18		縄文土器	壺	遺物外	IX-116	1層	口縁部	表裏通ともミガキ(黒色)	縄文021
20 - 19		縄文土器	壺	遺物外	Q-114	風層木炭	口縁部	表裏通ともミガキ	縄文113
20 - 20		縄文土器	鉢小	遺物外	1層	胴部	ミガキ 穴縁	ミガキ	縄文075
20 - 21		縄文土器	台付鉢	遺物外	IP-118	1層	底部	高台付 L.R.縄文 内面ミガキ	縄文047
20 - 22		縄文土器	壺小	遺物外	Q-116	1層	底部	L.R.縄文	縄文191
20 - 23		縄文土器	壺小	遺物外	Q-114	風層木炭	口縁部	→胴部	縄文101
20 - 24		縄文土器	壺小	遺物外	Q-115	1層	胴部	R.L.縄文	縄文178
20 - 25		縄文土器	台付鉢	遺物外	Q-117	1層	胴部	L.R.縄文	縄文019
20 - 26		縄文土器	台付鉢	遺物外	HD-131	1層	胴部	高台付 内外面ミガキ L.R.縄文→穴縁	縄文052
20 - 27		縄文土器	台付鉢	遺物外	Q-115	風層木炭	胴部	高台付	縄文173
20 - 28		縄文土器	台付鉢	遺物外	Q-112	埋土層上	胴部	高台付	縄文116
20 - 29		縄文土器	深鉢	遺物外	HD-131	1層	口縁部	→胴部 穴縁 条痕文	縄文015
20 - 30		縄文土器	深鉢	遺物外	IX-117	1層	口縁部	→胴部 穴縁	縄文022
20 - 31		縄文土器	深鉢	遺物外	IX-117	1層	胴部	L.R.縄文	縄文023
20 - 32		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-115	1層	胴部	穴縁 L.R.縄文	縄文091
20 - 33		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-116	1層	口縁部	口縁部に朝霞 指頭圧痕 L.R.縄文	縄文004
20 - 34		縄文土器	深鉢	遺物外	HD-133	1層	口縁部	L.R.縄文	縄文046
20 - 35		縄文土器	深鉢	遺物外	HD-130	1層	口縁部	L.R.縄文	縄文100
20 - 36		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-118	1層	口縁部	L.R.縄文	縄文029
20 - 37		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-116	1層	胴部	L.R.縄文	縄文103
20 - 38		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-115	1・II層	口縁部	→胴部	縄文265
20 - 39		縄文土器	深鉢	遺物外	Q-116	1層	口縁部	L.R.縄文	縄文078
20 - 40		縄文土器	深鉢	遺物外	-	埋土	胴部	L.R.縄文	縄文196
20 - 41		縄文土器	深鉢	遺物外	IX-108	1層	口縁部	→胴部 条痕文	縄文112

遺物観察表 (12)

図 - No.	写真	種別	図録	遺物名	グラツ上	層位	部位・特徴・サイズ(cm)・重量(g)	整理No.
20 - 42		縄文土器	深鉢	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 R.L. 縁 L.R.	縄文200
21 - 1	51	縄文土器	深鉢	遺物外	1Q - 115	1層	口縁部~胴部	縄文201
21 - 2		赤生土器	鉢	遺物外	1Q - 118	1層	口縁部 花綱 ミガキ 口縁最上部にR.L. 内面花綱	縄文203
21 - 3		赤生土器	台付鉢	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 花綱 ミガキ	縄文206
21 - 4		赤生土器	台付鉢	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 花綱 ミガキ	縄文203
21 - 5		赤生土器	台付鉢	遺物外	1P - 118	1層	胴部 花綱 ミガキ	縄文206
21 - 6	51	赤生土器	台付鉢	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 花綱 花綱 R.L. 縁文 器面ケズリ	縄文202
21 - 7		赤生土器	鉢	遺物外	1Q - 116	1層	胴部 花綱 花綱 R.L. 縁文	縄文205
21 - 8		赤生土器	鉢	遺物外	1R - 109	1層	胴部 R.L. 縁文 花綱	縄文207
21 - 9		赤生土器	鉢	遺物外	1R - 109	1層	胴部 花綱 R.L. 縁文 花綱	縄文207
21 - 10	51	赤生土器	鉢	遺物外	1Q - 116	1層	胴部 花綱 R.L. 縁文 花綱	縄文204
21 - 11	51	赤生土器	鉢	遺物外	1Q - 116	1層	胴部 花綱 R.L. 縁文 花綱	縄文204
21 - 12	51	赤生土器	鉢	遺物外	1R - 113	1層	胴部 花綱 R.L. 縁文 花綱	縄文209
21 - 13		赤生土器	鉢	遺物外	1R - 113	1層	胴部(口縁部付近) 花綱 R.L. 縁文	縄文209
21 - 14		赤生土器	鉢	遺物外	1R - 106	1層	胴部 半片状割裂 R.L. 縁文	縄文207
21 - 15		赤生土器	深鉢	遺物外	1Q - 109	1層	胴部 R.L. 縁文 花綱 縄文 花綱	縄文227
21 - 16		赤生土器	深鉢	遺物外	1Q - 124	1層	底部 あけ底 縄文時代後期前半葉以前か、黒色の焼成	縄文203
21 - 17		縄文土器	-	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 ミニチュアか、割裂片	縄文205
21 - 18		縄文土器	-	遺物外	1Q - 118	1層	胴部 ナデ→花綱	縄文209
21 - 19		縄文土器	台付鉢か	遺物外	1R - 125	1層	胴部 縄文後期前半葉か	縄文202
21 - 20		縄文土器	壺か	遺物外	1R - 105	1層	口縁部 縄文後期前半葉か	縄文114
21 - 21	51	縄文土器	深鉢	遺物外	1R - 125	1層	口縁部 口縁部割裂 L.R. 縁文か、内面に赤色元朝顔科付着 縄文後期前半葉か	縄文207
21 - 22	51	縄文土器	深鉢	遺物外	1R - 114	1層	胴部 L.R. 縁文 花綱 縄文後期前半葉か	縄文234
21 - 23		-	深鉢	遺物外	1Q - 109	1層	胴部 L.R. 縁文 花綱 赤生中期後半葉以降か	縄文237
21 - 24		縄文土器	深鉢か	SI205S001	1R - 108	層上	口縁部 赤気文 縄文中期後半葉か	縄文254
21 - 25		縄文土器	深鉢	遺物外	1Q - 116	1・B層	胴部 丸底か	縄文275
21 - 26	51	土製品	-	遺物外	1T - 121	1層	ミガキ 長さ2.2 幅3.7 厚さ2.2	縄文051 (土製品)
21 - 27	51	土製品	土器片利用凹板	風銅木底	1Q - 116	層上	胴部 L.R. 縁文 長さ3.8 幅3.0 厚さ1.0	縄文079 (土製品)
21 - 28		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1R - 105	1層	長さ3.5 幅3.2 厚さ1.0	土器106
21 - 29		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1R - 109	1層	口縁部 藍染2型(R.L.R.)か	縄文003 (土製品)
21 - 30		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1Q - 118	1層	長さ3.3 幅2.7 厚さ0.5	縄文238
21 - 31		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1R - 112	1層	長さ3.0 幅2.3 厚さ0.7	土器108 (土製品001)
21 - 32		土製品	土器片利用凹板	遺物外	11 - 103	1層	長さ3.0 幅2.5 厚さ0.8	土器100 (土製品006)
21 - 33		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1Q - 110	1層	長さ3.7 幅3.2 厚さ0.8	土器107 (土製品007)
21 - 34		土製品	土器片利用凹板	遺物外	1R - 113	1層	長さ3.1 幅3.7 厚さ0.9	土器109 (土製品008)
21 - 35		土製品	不明	遺物外	1R - 122	1層	土器の一部か、長さ3.3 幅2.8 厚さ1.6	縄文150
21 - 36	48	土器碎片	壺か	遺物外	1Q - 118	1層	古式土器器か、体部 外部ハケム 内面ナデ	土器106
22 - 1	52	新片石器	石鏃	遺物外	1R - 124	1層	片首直器部 長さ3.8 幅3.1 厚さ1.0	縄文042
22 - 2	52	新片石器	石鏃	遺物外	1R - 113	1層	片首直器部 長さ3.1 幅3.5 厚さ0.7	縄文047

遺物編録表 (13)

原-No	写真	種別	図録	遺構名	グリッド	層位	部位・形状・サイズ(cm)・重量(g)等 (2/3)の内の欄は任意で省略・測定値	整理 No
22-3	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-109	II層	材質頁岩 長さ51.9 幅5.7 厚51.2	新片043
22-4	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-110	I層	材質頁岩 長さ45.5 幅6.1 厚51.6	新片045
22-5	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-130	II層	材質頁岩 長さ45.1 幅7.6 厚51.3 重量30.1	新片055
22-6	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-109	II層	材質頁岩 長さ52.1 幅5.2 厚50.7	新片044
22-7	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-112	I層	材質頁岩 長さ52.9 幅5.0 厚51.0	新片046
22-8	52	新片石器	箭頭	遺構外	IP-109	II層	メノウ製 長さ51.0 幅5.0 厚51.0 重量9.6	新片050
22-9	52	新片石器	箭頭	遺構外	IP-109	II層	材質頁岩 長さ52.2 幅5.2 厚50.6	新片051
22-10	52	新片石器	石箭	遺構外	IP-111	I層	材質頁岩 長さ35.6 幅5.9 厚51.2 重量17.8	新片056
22-11	52	新片石器	石箭	遺構外	IP-111	I層	材質頁岩 長さ40.0 幅5.2 厚51.2	新片049
22-12	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-110	I層	材質頁岩 長さ55.8 幅5.9 厚51.2	新片053
22-13	52	新片石器	石箭	遺構外	IK-110	I層	材質頁岩 長さ55.3 幅6.3 厚51.4 重量18.4	新片054
22-14	52	新片石器	石箭	遺構外	IP-110	I層	材質頁岩 長さ53.0 幅5.2 厚52.0	新片050
22-15	52	新片石器	石箭	遺構外	IP-117	I層	材質頁岩 長さ55.5 幅5.6 厚51.6 重量10.6	新片048
22-16	52	新片石器	石箭	遺構外	IQ-116	I層	材質頁岩 長さ53.6 幅5.3 厚51.0 重量9.7	新片052
22-17	53	礫石器	磨石	遺構外	IQ-113	I層	安山岩製 長さ70.8 幅11.8 厚53.2 重量600.0	礫079
22-18	53	礫石器	磨石	遺構外	IQ-113	I層	アイサイト製 長さ58.0 幅14.9 厚56.5 重量1,000.0	礫080
22-19	53	礫石器	磨石	遺構外	IQ-112	I層	アイサイト製 長さ56.0 幅11.4 厚54.7 重量400.0	礫081
22-20	53	礫石器	磨打痕のある礫	遺構外	IQ-111	I層	凝灰岩製 長さ58.2 幅6.2 厚53.3 重量200.0	礫082
22-21	53	礫石器	磨石	遺構外	IK-109	II層	スリ～磨打 凝灰岩製 長さ58.0 幅7.0 厚53.9 重量200.0	礫083
22-22	53	礫石器	磨石	遺構外	IP-115	I層	凝灰岩製 長さ58.7 幅5.7 厚52.5 重量200.0	礫074
22-23	53	礫石器	磨石	遺構外	IQ-118	I層	アイサイト製 長さ56.5 幅10.4 厚52.9 重量200.0	礫141
22-24	53	礫石器	磨石	遺構外	IP-116	II層	凝灰岩製 長さ57.6 幅10.3 厚53.6 重量200.0	礫142
22-25	9	53	礫石器	磨打痕のある礫	遺構外	IP-116	凝灰岩製 長さ58.5 幅12.5 厚53.5 重量400.0	礫143
22-26	10	53	礫石器	磨打痕のある礫	遺構外	IE-131	安山岩製 長さ57.4 幅8.1 厚52.8 重量200.0	礫154
23-1	53	礫石器	石皿	遺構外	IS-121	I層	アイサイト製 長さ44.2 幅20.7 厚510.5 重量3,800.0	礫153
23-2	53	礫石器	磨石	遺構外	IL-104	I層	凝灰岩製 長さ59.5 幅14.8 厚53.4 重量600.0	礫084
23-3	52	礫石器	磨石	遺構外	IQ-115	II層	凝灰岩製 長さ70.0 幅10.4 厚55.2 重量600.0	礫078
23-4	53	礫石器	磨石	遺構外	IE-131	I層	凝灰岩製 長さ58.2 幅9.7 厚56.5 重量600.0	礫139
23-5	53	礫石器	磨石	遺構外	IP-116	I層	凝灰岩製 長さ52.7 幅5.0 厚51.5 重量200.0	礫312
23-6	53	礫石器	磨石	遺構外	IP-128	I層	凝灰岩製 長さ43.3 幅5.4 厚52.1 重量100.0	礫311
23-7	48	土師器	埴	遺構外	IG-105	I層	胴部～底部 ロウレン形 内面ミカヤ・黒色処理 底面回転形切痕 底径5.4 器高(2.6)	土師082
25-2		土師器	埴	遺構外	IK-105	II層	胴部～底部 底面回転形切痕 底径6.6 器高(2.0)	土師083
25-3		土師器	埴	遺構外	IK-114	II層	胴部～底部 ロウレン形 内面ミカヤ・黒色処理 底面回転形切痕 底径5.6 器高(1.5)	土師084
25-4	49	土師器	埴	遺構外	IK-114	I層	胴部～底部 ロウレン形 底面回転形切痕 底径5.2 器高(1.8)	土師085
25-5	49	土師器	埴	遺構外	IG-108	I層	底部 底面回転形切痕 底径5.9 器高(2.9)	土師086
25-6	48	土師器	埴	遺構外	IK-107	I層	底部 底面回転形切痕 底径5.9 器高(1.9)	土師087
25-7	49	土師器	埴	遺構外	IK-113	I層	底部 口縁部 ロウレン形 底面回転形切痕 底径6.1 器高(1.4)	土師088
25-8	49	土師器	埴	遺構外	IK-113	I層	口縁部～胴部 ロウレン形 底面回転形切痕 底径6.1 器高(1.4)	土師089
25-9	48	土師器	埴	遺構外	IK-113	I層	口縁部～胴部 ロウレン形 底面回転形切痕 底径6.1 器高(1.4)	土師090
25-10	48	土師器	埴	遺構外	IK-113	I層	口縁部～胴部 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口縁(2.0) 器高(3.6)	土師411
25-11	49	土師器	埴	遺構外	IQ-118	II層	胴部～底部 胴部外面ケズリ 胴部内面ケズリ 口縁(2.0) 器高(2.3)	土師412
25-12	49	土師器	埴	遺構外	IQ-116	II層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 口縁(13.0) 器高(3.4)	土師404
25-13	14	土師器	埴	遺構外	IC-125	I層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 P-1	土師286
25-14	14	土師器	埴	遺構外	IC-125	I層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 P-1	土師287
25-15	15	土師器	埴	遺構外	IQ-116	I層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 P-1	土師289
25-16	16	土師器	埴	遺構外	IC-125	I層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 P-1	土師287
25-17	49	土師器	埴	遺構外	IQ-116	II層	口縁部～胴部 口縁部内面僅付着 P-1	土師403

遺物観察表 (14)

図 - No.	写真	種別	器種	遺構名	グリップ上	層位	部位・構造・サイズ(cm)・重量(g)等 (注) (内径・底径・高・幅)	整理 No.
25-18	48	土師器	外	遺構外	W-105	1層	胴部～底部 外面タタキ・内面ミガキ・重色焼埋 底径(5.4) 器高(2.3)	土師52
25-19	48	土師器	外	遺構外	0-107	1層	胴部～底部 外面タタキ・内面ミガキ・重色焼埋 底径(5.4) 器高(1.9)	土師53
25-20	48	土師器	外	遺構外	0-107	1層	胴部～底部 外面タタキ・内面ミガキ・重色焼埋 底径(6.0) 器高(1.7)	土師59
25-21	48	土師器	外	エリア1		1層	口縁部～胴部	土師58
25-22	48	土師器	外	遺構外	H0-131	1層	口縁部～胴部	土師406
25-23	48	土師器	外	遺構外	H0-131	1層	口縁部～胴部	土師407
25-24	48	土師器	外	遺構外	11-107	1層	口縁部～底部 口径(2.6) 底径1.6 器高2.4	土師426
25-25	49	土師器	外	遺構外	N-107	1層	口縁部～胴部	土師439
25-26	49	土師器	外	遺構外	0-109	1層	口縁部～胴部	土師438
25-27	49	土師器	外	遺構外	0-109	1層	口縁部～胴部	土師432
25-28	49	土師器	外	遺構外	0-118	1層	口縁部～胴部	土師437
25-29	49	土師器	外	遺構外	0-107	1層	口縁部～胴部	土師430
25-30	49	土師器	外	遺構外	0-109	1層	胴部	土師470
25-31	49	須臾器	外	遺構外	0-109	1層	口縁部付着 胴部外面タタキ 胎土分析№745(五所出原)	土師715
25-32	49	須臾器	外	遺構外	0-107	1層	口縁部 胎土分析№694(五所出原) 口径(12.2) 器高(4.1)	土師696
25-33	49	須臾器	外	遺構外	11-105	1層	口縁部 胎土分析№700(五所出原) 口径(12.2) 器高(3.1)	土師700
25-34	49	須臾器	外	遺構外	11-105	1層	口縁部～胴部 胎土分析№703(五所出原) 口径(13.1) 器高(4.0)	土師703
25-35	49	須臾器	外	遺構外	0-105	1層	口縁部 胎土分析№711(五所出原) 口径(12.0) 器高(2.2)	土師711
25-35	49	須臾器	外	遺構外	0-118	1層	口縁部 胎土分析№716(不明) 口径(13.2) 器高(2.5)	土師716
25-36	49	須臾器	外	遺構外	N-108	1層	胴部 胎土分析№733(五所出原)	土師733
25-37	49	須臾器	外	遺構外	0-105	1層	胴部 胎土分析№653(五所出原)	土師653
25-38	49	須臾器	外	遺構外	0-118	1層	口縁部	土師760
25-39	49	須臾器	外	遺構外	N-113	1層	口縁部	土師727
25-40	49	須臾器	外	遺構外	0-110	1層	口縁部 胎土分析№747(五所出原)	土師747
26-1	49	須臾器	外	遺構外	K-106	1層	底部 底部向軸水切痕 底径(7.6) 器高(2.7)	土師708
26-2	49	須臾器	外	遺構外	N-107	1層	胴部 胎土分析№730(五所出原) 底径(6.4) 器高(2.1)	土師730
26-3	49	須臾器	外	遺構外	11-107	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師671
26-4	49	須臾器	外	遺構外	6 トレンチ	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師683
26-5	49	須臾器	外	遺構外	N-107	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師731
26-6	49	須臾器	外	遺構外	0-110	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師746
26-7	49	須臾器	外	遺構外	5 トレンチ	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師685
26-8	49	須臾器	外	遺構外	F-105	1層	胴部 胎土分析№687(五所出原)	土師687
26-9	49	須臾器	外	遺構外	16-105	1層	胴部 胎土分析№689(不明)	土師689
26-10	49	須臾器	外	遺構外	0-116	1層	胴部	土師763
26-11	49	須臾器	外	遺構外	0-118	1層	胴部	土師758
26-12	49	須臾器	外	遺構外	10-105	1層	胴部	土師704
26-13	49	須臾器	外	遺構外	11-111	1層	胴部 胎土分析№713【輸入品】	土師713
26-14	49	須臾器	外	遺構外	0-110	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師718
26-15	49	須臾器	外	遺構外	K-110	1層	胴部 胎土分析№709(五所出原)	土師709
26-16	49	須臾器	外	遺構外	F-115	1層	胴部	土師756
26-17	49	須臾器	外	遺構外	11-108	1層	胴部	土師702
26-18	49	須臾器	外	遺構外	4 トレンチ	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師684
26-19	49	須臾器	外	遺構外	K-105	1層	胴部	土師706
26-20	49	須臾器	外	遺構外	16-105	1層	胴部	土師688
26-21	49	須臾器	外	遺構外	11-103	1層	胴部 胴部外面タタキ 胎土分析№698(不明)	土師698
26-22	49	須臾器	外	遺構外	0-113	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師751
26-23	49	須臾器	外	遺構外	N-111	1層	胴部 胴部外面タタキ	土師738

写真図版



写真1 赤坂遺跡周辺の環境（南から）



1948.05.21撮影 (この写真は、米軍撮影の空中写真を国土地理院の承認を得て、掲載したものである。)

写真2 赤坂遺跡周辺の環境



1975. 10. 23撮影 (この写真は、国土地理院の承認を得て、掲載したものである。)

写真3 赤坂遺跡周辺の環境



写真4 赤坂遺跡 検出遺構



2. 検出遺構の状況 S1205付近の状況 (北西から)



4. 検出遺構の状況 S1203付近の状況 (北西から)



1. 検出遺構の状況 S1103付近の状況 (南東から)



3. 検出遺構の状況 S1202付近の状況 (北西から)

写真5 赤坂遺跡 検出遺構



1. SI101(新段階[一部古段階])完掘(北西から)



2. SI101 遺物 出土状態(上位層)(北西から)



3. SI101(古段階)完掘(北西から)



4. SI101 右壁側 土層断面



5. SI101(古段階)炭化物 出土状態(南西から)



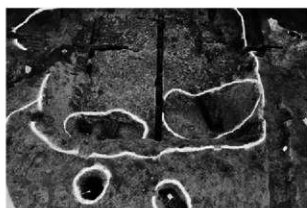
1. SI101カマド 完掘 (北西から)



2. SI101(新段階) カマド 土層断面 (長軸)



3. SI101(古段階) Pit1 土層断面



4. SI101SK01・SK02 完掘 (北東から)



5. SI101Pit5 完掘 (南東から)



6. SI101SD01 完掘 (北東から)



7. SI101SD01 土層断面

写真7 竪穴建物跡 (SI101)



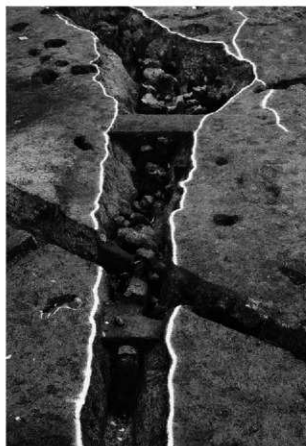
1. SI102(新段階)及びSI102SD01 完掘 (北西から)



2. SI102(新段階と古段階) 完掘 (北西から)



1. SI102SD01SK01(旧 SD109SK01) 遺物 出土状態 (北西から)



2. SI102SD01(旧 SD109) 遺物
出土状態 (1 N-107グリッド) (南東から)



3. SI102SD01SK01(旧 SD109SK01)
焼土・粘土等 出土状態 (南から)



4. SI102SD01SK01(旧 SD109SK01) 土層断面



1. SI103 完掘 (北西から)



2. SI103及びSI1103SD01(旧SD110) 完掘 (東から)



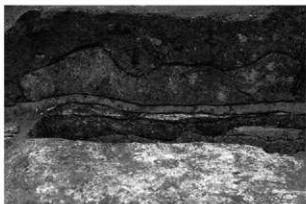
1. SI103カマド 完掘 (西から)



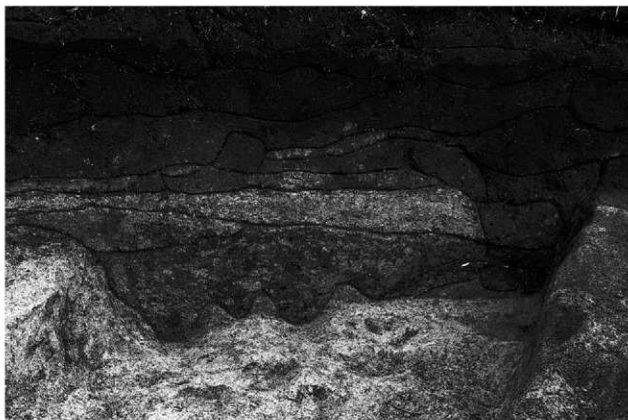
2. SI103カマド付近 土層断面 (A-A')



3. SI103 火山灰の堆積状況 (北西から)



4. SI103 土層断面 (B-B')



5. SI103 後壁付近の床構築土と壁溝 土層断面 (A-A')



1. SI103(張り出し部) 完掘 (北から)



2. SI103 土器・礫 出土状態 (北東から)



3. SI1103SD01(旧 SD110) 完掘 (北西から)



4. SI1103SD01(旧 SD110) 完掘 (北東から)



5. SI1103SD01(旧 SD110) 土層断面 (E-E')



6. SI1103SD01(旧 SD110) 土層断面 (E-E')



7. SI1103SD01(旧 SD110) 完掘 (西から)



1. SI104 完掘 (北から)



2. SI104カマド 完掘 (北から)



3. SI104 土層断面



4. SI104 遺物 出土状態 (南から)



1. SI201 完掘 (北西から)



2. SI201カマド 遺物 出土状態 (北西から)



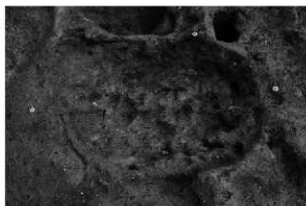
3. SI201カマド 土層断面 (長軸)



4. SI201カマド 土層断面 (短軸)



5. SI201SK03 土層断面



6. SI201SK04 完掘 (北西から)



7. SI201SD01 (旧 SD210) 完掘 (南西から)



8. SI201S801 (Pit3295) 土層断面



1. SI202(古段階) 完掘 (北西から)



2. SI202(新段階) 完掘 (北西から)



3. SI202(古段階) 壁溝 検出状況 (北東から)



4. SI202(新段階) Pit2 掘出土状態 (南西から)



5. SI202 炭化物 出土状態 (北東から)



1. SI202(新段階)カマド 完掘 (西から)



2. SI202(新段階)カマド 遺物 出土状態 (西から)



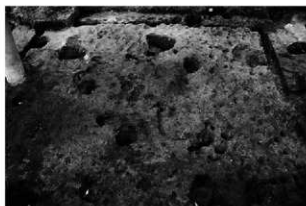
3. SI202(新段階)カマド 土層断面 (長軸)



4. SI202(新段階)カマド 土層断面 (火床面付近・長軸)



5. SI202(新段階)遺物(土鈴) 出土状態 (東から)



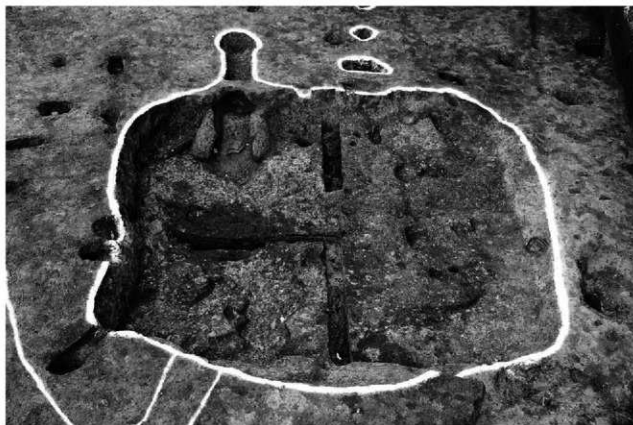
6. SI204 掘方 完掘 (南西から)



7. SI204Pit01(旧 SK202) 土層断面



8. SI204SK03(旧 SK201) 土層断面



1. SI203 完掘 (北西から)



2. SI203 炭化材 出土状態 (北西から)



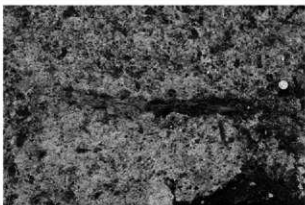
1. SI203 土層断面 (A-A')



2. SI203 土層断面 (A-A'・右側側面)



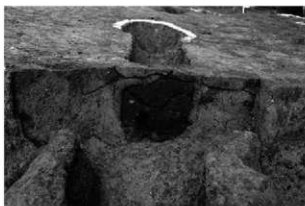
3. SI203 土器・炭化材 出土状態 (北西から)



4. SI203 刀子及びび刀子の痕跡 出土状態 (南東から)



5. SI203カマド及びび燗跡 完掘 (北西から)



6. SI203カマド 土層断面 (C-C')



7. SI203カマド 芯材 固定状況 (北西から)



8. SI203カマド 土層断面 (B-B')



1. SI205 掘方 完掘 (南から)



2. SI205 火山灰の堆積状況 (北東から)



3. SI205SD01(旧SD115範囲)土層断面(上位層は火山灰)
(南から)



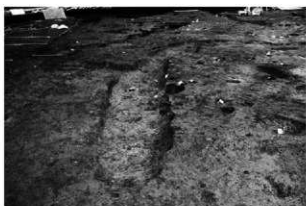
4. SI207SD01(左: 旧 SD114),
SI205SD01(右: 旧 SD116) 完掘 (東から)



5. SI207SD01(旧 SD114) 遺物 出土状態 (西から)



6. SI207SD01(旧 SD114) 土層断面 (B-B')



7. SI208SD01(旧 SD106) 完掘 (東から)



1. SK114 完掘 (南西から)



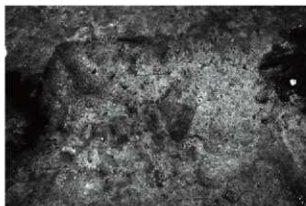
2. SK114 土層断面



3. SK117 完掘 (南西から)



4. SK118 土層断面



5. SK208 完掘 (南西から)



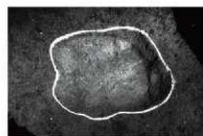
6. SK208 土層断面 (A-A')



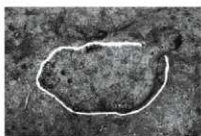
7. SK208Pit1 土層断面 (0-0')



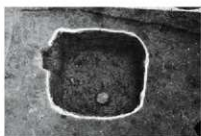
8. SK216 完掘 (南東から)



1. SK101 完掘 (南西から)



2. SK102 完掘 (南西から)



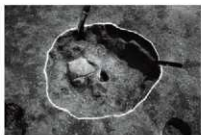
3. SK107 完掘 (北西から)



4. SK107 土層断面



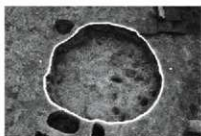
5. SK108 完掘 (北西から)



6. SK109 完掘 (北西から)



7. SK112 完掘 (北西から)



8. SK115 完掘 (北西から)



9. SK119(旧 SX105) 完掘 (南東から)



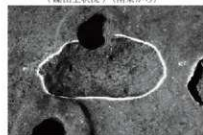
10. SK119(旧 SX105) 確認状況
(露出土状況) (南東から)



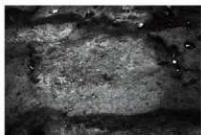
11. SK119(旧 SX105) 土層断面



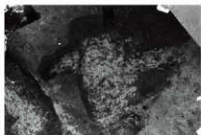
12. SK203 完掘 (南西から)



13. SK204 完掘 (南東から)



14. SK213 完掘 (南西から)



15. SK214 完掘 (北から)



16. SK222 完掘 (南西から)



17. SK223 完掘 (南西から)



18. SK226(旧 SX201) 完掘 (南東から)



1. SD013 完掘 (北から)



2. SD103 完掘 (南西から)



3. SD112 完掘 (南東から)



4. SD117 完掘 (北西から)

写真22 溝跡 (SD013・SD103・SD112・SD117)



1. SD118 完掘 (北東から)



2. SD119 完掘 (北西から)



3. SD017・SD018・SD019 完掘・土層断面 (北から)



1. SX102(新段階) 完掘 (北東から)



2. SX102(新段階) 完掘 (南西から)



3. SX102(古段階) 完掘 (南西から)



2. SX102 土層断面 (A-A', 2m付近)



4. SX102(新段階) 盛土 土層断面 (B-B', 中央部)



1. SX102土坑状部分 土層断面 (A-A', 12cm付近)



3. SX102(新段階) 土層断面 (B-B', 1m付近)



1. SX103 完掘 (南西から)



2. SX103 土層断面 (0-0')



1. SX104 完掘(左: S1102SD01, 右: SX202) (南東から)



2. SX104 土層断面



1. SX202(A) 完掘 (東から)



2. SX202(B) (旧SD111) 完掘 (南東から)



3. SX202(D・E) 完掘 (南東から)



4. SX202(D) 完掘 (南東から)



5. SX202(E) 完掘 (北西から)



2. SX202(C) ピット中の微小堆積範囲4の状況(IN-109坑付近) (南西から)



4. SX202(D) 微小堆積範囲6の状況(I 0-112グリッド) (南から)



1. SX202(A) ロームブロックの散布状況(I K-104グリッド) (南東から)



3. SX202(D) 表面凹凸の状況(I 0-112グリッド付近) (南から)



2. SX202(B) (旧 SD111) 土層断面 (0-0')



4. SX202(B) (旧 SD111) 土層断面 (0-0'・7-7')



1. SX202(A) 土層断面(調査区壁) (0-0')



3. SX202(D) 土層断面 (0-C')



2. SX202(D・d) SI103との接続状況 (南東から)



4. SX202(b 2) SI101との接続状況 (南西から)



1. SX202(A・a) SI203との接続状況 (北西から)



3. SX202(A・a) SI203との接続状況 (北西から)



1. SB001 完掘 (北から)



2. SB002・SB003・SB004 完掘 (北西から)

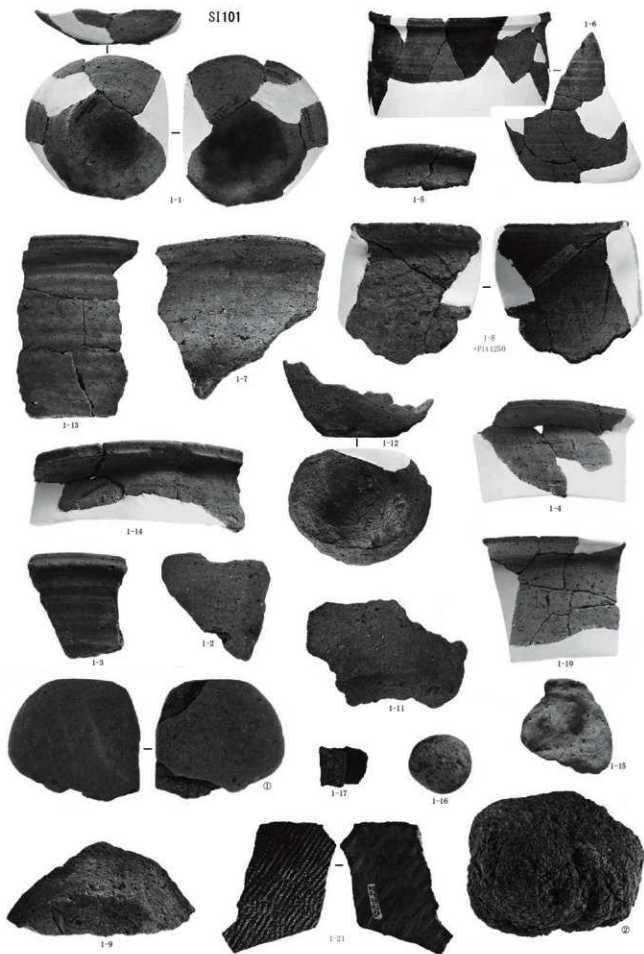


写真33 竪穴建物跡出土遺物 (SI101)

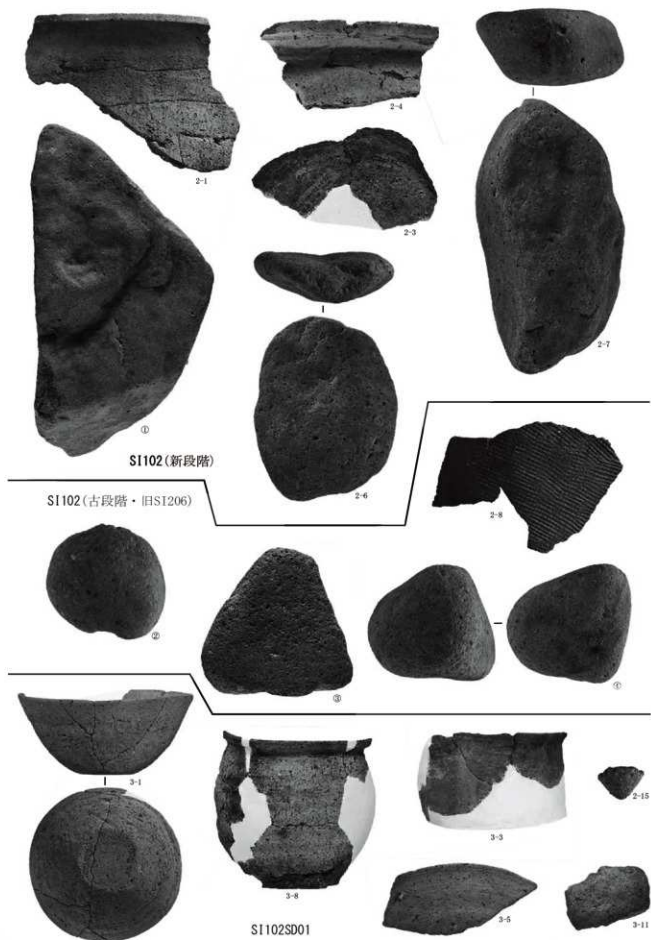


写真34 竪穴建物跡出土遺物 (SI102)

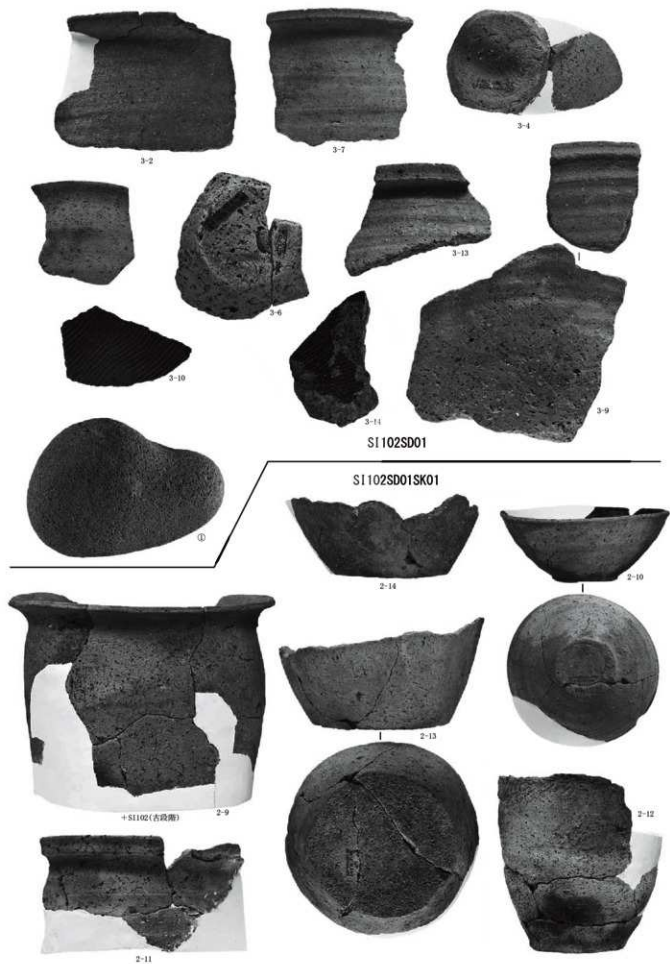
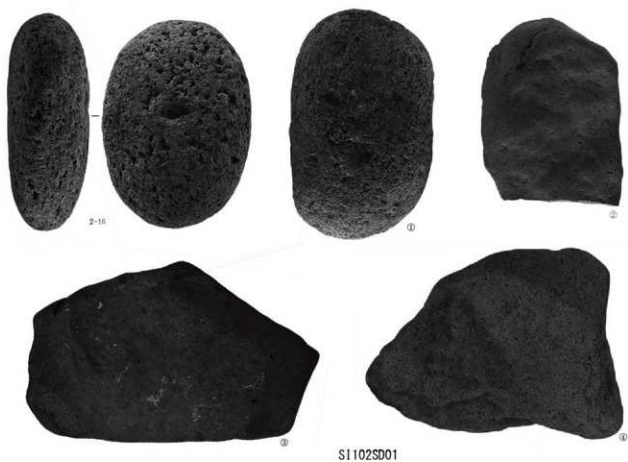


写真35 竪穴建物跡出土遺物 (SI102SD01)



SI103

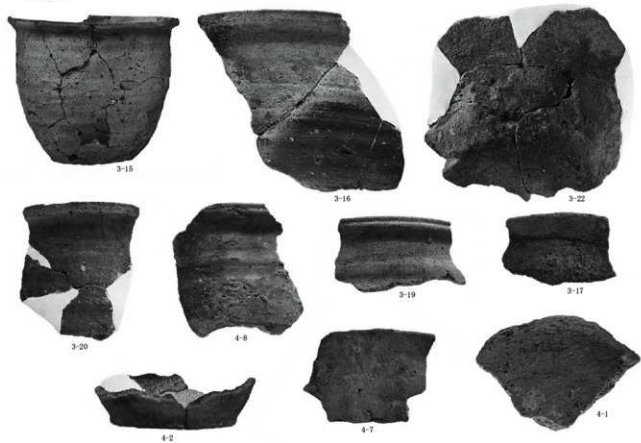


写真36 竪穴建物跡出土遺物 (SI102SD01・SI103)

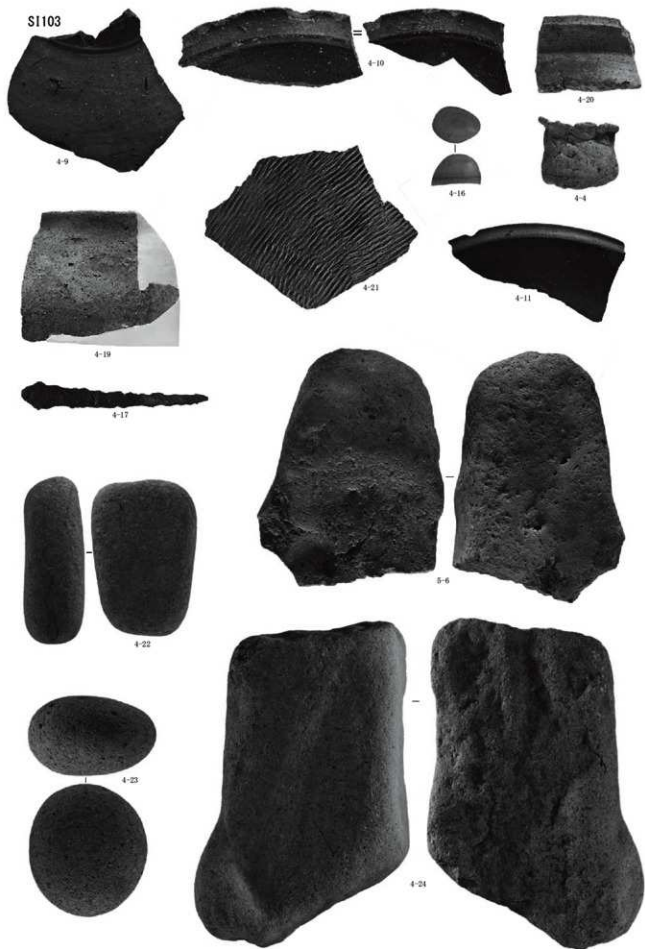


写真37 竪穴建物跡出土遺物 (SI103)



写真38 竪穴建物跡出土遺物 (SI103)

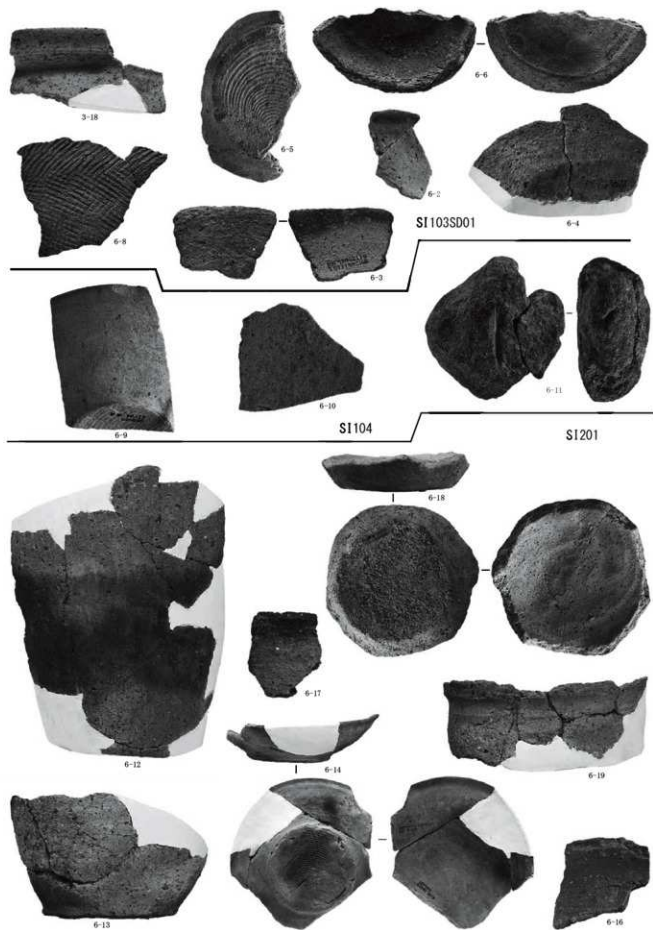
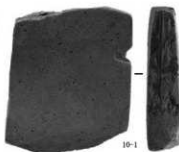
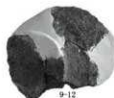
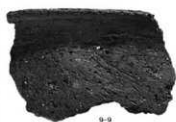


写真39 竪穴建物跡出土遺物 (SI103・104・201)

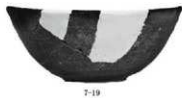
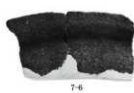


S1201

S1201S02

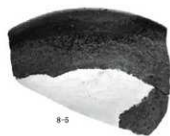


S1202(古段階)



7-6

7-19



8-5

S1202(古段階)+(新段階)



8-2

S1202(新段階)



7-23

S1202(新段階)

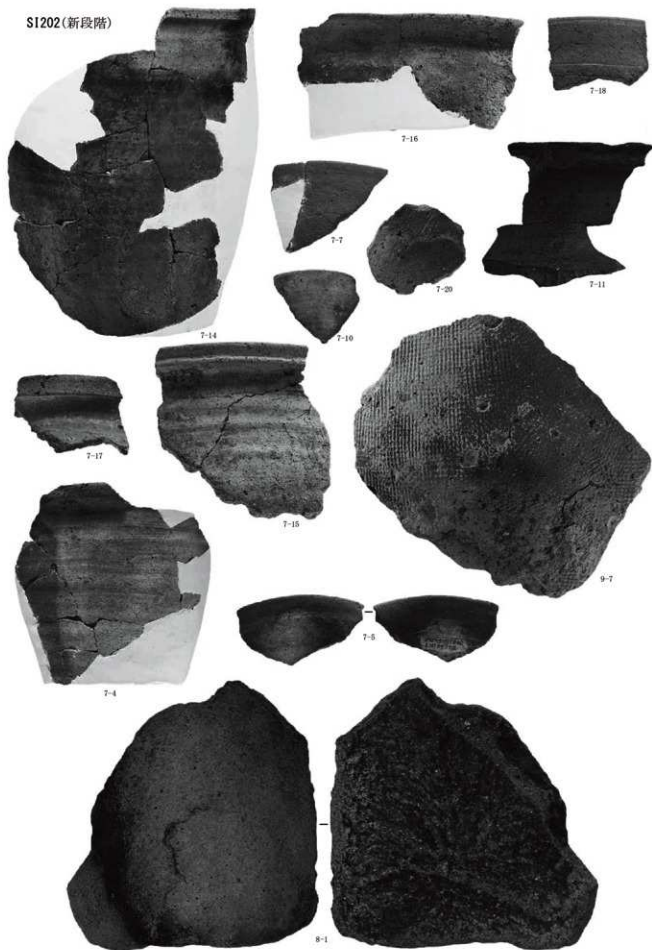


写真41 竪穴建物跡出土遺物 (S1202)

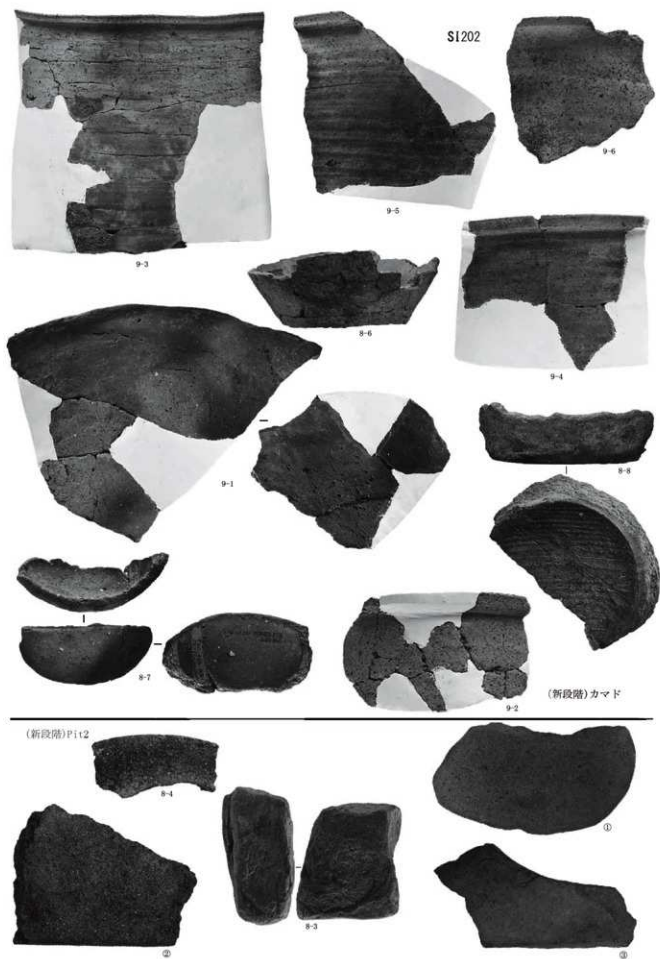


写真42 竪穴建物跡出土遺物 (SI202)

S1202 (新段階)



(新段階)P1111

S1203



写真43 竪穴建物跡出土遺物 (S1202・203)

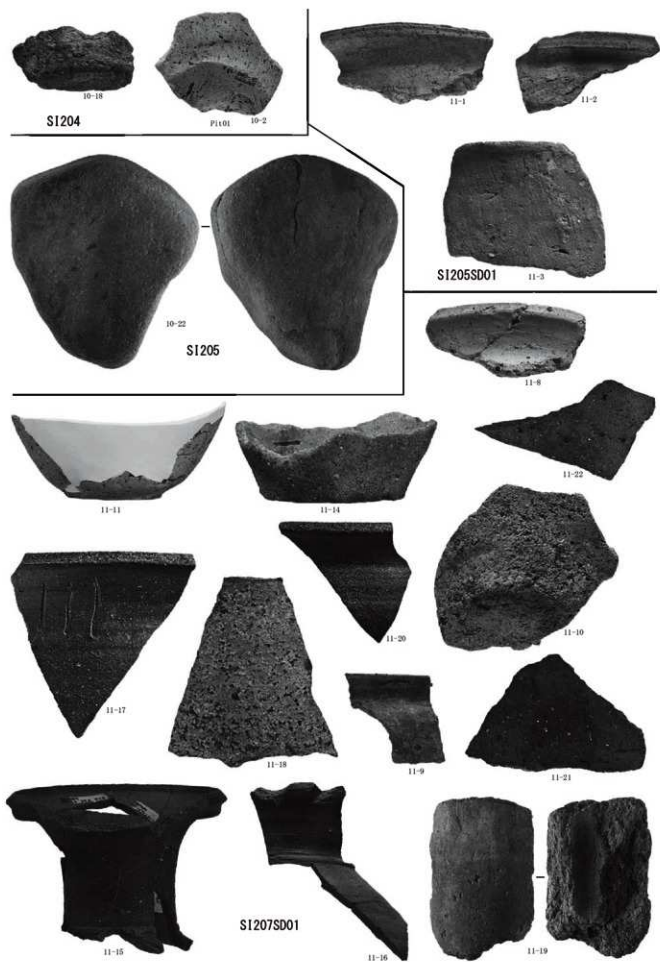


写真44 竪穴建物跡出土遺物 (SI204・205・207)

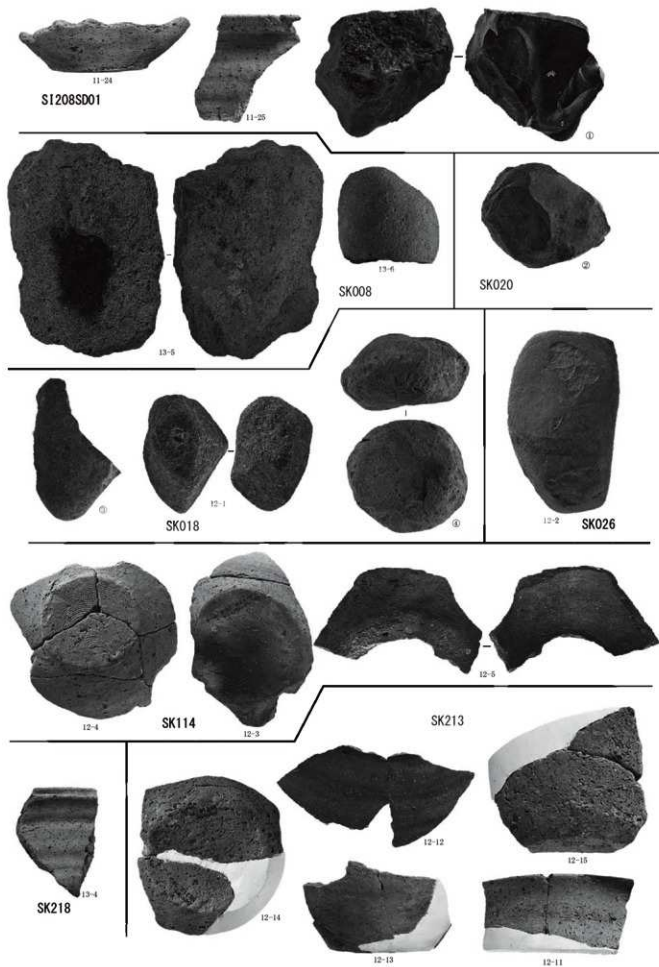


写真45 竪穴建物跡 (SI208)・土坑 (SK008・018・020・026・114・213・218) 出土遺物

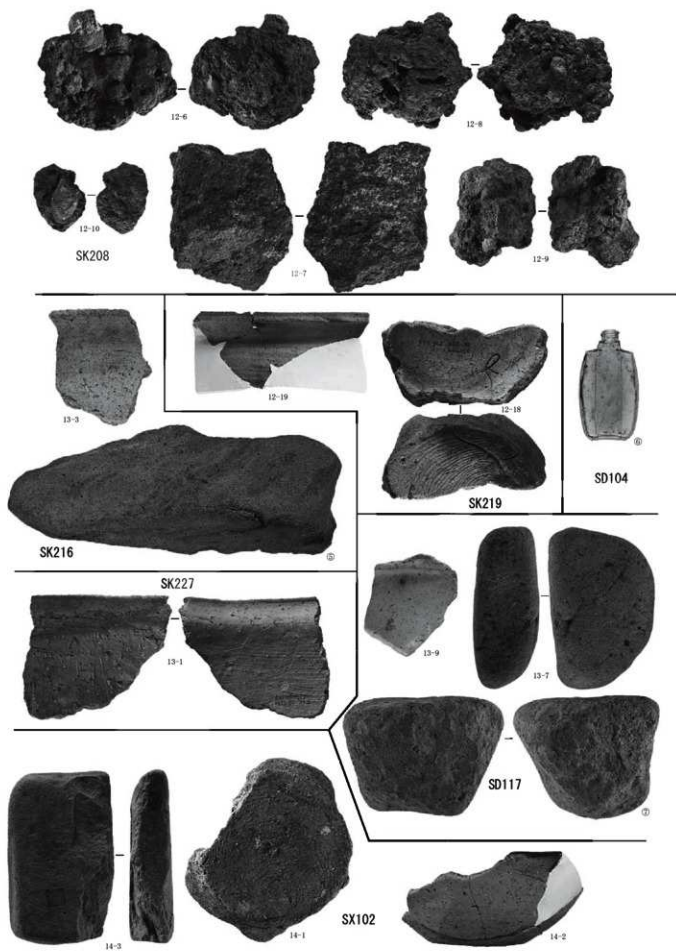


写真46 土坑 (SK208・216・219・227) 溝跡 (SD104・117)・用途不明遺構 (SX102) 出土遺物

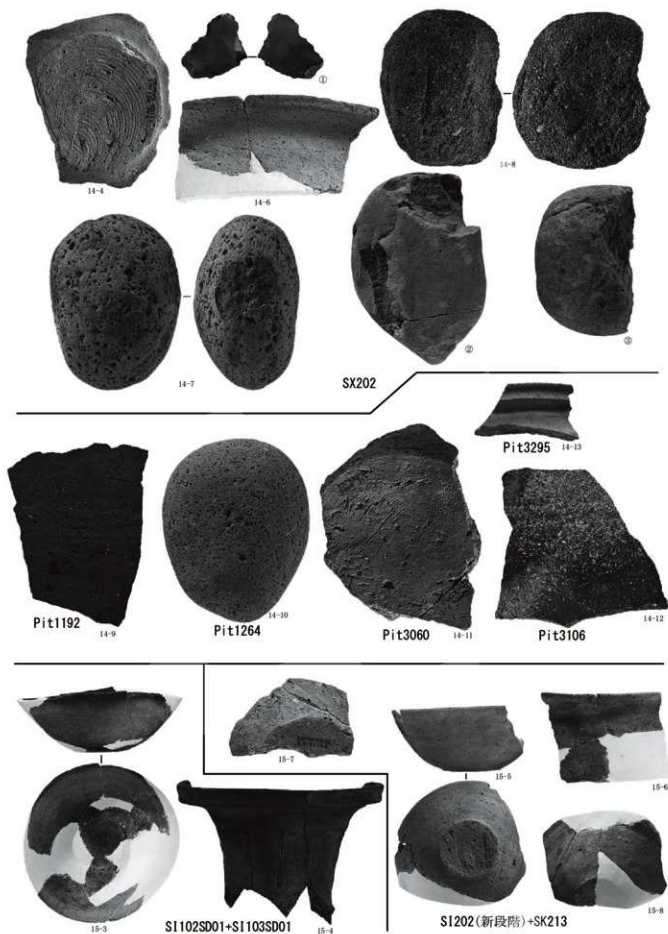


写真47 土壤硬化範囲 (SX202)・柱穴 (Pit) 出土遺物・遺構間接遺物

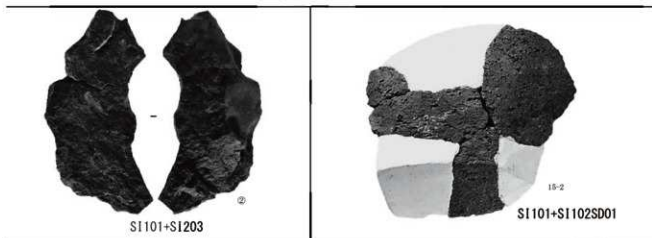


写真48 遺構間接合遺物・遺構外出土遺物(平安時代)

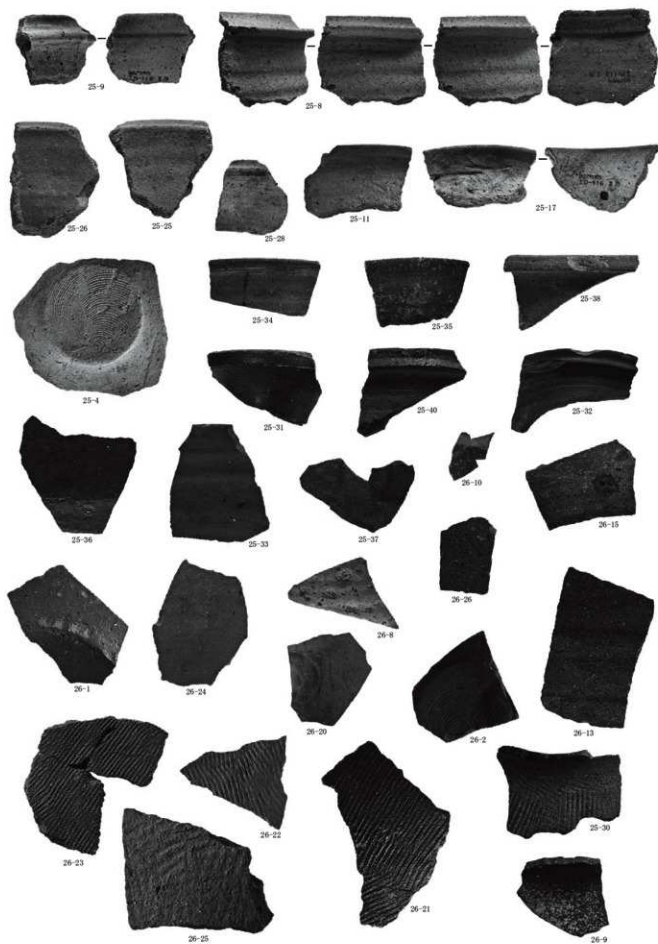


写真49 遺構外出土遺物（平安時代）

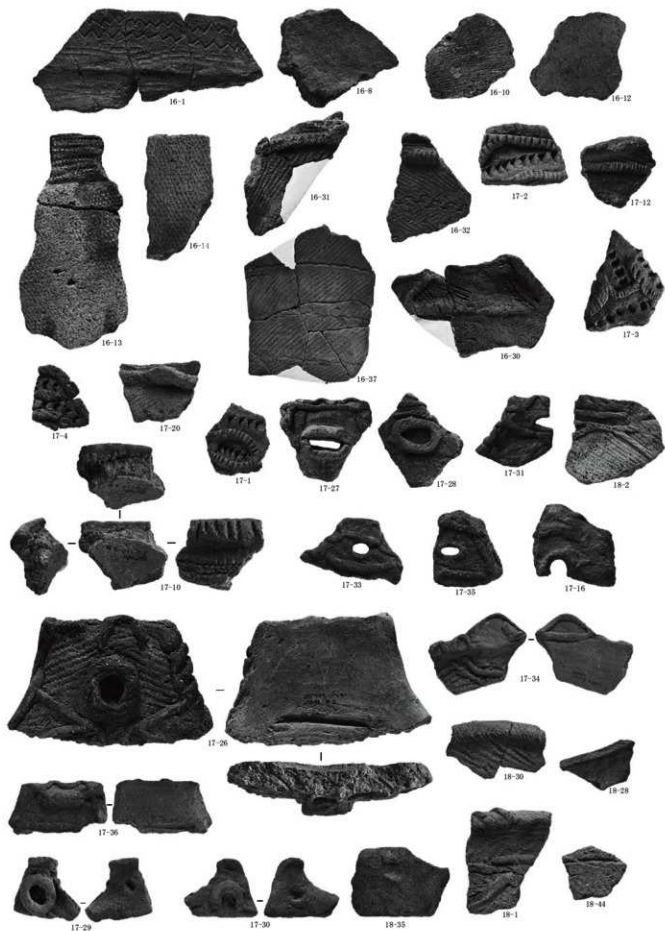


写真50 遺構外出土遺物（縄文時代）

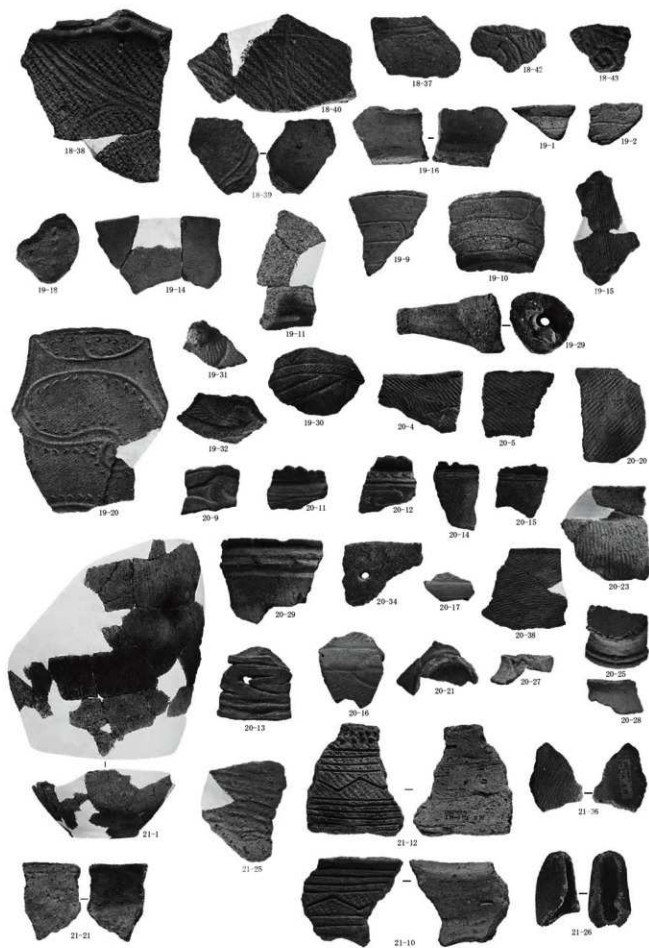
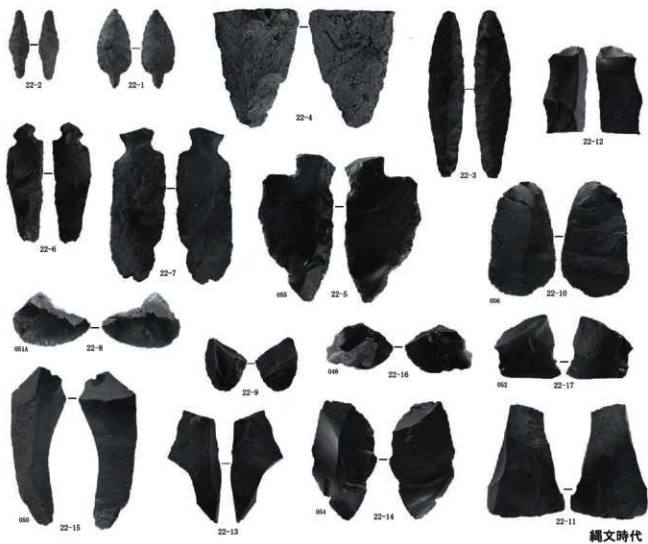


写真51 遺構外出土遺物（縄文時代・弥生時代・古墳時代か）



縄文時代



平安時代

近世以降

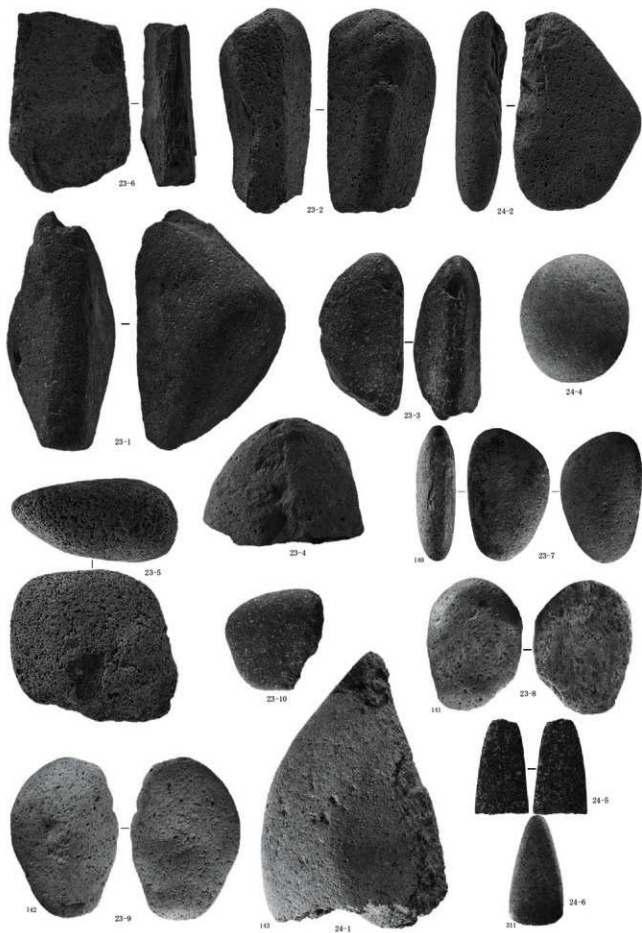
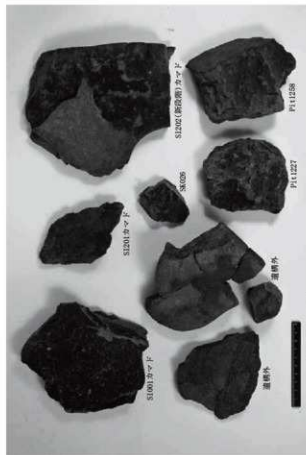


写真53 遺構外出土遺物（縄文時代・平安時代）



各遺構出土土練 (第487集『寺坂遺跡Ⅱ』報告書の遺構含む)



堅穴建物跡出土土練 (遺構名のないものは全てS1101からの出土) (第487集『寺坂遺跡Ⅱ』報告書の遺構含む)



微小集積範囲D SX202土練硬化範囲D



微小集積範囲1出土 SX202土練硬化範囲B

報告書抄録

ふりがな	あかきか いせき に						
書名	赤坂遺跡Ⅱ						
副書名	県道酸ヶ湯黒石線地方特定道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第531集						
編著者	木村 高						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦 2013年 3月 27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)	調査期間	調査面積	調査原因
あかきか 赤坂遺跡	青森県黒石市大字上十川字長谷藩一番町 32-1他	市町村 02204	遺跡番号 204008	北緯 40° 39' 55"	東経 140° 38' 10"	20090827 1,872㎡ ? 20091028 本報告の 報告面積は 1001㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
赤坂遺跡	不明	縄文	柱穴・小穴 (下記に含まれる)	縄文土器(早期～晩期) 石器 土製品	・縄文時代の柱穴・小穴は、少数と推定される。 ・土器は破片主体だが、各時期のものがみられる。		
	散布地	弥生	なし	弥生土器	・砂状式並行と田舎館式並行(少量)、その他		
	散布地	古墳	なし	古式土師器	・破片1点		
	集落	平安	平安	竪穴建物跡 11 土坑 40 溝跡 19 並列溝状遺構 1 並列溝状遺構 1 掘立柱建物跡 16	土師器・須恵器 石器・石製品・礫 土製品・焼成粘土塊	・白頭山-苫小牧火山沢(B-Ta)の降下以前が主体。 ・竪穴建物跡は、礫石器を伴う例がある。 ・SK208土坑は、鉄関遺構と判断される。 ・並列溝状遺構は、畠跡ないし波板状遺構と推定される。	
塀(柵)跡 数量不詳 柱穴・小穴 1502 (掘立柱建物跡の柱穴及び 縄文時代と近世以降を ごわずかに含む) 土壌硬化範囲 4 用途不明遺構 3				鉄製品・鉄滓・羽目	・柱穴・小穴には、ごくわずかに縄文時代および近 世以降のものが含まれている。 ・土壌硬化範囲は、竪穴建物跡の出入口に伴って形 成されたと推定され、近世以降に本格的に機能し たと推定される土壌硬化範囲(道跡)に接する。 ・用途不明遺構には、貯水用と推定されるものが含 まれる。		
不明	近世以降		溝跡 1 土壌硬化範囲 1 柱穴・小穴 (上記に含まれる)	陶磁器・土製品・鉄貨 金属製品・石製品等	・土壌硬化範囲は道跡と推定され、形成の初期は、 平安時代と推定される。 ・近世以降の柱穴・小穴は、少数と推定される。		
要約	<ul style="list-style-type: none"> 平成21年度調査区(第2次調査・グリッドライン116以西)に検出された遺構及び遺構内出土遺物及び平成20～21年度調査区(第1次～第2次調査区全域)に検出された柱穴・小穴から抽出した掘立柱建物跡、遺構外出土遺物、各種自然科学的分析に関する報告。 縄文時代と平安時代、近世以降にわたる複合遺跡。主体は9世紀中葉～10世紀前半の集落跡。 集落は、竪穴建物跡と掘立柱建物跡/塀(柵)跡(柱穴・小穴)・土坑・溝跡等で構成される。 竪穴建物跡は、掘立柱建物跡(柱穴・小穴)を取り囲むように分布する。 竪穴部内には土坑や外延溝等が伴い、外部付属施設には外周溝と掘立柱建物跡・塀(柵)跡がある。 竪穴建物跡には、外周溝を伴うものと伴わないもの2タイプが認められる。 竪穴建物跡の数棟には、拡張及び貼床の複数施工が認められ、長期使用されている可能性がある。 竪穴建物跡の重複関係等を検討し、各竪穴建物跡の構築～廃絶の時間的推移を推定した。 道跡と推定される土壌硬化範囲、畠跡ないし波板状遺構と推定される並列溝状遺構、貯水用の土坑と推定される用途不明遺構等は、平安時代集落における空間利用のあり方を考える上で重要である。 						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第531集

赤坂遺跡Ⅱ

— 県道酸ヶ湯黒石線地方特定道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2013年3月27日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152番15
TEL. (017) 788-5701 FAX (017) 788-5702
印刷 長尾印刷株式会社
〒030-0931 青森県青森市平新田森植17-1
TEL. (017) 726-7121 FAX (017) 726-9237
